明治四十三年六月廿五日印刷納本（毎月一回二十五日印刷納本）

女子文壇

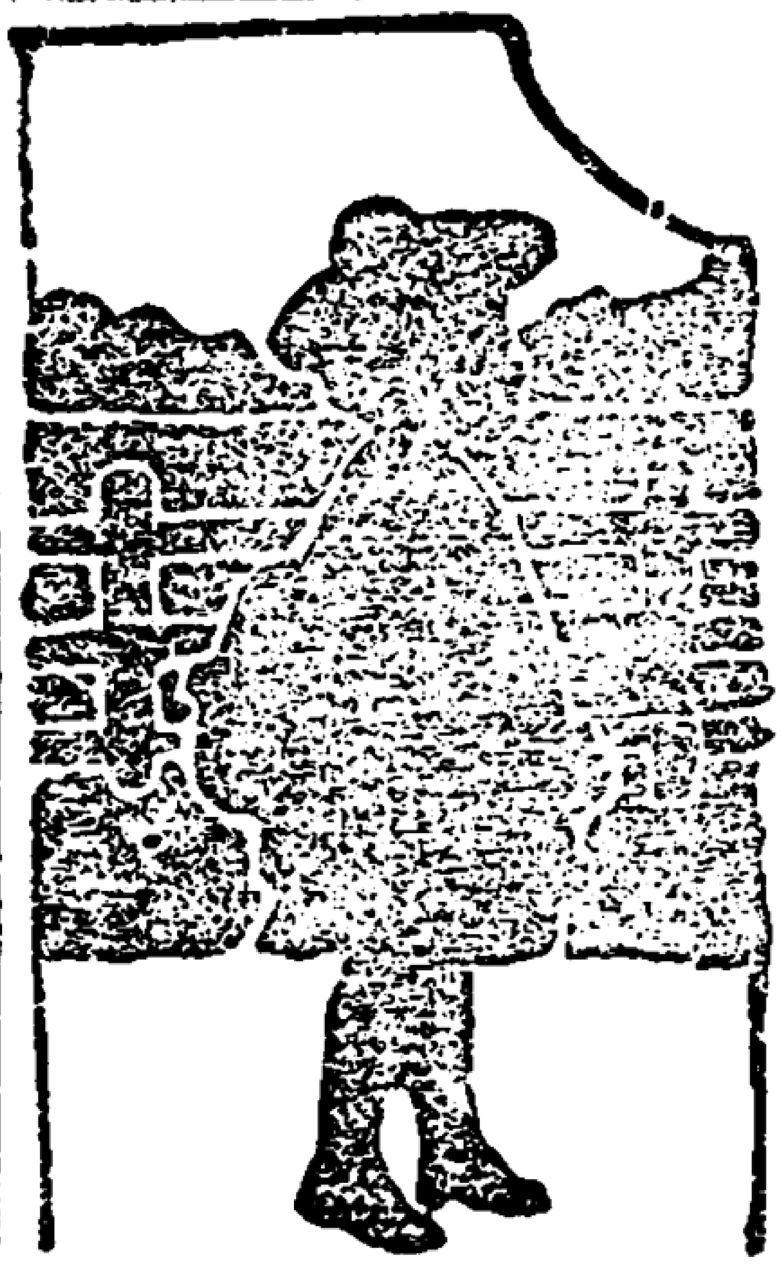
七月號

第六年第九號

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



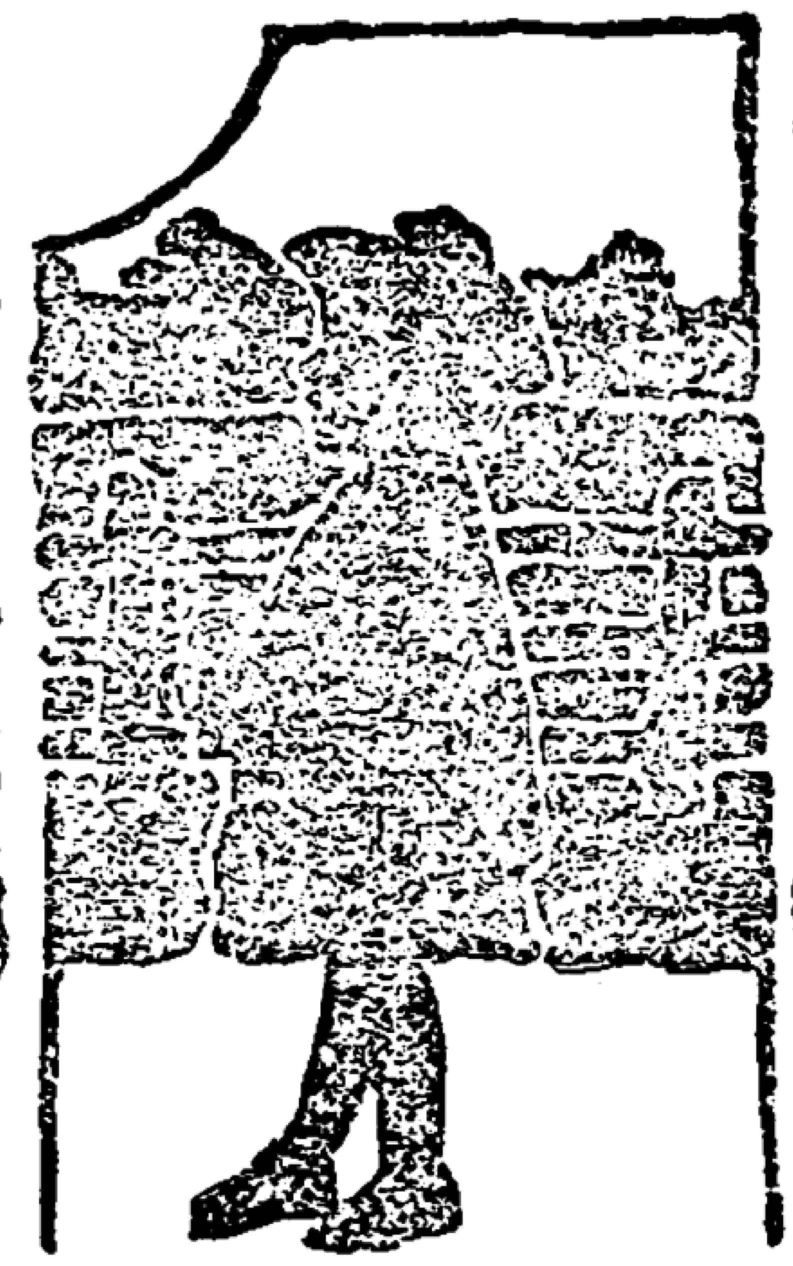
愛らしき少女達の讀物には一等評判よい



少女

一日發行 七月號 要目

毎月一日發行 定價 一册拾錢（送壹錢） 半年（郵税共）六拾三錢 （口繪插畫澤山）



▲悲しいさようなら（繪とき）……竹久ゆめ二
▲おとぎばなし 少さなお庭……佐々木好母
▲少女史談 勾當の内侍……夢守人
● 少女小說 赤い船……小川未明
● 少女小說 花守橋……河井醉茗
● 茶柱蟲はどんな蟲か……千田かや子
● 滑稽小說 間違のお使……海賀變哲
● おとぎばなし 文子さんの桃割れ……閨秀作家 水野仙子
● 少女小說 暗い心（三）……犬麻呂
● 一人の貧民の美しい赤心から出來た日光の大鬱林……男爵世嗣夫人 永山きみ子
▲臺灣の兄様……ゆめ二
▲廻覽雜誌（上）……一色醒川
▲乳牛の話……田島薫
▲少女科學 花子さんの修學旅行……糟谷秋風
▲少女小說 母の手紙……金子靜香
▲其他少女文壇、繪さがしの懸賞もの澤山あり

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （振替口座東京第壹七貳九番） 最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ


IVORY
アイボリー
品良く價安き
無比絶品なり
近來類似品多
し御注意あれ
石鹸！
IVORY

女子文壇七月號(第六年九號)目次

【卷頭口繪】

【本欄】(一―四)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

相模江の島



大下藤次郎筆

此社告を見落す勿れ

女子文壇 八月十日 第三增刊

地方の婦人

紙數二百餘頁 挿畫澤山 定價貳拾錢 郵稅壹錢五厘

☞讀み物の一般☜

▲地方 若き婦人の心持

地方の家庭は舊式なり、地方の天然は壯麗なり、此間に養はるゝ若き婦人の心持は如何

▲名流婦人の地方談

名流婦人は地方と都會とを比較して、如何なる感想を抱くか、地方の女子も、都會の女子も聞かんと欲する處を語る

▲天然の美と人間の美

地方の天然は清く美しく、殊に我邦は秀麗なる山岳と、明媚なる河海に富む、此等自然のみを描寫せるものあり、自然美を配景として女の美を中心としたる記事あり

▲旅行と名所

珍しき風俗、隱れたる名所、面白き旅行談などは夏日の讀み物として尤も適切なり、本誌は特に勝れたる材料を蒐めたり

▲女子の手に成れる ローカルカラー

ローカルカラーとは地方色のことなり、或る地方に限られたる印象を謂ふ、世にローカルカラーを語る者少からず、而かも其地方の若き婦人に依りてローカルカラーを發表し得るは實に本誌あるのみ

▲小品文と和歌

天然を題材とせる小品文と、現今若き人々の心を惹きつゝある新しき和歌とを募りて、文藝の趣味を賑かにしたり

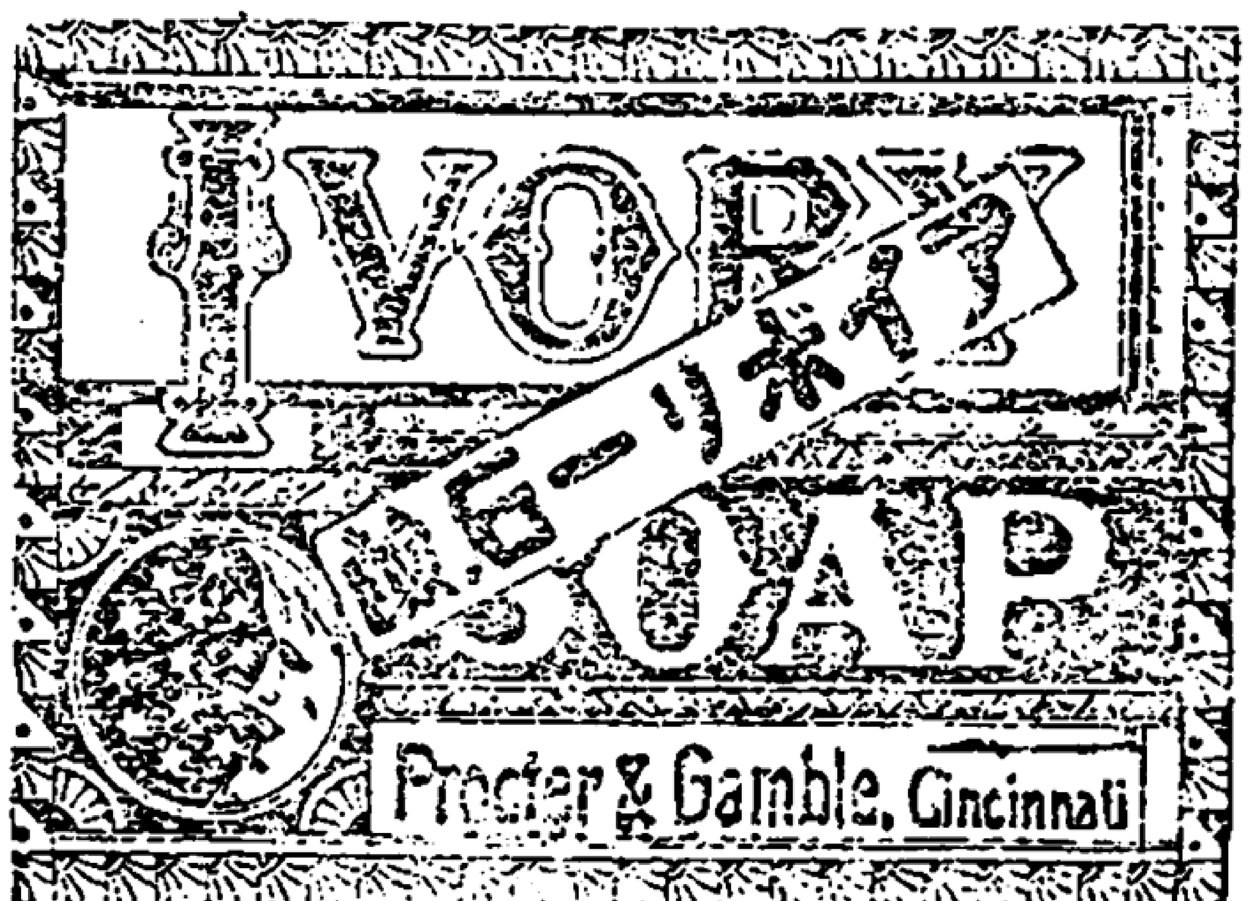
右は「地方の婦人」編輯計畫の一般のみ、詳しき內容は更に次號を以て豫告すべし

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （振替口座東京第壹貳七九番） 最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ



散歩

東京鄕石堂石印



IVORY
アイボリーソープ
SOAP
Procter & Gamble, Cincinnati

愛



獨逸公使館附陸軍大尉溝口直亮氏夫人須美子

名門夫人



伯爵酒井忠道氏令嗣
夫人喜美子



子爵仁禮景助氏夫人嘉枝子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

產科婦人科專門 醫學士北昌孝夫先生閲

婦人病心得

(最近)子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛嘆の極である◎著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◎病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の內無代進呈すはがきにて至急申込まれよ

目次

婦人病の總論◎子宮病血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一 (電話新橋三千六百一) 雅岡省三

妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 河村愛子



◎診察時間朝七時より夜九時迄◎あざほ黑こぶいぼ

梅毒りん病ぢ疾わきが生殖器病神經衰弱症

東京 淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横兩國橋より三丁

中央醫院

生殖器病神經衰弱 記臆力減衰陰萎遺精早漏夢精發育不充分症等

梅毒◎横根下疳 りん病◎わきが◎ぢ 皮膚諸病

△各自病狀を記し郵便切手六錢を封送せば其病症を速に全治せしめ得る特効新薬の説明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◉本誌は内容を革新し大に面目を發揮せり◉

毎月一回(一日)發行

秀才文壇

年四回増刊

七月一日 ▷第拾卷第拾四號◁ 發行要目

◉(改正)定價 ○壹冊(大百四十頁)(實税)共拾四錢五厘 ○四冊(三ヶ月分増刊共)(同上)六拾參錢 ○八冊(半年分増刊二回)壹圓貳拾五錢 ○十六冊(一年分増刊四回共)二圓卅五錢

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂(振替東京一九五五)

賣捌 東京堂 東海堂 ○ 北隆館 上田屋 ○ 至誠堂 良明堂


大英國皇室
御用品
DIEU ET MON DROIT
値の安き劣等白粉を
御使用なさると
顔に小さき腫物ができ
且つ皮膚を荒らします
純良なる舶來の
ヴィノォリヤァ白粉は
絶して其等の憂なく
一層素顔の美を發揮し
艶麗なる美貌を保たれん
交際場裡の貴婦人方は
ヴィノォリヤァ石鹸
ヴィノォリヤァクリーム
ヴィノォリヤァ石鹸齒磨
ヴィノォリヤァ香水
のみを御愛用せらる
日本代理店
神戸クローザ商會
ヴィノォリヤァ會社
VINOLIA
POWDE
VINOLIA
LONDO

盛裝



東宮武官富邦鼎氏令嗣
邦茂氏夫人荻子



伯爵有馬賴萬氏令嗣
賴寧氏夫人貞子

名士夫人



遞信次官仲小路廉氏夫人

工學博士眞野文二氏夫人

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◎るいれき患者に注意す

▲瘰癧は古來難症中の難症で本病の治術としては先づ局所切開するのが通例です併し根治の療法とはいへない假令一時は治しても十中の八九は必らず再發します加之頸部には最も醜態なる瘢根を殘し之が爲め往々婦女子の婚嫁を妨ぐることあるは實に氣の毒千萬の次第でありますが此病毒は單に容貌を損ずるばかりでなく漸次進んで體内樞要の臟器を侵し終に生命まで奪はるるに至ることも亦往々見聞す事實で此病の恐るべきは申迄もないが今日迄確に治す藥がなかつたのであり升

▲發見の新藥 金線草丁幾は此病に對し不思議の効能あり卽ち小なるグリ／＼は内部より消散し大なるものは自開排膿して根切全治せしむるのみならず連續服用中全然體質改良健全ならしむる獨得の効力あり

▲本藥は石津藥學博士及内務省衞生試驗所の試驗を經たるものにして其効能の確實なるは實驗せる醫師並に服用患者の證明に依り明かなる次第であります此實驗を揭げたる八十頁の說明書「金線草私言」は無代にて送呈す 東京日本橋本銀町四丁目東光堂 三田幸藏

▲本藥の價は四百五十瓦入參圓、二百廿五瓦入壹圓五十錢（送費拾貳錢）



調劑元

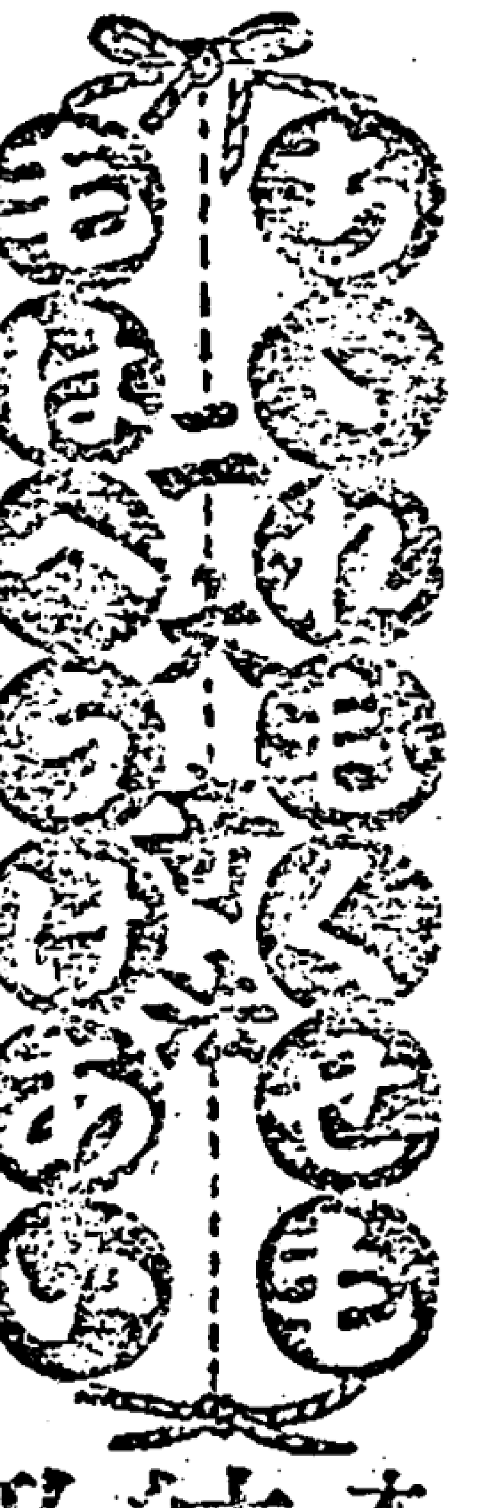
東京市丸の内

本劑は代々醫際の秘藥にて如何なる遲速の月經滯りも胃腸子宮等を痛めず安々と通じ經症なるは其夜にあること請合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其偉効を認めよ

定價廿五錢五十錢一圓 特製二圓但小包送料遠方は八錢を要す

有樂町三ノ二

江戸屋



本法は

女髮結師安部歌子女史

の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麴町區三番町六十七 小林濟世園

耳病 耳遠き人

▲藥「ナール」は耳漏、耳鳴り、中耳炎、鼓膜炎、其他の耳病及聽力遲鈍卽ち耳遠き人等の特効劑にて武庫川陸軍藥劑官が多年苦勞せられし靈劑耳病にて困難の人は參考迄に●貳錢郵券封入照會あれ調劑詳述書送呈す

東京日本橋區北島町一ノ八 東藥味調劑所

(たノ四)

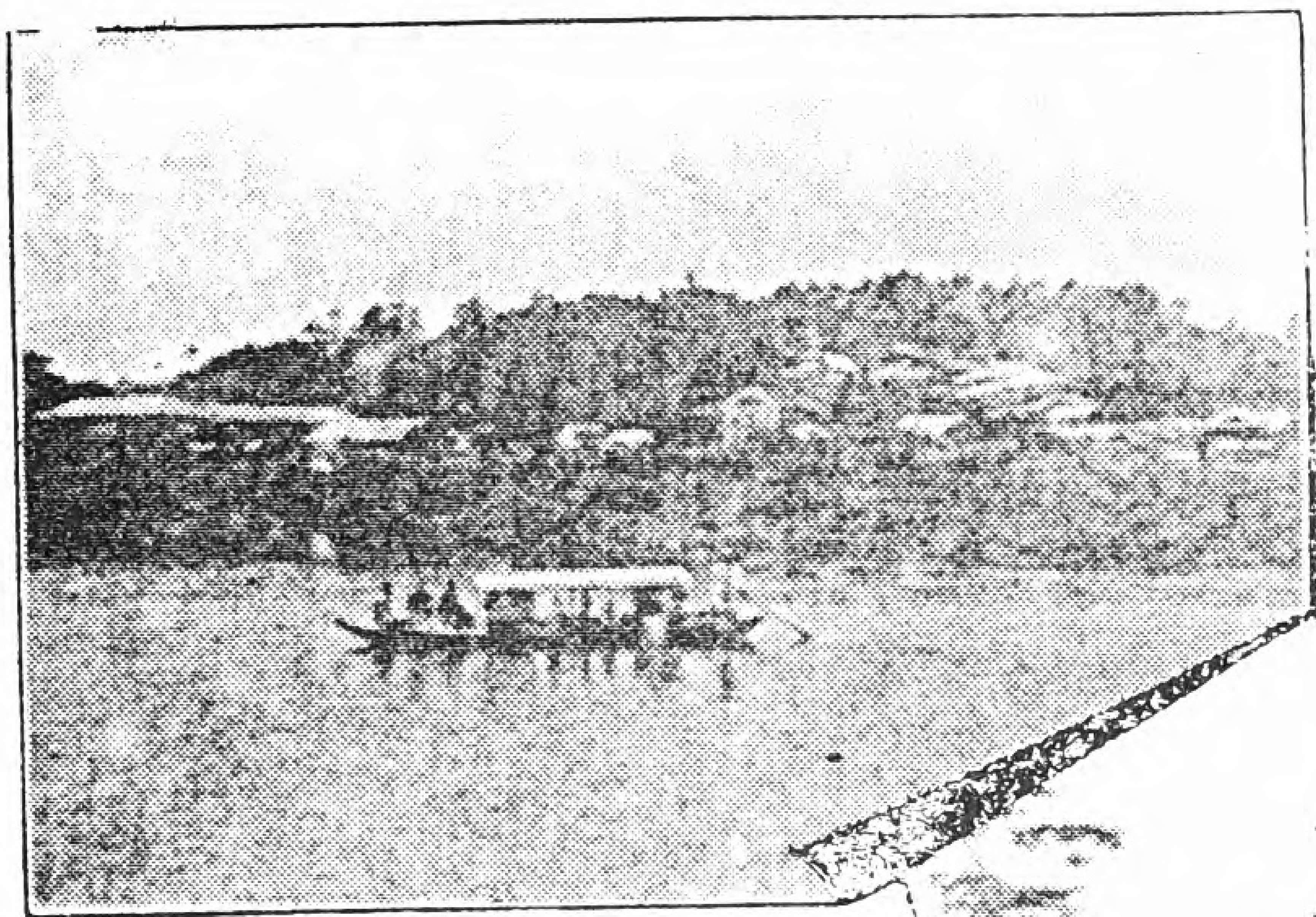
雙美



男爵永山秀雄氏令妹君子

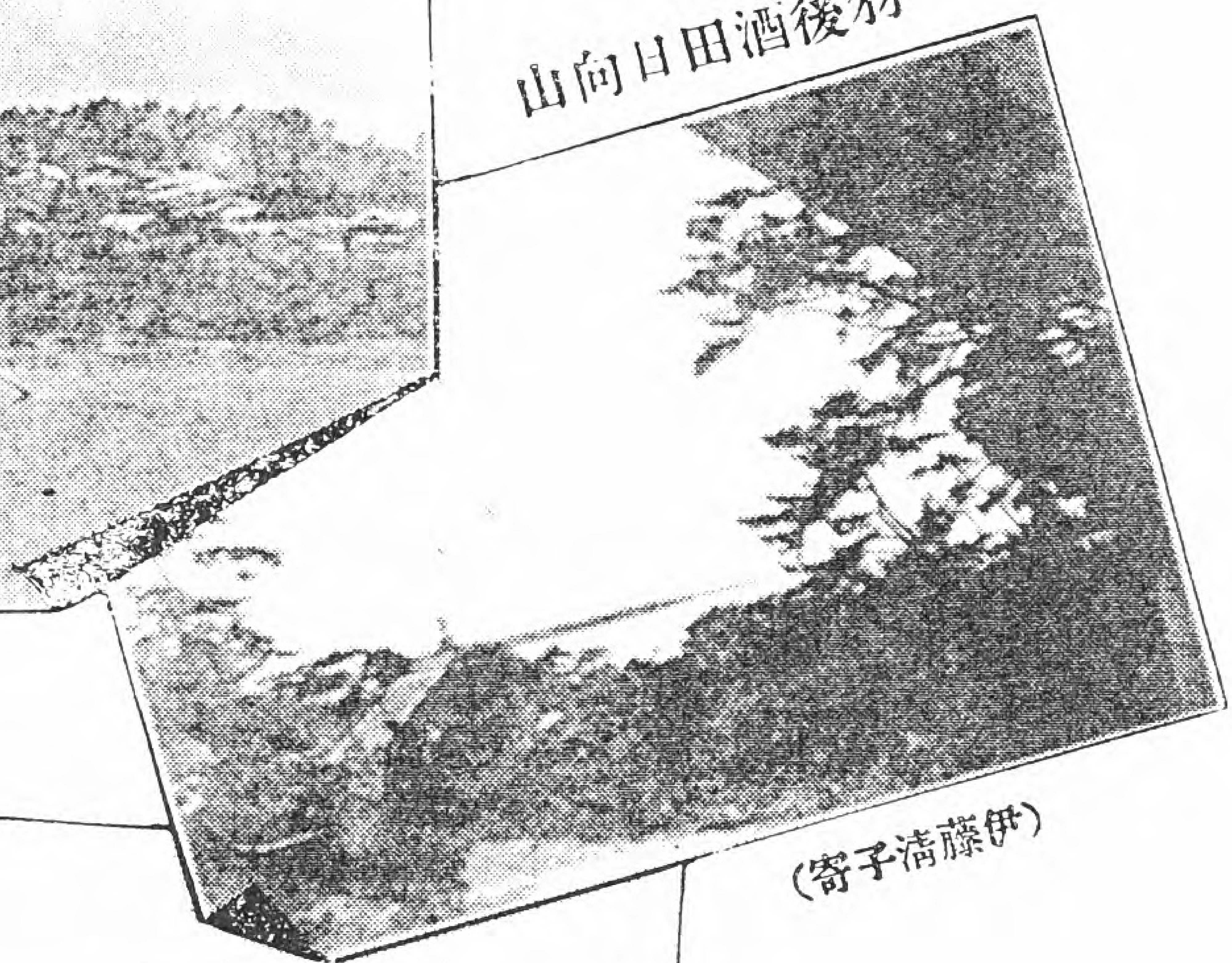


町田醫師令嬢しづ子（第三高女卒業）



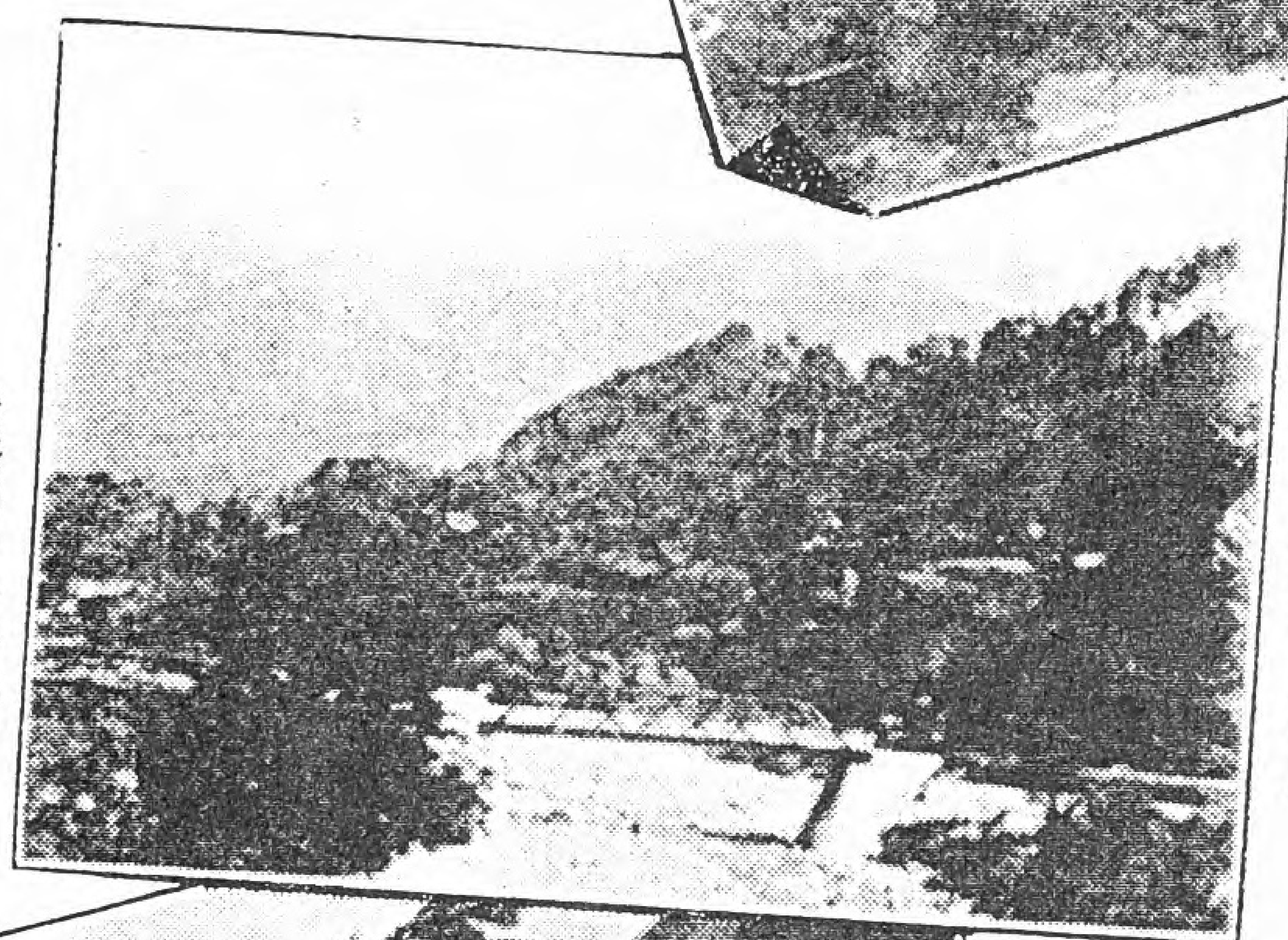
福井市足羽川より羽山を望む
藤島神社あり(新田義貞を祀る)

(田村とよ子寄)



羽後酒田日向山

(伊藤清子寄)



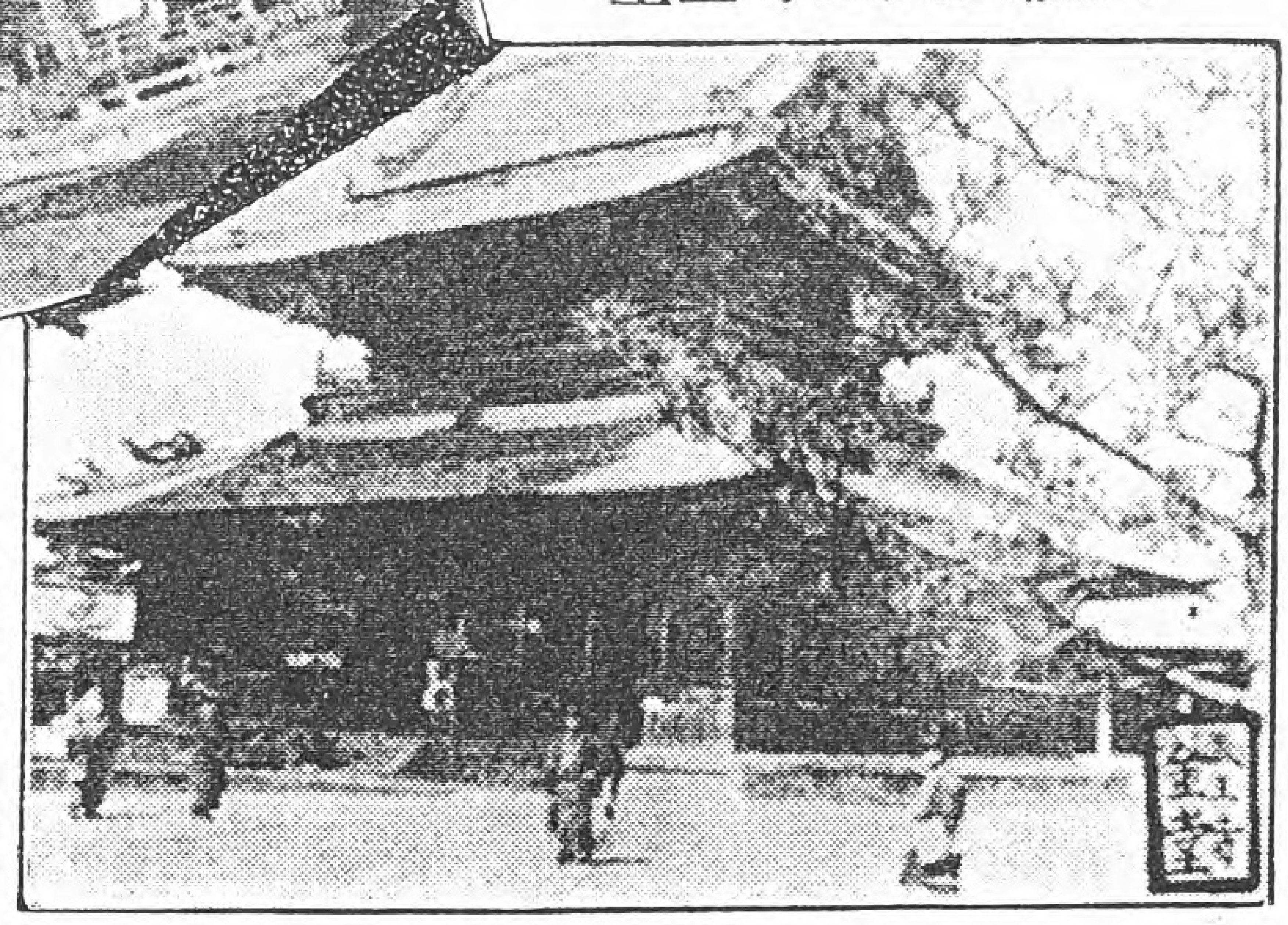
木曾駒ヶ嶽の夕照

(足利きみ子寄)



伊豆三島神社

(高田さり子寄)



大阪四天王寺金堂

(後藤ひで子寄)

腦神經衰弱症とヒステリー

婦人血の道及生殖器障害等の疾病は如何に治療すべきか

陸軍々醫　久保光藏　識

近頃此の種の病人が非常に多く成り、成つて其の治療法を研究する專門家も多く、又新聞雜誌其の他に顯はる腦病、神經衰弱症及ヒステリー症（婦人血の道）並に生殖器障害等の特効藥なりと稱する賣藥も亦續出せり茲に於て神經過敏なる本病者は心迷ひ迷ひて、醫者廻り、病院廻りを仕事となし、其の上他人や素人の好いと云ふ藥は申すに及ばず所有る療法を試み、長くの間何の効をも奏せざる治療を續行し、莫大の費用を投じて尚全治せざるのみか却て自身の將來を苦慮し、愈々煩悶に煩悶を重ね倍々病勢は加はり◎頭痛◎眩暈◎耳鳴◎不眠◎視覺◎嗅覺、味覺の障害◎脊髓の鈍痛又は激痛◎手足冷へ◎動悸◎息切れ◎食欲減退◎陰萎◎遺精◎早漏◎交接不能◎便秘等の容態が烈しく成り◎見聞して快感なく◎小事を苦慮し◎求めて心配苦勞を成し◎思考力と判斷力なく◎自分の位地、職業、家庭、居宅等常に不滿◎自分の不幸に陷る可き事のみ思想に浮び◎讀書力なく◎記臆力なく◎驚き易く◎悲み易く◎感じ易く◎倦み易く◎不活潑にして不機嫌◎常に悲觀と苦悶とにて終日病症を案じ自分の不幸不運を嘆き、甚だしきは不治の難症と早や合點をなし、哀れむべき厭世家となり、遂に自殺を遂ぐる者も往々あり實に憎む可き厭ふ可き此の病魔!!

諸子にして現に若し此の苦境に陷つて我が身の不運を嘆きつゝある不幸あらば送料二錢切手を添へ東京市東兩國小泉町救世堂藥院へ申込みあらば余が多年間直接患者に接し其の患ふ所を診斷し其の訴ふる所を採り實驗に實驗を重ねたる結果遂に成功したる余獨特の治療法を詳細に記述せる珍書卽ち▲腦神經病新論▼一冊を同病者に限り無代施本す、同病者は必ず病床に一本を供へ以て完全なる治療法を實行せられよ。

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人界に於ける新智識の涵養を努むは本講義也

緑蔭本講義を繙くは理想也

女子大學講義

新に第三回の學期を開始す

編輯所（東京小石川區目白臺 電話番町七百七十番）日本女子大學校櫻楓會

◎本講義は毎號雲上貴き邊に奉獻すべき光榮を有せり
◎入會は至極簡便にして學科は女子大學家政科に據る
◎本講義は文章平易趣味豐富假名付なれば何人も讀得
◎講師は悉く女子教育に經驗ある博士大家を集めたり
◎通信教育は簡便なる勉學方法にて家庭的婦人に適す

◎全學期を修めば十八册の百科全書を備付せしに等し
◎本講義は賢き基礎の上に立ちたれば世の信用多大也
◎本月限り入會者を優待す會費は一ケ月金五十錢なり
◎會則は「往復ハガキ」にて申込次第無代進呈すべし
◎會員にて毎月好評ある婦人雜誌「家庭」を無代進呈す

發行兼申込所（東京小石川區久堅町一の八 電話番町九三二番）精美堂

女子技藝研究會長
梶山彬先生著

梶山先生が一代の大著述たる女子技藝叢書は全國高等女學校及び同程度女學校は勿論一般獨習者より女子技藝書中第一の優良なる指南書なりと評せらるゝはその內容が他の參考書の如く空理空論など無く多年の經驗に基き學理と實際とを調和せしめ實際に適せる方法を明にせるが故なり、されば女學校敎員及び生徒は勿論獨習者は云ふまでもなく學校及一般家庭に本叢書を備ふるときは趣味ある技藝の蘊奥と經濟的智識と有益なる副産物を得らるべし。

衣類しみぬき染色洗濯法新書

（新刊）　大和綴菊版頗美本金三十錢送料八錢

㊟今ま衣類の汚れ易き夏季に際してしみぬき染色洗濯法新書を公にせられぬ、世間には洗濯せるが故に高貴なる綾羅を褪色せしめ、或は「しみ」の出來て晴衣とすること出來ざるものを營業者の手にて修飾せしむるため地質を弱むること多く又褪色せる衣類もその利用法を知らざるが故にやたら廢物に歸せしむるを常とす、本書は此の缺陷を補はんの趣意により絹布料布毛布其他あらゆる衣類の「しみぬき法」「染色法」「洗濯法」を叮嚀に說き容易に應用の出來る方法を明にせるものなり。

○此書の內二冊以上御注文の方は送料を要せず○

裁縫新書
大和綴菊版頗美本
積り方仕立方說明
圖百餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

編物新書
大和綴菊版頗美本
圖案及雛形圖百二
十餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

造花術新書
大和綴菊版頗美本
花葉形切圖二百餘
圖挿入全一冊
金五十錢送料八錢

刺繡術新書
大和綴菊版頗美本
圖案及雛形案百五
十餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

花たば新書
大和綴菊版頗美本
花葉形切圖百餘た
ばね方書九枚挿入
金五十錢送料八錢

摘み製作新書
大和綴菊版頗美本
切形及配置圖百三
十四箇挿入全一冊
金五十錢送料八錢

袋物製作新書
大和綴菊版頗美本
圖案及說明圖百六
十餘挿入全一冊
金五十錢送料八錢

發行所　東京市京橋區南槇町十八番地　廣文堂書店　振替東京四六八四

異彩



文學博士物集高見氏令孃和子（跡見女學卒業）



松岡順吉氏令妹　梅　子



水野義郎氏令孃　き　ん　子



（吳市）前列右より 桂乙和子、奥平敏子、齋藤爲子
中列 小菅時子、天野晴子、堀越辰子、露子
後列 佐藤信子、中島梅子、小口豐子



（近江）前列 右より 石川きよの、木下辰子、奥村しを子
後列 松田敬子、山本たみ子、細野その子

（此白上衣は割烹實習服です）



（和歌山）右より 秋本千登里、鈴木愛、長田タミノ



女子文壇

第六年第九號

明治四十三年七月一日發行

蓋し一切の戀愛に於ては、男子は唯自己自身を愛するのみ。而してそは一切の弱點と醜汚とを負へる自己にあらずして、自己が有らむことを欲し、且つ有らざる可からざる所の者即ち其最深最奥なる形而上本性是れ也。人は如何に深く自己の心底を探るも、到る處汚濁せるを見て、白璧瑕なきが如きを見ること能はざるなり、而かも人は全然自己たらむこと即ち自己の本性に還らむことを熱望す。然るに人は自己の本性の純清、濁無きを見ること能はざるが故に、之を外に求めて、以て其熱望の到達を易くせざる可からず、即ち人は自己の中に游離せしむること能はざる、絶對的價値としての自己の理想を放射して、之を他の人間に置く。この人を愛するとは是れ此謂なり。故に人は愛する時は、始めて全然自己たることを得べし。換言すれば人は愛によりて自己、即ち靈魂を意識す。我れ愛す故に我れ在りの語は藝術家のみならず、一切の人間に取りて、心理的眞理也。

（『男女と天才』の一節）



互に信じ合つた心を基礎として新しく持ちたる家庭

白木絲子

◎奧さんと云はれると妙な氣持

巣立ちした雛鳥の小さい巣の營みも、はじめてから旣う半年は經ちました。うか〳〵した稚い心持を持つた私には此頃やつと自分はもう處女ぢやない、人の妻であるといふ意識が何彼につけ先立つて參りましたけれど、近所の子供達もまだ伯母さんと呼ばず姉さんと云つてゐます位なので、主婦といふ言葉をきくと何だか自分の上に被せられる言葉ではないやうな氣持がいたします。實家へ行つても未だお孃樣で通つて居りますし、この間までは奧樣といはれると他の人をよんでる樣な妙な氣持がしてなりませんでした。漸く平氣で返事するやうに成りました。眞實に眼を開いて自分が踏んでゆく道を認めるのはまだ〳〵これからなのでございます。女として責任のある仕事が澤山前にあるやうに思ひます。

◎平和を希望とした新家庭

新たに造りました家庭ですから、夫と私との二人暮しに若い下婢を一人使つて居りますだけ、夫の兩親は揃つてゐますけれど遠く故郷に離れて居りますので、私は結婚する直ぐ其翌日から主婦の位置にたゝなければなりませんでした。二月程あとから夫は家にゐて勉強するやうに成りましたが、結婚した當時は伯父の店の方へ出てをりました故、晝間のうちは私と下婢と二人きり、今まで若い女達ばかり多く居る實家に育つて來た身には、時には寂しく思ふこともないではございませんでしたけれど、もと〳〵心持の平らかな生活を希つて入つた新らしい生涯でしたゆゑ、大方は思つてゐた通りの家庭が造れたのでございます。

◎實家を出でたる時の感想

實家を出るときには、いよ〳〵放たれて自から小さい巣をいとなまねばならぬといふ心持に滿たされてゐましたので、お孃樣といはれる境涯を獨り周圍に遠ざかつてゐる氣持で居りましたが、時々襲つて來る不安と淡い恐怖の念とはどうしても蔽ひつくすことは出來ませんでした。これからは自分が思ふまゝの生活が行へる、自分と云ふものが眞に試みられるのだと其よろこびが絶えず胸を走つてゆく傍、何だか寂しいと云ふこともないのに寂しくてならない暮春の哀愁の樣な心地に鎖されたり、一個の人として許されてゆく自分の姿が莫迦に弱いものに思はれたり、心が始終明るくなつたり暗くなつたり許りしてゐました。

結婚する前日など何故だかしらず氣が沈んで了つて餘り口も利かなかつたやうです。いよ〳〵其翌日、仕度をして俥にのせられて暗くなりそめた頃實家を離れました時は、只茫乎と何の意識もなくなつた樣で折角お化粧した頰を涙が熱く流れるのです。けれど霞む眼に映つて來る街の眩ゆい灯火は是れからの生活を意味するやうにも思はれて、冬枯の柳の下にずつと立並ぶ露店の賑はしさ、街の明るさを見ますと、二十年の寂

しかつた生涯はもう盡きた、私は明るい街の人となるのだと何物にも怖れず奮闘しようと云ふ根强い心持が萎れてた私を蘇生らせるやうにして、軈て俥は大通りを横町に入り、小さい二階建の中から灯の光が洩れる格子戸の前に停りました時は、あゝ新らしい生に入つたと嬉しいとも悲しいともしらず、うやむやに胸を衝いてくる物がございました。

◎他の家にて行ひたる第一日

他家の人となつての第一日、それはもう張り切つた高い調子の心の狀態でございました。何しろ引越女房と云つた具合で、夫が新たに此家を構へましたのも、結婚する三四日前なのですから、まだ道具の置場處も決まつてゐないと云ふやうな譯で、主婦としての第一日は其始末なんかで暮れてしまひました。私が實家から持つて來たものなぞ前に運んでおいたのですけれど自分が來てした譯でないので何處へ入れたか薩張判らず間誤ついてますと、とんでもない下婢の部屋の戸棚の中にあつたりして、奈何にか可笑しかつたでせう。けれど其樣に色々片附たり何かしてゐても何うも自分が此家の主婦になつたなんてことが僞のやうに思へて、そんな高い調子の心でゐながら、この生活が夢ぢやないのかしら、とやうな氣持がどうかするとムいました。

◎始めて下婢を使ふ氣苦勞

實家にゐました時は、大勢の女中を使つてをりましたものですから、三度のお菜のことから何から何まで總て自分で手を下すといふことは滅多にありませんでした。又周圍が中々思ふやうにさせないのですもの。臺所へチョイ〱出ればコセ〱するとか何とか、大きい家にはよくある事ですが萬事そんな風なので、厭な事をきくのが面倒ですから何所までも人まかせのやうに遣つて來ましたけれど私には又それが實にいつも苦痛を感じられてゐましたのです、祖父と父とよりしか目上はゐないのでしたから自分が丸で主婦の樣な立

場でしたけれど、性來氣のよわい私には兎角祭り込まれようとする傾向があるので、どうかして手も足も伸伸と、自分の思ふまゝに行はれたら奈何に快いだらうと夫れを望んでゐましたが、新らしい家庭に始めて主婦として臺所にのぞんだ時は豫ての希望が實際になつてきたのですから、たとへやうもない快さを覺えました。其代り今迄年來の習慣で大抵のことは云はなくとも女達が處理しておいてくれた實家の有樣とは異つて自分が直接下婢に總てをいひつけてやらなくては成りませんし、田舍出の何も知らない下婢で何から何まで一々口出さないと飛んだ失策をして了ひますので、お鍋一つかけておいても自分が傍にゐないと心配で堪まりませんでした。雖然何事も自分の意志のまゝに行へるといふことは實に愉快で、新生活に對する興味は實にハッキリ感じられたのでございます。

◎家庭の平和は三度の食事より

心持のいゝ簡易な生活をしたいと不斷思つて居りました私が氣にかけるのは食事のことでムいます。何も別に珍奇なものを拵らへるのでも何でもなければ、何でもないやうなものですけれど粗食でも快い感情をもつて食べて貰ふやうにしたいと思ひますと、一々自分が手を下して拵らへないではゐられません。

ですからなまじ變つたものを勸めようと思つて妙な物を拵らへあげたりして、折角の骨折が何の役にもたたない樣な事をして了ふのもよくあるのでムいます。考へが下手ですので其度のお菜に困つたりすると、よく夫が云つてくれたり致しますが時々あべこべだと思つて氣の毒になる事があつて眞箇にをかしい樣ですまあどうしても飯事してゐる樣な氣持でムいます。

◎下婢の交代

初め此方へ參る時、女中なぞは要らないと申してゐましたのですけれど、今迄何分大勢の女達を使つてゐたのだから、てんから一人で何も遣れるものぢや無いと云つて年寄なんかどうしても承知しませんので、一

人實家から連れて參りましたのでした。

下婢に家の中を荒されたり自分の心持を傷つけられたりする事は、今まで覺えのない事では厶いませんしそれが一番厭うて居た事なのですから使はないことにきめてゐましたのが、使ふ樣になつて、其女は默まりむつつりと云ふ方の性質でしたが、仍且少しでも實家の方に居たのをつれて參つたのが惡かつたのでしよう實家にゐた時の生活と新奇の生活とを同等に見られては困るのですけれど、どうもそんな傾があつて內々私も弱つて居ました處、當人から暇をくれとの希望で暇を遣りましたが、其出す時に、何ういふ原因で暇が貰ひたいのだか、よく云つてお呉れ、何といつても決して怒りはしないから、是からもあるのだから其原因を明瞭云つて貰ひたい、と色々尋ねましたけれど、どうしても云ひませんのでした。

餘り私は使つてるものに矢鱈に干渉はしません方なので、隨分自由にしとくつもりなのですけれど、そんな事があると苦痛で仕樣が厶いませんのです。用といつても下婢の爲事と私の爲事とはちやんと決めてありますし、何う考へても暇呉れといふ譯が判らないので實家の方からつれて來た女ですし、實家の方へ云ふのにも誠に困つて了ひました、尤も宅には水道がひいてないので少し離れた井戸から汲んで參るのですが、それとも大した事ではありませぬ。勿論それが原因の一つとは當人もさうでないと申しますのですから思はれませぬ、下婢の變遷なぞは何でもない事のやうでゐて其實家庭にとつては大きい影響を致します。只今ゐますのは仍且實家からの世話で來てゐるのですが田舍から出て來た許りの所を參りましたので、ごく使ひ好いのでございます、それにどうしても下婢なぞは自分より年下の田舍出かなんかでなくちや中々使ふ方が萬事に若いのですから遣りきれませぬ。

◎近所のつきあひ

私とては繁華な街の、四邊がさう大きくない家が建込んで、隨分ごちや〳〵した處ですけれど、電車通り

を一寸奥へ引込んだ新道なので大して騒しくはなく、住み難くはない所でございます。

けれど實家に居た時の近所といふものに重きを措かなかつたのと違ひ何でも世間的にしなくてはなりませんので、若い心持でゐる私にはそれが一番煩はしく思はれました。場所柄に相應しない私共なので近所でも毛色の變つた人として見てゐる樣でございますが、春のお彼岸の時なぞも、お配りなんて事を此邊ではするものかしないものか、一向判りませぬのでまあ來るまで控へて見ようと云つてますと、向ふ三軒と云ふ其お向ふの一軒から持つてこられて、仍且するのだつたと俄に大騒ぎを始めたので厶います。



其後またお向ふの一軒のお家で御主人が急病でおなくなりになつた事がございました。夜眞向ふのお家から知らせて下さつたので何れ會葬するのだらうけれど何分判らないから明日になつたらお向ふのお家へでも聞きにゆかなくてはと云つて居ましたが、其晩聞きに參れば宜しかつたのを、其翌日にな

つて夫は外出して了ひ、私は用をしてゐますと餘り戸外が騒がしいので出て見ましたら、既うお葬式が出るといふのです。お隣でもお向ふでも會葬なさるのに私とて許り參らないのですもの。見てゐるのも極りが惡くて仕樣が厶いませんでした。で其翌日私がお悔みを云ひに參りましたがこんな經驗も家持つたので初めて知つたので厶います。のつぼに育つた私でも家持つとどうしても家といふ觀念が心の一部におかれてあつて中々うか〱してはをられません。夫れでおかしかつたのは此春名古屋に共進會の開催中夫の實家の方から頻りに來い〱と勸められたけれど、どうにも家の始末が困るので遂に參り得ませんでした。下婢一人おいてく譯にもゆかず留守頼む人はなし、それで又二人共ゆきたくつて〱なりませんのでしたから每日の樣に云出しては、果ては蝸牛のやうに家を背負つてゆかれるものならいゝけれどもなんて笑つて了つた事がでざいます。自由なことも多い代り不自由なこともでざいます。

◎月末の心配

今迄月末も月初めも一向繰返してゆく日に變りはなく夢の樣に過して居りましたのが、家を持つて見て初めて每月々末になつてくり返す心持を知りました。

私の處では夫が伯父の店へ出てゐました時はとも角別にこれといふ收入もありませんので只今の處まあ重に私自身についてる財産の幾分を每月實家の方から出して貰つてゐるやうなのですけれど、それも多からぬ額なので少し贅澤すれば困るのは目に見えてをりますから餘程注意しないと不可ないので厶います。十三圓の家賃に三圓五十錢の下婢の給金、それを取除けたあとを生活費にするのですから大概キチ〱で氣をつけて居てもどうかすると使ひ過ぎて月末が心細くなつて來る時などは、勉強してる夫に成べく知らせたくはないと思ひますし、さうかと云つて急に何でもケチ〱して了ふ譯にもゆかず、大きに弱つて了ふ事が厶います、でも夫がなくなつたらなくなつたやうにするさ、

なんて云つて呉れますし、私もさうクヨ〳〵する方でも無いものですから、まあどうにかさして窮して了ふ事もなく遣つてゆかれますが、少し心細くなつて來た月なぞは、あと何日ある、今日が幾日だなどと日許り勘定してゐますをかしさ、雖然そんな思ひすると小さい乍らも自分で自分の巣をいとなんで居るといふ心持が明らかになつて來るので厶います。

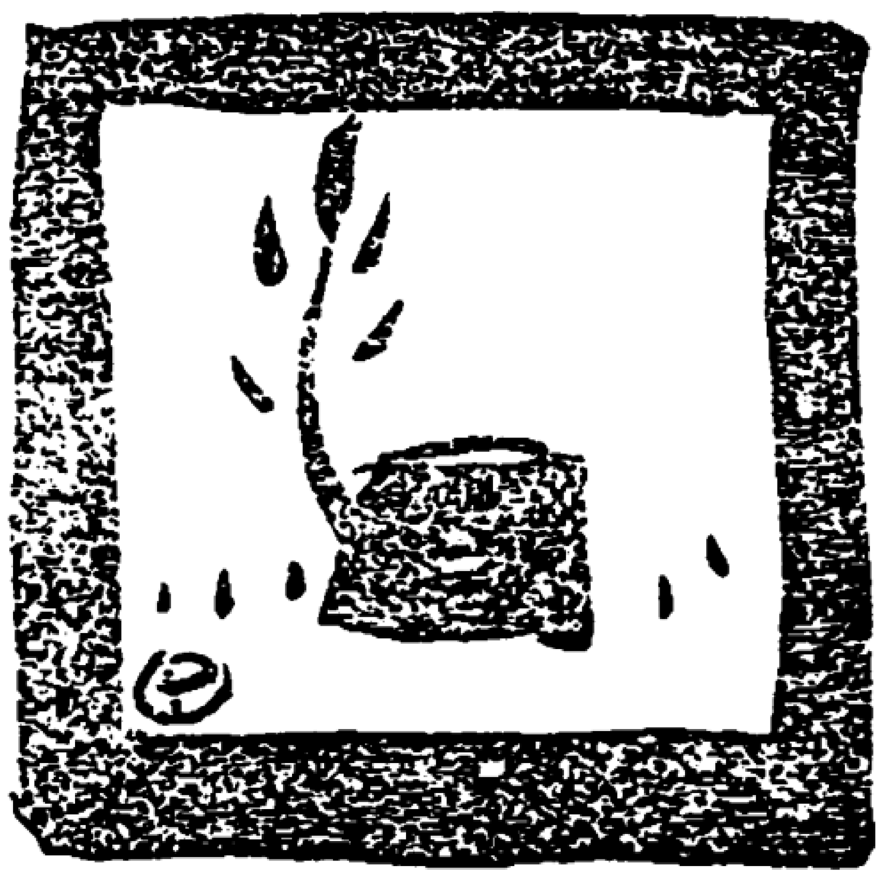
◎望んでた自由と思ひがけぬ壓迫

實家にゐました時は只もう何かにつけて監視されてるやうなのが厭で、自由が得度い〳〵とそれ許り望んで居りましたが、お互に信じ合つた心を基礎として拓いた新生涯には、希望してた自由が待つてをりましたまあ總てが自由だと申して宜しい位でせう。初めて自分で動いて自分で生きてゆくと云ふ人間らしい自覺が生じて參りました。結婚する前は囚はれて了ふのだとか何とか其樣な心地もありましたけれど、確かに私のは人と反對で結婚してから解放されたので厶います。

今に子供でも出來たら奈何か存じませんが今の所、囚はれるなんてことは少しも思ひませぬ、第一實家では何よりも忌まれて居た文藝の趣味性も、此家へ參つてからは束縛處でなく却つて良人が讀書をすゝめたり何かする位なので、實家にゐた時のやうに血眼になつて讀みたがつた熱心が淡くなつて了つた程でございます。ですから舊い時代の空氣が殘つてゐる實家にゐましたときの半ば自暴自棄的な放縱な心持は今もう全然忘れてしまひました。そんな風で極めて安らかな日を重ねてまゐりますけれど、時々心の平安をかき亂すものがないでもございませぬ。

夫れは新たに入つた生活と今迄の生活とか餘りに懸隔があります爲に、心にもない見榮をはつたり何かしなくちやならない場合があるのです。無資産の人の許へわれから進んで參りましたのですから、自分は新奇に拓いた生活に準じてゆき度いと思つて居りますけれど、鳥渡兒の許へゆくにしましても、着物からして心配しなくちやならないのでございます。下手な服粧を

してゆけば笑はれますから、どうでもいゝやうなものの仍且女ですから笑はれるのは辛うでざいますもの、兄の家が眞個は私の生れた所なんですけれど、その家へゆくのに氣取つてゆかなくちやならないなんて云ふのも全く一種の苦痛を覺えます。恁ういふ所へゆくと自分の意志を措いて全く周圍の爲に動かされるやうなものですから、僞りなき生活だと思つてゐる現在を、何故欺むかれてるやうな今迄の生活の爲に何時までも累はされるのだらうと、つく〴〵複雜した世の中だと思ふのでムいます。



若い奥樣達に考へて頂きたい

戊申婦人倶樂部理事　宇山碌子

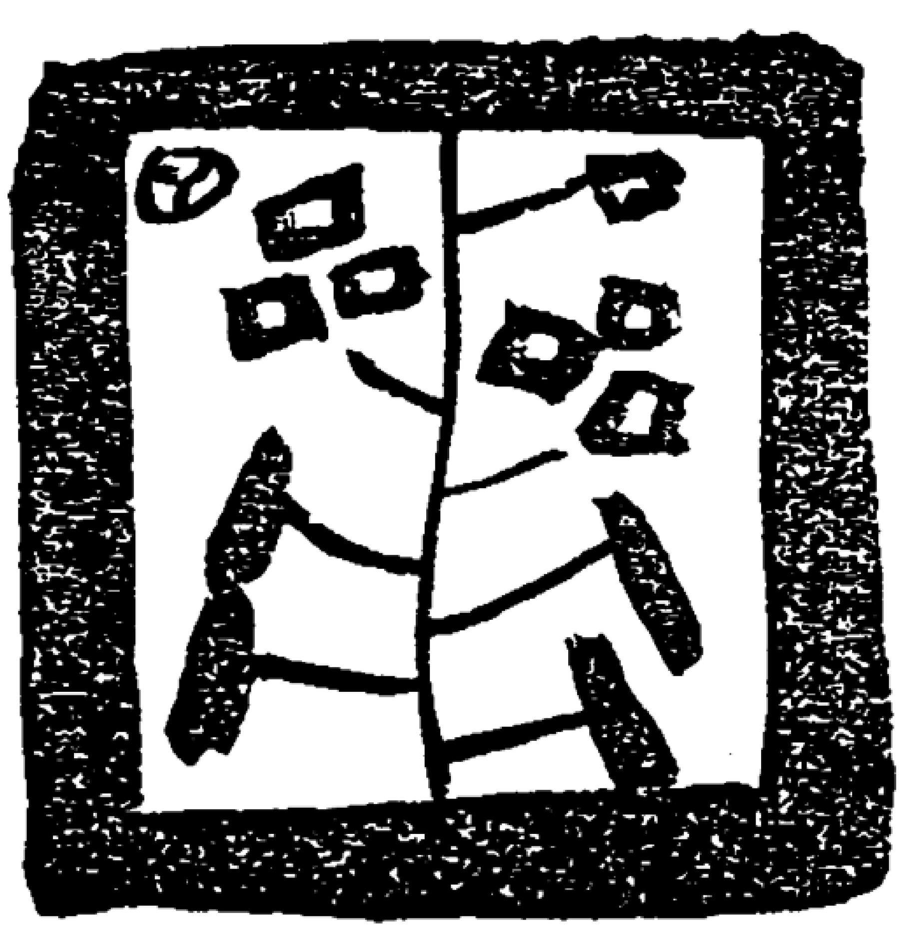
私などお話し致すのもお恥しい樣な次第で御座いますが、折角のお尋ねですから、學問的にはとてもお話出來ませんが、唯私の實驗から割り出した、つまらぬ考へでも申上ませう。

　私考へますには今の若い奥樣方は餘り虚榮に流れはしないかと思ひます、もうお召からお帶、ショール指輪に到るまで何方も〳〵お立派なものばかりですがさう皆樣のお活計の豐な譯では御座いますまい。社會と申しますと先づ官吏とか、商人とか一般には中流家庭が標準に成つて居るので御座いませうが、今日、失禮ですが中流の家庭の收入と奥樣のおなりとを比べて見ますと、そこに調和が取れません。早い話が日曜な

どに夫婦と小供と一家うち伴てお出かけの方々を見ますに、旦那様は日頃お勤めの塵埃だらけの洋服を召して、お小供衆はせい〴〵メレンスと相場が定つて居ますのに、奥様お一人は三越か白木のモデルの様なお容粧をなさつて、而も電車のこみ合ふ時など、先づ自分のお召が氣になるので、夫小供をさし置いて席が空けば自分が腰を下して了ふなど、見るに耐へない事で御座います、私はかう言ふ方を見ますたび、實になげかはしい事だと思ひます。自分自慢を致します様ですが私共などでは日曜にはよく打ち揃つて出かけますが、衣服などは惜し氣なしの平常な服粧をしまして、眞實の樂しみに出かけます。此方が結句氣樂で御座いまして、一週間の勞れも忘れる様に思ひます。又之でこそ眞實の日曜日だと思ひます。今日の所拜見致しますのに、月給の三百圓のお家の奥様も、五十圓のお家の奥様も、お服粧に於てはさしたる相違が無い様です。三百圓は三百圓、五十圓は五十圓、此月給は同様に致す事は出來ませんのに、奥様のお服粧は同じ様に旦那様のお肩にかゝつて參ります、妻が夫に何よりさきに衣服の心配を懸ける様な事して、それで妻の職分を盡したお積りでせうが、妻たるの職分を盡さずして、唯徒らに美しい衣服裝飾品の心配をかけるなどは、妻のする事でありませぬ。妾、手かけの仕事です、一家の主婦たる者が妾、手かけの眞似をして得々として居るなど實に一人前の女子の恥とすべき事です、主婦は主婦たる職務を盡して始めて主婦で御座います、いくら夫人だの奥様だのと申しましたとて、主婦の務めを盡さずに着物などばかり氣に懸けて居る方は、妾と何の選ぶ所が御座いませう、私は此等の方々によく〳〵考へて頂きたいので御座います。

で、又かう言ふ方に限つて、夫の不足を仰しやりたがる、會の席とか、さも無くても三人も集りますと直ぐに夫がどうのかうのと必ず不足を並べますし、さも無ければお姑子様の蔭口、又は御自分のお身體の弱い事を何か名譽の様に、頭が痛いとか、やれ神經衰弱だとか、そんな病氣でもしなければ奥様では無い様なお

積りに成つて、御自分の不健康をお並べですが、働くべく生れて來た人間が、かう言ふお身體をして、それで人間の務めがすむお積りだらうかと思はれます。猶此外には下女の噂です、下女は家事の補助者で決してお勝手の事を一任すべきものでは御座いません、其れを下女に任せ切りで、お姑樣なり旦那樣なりが此汁は甘かつたとか、鹹かつたとかおつしやれば、「まあこんなこしらへ方をして」とすぐに順送りに下女へ持つてゆく、下女は下女でお小言おつしやる位なら、奥樣御自身でなさればいゝと、彼等は直ぐに腹を立てます。かうして面白くない家庭を造つて、唯目の先の虚榮にばかり走つてゐらつしやる方々に、私は一度よくよく考へて戴きたいと思ひます、學問的には申上られませぬ、只自分の多年苦心して姑、夫につかへ、小供を育てて來た苦勞から出ました實驗上よりして、考へて頂きたいと申上るので御座います。



大きい花より小さい花
(並に椎茸の手製)

三宅花圃

花の趣味と申しましても、私も特別に此花が好きだとか、彼の花に趣味があるとか申す樣な事は御座いません。一體私は何事によらず、餘り好きと申す事も餘り嫌ひと申す事も有りません、唯かうもしたら人を樂しませる事が出來るだらうかとか、あゝもしたら人が喜ぶだらうかとか、直ぐに人の事が頭に浮びまして

それが中心になつていろ〳〵の事を致します。お話がわき道にそれる樣ですが、私每年二三本の木を伏せまして丹精して少しばかりですが「しひたけ」を作りまして、それを人樣のいらつしやる時、おつゆの物になど致しまして出しますのが大層樂しみで御座います。自慢でも何んでも御座いません、私は眞實に人を喜ばせるのがうれしう御座いまして、いろ〳〵の事を致すので御座いまして、此草花を丹精致しますのも、全くそれなんで御座います、けれど全然其趣味のない者には出來るわけでは御座いませんでせう、夏分の花には朝と夕に水をやります、汲み置きの水なれば晝やつても宜しいさうですが、宅では晝は忙しくもありしますのでやりませんで御座います。

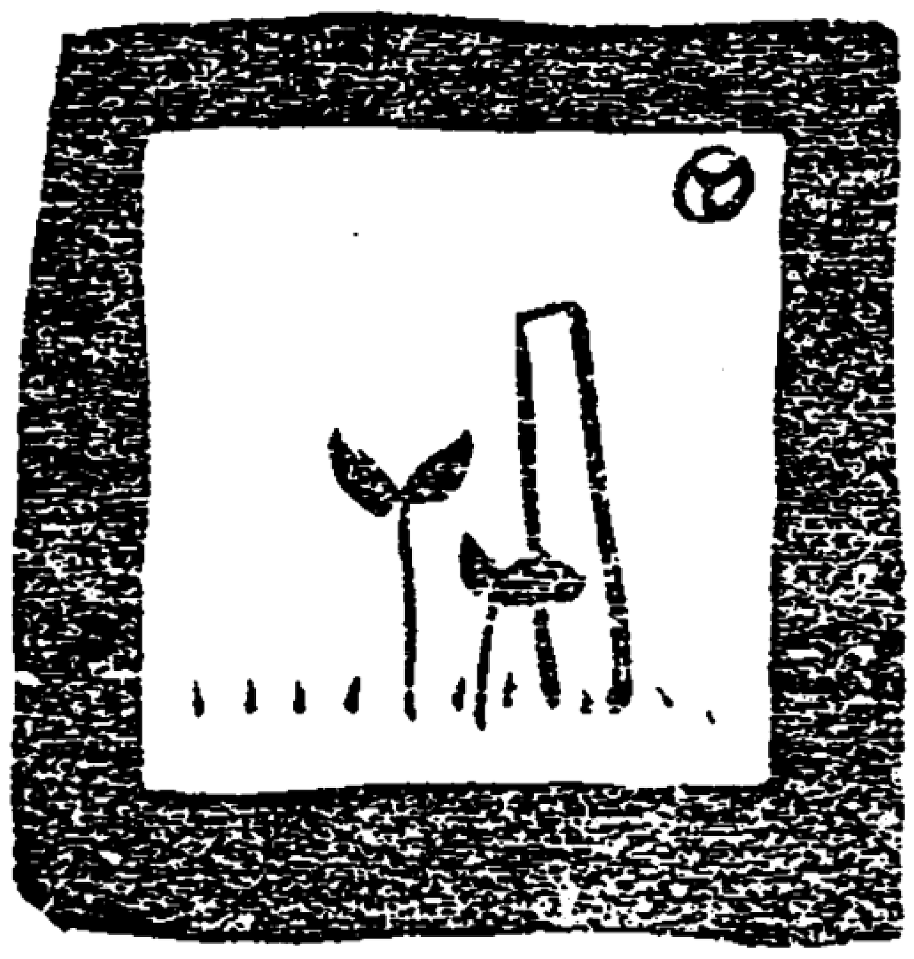
私は春の花も夏の花も秋の花も凡て大きな花より小さな花が好きで御座います。夏分など牡丹とか日向草とか立派な花が多く御座いますけれど、私は此等の花よりもあの芝の中に咲きます小さい文字摺とか、時鳥とか言ふやうな花の方が窮窟さうで無くて好い樣に思ひます。朝顏なども鉢に植ゑてさま〴〵に作つて大輪の花を咲かせたのより、垣根にからんで見ゑ影も無く咲いてるものの方が、自然の樣で好ましう御座いますし、百合なども鐵砲百合とか何百合とか、いかめしい花よりも山百合などの方が好きで御座います。

西洋花ではフロックス、ツノドロップ、ミクライシゼラニヤムなどが好きですが、どうも西洋と日本とは氣候が差異ひますので、折角美しい花も、色や姿を見る影もなくさせて了ひます、私が丁度二十歳前後の頃で御座いましたでせうか、鉢植で麝香草と言ふ可愛い花が有りまして、其花の香氣が麝香と少しも違はぬ好い香ひでしたのに此頃植木屋などの持つて來ます麝香草は、花こそ昔のと違ひませんが、香氣はもう少しも殘つて居りません、宅でも作つて有りますが、矢張り香氣は御座いません。

夏咲かせようと思ふ草花の種は、大抵、秋の彼岸に蒔きます、然しかう致しますと霜よけだとか雨よけだとかいつて大層手がかゝります。肥料にはゴマメを白

水に浸してそれをやります。花は氣候の關係や何かで年に依つて大層美しく咲く年と、餘り咲き榮のしない年とあります、然し手入が能く行き届いて居りますと其効は必ず現はれるもので御座います。

之は又異つたお話ですが、親戚のものから先頃寄生木の實を貰ひました。御存じでも御座いませうが、寄生木は深山や幽谷の内に生ずるもので、御座います、丁度親戚のものが西ケ原農事研究所に參りました、歸りに、珍しいからと言ふのでくれました、西洋などでは此寄生木を大層お目出度いものとしてあるさうですで私はそれを楓の枝につけて置きますと、つひ此頃芽を出しましたので、何かお目出度事でも有れば好いなどと笑ひましたが、かうして人樣が珍しがつて見て下さるのが大層樂しみで御座います。



煩悶の相談對手

牧師　綱島佳吉

◎煩悶者は多い

所謂煩悶者の引受と云ふのは、眞實煩悶の結果自殺でもしようと云ふまでの窮境に陷つて、精神上の慰安を欲する者ならば、何時でも其の相談相手に成らう、又場合に依れば物質上の助力もしようと云つた主意で篤志の友人の賛助のもとに、本年二月十一日初めて世に發表した樣なわけでした。

處が今日までに其の煩悶窮乏を訴へて來た者は男女共になかなか多い、殊に初めの頃には隨分やつて來た

もので、其の多數の人々に迚も滿足を與へる事は出來ない處から、其の中で最も事情の切迫詰まつたものと認めるものに對して聞く樣にしました、其後幾分數は減じましたが、私の目的は極少數であつても其の實を擧げて彼も喜び自分も喜ぶ事が出來さへすれば宜ろしいのでありますから却て自然の好都合になつた。

◎個人の秘密

で、其の煩悶の内容事實などは、絕對に秘密を守ると云ふのが無論當然の事でありませうから、御尋ねに就いてもお話し致し兼ねますし、又其の結果に就いても、彌ほ日も淺い事ですから、之を綜合して如何云ふ意見を立てると云つた程度にも行かないのですが、訪問して來た者を大體に彙類すると、男子は半ばは事業に失敗を重ね、物質上に窮迫して居ると云ふのが多數にある、次には純粹の精神上に關する煩悶者も尠くない、又或る場合には衣食足りて其の方向に迷ふとか、良心の苛責に堪へられないとか云ふのもある、其れから病者があります、さう云ふ人々は大抵書面などで云つて來るのですが或は結核に罹つて苦しんでゐて、親戚も友人も來て呉れないが、淋しくてならぬから眞の友を求めて居る、定めて自分と同境遇の人達で訴へて行くのもあらうと思ふから、さ



う云ふ人の住所姓名を報らせて呉れるやうにと云つた樣なので、此等も最も同情すべきものだと思ふ。最後に少數の處、宗教上の懷疑から來た煩悶があります。婦人の方は一言にして言へば家庭問題に歸着するやうです、社會職業上の事などは少ないし、純粹の思想上の煩悶などはまづ皆無と云つて宜らうと思ひます。

◎弱者に同情す

私が斯樣な事業に志したのは決して一時の感じや一朝の好奇心からでは無いのです、私は病人罪人或は蹉跌した弱者に接するのが好きなんで、其者等に精神的慰安を與へたいと云ふのは十年の宿題であつたのです、今度友人などの助力で幾分その緒に就いたわけですが、恰度天性小供好きな人に小供が馴付くやうに、自然是れらの人が訴へて來る、それで私は愉快にやつてゐるのであります。

この事業に就いてはいろ〳〵な取沙汰も聞きました或る文士の方は、こんなにいろ〳〵な煩悶者に接しては自然其の興味が薄くなりはせぬかと云はれたのですが、私の心持はさうではない、醫者が患者を診る時のやうに、いろ〳〵な實驗をしたり、又難病者に出合へば一層の興味を以て對すると云つたのと同樣であらうと思はれる。

◎贋者は殆ど無い

又或る人はかう云ふ風に氣遣つた、世の中には隨分さま〴〵な者があるから、其中には贋物が來て煩はしくは無からうかと云ふのだつたが、今日の處私はさうは思はぬ、苟くも自己の秘密を打明けようとするのに漫然來ると云ふ筈も無いので、現に私の家の門先まで、來て門をくゞるのに躊躇して二度三度目に漸く這入つたと云ふやうな人さへあるのです、出掛けて來るのに餘程の勇氣が入るのであります、實際今までに先づ油斷のならぬと思はれたのが唯一人ありましたが、さう云ふのはもう直ぐ分りますから、其れは又其れで其の樣に訓戒する事が出來るので、別段是れとても徒勞にはなりません。

又批難の一として或る新聞記者は社會の寄生蟲を增すものだなどと云つた、是れは結果の事ですから未だ何とも分らないが、其の意味は物質上の事にわたるのでせう、如何にも物質上の補助を與へると云ふ事は今日までに就いて云つても餘り大した效果は無いやう

でした。

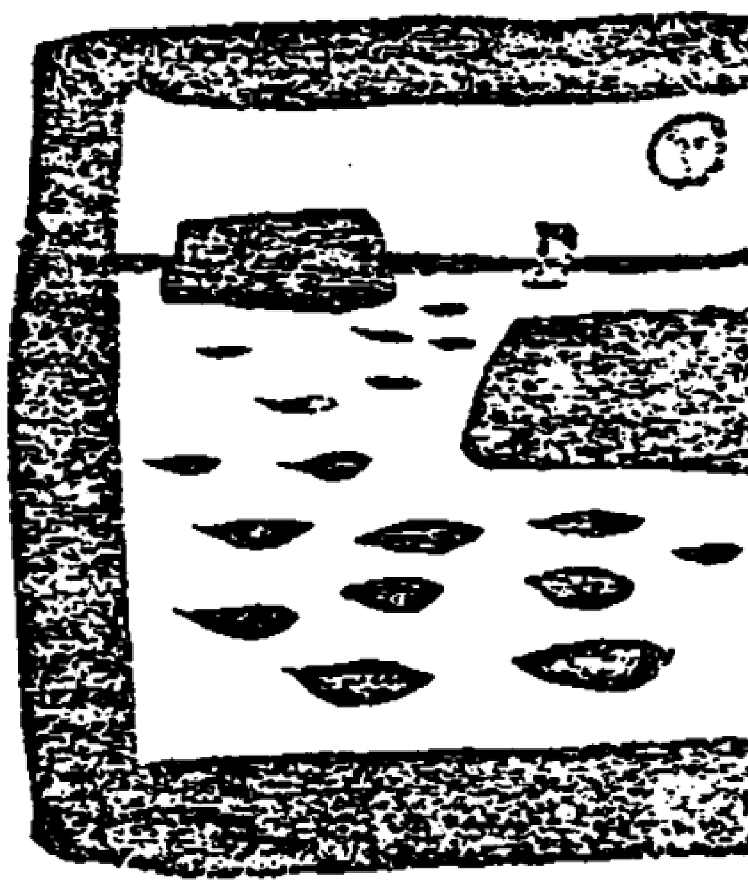
◎物質的救助は斷る

で、私は爰に二個の注意をして是れから後も此の事業に努めたいと思つて居ます、其の一つは唯何でも心配の事件として持て來ても其れは必ずしも取らない、換言すれば、元來の本旨でもある通り、周旋屋を以て目せらるゝやうな事は爲ない、殊に金錢上の事を主として救助を求むる者の如きは受くる限りとはしない。眞に押へ切れない煩悶を持して是れを語る事も出來ないと云ふ者に對しては、慰安の道を講ずる事に努めたいのです、最も其の慰藉なるものが直接どれ丈け效果のあるものかは分りませんが、元來人と云ふものは、鬱屈した情を獨りで懷抱してゐると云ふ事が一番痛苦で又危險である、さう云ふ時分には何でも宜い之を外に洩らす時は幾分重荷が輕むのである、感心した例でもないが激昂の時に器具を毀棄したりとするのも畢竟この悶々の情を遣る爲めの一法である、かゝる際に眞に同情を以て其の紛糾の經緯を聞いて遣ると云ふ事が既に一つの慰藉になるわけで、暗黒な中に幽かながらにも一道の光明を見、更に勇氣を鼓舞するやうになる、現に今一度氣を取直して奮闘して見ようと云つて來た人もあつた、又私は直接に強ひて勸めはしなかつたが、自然と信仰を起したと云ふ人もありました。

そこで自然又今一つの注意としては何處までも個人の秘密は之を嚴守すると云ふ事にしたいのであります私が悲哀に同情して慰めた事を、多くの人は果して如何受けたものか、一體ならば其の喜びとか感謝とかの念を表彰すると云ふのが相互の喜びとなるのですが決して其れを云はぬから如何のかうのと云ふのではありませぬ、私が秘密を明さないと同樣又默つてゐる人もありましよう。

社會はます〳〵複雜になる、複雜になればなる丈け此の種の人が殖えて來ると思ふ、私は社會に於ける眞の見識あり實力ある同情者が出て、眞實に、煩悶者の相談相手となつて其行くべき方針を示してやる樣にしたいと思つてゐます。

世間には煩悶と云ふ語を、一種侮蔑の眼を以て聞いてゐる人もあるやうですが、かいなでの煩悶、若い人達が口癖のやうに云ふ煩悶は素より大した問題ではありませぬ、私の云ふ煩悶者は此等雷同的煩悶者を指すのではありません、序に一言して置きます。



生活の途を拓いて行く女子教育

日本女子大學校學監　麻生正藏

最近女學生界の傾向に就いて一番に感ずる事は、女子教育が實利主義に向つてゐる事であります。實利主義と云ふのは、父兄が女子を實業の學校、卽ち裁縫とか技藝とか、兎に角金になる學校に入れ、卒業後直ちに金の取れる者に仕立上げると云ふ風で、つまり教育と云ふものは金錢を得る方便のものと一體に思はれてゐることです。從つて女子自身に於いても、自然何か教育を受けた後に金が取れねば父兄に對し社會に對して濟まないと思つてゐるのが一般女子教育界の傾向の如く見えます。

斯の如き現象を生じた原因としては、つまり社會全體の潮流が爰に到らしめたものであつて、決して個々の生徒個々の父兄の意嚮とばかりに見る事は出來ませぬ、かの政府が奬勵してゐる勤儉貯蓄と云ふ事は、生活上激烈な競爭の影響などもあつて、社會に於ける經濟上の傾向を察して見ねばならぬのであります。

此の經濟的潮流に支配さるゝと云ふ事は、止むを得ず斯の如くなつたもので、どうも一概に排斥すべきものでは無い、若し各自が一度内に省みる時は、又自ら然るべき理由を見るのである、例へば看病婦になると云ふ事にしても、悉く病者其の者を憐むと云ふのではない、教師となるのも、必ずしも其れを天職と見るのでも無い、皆自己の生活の爲め求めたもので、是れは日本のみならず西洋に於いても女子が職業を取つて社會に立つ時の動機で、生活維持の爲め出てゐると云ふ事は明らかである。

併し斯く實利的功利的の教育思想が跋扈して來ると同時に、此の傾向を憂へて精神教育を唱ふる者の出づるのは當然で又極めて必要な事であります、さう云ふ實利一遍な教育を必要とすると共に又實利を目的としない、高等なる人格教育が女子に取て必要である、是れは社會の生命の基礎を築き上げるもので、縱し卒業してから直ぐ金にはならないでも、形となつて右から左に現はれないでも、歳月を積むうちに、或は家庭の整理とか、社會の交際子女の教育等に効果を生じて、社會全體の氣品趣味を高尚ならしむるのであります。

無形のものが有形の結果を生ずるのは高等なる教育の本領で、社會國家の上から云つても、今日物質的の夫れは一時の要求とも云ひ得られるが、眞の要求は此の無形のものであらうと思はれる、如何なる時もこの人格教育の爲め根本的精神の修養を怠つてはならぬ、本來から云へば婦人は金錢を得る爲めの者では無く、ての無形の感化を與へるもので無ければならぬのであります。

と云つて自分は決して實利的教育を攻撃するのでは無い、教育者の常に忘れてならぬのは、精神教育と經濟教育の兩方面で、精神が經濟を忘れ、經濟が精神を缺くと云ふ事は共に不完全である、かの宗教の如きものでさへ、單に精神上の事を説くばかりでは決して滿足な普及の道は無いとして、救世軍の如きは、傍らパンを得るの道を授けて以て心靈上の救濟をしてゐるので最も新らしき傳道法となつてゐる、教育家がいかに精神問題に努力しても經濟眼を缺く時は、多く勞して功なき結果を見るのである。

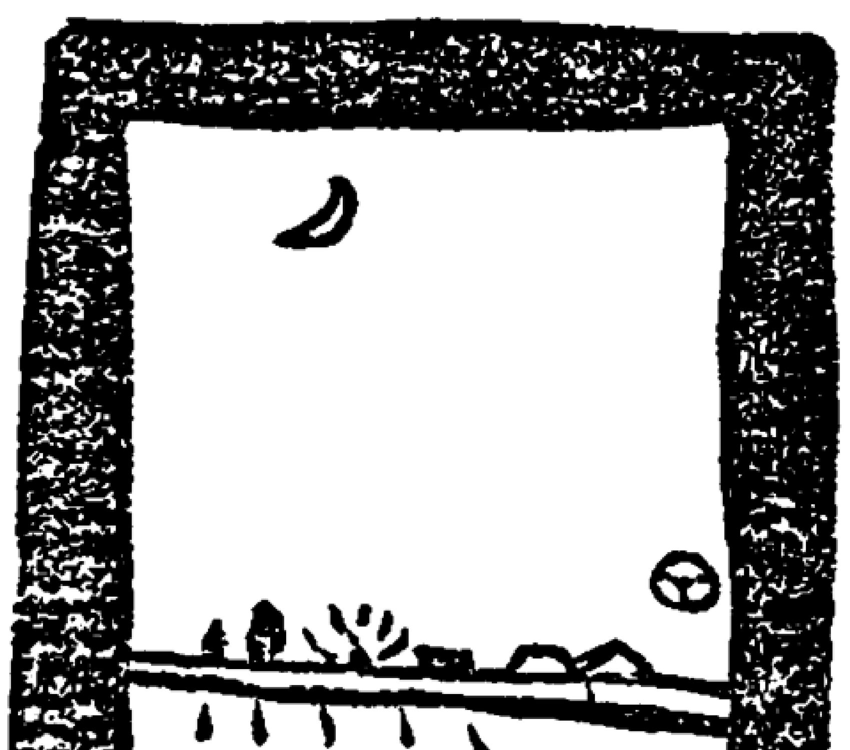
今日女子教育界に見る傾向は、啻に日本のみならず世界の潮流と云つても宜いので、其の原動力は或は實業に或は軍事に、物質の力が有つても精神の力が添はなければ働く事の出來ない事を、又反對に精神があつても物質なければ空しく終ると云ふ事を證してゐるのである。

其れで教育方針として、今回文部省では家政高等女學校と云ふものを設くる事になりましたが、私は猶ほ其の主意を擴張して、商業地には商業高等女學校、工業地には工業高等女學校、又田舍には農業高等女學校と云つたものの出來る事を望むのです、それは純然たる專門的のものでなく、家庭に於ける女子の副業を與へる上から、普通實業教育を授くる女學校として極めて必要でありませう。

又是れからだん〳〵新らしき傾向としては、まだ其の女子の專門教育と云ふものも殖えて來ねばならぬ、いろ〳〵と社會の實業家や學者や教育家が議論してゐる間にも、女子は默まつて既に文學者となれる者、醫師となれる者さへ、事實となつて現はれてゐますのです教育者はこの社會の經濟生活に着眼を怠つてはならぬ事が分ります。

遺憾な事にはどうも日本には女子の職業の範圍が狹隘な事です、まづ教育界には女子が最初に入るところで、これは西洋も同樣ですが、今のところ我が邦では其れ以外には醫師看護婦、其れから文筆に携つてゐる記者、近頃官吏が少々位なものに過ぎない、西洋では工場視察と云つて女工などを取扱ふに適するもの、衞生視察と云つて家庭衞生を司るに便宜なものなどもある、其れから英米には園藝に身を委ねて居るものが隨分あつて、婦人の園藝師が巡回視察をする、公園などの園藝も女子が司るのが多いが、個人の家庭のを引受けて美觀を添えしめる極めて適當な仕事なんですが日本ではまだ〳〵生活が其處まで行かないのであります。

女學生各自が如何なる要求を持つてゐるかは、一々質問でもして見なければ分りません、實は各個に於いて自動的に其れ丈けの表白を爲すまでの程度に達せないのであります、最も中には自覺を有する者もありましようが、恐らく其れは少數で以て一般の大勢を卜する事は出來ますまい、たゞ社會の潮流、或は男子の教育等の影響を受けてそれ〳〵方針を定めて導くより外に仕方がない。今日では前申した傾向ですが、私は社會の經濟的要求に應ずる教育を授くると共に更に精神を忽諸にせず、社會國家の上に數層有效なる人格となつて無形の感化を與へ、社會を指導する者の出でんことを望むものであります。



女自ら研究せよ

八雲たつ子

女性の研究は近來益々科學的に、或は文學的に、何れも眞面目な態度を以て歩を進められて居る樣であるが、猶ほ吾々の常にあきたらなく感ずる故は、其研究

者が、女性自らでなくして却て男性であるといふ事である、随つて其研究が多少不自然に流れ、時には女性自ら首肯する事の出來ない様な議論もある。

元來此女性問題は、人生の最も機微に渉ることであつて、一方女性自らが自らの研究と實驗とを以て進まねば、如何しても研究の完成を期する事が出來ないといふ事は明かである、西洋では既に女性の手に依つて心理或は生理或は經濟の方面から着着研究の歩が進められ、其の結果が立派な著書となつて、男女學者の参考となつて居る程である、聞く所によれば、今年はベルギーに於て、萬國家庭教育大會も開催されるといふ事、之れを見ても歐米に於て此問題に對する注意の大勢は伺はれる次第である。



が翻つて吾國女性の態度は如何であるかといふと、實に奇異な感が起らざるを得ないのである、それでも文學にもたづさはつて居る人々の中には、眞面目に研究して居る方もあるやうに見受けるが、多くは「女自ら女を知らず」の有様である、女性の地位とか、女性の確信とか、いふ問題は、度度耳にするけれどもさて其女其者を研究する人が殆どないではなからうか、斯くいふと或は獨斷に陥るかと思ふが其れが事實でなければ何よりの幸である。自分は讀者諸嬢の中に眞面目な研究の友を得たいと久しく切望し

て居るものである。

そこで女性研究の態度に就いて、今少し具體的のことをいつて見たいと思ふ。前述の樣に女性研究者は主として男子であつたといふ事は、勿論知識が男子の獨占になつて居た爲め止むを得ない事であるが、これから女性がドシ／＼其の受けた敎育を實地に應用して、女性の社會學者、女性の心理學者等が實際に出て來て自づと女性の解釋がつく樣にすると同時に、自覺した女性が自ら女性研究者を以て任ずる事が必要であると思ふ。卽ち凡ての科學を廣く綜合して、生命のある說を作り出し、實際の經驗と結び合せて根據ある女性の解釋が得たいものである。

がさて此研究を始め樣とすると是非其出發點を定めねばならぬことになる。之れに三方面ある樣に思ふ。卽ち「女性とは何か」といふ問題が頭に起る、それを大別してみると知的と情的と意的とになる。知的方面は女性を科學的に研究するのである。意的方面は女性としての活動を導き其眞價を確實にして行く方面である終りの情的方面は今日の思想界の狀態として自ら起つて來る方面であらう。此三方面を研究する人の趣味性格等から其選擇が自ら別れる筈であり、また實際別れて居る樣に思ふ。が此方面卽ち研究の立脚地が違つて來ると其結果も非常に違つて來ると共に興味の多い事は勿論である。併し何れにしても研究は困難である卽ち研究の標準が未だ立たないといつた樣な狀態である。勿論或る程度迄は既往の科學を土臺にして證明もし、進んで新らしい假說も作つて行く事が出來樣が現在では未だ社會其もの、卽ち男女兩性から成立して居る社會の法則が判然しない有樣であるから、寧ろ女性の研究と共に凡ての方面が完備してゆかねばならぬのである。隨而今のやうな時代では研究が憶說になり易いから、此邊は研究者の人格に待たねばならぬのである。

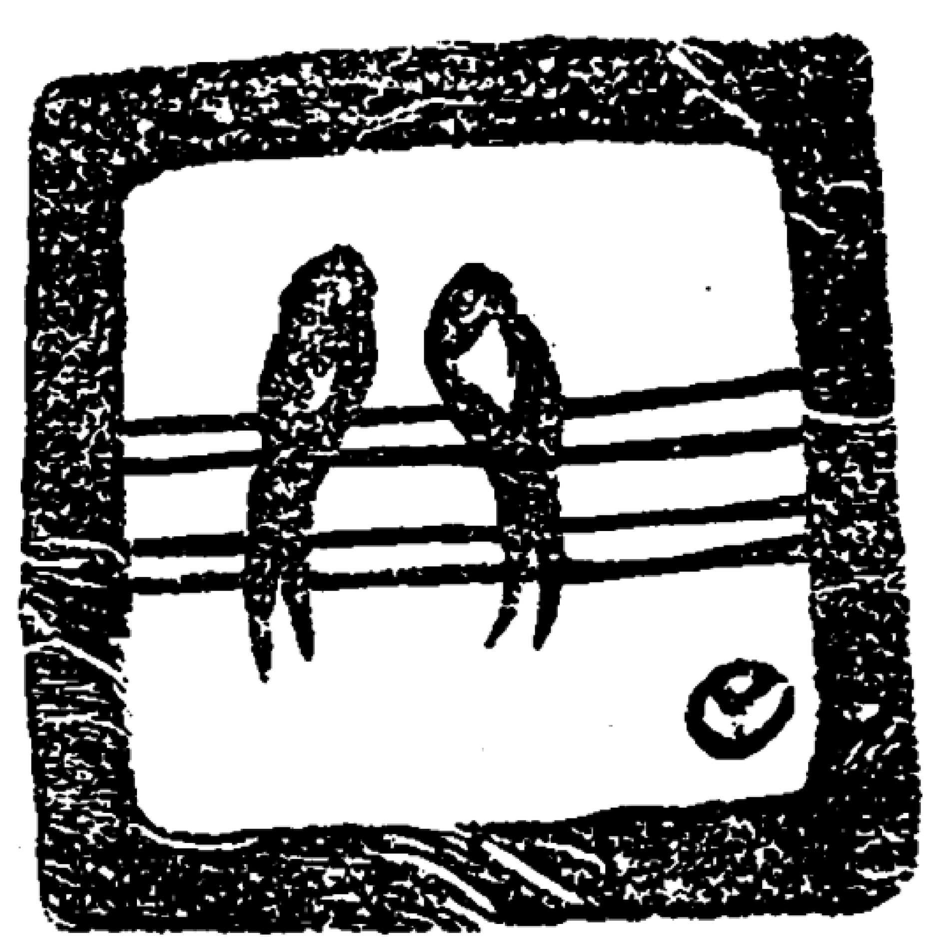
今試みに女性に對する從來學者の意見の二三を擧げて見よう。其一は男女優劣說である。これにもまた多少違つた說もある樣だが、そんな事は暫く措き、要は完全な理想的人格は女性ではないといふ事、但しこれは遺傳境遇の爲めであつて、先天的には男女對等の可能力があるといふのである。

其二は此一から自然と起つて來る問題であるが、さらば女性が進步すれば、男性の如くなるものか、又なるべきものかといふのである。是れが近來の新らしい

問題である。即ち男女は先天的に天職を分つものか、或は分つべきものかといふのである。一寸考へると深い問題でもない樣に思はれるが、其解釋如何に依つては社會に非常な動搖を來たす事になる。女性は今日の所家庭をとゝのへ其餘力があれば専門研究に從事する若し全く専門に進みたいならば、男子の樣に獨立すべきであるといふ樣になつて居る。が自分としては此問題は其人其人の人格理想に直接關係あるもので未だ容易にこゝに斷言する事を欲しないのである。

只、諸孃の前に參考として此の一說を捧げたいのである、男性と女性との比較研究から、女性の地位、並に事業と云ふやうな問題に說き及ぼすことは、甚だ困難なる問題であると同時に、女性其れ自身が自ら挺起して何程かの解決を試みねばならぬ問題であらう、男性から見たる女性の研究は、西洋にも可成澤山ある、女性自ら女性を研究したものは洋の東西に於て甚だ少い、さしあたり思想界に生活する女子の氣をつけねばならぬのは此問題である。

要するに此女性問題は、豫め自分の假說を設け、公平な觀察と確實な實驗の上に立つて、各々好む方面から進んで行きたいものである。



小說のやうな奇緣

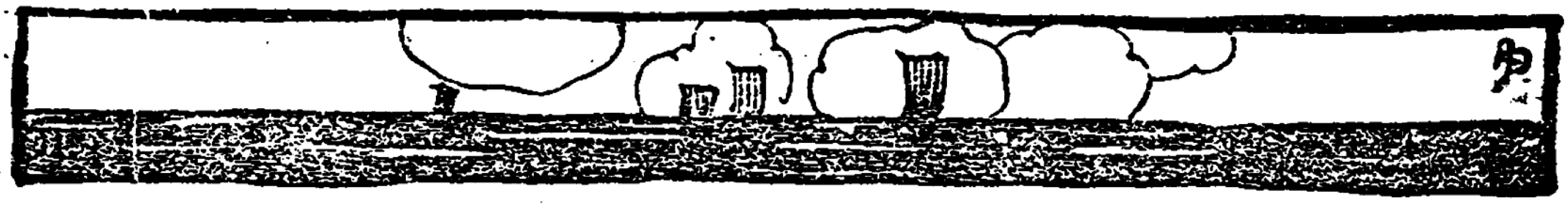
工學士山口金太郎氏夫人
山口ます子

人情ほど面白いものはない、善いと思ひ決めたら、腹の底では、少々のわるいことは合點してゐても、無理に善いにして仕舞ふ、惡いとなると、振向くのも嫌になる、實に得手勝手なものである。此間或る外國雜誌を見たら米國人のゼームス、ハートルバットと云ふ男が、十四年前に離緣した現在の女房を、それと知らずに再び娶つて、二度目の新婚旅行に日本に遣つて來たといふ奇談があつた、其梗概は斯うである。

ハートルバットが二十六歲の時、ルース、エメリーと云ふ婦人と偶然或る人の紹介で相識となつて、間もなくキベックで結婚の式を擧げた、花嫁は其時十八歲の

少女であつた。未だ是ぞといふ定まつた收入の途もなく、財産とては無一物の花聟は、さしあたり結婚費用にも困る位であつたが、漸く無理算段して形式許りの新婚旅行もしたが、それから前途が何うも方法がつかぬ。そこで夫婦相談の上で、細君のルースは當分先の主人の家に預けて置いて、自分は西岸のカリホルニヤへ出稼に行つた。そして多少財産も出來て、呼迎へるまで、何程かの生計を支へるだけの送金をするとの約束であつた。それが計らず離縁の端緒となつた、と云ふのは亭主が出立後間もなく、手紙の行違ひから、双方とも酷く感情を害して、手紙は一切出すまい、貰ふまいと、賣言葉に買言葉で、二三箇月も音信不通となつた。ルースは流石に女だけに心細い處から、詫狀を出したが一向に返事が來ない。能く〳〵糺してみると其手紙は本人の手へは入らないで、到頭ハールバットの行方は不明になつた。日夜案じくらしながらも四五年の月日がたつて了つた、多分何處かで死んで了つたのかも知れないと思つたけれど、是ぞと云ふ確かな證據もない、然うかと云つて何時までも、歸るか歸らないか分らぬ人を待つても居られないので、仕方なしに裁判所へ出て、離縁の訴へをした處が、置去にしたと云ふ廉で、首尾よく許されて獨身となつた。それからベレスホードと云ふ今度は財産家の老人に嫁した、處が二年目に其老人はメキシコで死んだ、多くの資産を殘していつたので、ルースは有福なる未亡人となつた遺産の中にモンタナの鑛山があるので、檢分の爲に出掛に行て、偶と其處の宿屋で懇意になつた男がある、年こそ老たれ、容貌から風采まで前の亭主であつたハールバットに酷似てゐるので、之は不思議と宿帳を檢べて見ると、似たのも道理、死んだと思つてゐた現在以前の亭主であつたので、飛び付きたい程に思つたが扨く別れた事情は兎に角、其後の自分の身に就いても多少後めたいこともあるし、今のハールバットの心意も分かず、若しや二度目の妻でもあれば、いゝ恥さらしだと思つて、ぢッとがまんして、暫くの間は名乘らなかつた。幸ひ男の方は毫も氣付いた樣子がないのでそれより交際を續けてゐたが、いつしか二人の間には新しい戀が成立つて、新らしからぬ二度目の新婚旅行に出掛けたわけである。


ビール
レート
カフエーの女
YUMEZI



裏の家

葉山しげ子

ふだんより數の多い食器を一つ〱丁寧に洗つてゐるうちに流し元は漸々暗くなつて來た。魚の骨を捨てると、待つてゐるやうに前の呉服屋の猫が來てばり〱嚙り出した、むく〱と動く白い背中をねらつて水をぶつかけるはづみに、お重は身體をのめらして流しの緣に強く膝を突た、ガチヤ〱と瀨戸物の鳴りが急に止らなかつた。

「どうしたんや」、とお袋の甲高い聲が茶の間から響いた。無遠慮に笑つてゐた姉の聲はぴつたり止んだ。

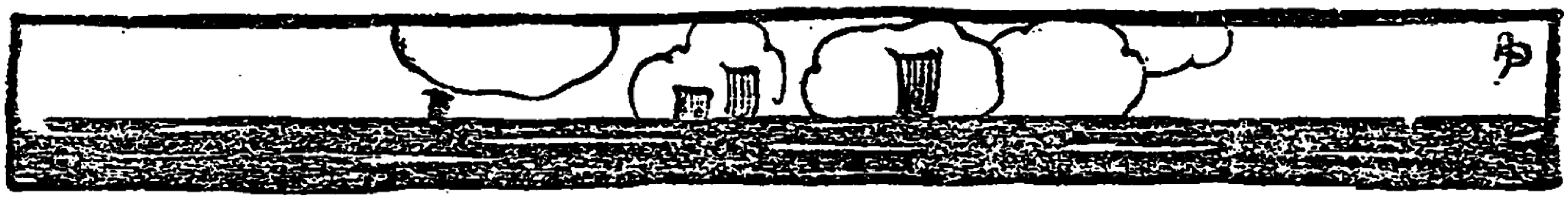
お重が極り惡さうに笑ひながら答へた聲は、耳の遠い母親に聞えなかつた。

「三田村さんから貰うた皿はちやんと揃うとるよつて一枚でも缺いたらいかんせ、何をするにも落付てせにやいかん〱と何ぼ云うても解らんなあ、ほんまに變な子や、少し忙しいちうと直にふくれよつて」、

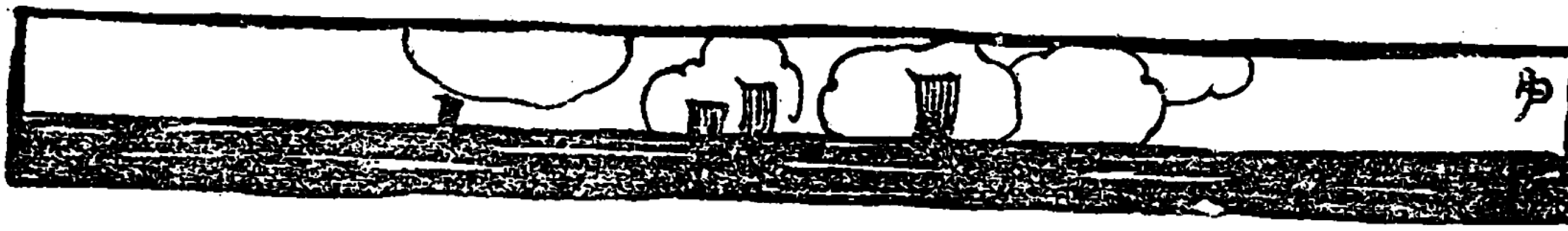
「あゝえゝわな、うるさい」、と親父は深い八の字を寄せたが、お倉の顏を見て淋しく笑つた。

上り端の土間を中に置て、住居と臺所とは全く緣が離れてゐる、それを無理につなげた、どん〱橋のやうな板を渡つてお倉は臺所へ出ていつた。

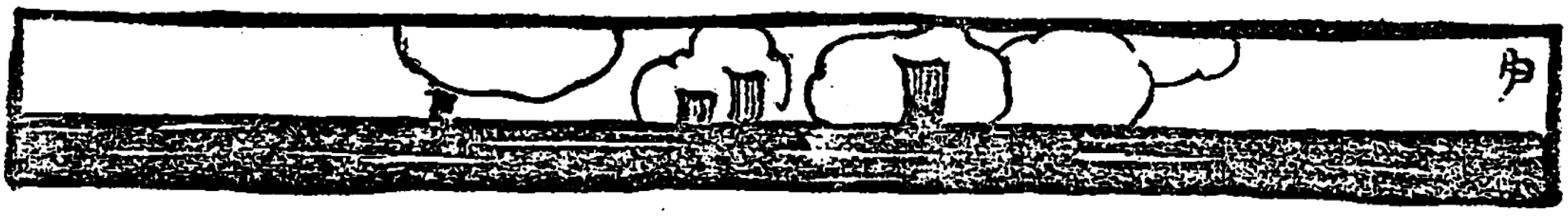
「そして其人はもう直つたのんか」、とお袋が話しの續きを迫るのを、生返事して行つて了つた。



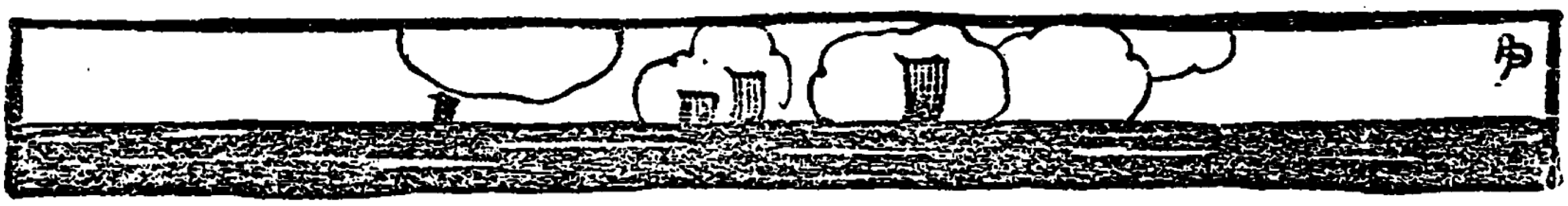
「あゝ暗いぢやないか、ランプ持て來て上ようか」、
「いゝの、いゝの」、とお重は又殘りの器を洗ひ出した。
「さ、お手傳ひいたしましよう」、とお倉は絽縮緬の羽織をくるゝゝと捲つて、そこへしやがみ込んだ。白い足袋と瀨戸物の鈍い光りとが、外の薄明りを吸つてちら〳〵動いた。
「私が來た爲に忙くて濟まないねえ、おこつてたんだらう」、
「そんな事ありやしない」、
前の呉服屋の湯殿では、子供が嫌がるのをお湯に入れようとして大勢であやしてゐる。いつもの賣藥屋が押つぶしたやうな聲で唄ひながら入つて來たが、こゝの流しの前で一寸中を覗き込んで、どういふ氣だつたか「今晩は」、と云つて、それからは默つて大樣に溝板を踏鳴らして行つた。お重は、廣い通りの新しい家に晝間は女中と二人きりで靜に暮しつけてゐる姉が、よくこんな家へ泊る氣になると思つた。
「お重、わしの眼鏡知らんかなあ」お袋の聲は隣りの人にでも云ふやうに高かつた。
「先刻あんた火鉢の上へ置たぢやありませんか」、
針の刺さつた頭の影の動くのを見て、お倉は舌を出した。
「お銀ちやん此節來るかい」、茶の間へ持つて行くものだけ盆に乘せて、お重は立たうとした處を、かう云はれたので又しやがみ込で了つた。
「着物が損まなきや來やしない、此間新聞に寫眞が出てゐたの見た？」、
「知らない、どんな寫眞」、



「小さいの、三人並んで、君龍て人ともう一人――」、
「さうかも知れない、又玉突の事を、讀んだけど忘れちやつた、あ、年もねえ今度は十八だつて」、
「馬鹿にしてゐら」、
「うちの兄弟ぢや彼人一番綺麗だからねえ」、茶の間でお袋の聲と共にけたゝましい音がした。
「あんた寢るなら床とつたが宜しやろ、そんな處へ足出して、まあ何といふざまやろなあ」、
お重が茶の間へ來た時は、親父は起上つて欠伸した後の顔を頻りに撫でてゐた。お袋は半紙を細長く綴た帳面を疊の上に擴げて、丸くなつて算盤を彈いてゐた。お重は靜に歩かうと思ふと、油足のにい、、ちやく〳〵いふ音が猶高く鳴つた。
長火鉢と直角をなしてゐる戸棚は、奥行が一尺程しかない。中の段に三四本並んでゐる錆びた茶筒を押除けてお重は幾枚かの皿を藏つた。
お倉が次の間から手招ぎした。
茶の間が長四疊、奥が八疊、座敷はそれぎりない。疊も柱も天井も簞笥も佛檀も、簞笥の上の鏡臺も道具箱も、皆くすぶつたやうな色をしてゐる中に、獨り床の間と並んだ小形の金庫が際立つて立派に見えた。
二人は小聲で話しをした、時々お倉が失笑すやうな聲を立てようとする度にお重は慌てて手を振つた。
暫くするとお倉はお重を連れ出して表へ出た。夏の夜の町は生々してゐた。後から氣持のいゝ風の



吹て來るたんびに、お重は自分の頭の匂ひに息がつまるやうだつた。
此通りが市區改正にならぬ前、一時兩側とも取拂はれるやうな噂のあつた時、お重は移るべき新らしい家を毎日想像してゐた。處が取拂はれたのは向側だけで、毎日〳〵市の印袢纏を着た土方が大勢土を掘り返したり、石を持つて來たり、雨の降つた時は足駄の齒も埋る程ぬかるんだり、お天氣の續いた時はそれがでこぼこの儘乾き切つて了つたり、近所の人達が逢ふ度毎に愚痴を云ひ合つてゐた長い工事がいつか終つて平な廣い町の片側に、西洋造りの菓子屋や煙草屋がぽつ〳〵看板を上げ始めたのを見る度に、お重は其店の人達が羨しくて堪らなかつた。
お重は又、去年播州のお祖父さんが死だ時の事を思ひ出した。
知らせの手紙の來た時、お袋はお重を連れて夜汽車で立つと云つて、金庫から澤山出して來た帳面を祖父の前に突きつけ、くど〳〵と留守を云ひ付けた。お重は汽車に乘る事、知らぬ土地へ行く事、服裝を改めた人がでた〳〵と出入りする狀――いろ〳〵な空想に若い血が漲り立つた。
けれども此空想は實現されなかつた。
「何といふ解らん人やろなあ、わしが一月も空た程なら家の財產はわやや、あゝ〳〵因果なこつちや、親の死目にも行かれやせん」、
お重が骨折つてカバンに詰めた着替は、あつけなく疊の上へ取散らされて了つた。
「お重ちやんおこつてるんだらう」、お倉は氣にして度々から云つた。二人はいつか四辻の方へと廣い坂を上つてゐた。



「今日病院から廻つて來たもんだから何にもお土産がなかつたねえ、何か買はうぢやないか、お重ちやんの好なものでも」、

「姉さん病院と家と、どつちがいゝ」、

「そりやお前さん、家程いゝ處はありやしないわ」、こんな問はお倉には腹の立つ程馬鹿げてゐた。頭の禿げた夫を友達か何かのやうに、氣輕に取扱つてゐる姉の生活を目に浮べて、お重は早く年を取つて見たいやうにも想つた。

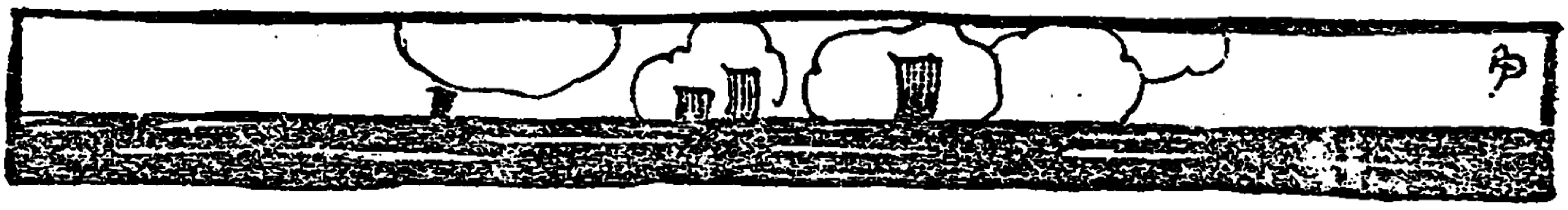
横町の角の水菓子屋からは、熟した果物の甘い匂ひが溢れてゐる、お倉は苺を買ふと云つて立止つたが、

「まあ驚いた、もうこんなかしら」、と小さな時計を帯の間から出して、店の正面の柱時計と見くらべた。

「へゝゝ夜が詰りました」、と奥にゐた身長の高い男が下駄を突かけて出て來て、奥様風のお倉の服裝をじろ〳〵見た。

お重は、店の眞中に燃えてゐる白い明りが羞ゆかつた。メリンスの小さい帯をしめた自分の腰のあたりを、往來の人が皆見て行くやうな氣がして、兩方の袂を後へ廻しながらぢり〳〵と暗い方へ出ていつた。

隣りが繪草紙屋で、美しい着物を着た御殿女中の繪や裸體の子供の石版摺や、掛け吊された紙と頭を摺れ摺れにして、顔色の惡い若い主人が坐つてゐる。お重は坂の上へお使ひに行く度に嫌でも此繪草紙屋の前を通る、中の姉が家にゐた頃は、よく常盤津の稽古本を買ひによこされた、だから此主人



とは古い顔なじみなのである、それだのにかうして店先に立てゐても、いつ途中で逢つても、つひぞ表情を動かした事のない男である。義太夫百段集や、百人一首必勝法や、裁縫獨案内や、そんなものは珍らしくもないのでお重は往來の方を見てゐると、坂の上から五六臺續いた車が威勢よく下りて來た、いよ〳〵前へ來て見ると乘つてゐるのは男ばかりで、お重が想像したやうな、白襟の高島田の人はゐなかつた。「さ歸りましようよ」、とお倉が肩を叩いた。

「もう少し上の方へ行て見ない？」、「だつて持物があるもの」、

「あ、濟みません」、とお重は苺の箱を受取つた。

紺色の空の果が時々ピカリと青く光つた、十ばかり出てゐる星は皆大きくにじんでゐた。

「ことしのお祭りはよく出來たかい」、ぶら〳〵坂を下りながらお倉はかう云つた。

「何にも出來やしないわ相變らず」、

「あの踊りの巧い石屋の子どうしたい」、

「どうしたか、越しちやつたから知らない」、

「昨日逢つたよ東京座で、確にあの子に違ひないと思つたけれど、向ふぢや覺えてゐないやうだつたから知らん顏してゐた、大變肥つた嫌な子になつたねえ」、「もう芝居なんか行つてもいゝの」、

「ところがよくないのさ、今日早速院長さんに叱られちやつた」、

お倉は面白さうに笑つた、さうした性質がお重はつく〴〵羨しいと思つた。此姉が兩親の反對を振りもぎつて奉公に出たのも、中の姉が無斷で友達と家出をしたのも、自分の今の年よりは若かつた、お重は顏も氣質も父親によく似てゐる事を自分でも知つてゐる。

手島屋の店に掛け渡した浴衣地やメリンスの蔭に、お重の家の路地は細い口を開て待つてゐた。二人並んでは歩けないのでお重は先へ入つた。

「溝板の上を歩くといゝわ」、と云つた時お倉は既につまづいてゐた。

黑百合（つゞき）

横瀬夜雨

三

その一

信濃のくにゝまゐり候。

たゞ今北行の汽車の中に在り、寒ければ麻のきれかけたる湯たんぽの上に坐し、席にかへりては仰向になりてノートにらくがき致し候。灯はあをく點きをり候

碓氷も淺間もすぐに越しぬ、右に山有りや、左に川有りや、月落ちてより窓の外はたゞ怪物の如き闇の走るを見るのみに候。卒然として彼の新婚の人をおもひ出し候。

夕ぐれ起る木枯に
ちまたは塵のあがれども
水とすみ行く家の中に
居るは二人の無言哉

富士の高根も一頃の
水に縮まる思あり
古き詩歌に目をさらし
倦んずともなき夫のさま

熾々と燃えたる灯に
時の移りは見ゆれども
運びなれてしぬひはりに
妻のしごとの手捷てき

想像し來りて、一笑す。

妻とはいへど夢のごと

何の氣もなう日を經れば
ほゝゑむのみに見かはして
寂しきものは眼かな

あつき心もたぎりおつる
涙もひとの世に見れど
輝かしくも今樣の
ふりにならはぬ二人なり

新人、年十八、才色ふたつながら聞えたる君に候ひしが、今、好俅を獲て某所に在り、戀々の情、慕々の心ねがはくば、松相生に久しかれと存じ候。さて小生には何ものの候ぞ。水の如く流るゝ悲みをいだいて、あをく寂しく搖ける灯に對す、瓦に鴛鴦有り、自雙飛の義を羨み、簾に翡翠を編めり、空しく共會の娯を嘆く。

豈人を哀れむに暇あらむや。しかして天馬空を馭くは止みがたきわが心の欲するところ、やがては海を越えて行きて石かりの野につひのすみかを求めんとさへ存じ候ものを、旦月波の麓を去つて、夕淺間に到るほどの道ならばとて、終に母にゆるされて旅立ち候。來ん秋には長塚節君にともなはれて、會津より鶴岡を經最上川を下りて遠く酒田に入らんとおもひをり候。所詮は、われを背きしビッチの國を見んが爲に、否ひと度は其山其水其鄕其家に冷笑の目を投げんと志し候のみ。

知り給ふが如く、わが命は執着に生き、わが心は復讐によりて鋭くさる。

されど君よ、おもへばつたなきは世をひとり行く人の涙に候かな。

獨對寒窗恨明月之易過
孤臥冷席悲長夜之不明

孤客

幸三郎樣

その二

早速ながら、

一人ぢや行けなからうから同行してやらうとの御親切を無にしてたうと秋君のとこへやつて來た、夜になつちやつた。『常陸にはまだ曲彔据ゑて馬で嫁入するものがあるといふが、僕の國では正月には花嫁花聟を上り端(玄關)に据ゑておいて、廻禮者に一人一人ひき合せる、それがつまり披露なんだが、しかし僕は弱つたよ』さすがの豪傑もよほどよわつたと見える、細君に逢つた。

いかゞですか、烏水さま、あなたもその正月にはお雛樣になつたでせう、どの正月などととぼけたつていけない。

君がこの前信州へ來た時鱗つきの鯉を出されて妙な顔をしながら一つ一つ鱗をのけて喰べたといふぢやないか、秋君がさう言つてゐた。

横濱あたりには鯉はゐねいからな、喰べ法を知らないのも尤だとはちとひどい。其くせ鯒臭いこくしようだ。

實は僕もびつくりした。不意におしかけたので秋先生うしろの田ン中からとつ捕へて來て鱗を取る隙が無かつたのだらうと思つて。

わたしやお前のそばがよいのそばは知らないが、一九の膝栗毛に據ると、信州の人たちは朝起きおくれに赤ん坊の頭ほどのおむすびを噛るところ、とろゝを摺つた摺鉢へ飯をぶち込んで啜りこむところと覺えてゐたら……あとを何といはう。

烏水兄

その三

無事鹽尻着。

高崎よりすわり心のよき室を獨占して寢るも起きるも好きの上、湯たんぽも備へつけてあつたし、そんなにふるへもせずに參れ候。

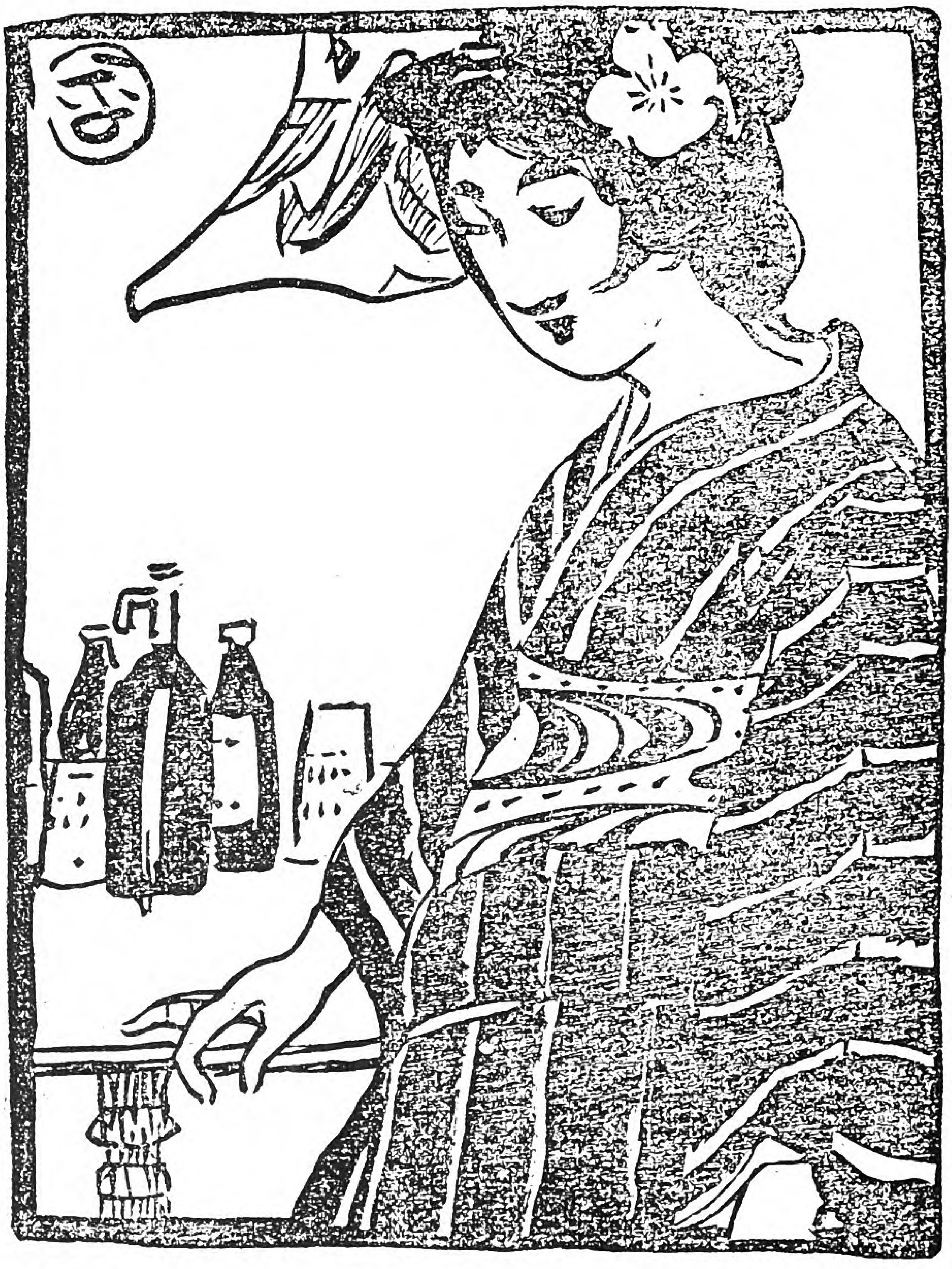
飯塚らは、停車の度にかはるぐ出て來て面倒を見てくれ候、三人は明日故郷へ着くべく候。

只今秋君一家の歡迎に包圍されをり候。すべて御安

心下さるべく候。

炬燵は客坐敷の眞中にこしらへあり、お客をはいらせてからそれから御挨拶をする由に候、主人方も主人方なら來る客もべら棒、寒むがればかりと見え候。

秋君のおつかない顔はピンとした髭によりて一層おつかなくなり候、あつちのがかかあ、こつちのが妹と若き二人の方に炬燵でひき合はされて繪葉書帳や寫眞帳やを説明していたゞき候へと、顔も寫眞も覺える下から忘れてしまひ申候。



寢る少し前に椽に出申候。風高原の草を鳴らして、星に聲あり。紫かすむ常陸の山はさもあらばあれ、雪白き科野の山もなつかしく覺え申候。

まるゟ

母上様 參る

その四

Tに逢つた。

逢つて見ると――冨き道の師、十年の友!!やつぱり口が利けなくなつて涙がこぼれた、僕は弱い。自分の幸福を奪ひ、生命を呪ひ、心を傷つけ、情を荒れしめたる常識の紳士!!と手を握り合つて床を丁字形に敷いて貰つてねむくなるまで話をした。烏水君はまた

候行違があつてはならぬからおれが一緒に行かうと心配してくれたけれど、不倶戴天の讐敵といふぢやなし人ませせぬ方が解決が早いと思つて、單身敵城に乘りこんだだけはあつた。

「君はこもろで僕の命を長いことはないのだと言つたか」「言つた」「ドクトルSが今まで生きたのさへ不思議なんだつて話したと言つたか」「言つた」「折角かたづいてもすぐ後れるから其さきの若い身のふり方をどうするつて言つたか」「言つた」「親たちの在るうちは僕同樣溫かに保護されようけれど引きつゞいて世を去れば多勢の兄弟から薄遇されるにちがひないと……」「待ちたまへ、僕はたしかに君の希望の一つを破壞したのだから瞑目して怨嗟の聲を聽くけれど、お兄さんなり令弟なりが君たちを薄遇しようなどとゆめにだつて思つたことはない。また言へもしない御兩親が亡くなつてからは氣がねをするのが大へんだらうと言つたまでである。誰に聞いたのか知らないが、途方もない」「……さうか。N君もそれは言つてた、殆人格に關するほどのことだし、まさか君がそれまでにさげすむ筈もないとは思つてたが……」つとめて冷靜の態度を保たうとしたけれど、呼吸が逸んで聲が出なくなつた。すと枕をのけて布團の上へすわつた。あるかれるなら庭へ出たい、野へ出たい、峰といはず尾といはず路をたづねて山の中へ行つてしまひたいと思つた。

君、風をひくよ。折角來さしてわづらひつかれちや常陸のお母さんにすまないから、橫になつてくれたまへ、冗談ぢやないよといふのをきかず枕もとのカバンをひきよせてかくしから一封の書をとり出した、枕に顎をあてて腹ん這ひになつてる人に見てくれと渡す、

……………今は悲しいかな本人の心が動いた先を案じてやはり君と兄妹として交りたい、兩親の悲みを見て行くことはできぬ、家に背いては嫁かれないと言つて來た、おどされて恐ろしくなつたのだ兄妹として交はりたいといふやうな平凡なことは僕の取次を待たぬ、僕は世間並の仲人をしようとしたのではない、空想を實現して、明治文學史の奇蹟を

作らうとしたのだ、むざ〳〵と失敗してしまつた。君よ、Tを怨みたまふな、つかさ子をもうらみたまふな、たゞ君自身の不運をなげきたまへ、再「神も佛も」を作つたむかしにかへつて泣きたまへ。僕も今朝つかさ子の手紙を見て君の爲に心から湧く涙を禁じ得なかつた。

遠慮なくいふ。君の運命はすでに盡けり、本氣になつて一切の煩惱を捨て、あらゆる憧憬を忘れて、新しき「生」の立場に立ち、君の筆と君の聲とを以て「人」を呪ひたまへ、而して世を救ふの人になりたまはずや。度すべからざるは女子なり。似而非同情を甘受せんよりは、むしろ憫むべき彼等低級の人間に同情せよ。Tは我等より更に賢なり、沈默するの賢なるに若かず

六月廿六日夕



二人の握手はからして成立したのだ。君が豫言の通りならおれは今ごろ墓木が雨ざらしになつてるのだ、字は遺言して君に書かせるつもりだつたといふと、「何だ馬鹿な」といふ。

「鎗にも鐵砲にも「常識」を使つて僕の空想を叩きてはしてくれたが、おかげで大分利口になつた、自分は妻帶してゐながら他には不犯――『齋宮』たるをすゝめるかと嘲つたのが氣になつてゝすまないと思ふ。努力の結果長いことはないと言つた君の言に復讐はできた、けれど僕の世にはぐれて來た生涯はかへつて君にうら切らうとしてゐるのだから詮がない。かしこい人の目から見たら戀などするのは阿呆だ、その爲に泣いたり笑つたりするに至つては痴愚の骨頂であらう、しかし人は百尺竿頭一歩を進めて結婚は愚劣のわざだとなせ言はないのだらう。かんにんしてくれ、君には細君がある、細君があるからことさらに罵倒するのではない僕の深刻なる印象に據れば、女といふ女は誓約の尊いことを知らない。昨祭壇に供へたいけにへを下げて今また新しき神に捧げて平氣でゐる。一度人に賣つた貞操を斷りなしに又賣して代價を受取つてゐる。刹那の衝動を追ひて全心全靈を無視するとならそれは別問題だ、が女はことごとく娼婦では無い……」言ひかけてはつとした、女は悉く娼婦ではない、何といふ暴言であらう、現代的女の多くは舊道德には縛られたくない、花やかに生れた上は花やかに暮したいやうに考へてゐるらしいが、心から一人の夫に賴るのと、媚をふたりの男に賣るのと、どちらが女の耻か。自分は法を執る判官ではない、また人の個性を批判する能力も無い、けれどみづから其軀のなほ他にゆるさざりしを誇りとして嫁ぐ女ありとせよ、而してその心には過去の時代にすでに相許しゝ人ありきとせよ、處女の價値奈邊にか有る。

けれどTは何ともいはなかつた。遣方なきわが痛恨と寂寥とを知りて、冷笑熱罵わづかに慰めてゐるのだと思つたのであらう。

かつて光明にあこがれ、詩歌にあこがれ、花を愛し戀を戀した時代があつた、そして皆破れた。君よわが惝怳は皆空想だつたのだ。

冷笑すれど、心にこゝろよきは畢竟一時のみ。かぞ

へ來れば、Eや、Yや、Kや、Rや、むなしく殘酷なる印象をとゞめて、道すでに千里。わが涙つひに湧かざるを得むや。

義朗樣

（つゞく）

『霧』を評す

其一

溝口白羊

日本橋を起點として京橋に到る所謂る日本橋通の一線に平行して、其裏側に中通と云ふ所がある。私はいつも此邊を通る度に、東京の近代文明を代表した若々しい華やかな看板や、若い男女の心をそゝる強烈な香ひと色とが充溢したサムプルボックスの列んで居る日本橋通の直ぐ隣に、青年の眼から覩れば爛んだ——併し日本美術の精粹を集めた——美術品々が軒を並べて居る中通のあるのを見て、面白い對照だと思はぬことはない。若い男女は憧憬れたやうな眼をして日本橋通を足も空に通つて行くが、中年の紳士や外國人などは、繁華な表通をよそに、充實した心持で中通を歩いて居る。

醉茗君の詩は此の中通ぢやあるまいか。『霧』全編を通じて、忌憚なく其若い人々に對しての短所を擧げると、近代的の色彩に乏しい、刺戟がない、若い女の事を書いても何だか斯う老人臭い、と斯うである。

併し詩は香水ぢやない、ネクタイぢやない、モデルヌの香ひや色がなければ、何も詩の仲間入が出來ないと云ふ譯ぢやあるまい。醉茗君に向つて、情熱的な、瞥見した者の眼を傷けるやうな刺戟の強い、流行の色合や柄を望むのは、望む者の誤りである。

醉茗君の詩の特徴は、決して急流的ではない、又硫黄質ではない、靜に大和國原を流るゝ大河の、面は甚だ平かであるが、底には確に一道の温か味と、深さを持つて居る。興奮期に在る古今の官能を刺戟するやうな強烈な香氣な色彩は無くとも質實な、世故を嘗めた中年者の感情は能く現れて居る。倫理的情緒を惹起す最高級なる美的感情——これが醉茗君の散文詩のすぐれたる内容であつて、而も亦青年詩人等の斷じて企及すべからざる長所である。

私は佛蘭西あたりで最う出がらしになつた二世紀程も前のモデルヌを、態々新らしがるやうな通人には成りたくない。日本の若い畫家等が新美術だの何だのと云つて新らしがつて居る間に、具眼の外國人等は中通を歩いて、せつせと師宣や歌麿の揮毫を蒐めて居たぢやないか。

重ねて云ふ、詩は一時的の流行品ぢやない、だから詩が當時の若い人人に好まれる流行の柄合に適合しないからと云つて、少しも耻づべきことではない。私は其點から云つて『霧』の中に、二三流行を趁ふやうな

所謂る近代的聲調の交つて居るのを、却つて不快にさへ思ふ。『暗い濱邊』『ためらひ』『無言の號令』『きもの』『道ゆき』などが夫れだ。Platycleis Bonnetiの高い情調や、燃えるやうなAnasgalericulata の熱情は、若い詩人に任せて置けと云ひたい。何も兆殿司の佛畫を日本橋通のサムブルボツクスに陳列して、花瓦斯で裝飾するには及ぶまいと思ふ。詩歌の生命は僞らざる眞の感情にある。私は『泣き聲』『消えゆく日記』等に、醉茗君が父としての美しい倫理的情緒を歌つて居るのを見て、非常に嬉しく感じた。

君の個性の最も善く現れて居るものとしては、巻頭の『薔薇色の雨』集中で一等私の好きなものとしては『月の痛み』など色々あるが、夫等よりも何よりも、私は父としての情緒を歌つてある詩を發見したのが、嬉しい。私は何故君が斯う云ふ特色のある詩をもつと創作せないで、君としては寧ろ不得手な『若さ』をより多く歌はうとしたのかを疑はざるを得ない。

私はこれまで日本に、父としての愛情を歌つた詩が乏しいのを甚だ慊らないことに思つて居た。これは詩の作者讀者が、從來若い人々に限られて居た故であらうが、若い感情は華やかでも何處かに空隙が在る。讀んで了つた後には何も殘らない。假令色彩や香氣は強くともそれから得た印象は淺い。落着いた、充實した感じは、どうしても醉茗君のやうな世故に馴れた中年者の詩に待たざるを得ない。私は『霧』一篇を得たことによつて、日本詩壇の少からざる缺陷を補ひ得たことを固く信ずる。

『霧』は、其瞥見者に對しては、平面的の感じならでは與へないが、深い注意力と透察力を有する者に對しては、他の人からのよりも、深い感銘を與へることを、私は更に附加して云ひたい。

只――散文詩其ものが將來に對しては、尚多くの研究すべきものがあらう。併しそれ等は、自づから別個の問題である。

私は二代目豐國や周延などの末輩の畫を讃美する者に對して、勝以や師宣の繪の眞味を知らせてやりたい。日本橋通を電車や自働車や自轉車で走り廻つてる者に、ちつとは中通の落ついた空氣を呼吸させてやりたい。

私は此心持で『霧』を推奬する。

妄評多謝。

其二　一色醒川

△是れは私が『霧』を讀みながら感じた事をノートに書き〳〵して置いたのを出すまでゞす、生意氣に批評などと言ふわけではありません、

△私の先づ感じたことは此の作品中田園趣味と云ふべきものの、唯一『花びら』を除いて殆んど皆無と云つて宜いことであつた、他に『旅情』と云ふのがあるが描寫と敍情との脈が違つてゐる、で、是れを作者の是れまでの作と比べて考ふるに、無論詩と散文詩との相違もあらうけれ

と、かの盛んに大和國原などを歌つた塔影時代と大變りである、尤も『石』に大和を背景に取り、『毛髪』に山門を現はしてゐるのが地方的とも云へやうが、田園詩では無い、のみならず『塔影』に歌はれた都會近郊の如きも何となく田舎の色彩を帶びてゐたのに反し、『霧』には、「野」「松風」「ゆれる花」「闇夜」等にさへ密接に都會的交渉の氣分が出てゐるやうだ、同じ野でも、護謨靴を穿いてリボンをひらめかして行く若い女などの取り合せが目につくのである。

△扨て少數を除いてその作の背景となつてゐるものは大抵都會生活であつて、その色彩情調には際立つてではないが暗愁が漂ひ或は籠つてゐる、或るものは人生をレンズに入れて縮め出したやうなのもある、この部の作を一寸數へると、

「薔薇色の雨」「すれ違ひ」「都會の足音」「信濃町の月夜」「つぶて」「暮れたばかり」「場末」「塵烟」「轉宅」

など尤もよくこの趣味を出してゐる、これらはどちらかと云ふと客觀的な寫生的な又印象ぶりの行き方とでも云ふのでしよう。

△どの作にも通じて作者の主觀が出て居るやうであるが、それは前述の社會方面よりも今一層狹き周圍の、生活——家庭から來た實感のものに多い。

「聲せぬ家」「或る朝」「力の無い日」「うたゝね」「寒い日」

など、皆佳い作である。それから又如何にも家庭の人にして初めて道ひ得られる——多分白羊君も云はれたらうが——お父さんらしい作としては、

「泣き聲」「お窓の姉さん」「塀の外」「脈搏」などがある。

△此の變化多き都會生活を盛るべく如何に散文詩が適した形式であるかはこれらの作品が證據立てて居る、勿論それには熟練した氏の技巧を擧げねばならぬが、それよりも多く、所謂近代的潮流の動搖から來たもので、其の生活の斷片が如實に斯の如きものとなつて表現したのである。

△此の集には輕き皮肉、上品なユーモアと云つた風なのがある、「禮拜」「無言の號令」「眺望」「細君」「舞臺」等これに入れる事が出來る、この氣の利いたところも矢張り都會的である。

△此集には追懐と云つた氣分のふくらみもある、而もそは享樂の甘い夢では無く、矢張り現實生活の上からで、謂はゞ新らしい此の囚はれの家から、舊き彼の囚はれの家を回想すると云つた風なもので、

「屋根傳ひ」「雨」「涙」「若氣」「空虚」「臆病」などが其れである、散文なら自己告白と云ふところ、皆切實な聲がこもつてゐる。

△此の集には理智的思索の作が餘程多い、感情の結晶とは云へ、純抒情と云つたものは殆んど無い、其の感傷のうちにも理智の分子が勝つてゐると思はれるものが多い、試みに此の部に入れるものを擧げると、

「痙攣」「鳥よ行け」「魚の血」「飯の湯氣」「消ゆる雲」「旗」「草」「トンネル」「曉」「橋」「睡眠」「無意味」「山頭火」「非人間」「空虚」「獄の詩」「光の下にて」「曉鐘」「晩鐘」等、問題になり相な佳作も亦少くない。

Before the Summer Vacation.

A. The summer vacation is getting near; what are you going to do during the vacation?

B. I intend to go to my native place.

A. How is the climate of your native prace in summer?

B. It's very hot.

A. Won't it be very unwise to spend the time at such a hot place?

B. But I am very anxious to see my parents and my younger sister.

A. When will the summer vescation begin?

B. The holidays of our school begin at the 11th of this month.

A. Then you will have the holidays in ten days; how long will they last?

B. Over seven weeks.

A. That's a good long vacation, won't you be tired of so long holidays?

B. No, holidays are always welcome.

夏期休業前

甲—暑中休暇も近づいて來ましたが，休暇中はどうするお積りです，

乙—私は郷里へ行く積りです.

甲—御郷里の氣候は夏は如何ですか.

乙—大層熱うございます，

甲—そんな熱い處で日を送るのは甚だつまらぬではありませんか.

乙—けれども私は兩親や妹に逢いたいのです.

甲—暑中休みは何日からです.

乙—私の學校の休みは此月の十一日からです.

甲—それなら十日經てば休みになりますねー，休みは幾日間です.

乙—七週間餘です.

甲—隨分長い休みですね，そんな長い休みに退屈なさいませんか.

乙—いーえ休みはいつでも結構です.

ARIOSTO.

Ariosto had built a small house for himself. Being asked by his friend, how it happened that he, who described fine palaces in his "Orland," could content himself with so small an edifice, the philosophic bard replied:

"Words are cheaper than stones."

アーリオスト

アーリオストと云ふ有名な伊太利の詩人は自分の住宅として狹隘なる家屋を建築しました. 嘗て「オーランド」と云ふ自分の著書中に結構壯麗なる宮殿を筆の先きであれほど迄に能く描寫したものが自分にはそんな狹苦しい家でどうして滿足が出來たかと友人に問はれて，博識の詩人は次の如く答へた.

「語句は石よりも安價なり」



英　文

(第六年第六回)

星野久成

A FILIAL GIRL.

An aged couple in Tokyo, were, in the severe winter of 1909, reduced to their last stick of wood.

Their only daughter, by whose industry alone they had long been supported, had on means of procuring her parents fuel or food.

In this distressing emergency, she thought of the expedient of going to a dentist, with the resolution of disposing of her fore-teeth, knowing that he had advertised to give three *yen* for every sound fore-teeth, provided only that he was allowed to extract it himself.

On her arrival, she made known the circumstances, which induced her to make the sacrifice; which so affected the dentist, that he could not forbear shedding tears.

He made her a present of ten *yen*; with heart full of joy, she hastened home to relieve her parents.

Remember this proverb:—

"Virtue is the most beautiful ornament of woman."

孝行娘

去年の冬の事なりき，東京の某所に住める或老夫婦は貧苦の餘り寒氣を凌ぐ薪炭さへはや盡き果てけり．

此夫婦に獨りの娘ありて，骨身を惜まず働きければ，辛くも一家を支へ居りしが，今は兩親に薪炭又は食物を給する手段に事かくに至りぬ．

かく饑渇に迫りし際，娘はふと或齒醫者の許に行きて，自已の前齒を賣らんと思ひ付きぬ，そは兼て此齒醫者は新聞に廣告して，健全なる前齒を齒醫者自身に拔かせれば一枚三圓宛に買ひ取る由を知りたればなり．

娘は齒醫者の所に行き其齒を賣るに至りし事情を逐一申し述べけるに，齒醫者は痛く感動して落涙を禁ずる能はざりき．

やがて齒醫者は娘の孝心に愛でて金拾圓を與へければ，娘は餘りの嬉れしさに胸一杯となり；一刻も早く兩親を悅ばせんと，家路を指して急ぎ行きぬ．　記臆せよ

「德義は女子の最も美はしき裝飾なり」

唇と眼

醉茗

女を呪ふ言葉、冷評す言葉、そゝのかす言葉、からかふ言葉などは、澤山ありすぎて困るが、女を覺ます言葉、力をつける言葉、慰める言葉が未だ甚だ少い、女を敎へる言葉は、もう沓くなつた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

女が男の前へ出ると、物を云ふのに遠慮するやうに、又は紙一枚隔てて物を云ふやうに、又は全然自分を欺いて物を云ふやうに、如何なる場合にも男子に對して、云ふことが正直でないやうに思ふ。謙遜と、たしなみは女の面目を保つ上に必要だからと云つて、然樣に多く謙遜し然樣に多くたしなむ必要もなからうと思ふ。女子が男子に對して、何でも彼でも思ふた通りの眞の心持を言ひ表はすやうにならねば、女の價値は高まらない。婦人の敎育家、又は名流婦人など稱せられてゐる人にも、同性に對しては能く語り、能く言ふが、男子に對して思ひ切つたことが言へないやうに見える、それでは却つて女子の爲にならぬ、女子より見たる男子の弱點も、どしどし言擧して、男子を反省せしめねばならぬ、女子にのみ弱點があつて、男子に弱點がないとは言はさぬ、近來殊に男子の人格が動揺して來てゐる、横暴、放縱、壓迫などが或る一部の男子に專有されて、女子を虐げる。盲目的の反抗は女子の爲に取らぬが、劣等なる男子を除外するのは、一に女子の識見に待たねばならぬ。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

服粧と云ふことの爲に囚はれて、行きたい會合にも、行きたい場所にも、行き得ない婦人が澤山ある、服粧が大切か、見聞を廣くすることが大切かと云ふ判斷が即決できない爲であらう出ないでも濟む日本の婦人は不幸である。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

嫁入前と、嫁入後と、女子の眼に映る世界が違ふのは、已むを得ないこととしても、今の處では違ひやうが餘りに甚しい。之が餘り違はぬやうになつて來なければ、女性の根柢が定まらない、年齡で云へば殆ど同じ位でありながら、娘時代にある人と、花嫁になつてゐる人とが、甚しくかけちがつた世間を見てゐるのは、女性全體の上から言つて面白い現象ではない。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

女子が其身體を愛するのは、先天的であらう毎月編輯局に集まる女子の投稿に、入湯を題材としたものが必ず二三篇は極つてある、生れたまゝの女子自らの美を愛惜するの情は、溫かに澄める湯槽に入ると、自然に表出されるのであらう。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

時代を動かすのは大抵の場合、一人の力である、我邦、女子敎育の聲が盛んになつてから約十年は立つ、未だ一人として時代を動かすやうな女子は出ない、今後の十年には出るであらうか。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

今の敎育は幾万の常識ある女子を養ふのが目的で、一人の天才を養ふ爲でないことは分つてゐる。けれども多少新時代の敎育に與つたものでなければ、傑出した婦人にはなれない。

短篇小説

水野葉舟選



○車（天賞）

筆子

偶とした口論の末、房子は逆づつた眼をして、表へ驅け出した。非常に感情が激して、カッカと身體が熱してる、持前の癇癪起り初めた。一體少さい時から斯うした性分で、學校の宿題が出來ぬと云つては泣き、手習が出來ぬといつては、自分の手首に喰付いて狂氣の様に喚き立てる、と母が遂々遣つて來て「さあもうお默り、さう焦れたつて仕方がないがね、さッ機嫌なほして母様と鬼子母神様へお參りしませう」と手を採りながら、それ御覽這麼に手首が赤うなつて……」と、勞はり、遂々近い鬼子母神の社へ蟲封じに連れられる青い木立が被ひかぶさつた境内は、しんとして、横手の池に蛙の聲が喧しい、奥の院を一廻りする内何時か自分の心は靜まつて、爽かな氣持で家へ歸る、それは昔、現在の房子が心地を誰か慰めてくれよう。故郷を捨てて三年、夫も自分も冷やかに放れ行く心と心、加ふるに家計不如意、夫は酒を飲んで、まぎらしてゐる、けれ共女は、暗の中に常住夫より壓倒されて、じめじめ苔の様に生きて居た、不平と寂寥が混亂して房子は奈何していゝのやら解らない、すると心の底から「母樣、母樣」と叫び出した、而して故郷の方の空を仰いだ。

夕暮の色がだん／＼に迫る、何氣なく横町を曲る拍子に、「ハイッ」と房子の前を突切つた俥があつた、はつと飛び退く途端に車上の人を仰ぎ見た。五十近い紬の羽織を着た老婆が、土地不案内と云ふ體である、「母

樣ぢやないか」と思つたけれど、無論母ではなかつた、然しながら、どうしてかこの老婆がなつかしく、放れ難い心地がした、「鳥渡お聞き申ます、」「えゝ」と六十二番地つてえと奈邊になりましやう」「はツ」房子は夢から覺めた樣な返事をすると、「あの、黒い門のお寺の横と聞きましたがの」と車上の老婆が尋ねた、「さうですねえ、黒い門のお寺つても澤山ありますわ」「はあ」と老婆は眼をしよぼ〳〵させながら「斯ういふ人なんですがな」と一片の紙を示した、けれども房子には、さつぱり見當が付かない、「どうも解り兼ねましたね、鳥渡もお心當りがないんですか」と尋ねると、「はい、始めてで御座いますで……」と便なげに答へた、泌々と氣の毒になつて「ぢや兎に角此處を眞直に行くと、小さな川がありますからね、それに付いて右へ行くと二三軒お寺がありますし」と敎へた、「はい、はい有難う、御深切樣……」と老婆は幾度か頭を下げる、「ぢや隱居さん、もう一廻り尋ねましよう」と車夫は、ガラ〳〵ツと引き出した。

房子は生垣に倚つて久らく、其車を見送つて居た、悄然とした老婆の影は、次第に夕霧の中に包まれ、同時に遠ざかりゆく車輪の響きは、彼の胸中に異樣に響いた。

人を尋ねて迷うて居る、あの老婆の影と、而して故郷の寂れた町はづれに、吾を求めて彷徨うてる母親の影とが、一つになつて房子の頭を馳けめぐる。

ヂーと涙にうるんだ眼で、猶車の後を見送つた、一層強く母親を思ひながら……、悔恨と悲痛とがひしひしと身に迫まつて、苦しい〳〵吾胸を確乎と抱いた。ガラ〳〵と馳ゆく車の音は、夢の樣に耳許に殘つてゐる、で尚其車を求めるやうに、突當つた小川の邊を、とぼ〳〵と歩き出した。

軒燈には火が這入つた、豆腐屋のラッパにざわめいた夕暮の街は、いつか夜といふ黒幕が下りて來た、小川の水には宵月の影を浮べた。三浦坂へ行く小橋の袂に來かゝつて、房子は遙かに、夜見世のカンテラの光を見た、其時、あり〳〵と夫の酒氣を帶びて、充血した眼、荒んだ顏を思ひ浮べると、強い〳〵壓迫を感じた、そしてほつと太息を吐いた、「歸らないツ、歸らないツ」と叫んで、欄干に縋つて立ち盡した。

春の夜風は、三崎町の方から抹香臭く吹き下す、淋しい裏町を何處迄も、暗い〳〵處に憧憬れつ、房子はふら〳〵と歩き出した、そして彼車の音は、未だ忘れ兼ねて居た。

強い言ふに言はれぬ悲しみがある。人間が意識せずして孤獨の感に襲はれた悲しみだ(評)

○不平(地賞)

信濃　優梨子

お多美は此頃毎日の様に「あゝ何故東京に居なかつたんだらう。困つてもどの位ゐ氣樂で好いか知れやしない」と云ひ暮して居る。



(天賞)金魚賣　青森　松尾ちま子

「又始めた。もう好い加減に諦めるさ」と良人の國造が煩ささうに云ふと、「だつて眞實ぢやありませんか、鄕里へ歸れ歸れつて云ふから歸つたらどんなにも面倒を見て呉るかと思へば、あゝの斯うのと親類中して箸の上下しにまで世話を燒いてさ、歸つて來た私達が馬鹿

なんですわ」と垢脱けのした小綺麗な顔を顰めて、何時も斯う云ふ、「まア好いさ、今になつて何だと云つたつて、仕方が無い」と國造は定つた樣に此言葉でお多美の口を止めて終ふ。お多美は溫順しく默つて終ふけれども、其顔は中々晴々しない。

國造がお多美を嫁つてから間も無く、東京で一旗揚げると云つて大意氣込みで出京したのは七年前だ。出京ると翌年、長女の靜子が生れる、お多美は產後が惡くて二月許り床に就く、何かと入費は嵩む、什麼も思ふ樣に行かなかつた。それに一昨年次女の芳子が出來てからは一層生活が苦しくなつた。國造はもう什麼にも仕方が無くて、嫌な〱思ひをしながら鄕里の親類に其始末を打ち明けた。親類では皆云ひ合せた樣に、嫌な顔をして、そして「離れて居ては何かと不便だから、歸つたら何だ、其上で又何とかして遣らう」と國造へ云つて遣つた。

國造は其事をお多美に話した。七年振りの歸鄕！と云ふ嬉しさがお多美の胸には眞先に浮んで、それが好いとすぐ定めた。不首尾ですご〱歸る恥しさも忘れて喜んだ。

國造は流石に餘り好い心持ちはしなかつたけれども外に仕樣が無いので、暗い顔で「ぢや左樣しよう」と云つた。

お多美は色々に鄕里の事を想像した。七年にもなるのだもの、嘸變つたらうと思ふと、一日も早く歸つて見たくなつた。

下町風に育て上げた靜子が縹緻の好いのを自慢して居るお多美は、おしやまな盛りの可愛い姿を早く皆に見せて遣りたいと、恁麼誇りもむら〱と湧いた。

「靜ちやん、明後日はネ澤山〱汽車に乘つて、田舍へ歸るんですよ、お鄕里にも大勢靜ちやんのお友達があつてよ」などと嬉しくて堪らない樣に靜子に云つた「お母樣眞實？あの好いお着物着て？」と芳子を抱いたお多美の肩へ煩さく絡まる靜子を、何時もの樣に叱らないで、莞爾した。

近所の誰彼に送られて上野の停車場を出た時は、流石にお多美の胸は淋しかつた。けれどもそれも何時となく新らしい思ひに消されて終つた。

大きなトンネルを越すと、右も左も山許りになつた。生れた國へ這入つたのだと思ふと、只懷しさにお多美の胸は踊つた。

旅は淋しいもの、鄕里で親類中助け合つて行つた方



大町桂月君序
長谷川天溪君閲 立野天風編（第五版）

立志訓 全一册

ポケット形 洋裝頗美本 金貳拾錢 送料二錢

本書は成功立志談の如き有り振れたる淺薄のものに非らず、全編悉く金玉の名什『之を讀む事、二十回讀む毎に新意味を發見す』とは是なり

中村不折畫伯裝釘及口繪
內藤鳴雪翁賦畫（虛子廿四句）

新選 俳句集

全一册ラフペーパ紙新式洋裝 金四拾錢 郵税六錢

○木版色刷 挿畫六十四葉
久保文學士著

附錄 俳文評釋

本書は汎く一般の俳壇に紹介して多大の賞賛を博したるもの世に定評あり卷頭の虛子二十四句は先生が得意の佳吟をひ得く錦上花を添へたるもの、久保文學士の俳文評釋は同氏苦心の餘になりて諸君の好參考たるべく、若夫れ口繪に至りては他に類なき珍中の珍なるものなり



△憂ふる勿れ良參考書あり▽



△最新版▽

資本不要

出世の秘訣

ポケット洋裝 二百五十餘頁 正價金卅錢 郵税四錢

本書は青少年に最も必要なる、古今東西の實際的成功の根源を究め、百五十項に區分して丁寧親切に指導せる必讀の良書なり

△第六版發賣好評嘖々▽

東宮侍講本居文學博士校閲
大川文學士、中內文學士序
國學院大學學士小森松風編

古今名家 短文軌範

附 類語篇

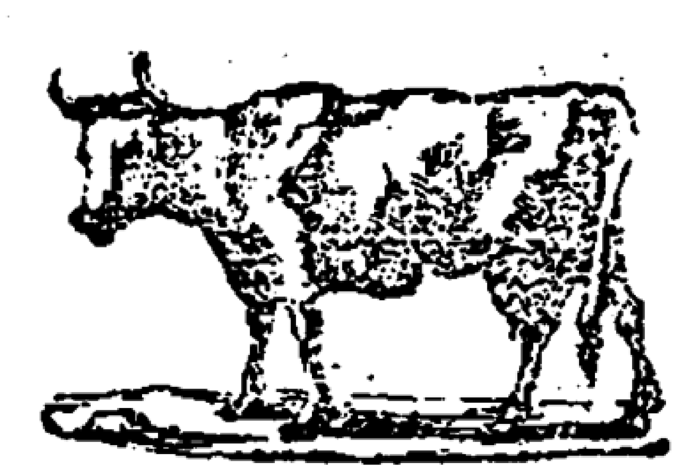
全一册中形洋裝 美本上製大册 價金三拾錢 送料四錢

目次

△記事△紀行文△說話△詞辭△評論△尙讃△序△消息文△春△夏△秋△冬△天象△地儀△人事△教訓△言行△動物△植物△雜文

類語篇 春、夏、秋、冬、雜、

附錄 日光山離宮三十勝記、東京名所記、其他短文等



發行所 東京神田旅籠町一丁目 （振替口座一九五五） 文光堂

賣捌 東京堂 東海堂 ○ 北隆館 良明堂 ○ 上田屋 至誠堂

好評　女子文壇第二增刊　製本發賣

都會の婦人

表紙　竹久夢二氏筆　口繪　挿畫

◀五月十五日發行▶

定價金貳拾錢　郵稅壹錢五厘

◎女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名
▲日比谷▲上野▲不忍▲神田▲神樂坂▲芝公園▲西片町▲根津▲洲崎▲谷中▲銀座▲魚河岸▲深川其他

◎若き女の眞情……婦人執筆
都會の渦捲に漂ふ▲濁つた室に輝く電燈▲入京記▲闘ひ疲れて▲熱涙冷涙▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう▲心の活動寫眞

◎都會の實際的生活
▲生活の階級▲卒業式の前▲バザーの當日▲某子爵邸に遊ぶ▲お孃樣のお供

◎東京の地と東京の女……諸大家談
▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士
▲詩に表はれたる都會……河井醉茗
▲婦人席にて……さわらび女
▲東海道線……一色醒川
▲西の郊外より……水野千枝子
▲南の郊外より……荒川澄子
▲上野より（對話）――うす雪
▲湯屋の三助に不快を感ず
▲開放されたのか落伍したのか
▲欺かれたる工女の懺悔
▲東京、大阪、京都

◎創作　小說。散文。詩。和歌。俳句。

◎都會を歩める女の印象
▲植物園で逢つた女（北原白秋）▲僅に殘れる印象（水野葉舟）▲街の夕月（森川葵村）▲三人の女（吉井勇）▲油繪に入る女（木下杢太郎）

◎日比谷大神宮結婚式の記事……

（七ノ三）

◀東京市京橋大鋸町　女子文壇社發行（振替口座東京壹七貳九）最寄雜誌書店品切ならば發行所へ申込を乞ふ▶

海外の讀者諸君安心して此便法を利用さなれよ

安全買物（あんぜんかひもの）

▲最も便利なる買物の方法▼

女子文壇並に少女の愛讀諸孃の御便利を計り東京市内にて發賣する

書籍及雜誌（教科書並に醫書を除く）定價の一割引

文房具、化粧品、

小間物、玩具類、定價の五分引

にて手數料を申受けず、誠實に御用達可申候間、多少に不拘、遠慮なく御申越被下度候、割引代金及び遞送費は一切前金にて、可成詳細に御通信願上候

東京市京橋區大鋸町十一　**女子文壇社**
振替口座東京第壹七貳九　**用達部**

▲確實で安い物を買入れる便法▼

新美文

全一冊二百三十頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税壹錢五厘

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附錄

◎小寒の日記……薄田泣菫
◎嬰家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一轉機……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葬……澤村胡夷

家庭日記

全一冊二百三十頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税一錢五厘

本書内容

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲開放したる心の扉
▲憚る處なき女學生の境遇
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と、出たる後
其他數項

（附錄）

最近の日記

三宅花圃
大塚楠緒子
與謝野晶子
岡田八千代子
長谷川時雨
國木田治子
尾島菊子
荒川澄子

短篇小説

全一冊二百三十頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税一錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

◎破疊……秋葉清子
◎女客……加藤貞子
◎町の出水……赤崎愛子
◎桃代……佐藤増子
◎朝顔……吉田駒子

其他美文、書簡文、新體詩、日記文、和歌、俳句、論文、小説總評豐富滿載

女子名文 新作家

全一冊二百卌頁
口繪數葉入美裝
定價貳拾錢
郵税壹錢五厘

若き女子が大懸賞の應募の美文、小説、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの別に日課表あり各自の住所に年齢家庭等作物と對照し人物を一目瞭然たらしむ其他

附錄

◎闇の夜……服部貞子
◎敗者……加藤菊子
◎火事……永代美知代
◎氣まぐれ者……太田樂子
◎新粧……尾島菊子
◎六月……山田くにえ
◎姉……故田中久子

東京市京橋大鋸町十二番地
女子文壇社出版
（振替口座東京七九貳登番）
賣捌全國書店

秀才文壇夏期增刊 旅

秀才文壇増刊

投稿歡迎募集

賞與規定

(一)(二)(三)……金拾圓以下 正金にて呈す

(四)(五)……金貳圓以下 圖書切符にて呈す

(六)……普通號に同じ

原稿締切及定價

投稿文締切期日は來る七月五日限りとす。

本號に限り一册金貳拾錢郵税金貳錢の事。

△(一)紀行文（一枚廿行一行廿四字詰總振假名付百五十行以內）

選者……吉江孤雁氏

純然たる紀行文も可、又日記文もよし。隨筆體も又よし。

△(二)旅行と冒險

選者……前田夕暮氏（同上）

旅行に冒險は必ず伴ふ者、無錢旅行、冒險失策談等

△(三)隱れたる避暑地の紹介

編輯局選……（同上）

全國の各地諸君、各々我が隱れたる風土の名勝を紹介するにつとめられたし、本欄に限り敢て字句の誇大なるを咎めず。

△(四)旅行を取材とせる 小品（廿行限り）短歌（五首以內）俳句（五句以內）

右選者…白柳秀湖氏、前田夕暮氏、高田蝶衣氏

△(五)表紙（五色以內）選者服部亘夫氏

△(六)各地風俗旅行スケッチ（大きさ半頁大）……同氏選

△各地名勝寫眞（手札形カビネ形）隨意

可成未だ世に現はれざる、風土の名勝を望む、掲載の上は本誌を呈し、優秀なる分は一圓以下の報酬を呈す。

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂 東海堂 ○北隆館 良明堂 ○至誠堂 上田屋

がどんなに心強いか、困つて歸るのだからつて、身內の一人だもの、無皆は待つて居て吳れるだらう。とお多美は恁麼事許り思ひ續けて居た。

歸つて見てお多美はガッカリした。自分の想像はガラッと外れて、親類の仕打ちが餘りに情無いので泣きたい程だつた。

お多美はそれを口說々々と國造に云つた。默つて聞いて居る國造の眼にも暗い色が見えた。

困ると云ひながら小供にメリンスの着物を着せて置くの、何時も丸髷を綺麗に結つて居るの、自分でぐるぐる卷きにしたら髮結錢が出なくつて好さそうなものの、と皆眼をくり〳〵させて細かい事まであゝ斯う陰口云ふ、それだけでももうお多美は、嫌になつた。

「困つても好いわ、又東京へ行きたい」と恁麼事まで云ふ樣になつた。

「靜ちやんは東京と此處とどつちが好いの？」と幾度も聞いた。

「お母樣、東京へ歸りませうよ、私淺草の花屋敷へ行きたいわ」と靜子が每日煩さい樣に云ふのを知つて居ながら、わざと聞いて見るのだ。

「それは東京が好いに定つて居てよ」と靜子が淀みなく云ふのを聞くと、お多美は、斯う何か小さいものに勝ち誇つた樣な、何處か心強い樣な氣がして、

「さう、お母樣も東京が好いのよ」と莞爾して見せた

靜子はそれを、何處へも行つて話した。

「叔母樣、東京は好い事よ、一寸お買物に行くにも電車に乘つて行くんですしネ、お水は汲まなくても獨りでお勝手へ來て居てよ、私は東京が好よ、お母樣も復行きたいつて云つて居るわ」と、皆が喫驚する程增せた事を云つて步いた。

「其麼に東京が好ければ何故歸つて來たんだらう。散ざ贅澤して居て、困るからもよく云へたものだ。又行きたければ行くが好い。」と親類の者は皆斯う思つて居た。

お多美は、靜子が親類へ行つて色々云ふ事など少しも知らないで居る。只親類の仕打ちが餘りだと曇つた顏をしてはぶつ〳〵云つて居る。

この作者は大變上手になつて來た。無理に作らうとしないのがいい。が、この作などはさういゝ作とは思へぬ（評）

●●●

揭載外の佳作の中で、小ゆり作の「或る夜」は別に何處と言つてよい處はない、併し、無理にまとめやうとせずに、何處かゆつくり書かうとしてある處が嬉しい。誤字のことに就いて書き添えてあつたが、そのやうなことは自分で注意して頂きたいものだ、少し注意すれば充分直ると思はれる、人だよりにしては何時までもなほるものではない（選者）

○娘（人賞）

神奈川　たへ子

「どこかに好い縁談はないものかねェ。」母親はよく肥えた娘の若々しい身體つきを眺め乍ら、例も口癖の樣に云つてる事を又云つた。「そらお母さんのお株が始まつた、私はもう厭んなつちまふわ。」「だつて全く困るぢやないか、お前がいつまでもブラブラしてた日にや兄さんの嫁を探す事も出來やしないもの。」……「ぢや什うすりあ好いのよ、廣告でもしたら宜いかもしれない。」！とお米の（娘）聲は怒つてる樣にきこえた。母親は默て了た。よく雨など降つて薄暗い樣な日に爲す事もない母娘は、斯うして長火鉢をはさんで、充まらなさ想な屈托顔をつき合せてた。

而して母親が持出す話題はいつでも此の事だつた。お米も其れをさけ樣とはしないのだつた。時には自分の方からヤヶな事を云つて母親を困らせるやうなこともあつた。十八才の暮頃から引つゞいて幾度も出逢つた縁談、お米は其度毎に新らしい不安と名づけやうもないさびしさになやまされた、而して何とはなしに、子供の樣な幼稚な弱い心で逃れたく思ふのが常だつた然しいつも明白に反抗爲得るほど、しつかりした信のある心では勿論なかつた、而して不得要領になやんだり、氣遣つたりのあげく、何かしら故障が出來て來て自然に破れて了ふのだつた。斯うしてありかけては流れるやうに行過ぎて了ふ、自分の縁談を考へてお米は不思議だとは思えなかつた。斯うしていく度逢ふ縁談も皆何かしらで破れて行つて、いつまで經つても自分は當家の娘で、若くて變る事もなく外の人の樣に妻だの母だのつて其麼者になる時はない、と實際其麼風に思へてならなかつた、其でそれも寧そ暢氣で好いなぞと思てみる、其の傍から譯のわからぬ不滿らしい淋しさが心の底にいらついてる樣に想へた。

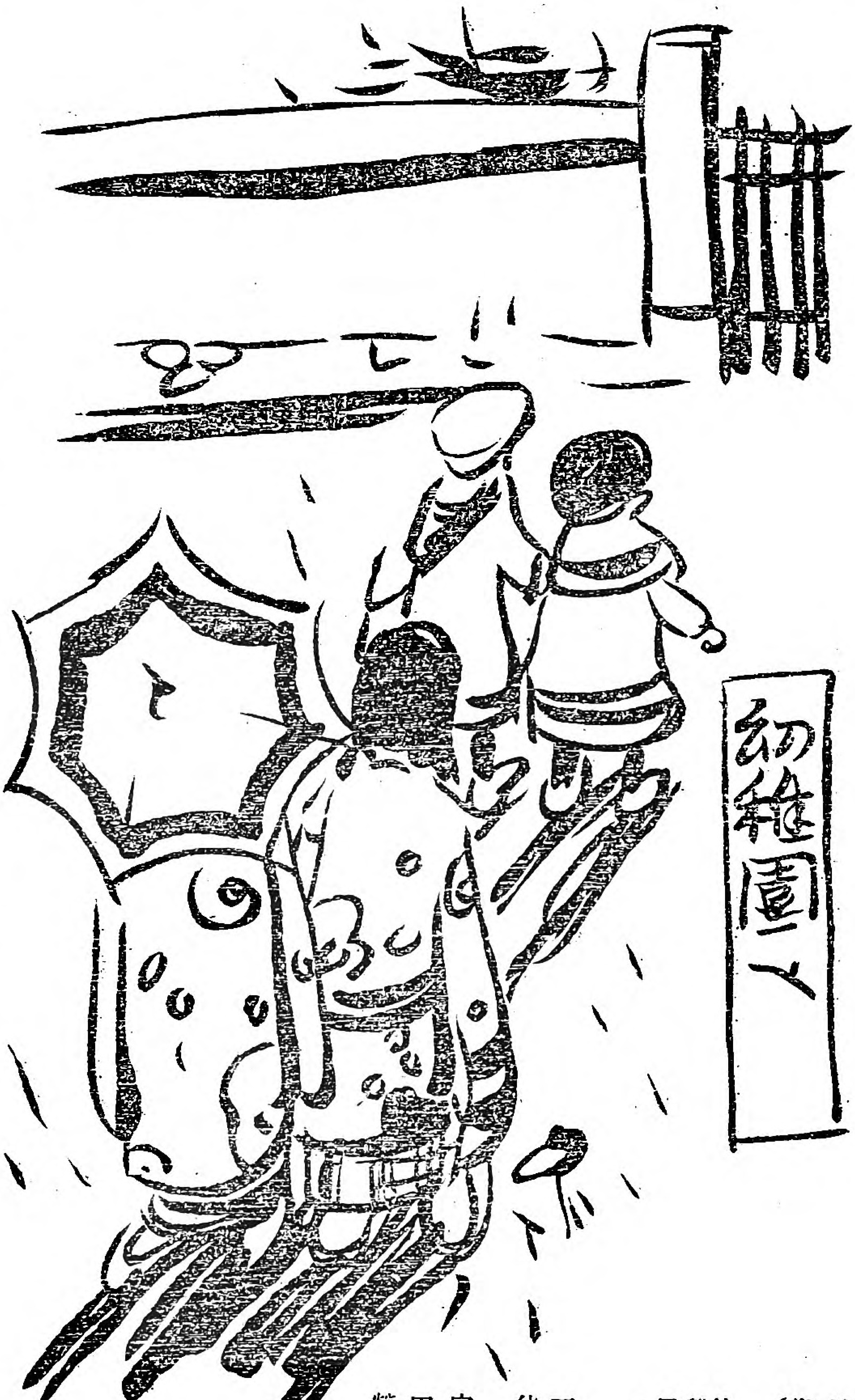
斯うして變化なく時を消して行く間に、同年輩の誰彼が嫁いだとか、其麼うはさが此頃の母娘の耳にはキハ立つてひゞく樣になつて來た。其頃だつた母親がお米の兄に一寸這麼事をもらした。

「松井さんは若いが中々敏腕家だね、あの人は全く見込のある人間だよ、親はなし氣樂なものだね。」ふと其れをきいたお米は此頃の場合として、これだけの詞を無意味に忘れて了ふ事は出來なかつた。

今までは何となく好もしい位に思つてた人だつた。

其れを今度は眞面目に研究的に考へてみようとした。

兄の友で度々來る人、横濱の貿易商店の番頭で、江戸子風のデキパキした厭味のない人だつた。而して誰にでも親切だつた。いつも苦勞をしらぬ様な元氣の好い若々しい顏をしてた。お米は若い心で此麼人と一緒に暢氣に暮したら幸だらうと思つた。何となく其麼事が實現される様に思へてならなかつた。其人を通して色々な空想もしてみた。いつかはお母さんが其問題を提出するだらうとお米は心待ちに待つてた。此方では斯う一生懸命に待構へてる問題を母親の方では什う云ふ積りか其事については何の沙汰も來なかつた。お米は日が經つて、松井に逢ふ度に餘計に此の事の解決をあ



(地賞)　幼稚園へ　下谷　守田榮

せつた。然も母親の方では相變らず、心易い知人の顔さへ見れば、娘の緣邊の事を賴みまはつてた。お米は其麽樣子を見て「お母さんは一體松井さんの事は何と思てるのかしら？」相談を持かければ譯なくまとまり想な平常の松井が自分に對する、態度なぞ考へて、其れを其れと云ひ出す事も出來ぬ此の問題がお米には一層焦心でならなかつた。

「母さんは厭になつて了ふね、他人の顔さへ見りあ餘り者か何かの樣に賴みまはつて、見ともないわ。」と苦苦しい顔色をして見せた。

「だつて賴まなきや誰も世話してくれないよ、いつまで浪人で居る氣なのさ。」

斯麽事をきかされたお米は今まで、母親の考へを當てにした、自分が非常に馬鹿らしく、何だか、かつがれてでも居た樣に思へて、無暗に腹が立つてならなかつた。

面白い處が書いてある、松井に對する、烟のやうな戀がい、が、あの、エピソードがも少し力强くにできさうなものだ。も一つはもつと落ち付いて書いてほしい(評)

掲載外の佳作の中で、吾妻白優梨の「手紙」は强て調子をつけたあとがある、この作の議論はまだ幼い、その上にわざと汚いことを書いてある、人間の奥までを曝露すると言ふ事と、面白がつて書くといふこととはちがふ、原田澪子の「出産」は無難（選者）

【秀逸】

○其の人

草葉の露

友子は××病院に半年も前から入院してる、春子からの手紙を讀んで、ハッと驚いた。其には同じ入院患者のH氏の死去の事が書いてあつたので。

友子は椽の柱によつて、今にも降り出しさうな、雲が漸々に低くなつてゆく、薄暗い灰色の空を見乍ら、其頃の事を種々と考へて見た。

其頃丁度友子は、一年前からの肺結核で、××病院に入院して居た。春子には、其時始めて會つたのであるが、大勢の中でも、年格好から、趣味の一致から、又其病の點から、特別に親しく、姉の樣にも思ふ樣に成つた。

友子と春子の室は、病棟でも一番奥の九號室……左手の廊下の硝子戸を開けると、だら〳〵とした、石段を降りて、下は一面の芝生になつて居た。天氣のいゝ時には、二人は何時でも其芝生で種々の事を話した。と、丁度其頃、毎朝洗面後、九號室の前を通つて、芝生に出て、深呼吸をして居る若い男の人があつた。

始めは何の氣も付かなかつたが、室の戸が開いてると、其人は屹度見て通る。

「變な人ね」と友子は云つた。

「左樣ね、あの人四號室よ」と春子は答へた。

或時隣室の附添人から、友子は其男の人の事を聞いた。〇〇村では、三番と下らぬ豪家の息子で、東京に五六年遊學して、其内病氣に成つて歸國した事など、そして、其人は、

「男がよくて、金持で、學問はあるし、眞實に御氣の毒ですね」と、付加へた。

何時か――左樣あれは、三月だつたと、友子は考へた。――何でも彼岸櫻がぼつ〳〵咲くと云ふ頃、ポツとのぼせる樣に暖かい春の日、廻診がすんでから、友子は春子と例の樣に、芝生に出た。

柔かい草の上で、暖かい午後の光を脊に浴び乍ら、春子は大阪の夫の事や、姑の六ヶ敷いことなど、種々と話した。そして此樣な病氣に成つて、何時までも、歸られぬと、離縁になるかも知れぬなどと、友子は、我身に位べて泌々と聞いた。そして自分も何樣なる運命やらと悲しく成つた。涙を拭いて、ソッと顏を上げると、フト、向ふの垣根――半町許離れた、低い薔薇の咲いて居る垣根によつて、チッと此方を見て立つて居る男があつた。Ｈだなと、友子は思つた。とフト、肺病同志夫婦に成つて居たら、如何なるだらうと思つて、今迄泣いた事も忘れて友子はニッと笑つた。

「あら何ーに」と春子は云つてＨ氏が目に付くと、

「あゝ、あの人も可哀想ね」と、春子は又、ホロリとした。

暫くすると、其人はソロ〳〵と歩いて來て、

「日光浴ですか」と淋しく笑つた。

「えゝ、まあ御話しなさい」。春子は云つた。

其樣にして、近づきに成つてから、Ｈ氏は、殆んど毎日、九號室に來て、話す樣に成つた。

そして、雜誌や新聞も借りて讀む、東京の話もするが、東京の事を話し出すと、春子は只默つて聞いた。

同病相憐むと云ふ心からか、一日〳〵と親しく成つた。

丁度友子が退院の前々日、五圓札が割れないかと云つてＨ氏は室に來た。春子にもなかつたので、友子は「二圓位」ならと云ふと、では一寸借りるからと持ていつた。其翌晚――明日は退院と云ふ時に、Ｈ氏は、其を返しに來た。寢臺の上に二十錢銀貨を、サラ〳〵と

列べて、「有がたう」と云つた。友子は何氣なく、取らうとすると、小さく丸めた紙がある。ハッと思つて、顏を上げると、其人はツト目くばせした。

友子は、ソッと春子の方を見ると、寢臺の上に向ふむきに寢て、雜誌の口繪を見て居たので、ホッと安心した。暫く話して、其人は歸つた。

春子が便所に立つた時、友子は急いで其紙切を出して讀んだ。其には只、今迄種々御世話になつたので、明日退院なら停車場迄なりと御送りしたいから、宥して下さいと、小さく書いてあつた。

其夜友子は、種々と考へた末、若しやく、明日停車場で、戀を囁かれるのではあるまいか、今迄時々見た、あの眼……無意味とは思はれぬ。あゝ、若し左樣だつたら、如何しよう……自分は人妻なる事は知つて居る筈、まさかくと思ふけれど――でも、もし萬一、左樣だつたら、何と云つて……といろく小さい胸を騷がせた。

＊　＊　＊　＊

其日、十一時の汽車に間に合ふ樣にと、今迄永い間一所に暮した、春子、若い看護婦、隣室の人などに、見送られて、俥が病院の門を出ると、友子は又、昨夜の事を思つた。停車場につくと其人は、來て居た。

「若し誰れかに見られたら、如何なすつて？」と友子が云ふと、

「何に見られたつて可いです、僕は大抵、毎日の樣に此邊散步するから」と、H氏は平氣で云つた。

△△行の切符を買つて、未だ二十分の間があるので二人は二等待合所の所にゆくと、巡査がジロッと見たので、「暫く外に出ませう」と、植込の柵の方に廻ると、其人は「一人で淋しいでせう……三時間ですか」と聞いた。友子は「えゝ、向ふの驛には迎に來てるでせうけれど」と云つて淋しく笑ふと、H氏は例の眼でヂッと見て、

「僕は之からは一人です、淋しいですな、今迄は、無言の内にどれだけ慰められたか知れない、之からは孤獨です」

「えッ……」と友子が何か云はうとすると、

「何に僕は、何時死ぬか分らない身です、二十代の者では女子よりも男子の方が危いと云ひますから」

「…………」

「あなたは最早退院が出來る位ですから大丈夫でせう……然し御養生なさい、菜の花の咲く頃が一番能く

ないそうです」
「えゝ有難う。あなたもどうぞ」と、友子が低い聲で云つた時、開札のベルがなつた。
汽車が動き出した時、窓から顔を出すと、H氏は未だ柵の所に立つて居た。そして、見えずなるまで、帽子を振つた。………
丁度一月になる。と思つた。「孤獨です……何時死ぬか分らない身です……」其聲が耳元に聞える樣に感じて、友子はハッと耳をおさへた。大粒の雨がポツリ〳〵と降つて、朝鮮梨の葉がくれに青蛙が鳴き出した。

　肺病同志、死、そんな事は今迄いくつもあつた。がこの作にはその他に力がある、終の對話が出來て居る（評）

○幸三夫婦

横濱市　うめ子

幸三とお泉は、孤兒になつた孫の市助を連れて、遂遂お泉の以前の亭主に出來た、吉次と云ふ息子の家へ同居する事になつた。其事は幸三にとりて、今迄の誇に對しても、忍べる事ではないと思つた。
「俺は厭やだな、此年になつてから、人の家に食客になるなんて、……お泉お前は辛いとは思はないのか、口惜しいとも思はないと見えるな。尤も吉次はお前にとつては實子だからな……」と那麼厭味を云た。
「實子だつて貴方、康の樣なのとは變て、彼の小供の時に私が置いて出て來て了たんですもの、酷い母親だと云ふ腹は充分ありましよし……でなくても一旦緣のきれた者ですからね。私だつて何んなにいやだか…。」
「だからよ、それに俺はあの吉次の高慢ちきな面を見るのかと思ふと、本當に胸くそがわるいよ。」
「かと云てね、此先の暮しを此儘何うしてつゞけてゆくと云ふ當てもなしね……なあに向ふで置いてやると云ふんだから、少も赤子の世話でもして、機嫌をとつてれば、それでいゝんですからね。」とお泉は云た。
　而して幸三夫婦は、間もなく荷物を片づけて、三丁程離れた、吉次の家の二階に同居する樣になつた。
　吉次の妻のお菊と云ふのは、なか〳〵氣性者で、清潔好きな女だつた。それで市助が外から足の裏を、きたなくして歸て來て、てか〳〵ふき込んだ板の間へ、白く足のあと等つける時には、「たまらないね、市ちやんは、きだなくて仕樣がありあしない。」と顔をしかめて、つけ〳〵云た。そんな事が二人にとつて、何より辛く、又氣持ちの惡い事であつた。お泉は朝早く起き

て、臺所を手傳て、吉次夫婦の食事のすむ迄、赤子の守りをして、幸三は別に何もする事がなかつた。而して其癖さも食客らしいと云ふ態度で、彼等夫婦に對する事が出來なかつた。それをお泉が氣を揉んで色々に云て見た。「少しは貴方も、考へなさいな。こうして食べさして貰てゐるのだからね。いやでも何とか、お菊の氣に入る樣にね貴方……損ですからね。」と時々見兼ると云ふ風に云た。さう云ふ時幸三は、いやな顏して「かまはんよ俺は、かまやせん……」と怒た樣な風を見せるのが癖だつた。或時幸三は市助をつれて外出した時だつた。お泉は吉次夫婦と長火鉢をかこんで、茶話しの末、不圖幸三の噂が出た。

「お爺さんは隨分頑固だね、あれ程でもないと思た。」と吉次が云た。「頑固にも何にも、呆れて了ふ位さ。」とお泉は早口に眉をよせて云た。「何だか全で喧嘩でもしてる樣だわね。でも感心に市ちやんの事は、可愛がるぢやありませんか。」とお菊は少し笑た。

「本當にあの人　、あの氣分にも弱るけどね、菊さんあの人は誰れにでもあゝなのだから、隨分貴女も氣に障るだらうが、そこをね、堪忍して下さいよ。貴女等に見はなされちや、何うする事も出來ないからね……。」と泌み〴〵お泉は云た。「それはお婆さん、私だつてよく分てますもの、何とも思やしませんわ。だけど却てお爺さんが、何とか心持ちわるくしてやしないかと思ふ位ですわ。」「否いくら何でも那麽事はないんだが…あの通りの氣分ですからね、私ははら〳〵する樣でね」と愚痴ぽくお泉はこんな事を云た。暫らくしてから、吉次が思ひ出した樣に、「何だね、お爺さんも壯健なのだから、何かやつて見たら、よさ相な物だね。」とお泉の顏を見た。「さあ、あの人に出來る仕事があるかしら」「やる積ならあるさ。」と吉次が輕く云た。「ありましようとも、本當にあゝしてブラ〳〵してゐるのだから……」とお菊も乘氣の樣に云た。お泉は何となく厭やな感じがした。而して其夜、床に就てから幸三に、其事を話して見た。すると幸三は、「那麽事だらうと思たんだ、只で飯食はせるのが嫌やになつたんだらうよ。いゝやな出て行けば、あゝもう一日でも居るのが嫌やになつた……康の奴あ不孝だ。彼が死んだお蔭に、七十になりかけて此の樣だ。もういゝから、のたれ死ぬ迄も自分等水入らずに稼いで暮すとしようかな、お泉ゝ……。」と忌ま〳〵し相に云た。翌朝幸三はいつ迄も起き出なかつた。お泉が氣にして幾度も起しに來たが、



（人賞）　停留場にて　濱松　曾田きん子

默て夜具にもぐつてゐた。而して吉次も出勤して了て幸三の茶碗丈けが食卓の上へ殘されてあつた。お泉は嫁の手前堪らなく氣にした。「貴方何うしたんですよ、早く片附けないと厭味が辛いぢやありませんか。」と氣兼した小聲で併し強く搖て云ふと、幸三は充血した眼を細く開いて、「かまはんで片附けてくれよ、俺は食はないから。」と又深く夜具を被た。と突然赤子が泣き出したので、お泉は、「蒼蠅い〳〵」と遣瀬なげにゆすぶつて歩き出した。すると梯子の下から「お婆さん、一杯飲ましてやりましよう、そしてお爺さんにね……片附かないで仕樣がない……」と聞える樣にお菊はつぶやいた。

何時も達者な筆だ。これは前の作「風の夜」よりいゝ、「風の夜」は紙面の都合で、今號に廻つたが、この方をとる事とした、たゞこの人は才にまかせないで底に沈んだ心で人生を見るといふ事が必要だと思ふ（評）

○母親

小石川　流水女

薄い靄が一面に流れて、横手にのびた小川を隔てた松林も、田畑を越えた裏道を通る人の姿も、ぼんやりと夢の樣にうつる頃、淸の雨戸を繰る音を聞いてゐたお豐は、倦る相に起きて、定つた朝の仕度をした。裏の畑へ味噌汁の實にもと、葱を取りに行つた。川端に米を磨いでゐた紺屋のお神さんが、いつもの威勢の好い聲で、

「お早う――」と挨拶する、筒袖の縞の着物に、綿メレンスと黒繻子の腹合せ帯を屹と締めた、いつもにこにこしてるお神さんを見て「若いのに感心な」と思つた。

寂びれた自分の畑に續いてる一反歩程の田も、その向ふの丹精した畑も、もう自分の家のものでは無くなつた、夫と二人で、アクセクと働いて作つた田地も漸々、他手に渡るのかと思ふと、淋しい心持になつた

一昨年夫が逝つてからのお豐を、人は皆、男勝りと讃めてゐた。お豐も根限り働らいた、二十二になる姉娘と、十六になる妹娘のお澄を對手に、畑も他手を借らずにやつたし、店の方も夫の存在た時と同じ樣にやつてゐた。

去年の夏の末、ゑぞ菊が庭一面を彩つてゐた頃、お澄は不意と姿を隱して仕舞つた。姉娘のお柳は、其間に淋しい婚禮をして、九里程離れた外の町へ行つて仕まつた。お豐は其頃から、めつきり老けて見えた、四

十五だと云ふが、七にも八にも見える。身體が痛い痛いと云つては、いつも寢轉んでゐた。佐渡屋のまんぢうと云つて此町で名高かつた饅頭も一日置に作る樣になつた、十一の息子を頭に二人の女の子は何も知らずキヤッ〳〵と騷いでゐた。

淸とお靜が、いつの間にか學校へ行つて仕舞ふ。お豐は茫然と、廣い店に列べられた、目なれた、お菓子やビールや鑵詰やを見てゐたが、沮喪した樣に爐邊へ坐つた。お柳の里返もしなければならないんだ、と每日の樣に思ふ、けど這麼汚なくてはと、所々擂れた古びた疊の表を見た。

近所の子供と、裏庭で仲好く遊んでゐたお千代が、驅けてきて、突然抱きついた。もう五つになるのだがまだ乳房を離さない、お豐も離させ樣とは仕無かつた誰れにも似ない、圓らな淸しい眼を、お豐はいつもほれ〳〵と見た。そして此子だけは如何しても手放し度く無い、と思つた。

「お千代は孝行者になるんだね」と云ふと分らぬながらも音無しく默言く。「お千代ちやーん」と外に呼ぶ聲が聞える、とお千代は少ししか出ない乳を一しほ強く吸つて「遊んでくるの」と云ひながらにて〳〵出て行く。そのちよこ〳〵した小さい後姿を、凝と見てゐたが、何か思ひ付いた樣に、立つて押入を開けて古ぼけた鼠色になつた大きな風呂敷を開けた、其の中には、お澄が小學校へ通つてゐた頃の、袷の形の分らなくなつたのや、單衣の色の褪めたのや、淸が五つ六つの頃喜こんで着た、あつさりしたメレンスの單衣だの、赤兒の時の麻の葉の着物や、黃色いのや、赤いのや昔の着物が幾つも〳〵出てきた、お豐は四五年前の事を種々考へながら、裏と表をバラ〳〵にしたり、裾や袖口をといたり、袂から出る塵埃や、腰上や縫目に積つた埃を振り落しながら、漸々半分程終へると、沮喪した樣に止して仕まつた。

昨日西町のお島さんがきて、その息子の直さんの事を泌み〳〵話していつた。それを思ふとお澄の事を考へずには居られなかつた。苦學！直さんの樣な立派な靑年でさえ出來ずに歸つたものが、如何して女の手で成功るものか、……もしや關塚の花さんの樣な？と思ふと慄然として眼をつぶつた。

「お呉れ――」と大きな聲で子供がきた、お豐は、が、、つくり立上つて五厘一錢と賣るのに厭な顏もしなかつた。

學校から、お靜と淸が歸つて來ると、寂寞してた家の中が急に活々してくる。

お靜が近所の子供を大勢集めて、李の根方へ蓆をしいて、學校事を初めた、小先生のお靜の本を讀む聲がしづかな春の日に心地よく響く、お豐はそれを聞くとお澄の幼ない時の事を思つた、友達も少なかつた、此處から見てると裏道を只獨り書物の包を小腋にはさんで本を見ながら歸つて來る、危い！と思つてる中に轉び相になつた事も幾度もあつた。涙脆い、其癖剛情で姉妹とは云へ、よくも這麽に似たものだ、とお靜を見てつく〴〵思つた。

お豆腐に葱に玉子を入れて汁を煮て遣ると、皆は嬉し相な顏して、膳を取捲いて食べた。

淸が唱歌を歌ひだす、とお靜も負けじと唱ふ、お千代も初の頃は歌つてゐたが、出きなくなると、つまらな相な顏して母親の膝の上へ乘つた。

漸々やさしい唱歌になる、お千代も立つて、可愛い口で「桃から生れた」を唱ひ出した。お豐は何事も忘れた樣に、それに調子を合せた。（をはり）

情味はある、しかし、何にも新しい發見が無い（評）

「ね、先生ほんとに涼しい晩ですこと、いつものをおねかひしとうございますね」

「ほんとよ先生、ヴヰオリン曲つて頂戴よ、ね、先生ね……」

「文ちやんのは何でしたね、好きなのは」

浴衣に五分刈頭、白いリボンのお下げ、桃割姿が明かに見えた時、まアいやらしいとたみちやんは一人言した。赤兒が見て笑つてる綾すと大きく聲出して笑ふやうやう面白くなつてきたとたみちやんも笑つたが……キロッ〳〵とヴヰオリンが聞えはじめるときふにねたましく、また何となくつまらないと思つた。

さうさう先日「竹屋さんではよくあの先生を入れておきますね、何といつたつて若い同志があゝして居てはどんな事がないとも限りませんよ、ねー」とおよしさんが話してたのを聞えたが、それから昨日、きよちやんが、いろ〳〵話の末「あの先生にはもう奥さんがあるんですよ」つていつてたが、私は何んだかきよちやん自分の事を言つてる樣で可笑しくてたまらなかつたが今夜あゝして仲よい友達のやうにして居るんざもの、およし樣に言はれるのも無理はないと思ふ。赤兒をゆり上げて松の影になつた月を見せる。風がふわり袖をあふひで螢が二つ三つピカリピカリ。

ちやらちやら〳〵と音がして、

「まアたみちやん——今晩は……」

と靜ちやんの笑顏が目の前へ

「あゝ靜ちやんどこへいらつしやるの」

「え、わたし、お涼みよ、——あ、きよちやんとこへ行つて見ませう。あの先生がヴヰオリン曲いておらつしやるわお上手ね、行つて見ませう、あら見るんぢやない聞くんですわほゝゝ聞きに行きませうよ、ねたみちやんさ赤兒ちやんわたし抱こして上げます……」

（小ゆり作「ある夜」の一節）



河井酔茗選

〇十八歳の春に歌ふ（天賞）

空氣は動く

和泉　金田代志子

空氣は動く――はた動く……。
雛鳩の胸の柔毛が風に散つて行く様に、
夕鐘の音が遠く暗の中に消え入る様に、
薄明な月夜の沼の水面の様に、
男子の手に抱擁められた時の自分の胸の様に、
キッスした時の唇の顫ふ様に、

空氣は動く――はた動く……。
（花摘む少女の、白き足美しき
風も無き春の眞晝に
毛莨色の芝生に坐つて
遠き彼方をじつと見つめて居る
と――）
屋根の瓦に反射した光が
ゆるやかに流れ去ると共に
溫かい日のほめきと、甘い花の香と
ほのかな髪のほのめきとを
薄らに交せて――。
空氣は動く――なほかすかに動く……
……。

雨の池面

涙ぐんだ灰色の空と
泣きたい様にぼつとした山と
淋しげな森の影とを、抱いた水面に
頼りないうらぶれの子が
病の床に咽び泣く様な
何とも云へぬ淋しい響を立てて
晝の淋しい雨が降つて居る。
ふるへてる水面は
深く默した白楊の下枝に打つて
極めて小さい、淋しげな音を立てる。
そして其の音の消え行くあたりは
夜の様に眞暗だ。
あゝ暗が此處に潜んで居て

此處から四邊へ擴がるんぢや無いかしら。
深く默した白楊、
其の根本の暗、
雨にふるへてる水面。
あゝ淋しい――晝の雨が
しと／＼と、しと／＼と降つて居る。

雨のあと

夕日は赤くひなげしの花に輝き
はなやかに露の光れる。
哀れ一日、花を落とし降り續き降り
あらびたる雨は晴れて
夕日は紅くひなげしの花に輝き
はなやかに露の光れる。

目覺ましき進境である、三篇とも凡て佳、恐らく本欄近來の出色の作であらう、未だ模倣の域は脱しないけれど、藝術的呼吸の深さが他より著しい、「雨のあと」などは僅に數行の小曲だが一字一句も動かし難い妙味を存してゐる（評）

○美（入賞）

越後　枯尾花

紫の山の麓をめぐつて來た此水、
どこへゆくの、遠い遠い、づゝと遠
いとこへ。
花が綺麗に咲く朝は、好い聲の鳥も
來ますのね、
自然の美、あなたも其中の一つでせ
う。
だのに、まあ――、
それではね、私にだけ、此華やかな
美しい、少女の美だけは、ゆるして
下さいな、
それも駄目だつて、情無い。
私一生こうして花やかで居たいのに
大切なだいじな、簪の花を、あなた
流してしまつたのね、おぼえてゐら
つしやい、また、あゝ、
私の指輪、ダイヤの光まばゆいのを
むりにもぎ取つて
私泣いても、ないても、此恨はつき
ませんよ、
あなたは、きつと、しまひには、暖
い私の胸に咲く珍花まで、散らすん
でせう。少女の美、つひにはけづり
去られる時が來るつて、あゝどうす
ればよいのでせう。

口語詩の初歩として好し（評）

【秀逸】

○陰

信濃　ふもと子

月が出たらしい、暗い野の草の、面
が輝く。
明るい空にはつきりと、黒い堤の松、
其の堤下の闇の中を行く我が足本に
コロ、ロ、コロロと切れ／＼の蟲の聲
月が高く登るのであらう、野の面は
いよ／＼輝く。
陰々！あゝ陰、寂しく強く胸が言ふ。
輝く野の面を望むだ目、疲れて力な

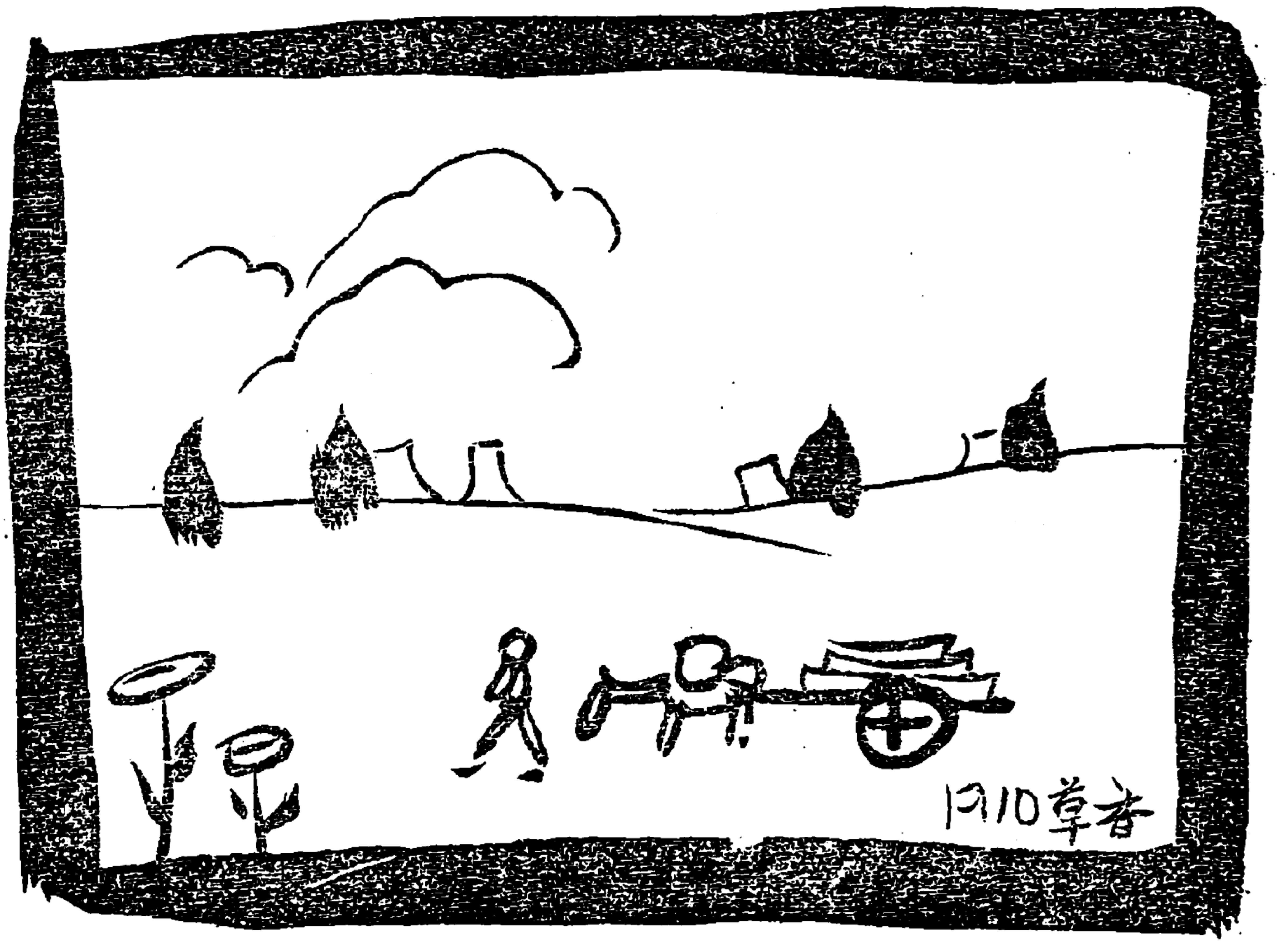
ぐ足もとにおとした。
私には闇、この陰の方が懷かしい。
と胸の底で憚るやうに叫むでみた。

讀み終つて陰の印象が胸に浮ぶ、何處かうまい處があるに相違ない（評）

○まひるの詩

章子

かなしげにうめきて細々と
煙たてつゝあり
發電所の煙筒。
かくていひ知らぬ寂寥は、
空にみてり。
さみしみを破るに力なき
人よ木よ川よ鳥よ
針もつ手はしぶりきて
あやしくも泪ながるる
（廣きつちをゆきゆきて
放浪に命をえてしさみし



まひる　埼玉　大郷草香

みの心は
おもひで多き里にかへり
て
こし方をおもへば、あゝ
たゞ永き永き月日なりき
一時に思はせまり、かへり
きて
時に日にへつれども
永き過去の思出はながくし
て
たまゆらの電光のごと消ず
によしなき
ふかきひらめきの道のあと
よ！
扇骨木垣かなたの庭に
無心の女は白き衣をあらへ
り
洗濯板にする、きぬの音
いひしらぬ音波をおくり來
り
あゝ今あたらしき何かの思

を
わが魂のするどきおもをみよ。
白きほそき風にもつれもつれて。
おこさんとしつゝあり

五月のうたの一つ

裾に冷たき露をはらひて興そゞろ。
木の芽けぶる橋のたもと音もなう
霧はふる、水は流る。
浮出し人影二つ、霧はゆれ低うけぶ
る。
水たゝへし田づら一かく、
冷たき音して人はたちぬ。
かゝる時霧はうすらぐ、今ぞみる
草はおひ花はさかりし、四月の野
あともなく、みづ〳〵し天地の姿は
うつりぬ、あやしきわざ!
杉並木、人影、立すくむ草木は
生氣をおびて、あゝ野に夏は歩を、
運びぬ。
蛙なきしく。なゝし川水は淀まず
中の洲にひゞきつたへて青ぐさは
喜にふるふ。はるか又一つ
田づち鏡はあらはれぬ
きりの朝きりの中よりゆかしき
夏の姿を今ぞみる——

あなたの野の印象は、海の印象ほど、快く映つてこない、見かたは鈍いのではない、かなり注意して緊張した心持にはなつてゐるやうだけれど、何處かまだ印象が能く映つてこない(評)

○淋しき時

播磨　千代子

我が最もさびしき時——
そは朝なり
萬象のしばしの沈默より醒むるとき
溫き光線を得んとあへぐ瞬間よ
このとき我は靄の中に
呼吸してありし賑しさを思ふ
あゝ——あゝ我は
今恐ある賑を味ふ
首を垂れて靄の中をゆるく歩みつゝ
——
幾度か透せども物なく
我がおづる光線もなし
我が息をのみきゝつゝ行く靄の中へ
さはれ——
惡魔の息の一度來て
この靄のはるゝとき
我がこの甘き若き心より覺むるを思
ふ
靜かに胸に手をあてて
光に遠きをよろこぶ

これと同じやうな心境を描いた散文詩の方も見た勿論歌として此方が好い、散文詩の方も決して惡くはないが今は此方を發表して置く方が宜い(評)

○鸚哥

朝　明　野

忍男は白銀の翅を、ひら〳〵と動し
て、若葉の蔭をそつと、書齋の玻璃
窓から——と、緋覆輪のシネラリヤ
が、歡樂の抱擁に、長い〳〵接吻が
夏の日はまだ永い。

葡萄色の窓掛の後に鸚哥が居た。
綠の裳重げに垂れて、靜かに搖ぐ空
氣を、押へ着る樣に啼いた。のが、
まるで呪の響と、破れた胸へ沁み込
んで來る。

妾は不意に窓掛を引いて
籠を抱いたまゝ、泣倒れた。

技巧が邪魔をしてゐる(評)

○日は澱む

石川　むらさき女

あゝ日は澱むまひる野の一刻、
新綠の木立より胸そゝる若葉の香
煙れる淡き日にまつはりて
暫し立なやみ又打ふるふ………、

限りなき歡樂と高調なる音樂に、
醉ひしれしかの瞳……太陽よ。
危げなる表情にみる〳〵うるみて、
明に見いでしあゝ暈の輪よ。

さら〳〵と走りゆく青むぎの、
さゞめきしばしとだえて、
あな濕りたる土の香ぞ、靜寂の
夢のさ中に襲ひきぬ。

かゝる時、音なき悲歌のなげかひに
そゝけしかみをかきあげて
より所なきこの魂の住家もとむと、
さすらひし……われ旅人よ、
こゝこそげにやわが魂の、
いこふを容るゝところなれ、
あゝ、あゝ澱める光のうちを、
よろこびに踊りゆく我魂を見よ……

相應に言ひこなす技倆はありながら、何うして此んなに感興が乏しいのであらう、頭腦のぼんやりしてゐる時に讀むとなほのこと印象がない(評)

○赤き信號燈

安房　美都穗

遠く末かすむ砂濱、
微白う死の雲は西に流れぬ。
陸軟風に綠き松の葉はゆれ
悲哀にみてる汀行く黑き鳥
官能をなぶる哀れなる聲、
心の奥に鼠の斑點つけられぬ。

綠くどよめる四月の海――
陸軟風にゆるゝともなく
死して悲しく西のはてに白く殘れり
そが綠き感觸の薄明り――

綠く死せる海に黑く船は死せり、
波は永劫に死して悲しみは滿てり。
斯くても猶ほ期せる『動』の力はひそ
めり。

古き古き追憶にふけりつゝある
荒れなむとする前の崇嚴なる有樣。

スル、スル、スル、と

赤き標燈は磯丘に昇りぬ。
海に行く人の命を掌に握れる光。

＊　＊　＊　＊

嗚呼遠き沖の方に悲しき
白き浪は今立つならむ。
早く〳〵碇によれよ、
沖行く船は來り泊れよ――。
かく囁きつゝ赤き標燈は
星見えぬ空に海を守れり。

暗い海邊の丘の上の赤いシグナルと云ふやうな目新しい材料を歌つてみようとするのは、何れ新しい方面の人に相違ない(評)

○紅の印象

麻布　美耶

色なき花に色を見ぬ
女性の誇り覺えしよ
稚氣未だ去りやらぬに
紅ゐ觸れし一刹那
心臓は烈しく亂れ
胸燃ゆる思ひ
靈は驚きに慄え
身内の熱てとぐ〳〵
頰にのぼれり
あゝ燃ゆる眼をふたぎて
暫し思ふ淡き愁ひの
冷かに胸を流るゝ
其の恥かしき美しき
くれなゐの印象よ

評は諸嬢に任す(評)

○かげ

札幌　安達葩女

濃ひみどり葉の眠いやうなうるほひ
てんもりと茂つた下
倉庫の白壁に私の影をうつして立つ
てゐる。
ぽつとして。
蒼ざめた月の光よ――
にほひもない追懷に咽んでるやうな
悲しい汝の光に私の影が又悲しう
うつつてゐる。
その暗い蔭には
私の愁はしい心の象がうづくまつて
ゐる。

庭

夕日は沈む
空はだん〳〵暗くなる
ぞろ〳〵と人間の足音がきこえる。
私は甘い花の香を嗅ぎ
ふと甘い昔を思ひ出して
たゞ氣ぬけしたやうにぼんやりと立
つてゐる。
何處かで何かいうてゐるらしい。

かげの方が表白が上手だ　(評)

○默した女

霞子

罌粟の咲いて居る花壇のわきに顏の
青ざめた女が袂をかんで、ぢつと何

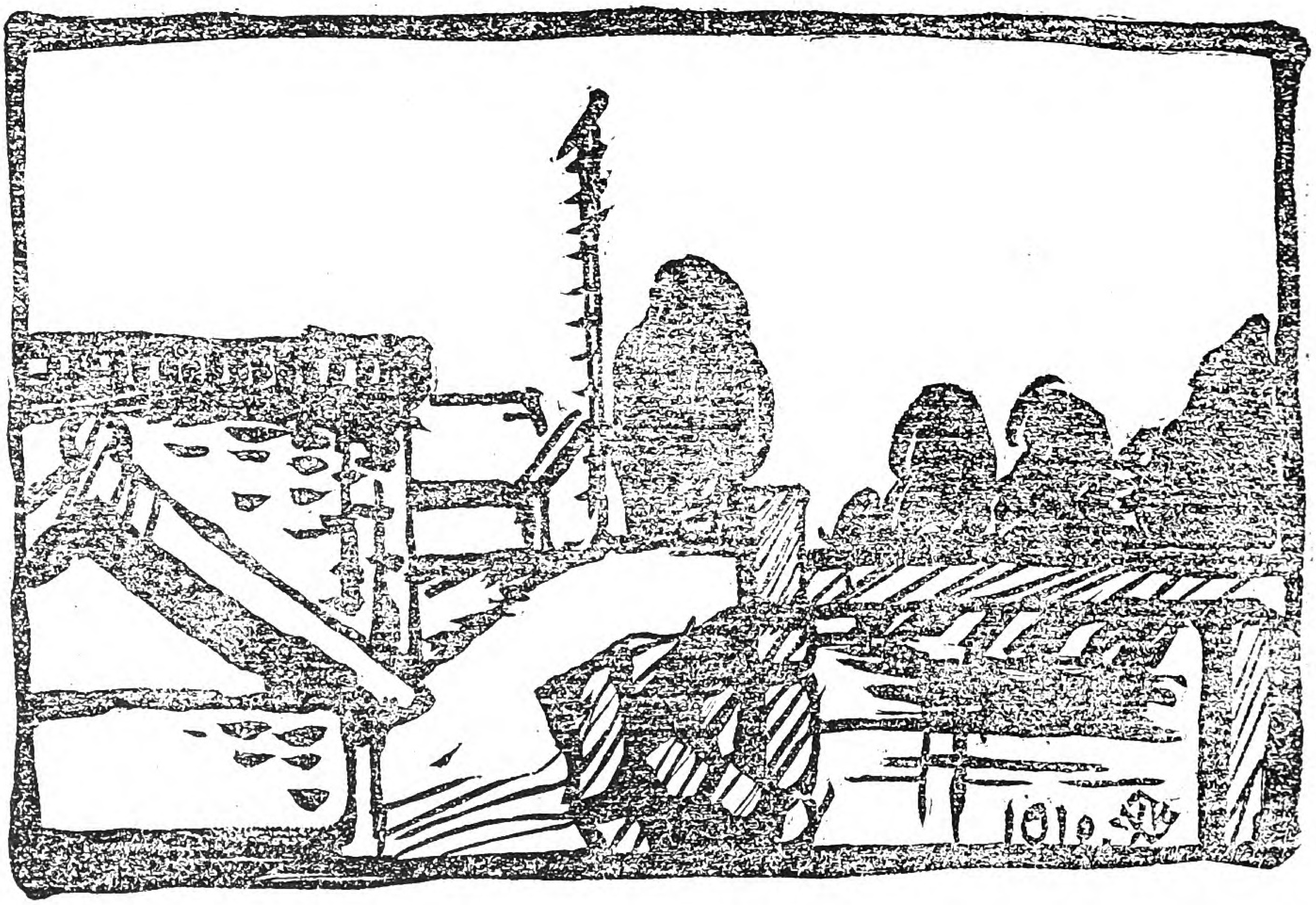
か考がへて居る、しほらしい姿、
「何うしたのなに考がへてるの」と聞いて見たけれど女は默したまゝ、ぬすむやうに私を見た。
嫉ましい樣な悲しい樣な其まなざし、血の氣の失せた口びるをかすかにふるはして氣味わるく笑つた、冷めたい笑み嘲りの、
あゝ忘れられない其顏が、
女はいつまでもみうできもしない、只茫然と立つて居る、ひら〳〵と足許にひなげしの散つて居るのも知らぬやうに。

優しいだけに餘りに單純だ(評)

○あまだれ

名古屋　岸つぎ子

ボタリ……ボタリ……



川沿の町　矢名

心の負傷にしみる
雨のおと
點滴の冷たきうれひ。
けたゝましい
絹を裂樣な叫びが聞える。
ピーチッ、チッ……
と、赤土の泥の中に
破れた翼をひたして藻掻いて居る小鳥の影が眼に浮ぶ
ボタリ……ボタリ……
心の底から攪き亂すやうな
力のある音
靜かに身體がふるへる。
烈しい叫びが、あゝあの突通つた聲が絲のやうに細つていく……
小鳥は
小鳥はどうしたらう……？

表現が適切でない、強て人を釣込まうとする力はあつても自ら動いて居る力が弱いからであらう(評)

新詩句

○嫌らしい蝶萎れた花を吸つてゐる　常陸　木村那賀子

○私は生きられるまで生きたくない　同

二つとも佳、殊に萎えた花を吸ふ蝶をいやらしいと一喝したのは女性の心から出た言葉であらう、次の生きられるまで生きたくないのは少し説明で、興味はあつても、それほど感じない。

○運命だわと俛首れた頸は白かつた　麻布　葉がくれ

○下駄から足を下したら土は冷たい　美濃　篠田とみ

原作には「無意識に」と最初に置いてあつた、無意識には分つてゐるから無い方が宜い、勿論此句の價値は其無意識の境を上手に捉へた處にあるのだから、無意識にと斷つて了ふと却つて句の價値を下げる。

○美しい花、匂ひには倦いた　麻布　美耶

突飛なやうで何處か面白い、美しい花——だけれど——と云ふやうな聯想を入れて考へてみると面白い句になるでせう。

○かまはない、行かう、行かう、凡てを捨てゝ　土佐　桃の花

○何時の頃よりだらう胸に影をさしたのは　紫水

原作「頃よりか胸に淡い陰影を止めた」とあつた。

○春が暮れたので家出した娘が戻つて來た　備中　小見山春子

餘り輪廓を説明しすぎて、内容がない、これは一つの事實だ、感情ではない、春が暮れたといふ處に作者は其腕前を見せたつもりだらうけれど、わざとらしい。

○思ひ切り叫びたい、あの空に　大阪　植村艶子

○此憂を封じて土にうづめたい　備中　篠原繁子

○私の寂しい顔ばかり見てゐる男　新潟　吉田ひな子

着眼はよい、原作「うら寂しい、私の顔——」とあつた。

○強い雨、君の言葉が聞取れない　靜岡　さち子

○ポツと上氣した、人聲に胸が騷いで　わかな子

○あゝ！戀が夕の雲だつた　和泉　金田よし子

氣取りすぎてやり損ひの氣味がある。

○森に圍まれた澤の寂しい鳥　香菫子

原作「薄暗い森の中の澤に寂しく鳥が啼いた」は少し長すぎる。

○灰色の雲、廣い水に浮いてゐる　大阪　露草

原作「白い雲、青い水に——」とあつた。

○あれあれ黒い雲が逃げてゆく　京都　香野子

原作「逃げてゆくもの」とあつたのはをかしい。

○危ないッ、そこの大きな穴がお前には見えないのか　小樽　倉田芳枝

○免れたい〳〵苦悶の鎖を切つて　黒澤とよ子

○月光が零れて小笹が顫えた　仙臺　秋保靜子

○淋しい町だ灰色の壁が長く續いて　金澤　文子

○鐵橋は霧に包まれた、汽車が通る　埴生　醉花

○月が出たらしい薄い明り　大阪　やす子

○聲に醉ふ？姿に醉ふ？人に醉ふ？　東郊女

○狹くなるのも心、廣くなるのも心　同

○着物を裁つ日、外では鳥の聲　夢の子



散文

編輯局選

○武藏野より（天賞）

長曾我部　菊子

若い女詩人を乘せた舟は、目醒るばかり鮮な六月の水面を、舞踏でもする樣に樂しげに降つていつた、その川は武藏野を流れて都會に入る荒川であつた。

水際の柔かくつて崩れやすい土を掩ふた夏草の上から水上にかけて、ゆらゆらとゆるい調子に陽炎が燃えてゐる。

春の頃だつたらこの川の綠色の兩岸に紅い優しい櫻草の花がちらちらと笑顏を見せるのだが、今はもう靑々と肥えた葉ばかりとなつた。舟から覗いてみると、水底は明い光が夢の樣に沈んでいきいきしたコバルトの色がふくまつてゐる、まア美しい水!!!

何といふ光明な自然…………女詩人は黑い眼にいつぱいの憧憬を充てて、ぱつと見開いて、そして、新鮮き綠の風のゆらぎと、心地よき草葉の香氣をふくんだ空氣とに心がかるくゆらめいて、詩をうたふべき情調を、ゆくりなく、實にゆくりなく得た時、おもはず莞爾と笑つた。

その舟はまだ木の香の殘つてゐるやうな新しい傳馬舟であつた、乘合の若人たちは、舟旅の興に循、白い泡をふし酒なみなみと盃にそそいであくまでも醉はうとしてゐる。おお！　その熱げなる耳朶よ。

わきのぼる滿面の血汐の色を女詩人ははればれと氣持よく眺めた。夏なんだもの。醉ふべき歌ふべき熱すべき六月なんだもの…………。

舟は…………しづかに水面を辷るやうにくだつてゆく右へ左へ、幾度か煉瓦造の、高くそびゆる工場があらはれて、そして後になつてゆく。

歌うたふ人の心のやうに輕快に搖れながら水鳥のやう

に憂なく舟はくだつてゆく。水から見ゆる樹立は、全く、枝をはりきつて、深緑の火焔は緑の土地から碧の空をさしてもえ上らうとしてゐる。其の深緑の蔭に、またもや工場があらはれて、そのによつきりと三本づつ立つた大煙突は、むくむくと「生」あるやうな煤煙を吐き出してゐる。煤煙は、黒い凄い蛇腹をうねらせてのびてのびて、擴つてゆく。

工場が退つてゆくとふたゝび林＝長い林となつた。林はしかも、榛の林であつた。幾千本といふ若々しい木は肩を擦り合して、希望を青い葉に輝かせて、力ある六月の太陽にてらされて、踴躍してゐる。木下には緑草の氈が敷かれてゐる。その緑の氈の上………水に近くて、枝の少い人象をしてゐる木の下………そこに若い畫家が居た。いちはやく、みとめて、女詩人の胸は慟悸打つた。美しき畫家!!。程よく畫架を据えつけて、手にパレットをもつて、しきりと前面＝榛の林を畫いてゐる。それにそのうしろに、矢張廿三四のすらりとした畫家か、何れ藝術家らしい若い人か、和服で、ステッキを、倒れさうにもつて、恍惚と、木の幹にもたれたまま、うしろから眺めてゐるのだ。二人の顔は、男ながら嫌味なき程美しい。肩は圓く見える。

舟は………しづかにすべつて、林を呼びかけるやうに、少し搖れながら水涯に近くなつた。

女詩人は危ないほど舟べりにすりよつて、つくづくと醉ひ心地に、林をながめ、水をながめ、畫家をながめ、一瞥の人をながめて、ぐつと涙ぐんでゐる。

ああ、夏よ。

ああ、水よ、草よ。緑よ、戀よ、繪よ。

舟は、それでも、無情に辷つてくだる。惜しいと思ふ林も、男も見えなくなつてしまつた、人の聲、器械の音、車のわだち、ものさわがしいどよめきの、千住の大橋に近づいていつた。

眼を射るやうな刺戟的の文字はないが、ゆるやかに描いでゐる女性の情緒は確に認めます、新しく云はうとして少し苦んだあとがあります、此の苦しみを多く味うて、早く樂に描寫の出來る境地に進んでもらひたい、第一段階として――（評）

○最後の祝福（地賞）

鳥取　むらさき

「お母様がお呼びで御座います」と云はれて座敷に行くと、弟はもう白の衣服に學校通の黒い袴をつけてお伽噺、教科書などの入つた、ブックを肩から斜に少さい足を草鞋、脚袢で固めて、遠き黄泉への一人旅に出づべくすつかり仕度されてあつた。みるからに涙含まれて「孝さん！」とその手を握つてみた、もしや、もしその手に暖い血が通つてはゐぬかとの、よしない望

をもつて「よく顔をみておやり、もう〳〵地に入るんだよ」一息を引きとつてから氣ぬけしたやうになつてゐる母はぢつと亡き子の顔をみてゐたが、新しい悲しみは更に湧くように唇を痙攣させて、泣聲をかみしめた叔父が白紙をもつて入つて來て
「あゝすつかり出來たなー」と大きな目に涙をためてぢつとみたが「これね、時さん」と白紙を私に渡して「茶袋を縫ふのだから、小さい字で、澤山南無阿彌陀佛と書いて下さい、ぴつしりつめてね」と言つて行つた、渡された白紙に、ともすれば涙のおちて墨のちるのを、一字〳〵に悲しい思をこめてすきまもなき程書きつくせば、母と叔母は傍から袋に縫つては茶をつめる「昨夜孝が湯に行くのを大變いやがつて入浴つてゐると早く、早く云つたつけが、その夜一夜の縁だつたのだもの蟲が知らしたんですわね」「早く死ぬとてかやさしい子でしたにねえ」などと悲しい言葉お二人の間にかはされる、最後の一枚をかきをへて少しのあきまに「この次には丈夫に生れていらつしやい」と書いた、母は私もと筆を取つて「一世限りと云ふ親子でも次の世でもお前は私の子だよ」と書いた、叔母はちらとみて「でもね姉樣他に子供もあるんですし、餘り考へて體でもこはした日には、あれ程親孝行な子だつたのですもの浮ばれませんよ」と云つてそつと目をふいた。

恐らく事實でせう、哀音惻々として人を動かす(評)

○かの磯この里（入賞）

章子

「あの山の櫻が月の晩に散る處をみたい」と私は西の方の突出た岬を見守りました、誰も答へては下さらぬ。夕の闇は濃淡なく覆うて仕舞ました。

私の胸は哀別のうたをうたうてをります。ぢつと、砂地につゝたつた儘、涙に悲しき思のすべてを、さゝやきふくめてゐるので厶い升、吾思のすべてを、今宵涙に抱かせて暗い沖に葬むらうと決したので。

丘を行く人の影はくろくこゞみがちに、皆一日を、行つまつた疲れた心を抱いて、廣やかの天を仰ぐ瞳も限なき海にあそばん魂も、さながら失つた樣に、家といふ小さなものを、ひたすら慕うてゆく……あゝ

新らしい木の香のする白い家と、遠い過去を語る樣な黒い家の、何れも、私になつかしいが、あゝ小さな磯の家には戸がたてられて仕舞ました。

橋のもと一すぢのさをに白布が、夕風にはら〳〵とゆれて居ります、のこし忘れたのでせう。私の魂は暗い悲しみを抱いて、あの白い布と、もつれもつれて嘆いてをります。今宵天地の總ての私の感情に矢のやうに、ふりそゝいでをるので厶います。

「雨が降つてきてよ」と街路で囁いた小學生徒の聲を耳にしてから、一時間もたつたらう。漸く音が聞こえ

てきた。朝なので雨がふつても天地は明るい。私は机に頰づえをついて、又かの濱の五月の雨の朝を考へながら、行春の花の割合に少ない青々した庭をみつめた。ポチポチと、たまに大きなのがこぼれるのであらう、尺あまりに伸びた菊の葉、いつの頃よりか芽ばえた紅葉の葉がゆるい調子で折々振動する、と又ツブ〳〵ツブと數葉が一處にせわしく顫える時もある。

自分の心はこうした時に最も沈靜であると思つた。たて廻らした、かなめ垣の尖が大分伸びて、すき透る様な橙紅色である。なつかしい、若々しい色なるが故に。今に鋏を入れにくるのであらうが、あのまゝおいといてくれゝばいゝが。

雨の數はふえてきた、臺所からプーンと、たつくり（魚）をこがす香ばしいにほひが、濕つた外氣へ流れてゐる。井戸の鐵なはをくる音が快くひゞいてくる。

私のみる世界はいつも色と香と、音樂である。

色と香と音樂の世界が目新しく出てゐます（評）

【秀逸】

○小さな着物

宮城縣　眞野圓葉

私は自分の所有品を荷造りする爲に机の抽出しを開けた、其處にはこぼれ梅を松葉の模樣のついた小箱がある、これを置いて行くのも惜しいと思ひ乍ら蓋を取つた、中には人形の着物が入つてゐる、紅の勝つた友禪縮緬の被布もある長襦袢もある、皆丈けが一寸五分位の可愛いのである、私は有りつ丈の物を掌にのせて今更の如く眺め入つた、古い記憶を呼び起こす此衣は母上が日當りのいゝ座敷に針箱を持つて來て小さい人形に着せるべく私の爲に拵らへて下すつたのである、私はいつも側に居て此小さい衣を縫ふ母上の手を見乍ら桃から生れた桃太郎を幾度も〳〵歌つた、歌ひ飽きると「母さん私どこから生れて來たの」と必ず聞いたもので其時母上は「寒い日に私は川へお洗濯に行きました、そしたら向ふから大きいふくべが流れて來ました、母さんはそれを拾つて歸り父樣と二人で開けて見たらお前が中から出たんですよ」といつもかう聞かして下すつた、此問答は度々くりかへされてあつたから私は其當時眞實に自分はふくべに入つて流れて來たんだと思つてゐた、だからお友達にも「私はふくべ中から生れたのよ」なぞと誇りかに聞かせたものであつた、母上が、愛と情とをこめて丹念に拵らへて下すつた美くしい人形の衣見れば涙が胸の底に湧く、幼い昔がなつかしくなる、けどもう私は母上の側を離れねばならぬ、自分が生ひ立つた山川に別れて知らぬ地に行かねばならぬ、これから先どんな事に遇ふだらうか、噫私はこ

れを持つて行きませう、母上の靜かな溫かいお聲を記憶のうちに聞く爲に。

清淨無垢の思想(評)

○わが寫眞帖

四谷　櫻子

雨はまだ止まぬ、習字もあきはてて裁縫は猶更いや、何か面白い本でもないかと一寸戸棚をあけたらすぐ寫眞ブックが目についた、出してみると私のだ、私が生れた時より今年十八に成るまでのがすつかりはさむであるのだ、見てやらうと引出してあける。一番初めには私が二ッの時、母樣にだかつて姉妹が側に立つてゐる。そりたてのたこ入道、兩手で母樣の着物をつかむで足をまくつて威張つて居る、誰でも一目みると吹出してしまふスタイルだ、是が神田の叔父樣の家に麗々とかざつてあるとは閉口してしまつた。母樣は何と思つてこんな物御送りなさつたのだらう。次のは三ッの時、姉樣と手をひかれてこはい顏して立つてゐる。其次は乳母と別れる時とつたので四ッ、是はほんとに可愛らしい紅葉の樣な手を乳母の膝においてゐる、私大好き。夫から五ッの時、姉樣と並むで二人共人形だいてゐる、是が姉樣最後の寫眞、これを寫した翌日、急性の腦膜炎であの世の人となられて是が唯一の遺品となつたのださうだ。次をまくると今度は七ッ、九ッ十一と三ッならむでゐる、何れもお下げにして全身、みんな可愛いゝ。其次は十二の時、是はほんとにほんとにいゝ子だ、御稚兒に結つて大きな前ざし、友禪ちりめんの扇の模樣の着物きて、ほんとにふるひつきたい樣、次は十五の時、袴をはいてやぶにらみで大きらひ、見るのも胸がわるく成る。夫から十六、思ひきり前髮出したマガレットに巾廣のリボン、是は一寸いゝ、次は去年卒業の時ので御召の着物に立矢の字、はじめて外景で寫したて髮は桃割。一番今の顏によくにてゐる樣だ。次は今年の御正月でまるで今までとは見ちがへる樣、高島田にべつかうの花かんざし藤紫のぼかし模樣のはでな振袖紋付にあの厚板の丸帶、頸からかけた金ぐさりに、手に房のついた扇子をもつて、まあ我ながら大きくなつた事「たこ坊主がこんなに成つたんだもの我々の年をとるのも無理はない」と此間御祖父樣がつく〴〵さうふつしやつたつけ。まあ此先どんなに變つてどんな姿がこのブックにはさまれる事だらう?と思ふと何だか世の中が樂しい樣な、恐ろしい樣な氣がして成らぬ。

一寸いゝが一寸いゝ(評)

○顏の印象

A

和泉　金田代志子

淡白い月に照らされて自分は淋しい街を行く。

あちらからも一人の若い女の方が來た。しよんぼりといかにも淋しさうに――。行き違ふた――。煙草屋の街燈が赤いインキの瓶の樣に薄く光つて居る其の下で。

年の頃は十八九、白い顏の――美しい姿の――ふわ／＼とした絹のハンカチで襟足を包んで、手には赤い花束を持つて居た。

自分は振向いて見た――彼の女も振返つて見た。

目と目が見合ふ――共に俯首いて又歩む――。

彼の人は何故淋しいのだらう、何故自分の樣にしよんぼりと氣ぬけのした樣な歩きをして居るのだらう――？あの美しい姿して。

やつぱし自分と同じ樣な思ひだらうか。

自分は又振向いて見た――彼の女は辻を右へとそれて去つて了ふた。白い顏の――美しい姿の――何處となしに淋しみを持つて居る彼の女が――。

B

ぼーうとした夕暗が山の端へたなびいた時、村はづれの橋の上で一人の若い少女と行き違ふた。

そして自分は何時か彼の人と逢ふた事がある樣に思つた。長い――睫――懷かしいひとみ――引きしまつた唇――其のほとりの二つの小さいほくろ淋しげな白い面――何時、何處でと云ふ事は忘れて了ふたが何時か逢ふたときも、やつぱし、あの小さいほくろや白い淋しげな面やほのかな忘れがたい香油のかほりなどで、種々な事を思浮かべたのだ。

此麼事を思ひ浮かべて居る間に暗が四邊を包んで來たが自分がやつぱし橋の上で引きしまつた口元のほとりに黑い少さいほくろが二つ並んである彼の白い顏の女を月の前に描いて居た。

Aの方が遙に勝れてゐます、好い藝術品だと思ひました、詩を作る方だけに散文詩としてみても價値があります（評）

○ほうの葉

越後　曉花

食器の觸れ合ふ音、板の間のひゞき、いろ／＼な物音が混雜して日沒のくりやの繁忙を表現して居る、爐の前にしやがんだ竹やは何か一つかみ火の中へ投じた、パッ／＼と一しきり燃え盛るとまた衰へて了つた、ああ落潮と厨の隅で私の胸に叫んだ。

「みえさんお皿持つて來て頂戴な」

「青滋？のの」

姉樣はだまつてうなづいた、十枚數へて持つて行くとにつこりして上から一枚づゝ取つて玉子燒をおもりなすつた。

火はトロ／＼と鍋の尻をなめつゝ床しい香りを發して居る、ほうの葉がもえて居た、…………竹はほうの葉許りつかんでまたくべた、パッ／＼と燃え立つた、後

には豊かな香りが散亂する、あゝなつかしい香りよ、私は醉ふやうに思ふた、何とはなしに此匂ひを幼い頃から好きだつた。

「醉ふやうな匂ひね竹、およしよ」

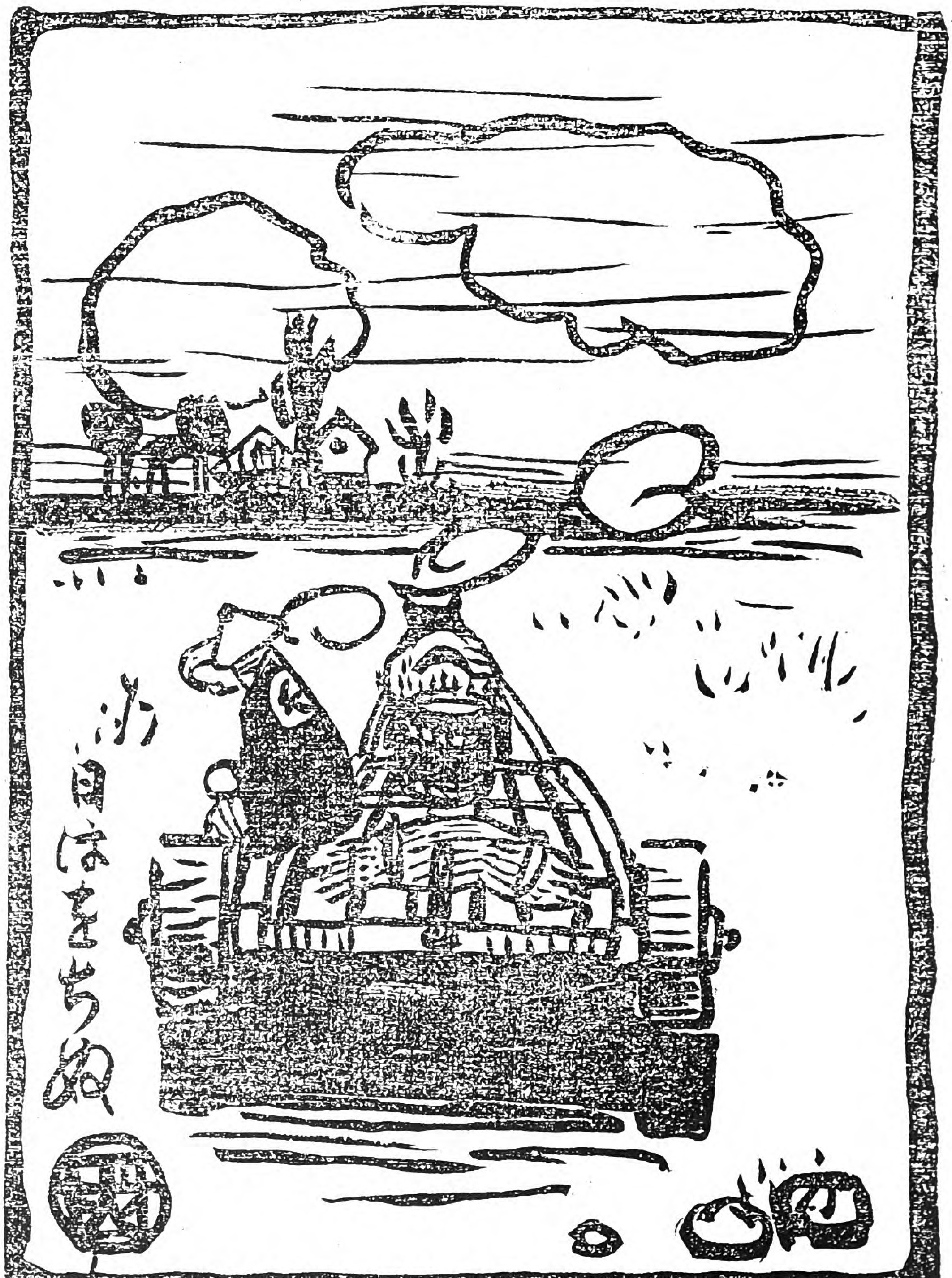
姉樣はお嫌ひ、私は心行くまで醉ふと眼をつぶつた、ふと忘れて居た幼時のことごとの追懷を頻りとせまられて胸はやすらかではない、ああはがゆい〱

ほうの葉を焚く匂ひとは珍しい材料でした(評)

○沈みゆく魂

霞子

あゝ冷えてゆく〱若かき血潮　一日〱に沈みゆく魂の嘆き、こうして〱私は奈何なつて終ふだらう、髪も亂れるにまかせよう、容色も衰へるにまかせよう、あゝ希望も目的も消え果てた此胸！せめては誰か來て



落日　福岡　田中千代子

裂いてはくれまいか、總ての物は燃え果てゝ冷めたい血潮の流れて居る此胸を、こうして抱いて居るに堪えられない。

青葉がくれに月は淋しい光りを投げて四方は寂として何の音もない、向ふの森でふくろふの陰に響く樣な聲の聞えるばかりだつた彼の夜の私の胸は夢と云はうか、現と云はうか、夢中で父の室から椽に出て無意識に更けゆく空を仰ぎながら茫然とした、あゝ此時私の魂はいづこへ迷うて行つたらう……？

「御兄樣幸枝が一生のお願ひで御座います、何卒ぞかなへて下さいまし」と泪ながら嘆願したけれど、病み疲れた御手に力を込めて、すがつて居る私の手を無情に振り切り「馬鹿奴ッ」と大喝の下にはねられて終つた、あゝ終に誰一人ゆるしてくれなかつたのだ、けれど〳〵それでもまだわづかののぞみを抱いて今日の今迄辿つて來たのも思へば女心のあさはかなさ、今更誰をうらまうすべもない、父にそむき兄にそむいて來た私、あゝ此憂を此悲しみをあゝ誰にあかされよう、此まゝに〳〵冷えゆく血潮沈みゆく魂あゝ荒びゆく心のまゝに…………

處女の聲、何をか疑はむ(評)

○心の傷

麻布　葉がくれの花

一生忘れては嫌よ、屹度、と別れる時は堅く〳〵手を握て仰有た面影はとても忘れることの出來ない深い深い印象に殘つてゐる。——病の爲め赤十字に通ふといつて每朝逢ふ坂の下では屹度俥を下りて坂を上る、苦しくはなくつて、と聞くと莞爾り笑うて、上るとお別れですもの——坂の上の有賀の處でお別れする、私は左りに友は眞直に——振り返つても見えない、立ち歸つて見た友は影は薄かつた。あゝ四年前の夏でした。親友と誓つた友は逝つて此に三年、丁度花の蕾む頃でした。

若い日の希望を抱た友は抱たまゝ開かずに散つた花だ、逝つた人は、現世に執着を殘したか、闇に現に私共の心を招てゐる、昨日も今日も、けれどもせめての慰藉は人の招く面影です。若く華やかに惜まれて逝つた友は確に幸福なんだ、私は獨り取り殘された心地がする。

故なく生きてる私に大なる責任をもつて世に立てと云ふ——。闇に歌つたり光を辿つたりして苦しき望を人に縋て語れば、嘲笑はれる苦しみは中々弱い心の私には苦痛なんです、未來を思ひ現在を考へてはゆかりの色を慕ひ望の苦學に心をよせたのも夏なんだ。

星を數へての微笑ば戀かと誤解され、熱して叫ぶ反語は處女ぢあないと——やがて、我が身の傷手です。影なき人の墓に花をかざせば熱情と云ひ、眞心もつて祈つても花をさゝねば誠とせぬ、神も佛も何處にあらうと思決めて決然と立つた、時は涙も無い世を呪ふ心も無い傷手を負うた心もいま、人の子として立ちませう、あらゆる世の悲慘も殘酷も身一つに引受けて——。紅の帶はもう解かねばならぬ、黒繻子の帶に〆め換へよと云ふ、淋しいけれども時なんだ。

白地の浴衣に淺黄の帶を〆めた友は確に美しかつた美人だつたけれども一度散つた花は色も香も無い、拾ひ集めてもう生は無い、涸た影は形は矢張り駄目だと一人り語つて呟いた。けれども私の周圍は綾なく絲の纏れ纏れてとても解くことのできないまでに亂れて居ります。是非とも切拔ねばならないが世に生く人の運命でせうか、でも弱い心は悲しみが先きに來て、綾なす絲を見たばかりでも只さめ〲と泣きました。此の思ひを潔よく、二つに割つて分ちたら、二人の人に分つたら、少しは樂になりませうに——けれども二つにして與へるものでは無いでせう? 迷てをります、——一つにして胸の奥の底に大切に秘めておけと囁かれましたから——。

あれ今道にころんだ子は立たうとして泣て居ります道のよいのに石につまづいたのでせうか、馳せ出して抱き起さうと思うても出來ませぬ——人に申して抱せました、私は自分から近づくことの出來る世の人に自分から遠ざかつて人に與へて居ります。世に立つには子供から起さねばならないかも知れない、けれどもとても私には出來ない出來ませぬ、諦めました。

眞情から絞り出した聲のやうで、如何にも心境の苦しさが、しみじみと味はれるやうです、包まれたる熱もあるやうです、女らしい一種の執着心と云つたやうなものが附き纏つてゐます、個性のある文字と思ひます(評)

○灸の歸り

美作　星子

津山の妙願寺では名灸があるとの事を人が話して居つたので、自分も病のつらさと好奇心から行つて見たが、何樣多人數で私は百二の番號をもらつた、それで先づ番紙を持つて、寺内に入つた、灸座はしてもらつたが自分として多くの人の前ではどうしても身に火を付ける事をようしなかつた、墨だけ付けてもらつてすぐ寺を出で、歸路に向つた、歸りの四ッ角の所まで歸ると右の角の帳所の中から、しきりと私の顏を見つめてゐるのに氣がついた、近よる程自分にも過去が思ひ浮かんで來た、其人とは自分は淺からず交りをしてゐたもののの、或る事情のため目下は全く絶交してゐる其人を

見る毎に自分はこはいと云ふかいじらしいと云ふか。實に云ひ様のない思ひがする、自分は其時他見があつたために顔を合せなかつた、否自分として其勇氣も無かつたのだ、雨も降つてゐないに雨傘をさして下へ向いてやうやく其前を通つた、其人の前を通つた時はどんな思ひをしてゐたか、夢中であつた、それから自分は後をも見ず歸つたが、人言にこはい物程見たいとやら、歸るとすぐ窓に寄りて見れば、其人もまた此方を見つめてゐる、きつと私の通る時も今の様に必ず私を見つめてをつたに違ひない、定めし不人情者と思つたか、無情の者と思はれたか、馬鹿な奴と思はれたか、いづれにしてもよく思はれてはゐないが其人がもしそう思うてをつたら其人こそ實に罪な人である、自分は面を合せない事も交りをせない事もないが、何分或人が或者のためにいじらしくてたまらないから、自分が頭を下げるはおろか、面を合す事すらせないのだ、自分はそんなつまらない事を繰返しくり返して思つてゐたが、人の氣はいのするのでふり向つて見たら、友人の埋木さんであつた。Hさん灸をして貰つたのと云ふので、自分はすぐ墨を付けてもらつてる事を思ひ出して、其所を御目にかけた、すると友人は非常に笑つた、自分は其笑はれたのが何か他に意味でもあつて笑はれてゐるらしく思はれた。

文學にも囚はれて居らぬ、世間にも囚はれて居らぬ、眞の生れたまゝの田舍のお孃さん(評)

○春

牛込　平塚白百合

いつか土がじめ〳〵うるほひもつて、草の芽がやはらかに芝生の間に模様を織り初めた。たんぽゝがさく菫が微笑する。夢のやうな白い斷雲が動搖しだす。戸山の原にも春は來た。青草にねそべつて銃をかまへた兵士の頭の上をこして蝶が二つもつれながら芝生の花に消えた。

美しい指ねー、櫻草つむ手をとめて一人が云つた。マアこんな手が、と爪の紅い指をちよつと廣ろげて日にすかすやうにしたが、おごれのなぞぢやなくつて?ホホヽヽとはなやかに笑つた。喜の充滿した聲だ。

* * *

誰か私に赤い透通るやうな玉をくだすつた。また一人青い美しい玉をにぎらせた。もう一人白い玉を持つて來た。二つの玉より美しくない。私は見たばかりでやつぱり二つの美しい玉をにぎつてゐる。向ふではとれ〳〵とさしつける。私はいやではないけれど手が出せない。とどうしたはづみか二つの玉が掌から落ちてしまつた。玉は二つともくだけて何にものこらない。白い玉が玲瓏とかゞやき出した。春の夜の夢である。

ちよつと氣の利いたものといふに過ぎません(評)

○姉妹

美濃　葛の葉

姉と妹は佇んだ、ずつと青葉が茂つてる楓の下に、妹の下髪にはリボンが長く〳〵垂れて居る金鶏が時々ぉつむをふる毎に皎々と太陽にうつる、姉は桃割に白の胡蝶の根がけをかけて、やはり金色する揚羽蝶の簪をさして居る、楓のしげみにむかうをすかす事は出來ない、若芽は梅も櫻も交つてる、一しほをくれの色、時々かん高い女の笑ひ聲がもれて來る、男の聲も空氣をゆるがせてはひゞいて來る、妹はあつちへ行かうといふ、姉は向うでお酒でも呑んでるんだからと口迄出たのをぢつとこらへて、こゝが涼しくつていいといふ立つた姉、石にしやがんだ姉、二人はにつこりした、不意に青葉の奥から、變調な亂聲で、淺くともの換唄がそれときかれたからである、青葉の奥でもいよう、あはゝはと笑ひ聲がいつ迄も空氣をゆるがせた。

飄逸（評）



湯上り　紀伊　粽田みつ子

○御奉仕の夜を懷ふ

信濃　優梨子

初夏らしい夕風の吹く椽の柱に寄つて、ぼんやりと暮れようとする庭を眺めました。

うつすりと出た八日の月に、垣根の卯づきが仄白く見えます。卯の花！私はわけも無く此花が懷しくて堪りません。

あたりの色が濃く暗くなるにつれて、くつきりと抜け出た樣に美しく見えるあの花を、昵と見詰て居ますと、屹度私の胸には、彼の××館の離れ――お薨れ遊ばした小松宮殿下に御奉仕しました其夜の事が、淡い夢の樣に、ぼーつと浮びます。

もう何年になるのでせう。露樣も私も未だ前髪を切り下げて居たのは覺えて居ますけれども…………。

御宴會場の廣間からドッと萬歲の聲が起る、私達は敷石の片側に列んでお出迎ひして居ますと、殿下は靜かに離れのお控へ所へとお退場遊ばしました。

露樣がお煙草盆を差上げて居る間に、太田樣の久江お姉樣は、ふつくりとお薄茶を立てて下さいました。そして黑塗の天目臺に載せて私に渡しながら、

「天目臺が高う御座いますから、お氣をつけてネ」と仰有いました。私の胸は小さく踊りました。

南のお廊下をすーつと行つて、曲ると、腰高なお障子が一ぱいに明いて居て、床しい燭臺の灯影に、ぱつと庭が明るくなつて居ました。

一寸高い敷居を下の足から這入つて、昵と俯向いたまゝ靜かに進め參らせました。

蘭麝の薫りがゆるく漂つて居るお居間を出ると、私はほつとしました。そして南のお廊下へ來ますと、久江お姉樣が凝と立つて被在いました。

「お姉樣何うして被在いますの？」と私が長いお振袖に摺り合ふ程側へ寄り添ひますと、

「あれ、あの卯の花が綺麗ぢや無くて？」とずつと向ふの、折戸を指して被仰いました。

闇の中にくつきりと白く見えた其花！私は只無心に眺めて居ましたけれども、それが小さい胸に深く刻まれたのでせう、斯うして今も朧ながら思ひ出されます。

幾度懷ひ出しても好い思出です(評)

○小さな人

麻布　美耶

暖かい春の日を脊に受けて、春ちやんと、靜ちやんと淸ちやんと、可愛い小さな人が三人集つて箱庭を造つてゐる。春ちやんは八つ、去年お父樣のお葬ひの時、見送り人達に涙を催ほさしめたいぢらしい面影は、今でも目に見えるやうだ。目のくりくりした子で、少し首を左へ出るのが癖、ツヒ此間から私にも思出の多い

母校の生徒になつてゐる。清ちやは七ツ、お化粧上手のお母樣を持つてゐる、赤いけれど癖のない髮を肩まで垂れて、何時でも淡すり紅を頰にさして、お人形のやうな可愛い顏をしてゐる、時色の帶をだらりと結んだ後ろ姿の可愛いつたら、通る人が皆ふりむいて行く位ゐ「私のお父樣はもう死んぢやつたの」無心の言葉には聞く者の胸を痛ましめる。靜ちやんは六ツ、目鼻立の凛々しい、細面の色白く、何處となく品格あつて貴公子然とした美しい兒、紫の帶をきちんと花結びに下げて、桃から生れた桃太郎――と歌ひながら躍つてゐる。

春ちやんは、此處等の小さい人々の內では、年長者なので、皆春ちやんの指圖に從つてゐる「早く土を持つて來とくれ」と云ふと、後の二人は一生懸命になつて、小さい手に土を運んでゐるけれど、箱はなか〳〵一ぱいになりさうもないので、春ちやんも交つて運び初めた、三人の手は泥だらけになつて、箱の中には土が滿された、六つの小さい手は思ひ〳〵に動いてゐる、池を掘つたり、小さな橋をかけたり、釣してゐる人形を其上にかしてまらせたり、お山のてつぺんにお宮を据ゑたり、なか〳〵忙しい、處へ、ひろめや〳〵諸共に國家の爲にひろむべし、ホイチニ――坊つちやん失敬孃ちやん失敬、何時でも元氣の好いひろめ屋が來たと思つたら、三人とも一せいと駈出した。暫く門の處で紙切を貰つて喜んで遊んでゐた、小さな人達はもう歸つてくるか〳〵と思つてゐる內に、何時か聲は消えて了つた。箱庭には農夫が鍬を振上げたまゝ、ひつくりかへつてたり、石燈籠が猿を枕に晝寢をしてゐるやら、鶴が半分土に埋れてもがいてゐるやら、それらのものは皆空しく小さな人々の歸りを待つてゐる。

（終の一節あつて、此文に生氣が添ふた（評））

○夜霧

萩花

室の中は外界から何物にか包まれてる樣にこうむーつと生暖かい。細い血管の現れた、小さい同じ柔かな嬰兒の樣な手は今迄讀んでた――其癖記憶に殘てる所は一もない――本のクリーム色の表紙の上にだらりと惰る相に投げ出されてる。凡ての官能は其働きを中止した。茫々として門に出た！。霧だ！其白い朦々とした中に割合近く只茫と十六夜の月が。其白い朦々とした自然の煙は凡ての家をフヽワリ包んでた。輪廓のない電燈の光さへ一際解らなくなる。又ぼんやり見えて來た。遙か彼方から幻の光が五つか六つゆら〳〵とゆれて來る。音はない、休んだ官能は此周圍と同じ樣な有樣で――何の感想も起らぬ。隣の油屋からよくしやべる老婆の聲――先に使た婆やだな――是丈の事を漸く疲れた頭に浮べ出したと、ガラ〳〵……と音がしてパーツの霧の中に一筋さした。「○樣でござりますか！」

其六十といふのに肉のたつぷりした、十人の子を產んだといふ——其癖些の倦怠の見えぬ女が出て來た。笑ひもせぬ、物もいはぬ——只老婆の後につゞいた。「夢が——うきよーか浮よ——がゆーめーかッヽン」と頭尾から枯れた樣な男の聲——よー太夫＝だらしなく霧の中に流れてむ。つゝーと下駄の音もせずに私共の橫をぬけて前に出た女がある、窺く樣に見たら餅菓子屋の娘だつた——白い手拭がだらりと手籠からさがつてる、十七位の二人づれ——湯の香が霧の中に混つて漂つた。みる〳〵二人の輪廓もぼんやり墨繪の樣に彼方に消えてゆく。ドーン　ドヾドンパチッパチ……　夜間演習だなと思つた。と、カーキ色の影が右方左方にかけるのが蜃氣樓の樣に目にうつゝた。ふと晝みた含らんだ櫻の蕾の事も思ひ出した、と、其白い煙に厭されて見えぬ程づゝ開いてゆく桃色の花がうつゝた——。菜の花の香が白い摑み所のない此夜霧の中に一線をひいた樣にプーンと匂つてきた。惰眠して居た官能が急にチク〳〵痛み出してきた。

殆ど距離の解らぬ影が二ッ三ッ動いてる。無意識だ、きつい印象も入らぬ、強いキスも入らぬ、〳〵此時此周圍と同じ樣な茫とした思想を抱いてる若い男と並んで步いて見たい。しやべつてもいゝ。沈默でもいゝ。男の影と女の影とが繪の樣に消えてゆくのがいゝ。そして此霧のある一夜をどてとも解らず步いてやがて男は煙となつて消えてもいゝ。未來——過去——そんな意識のない只々茫と菜の花の香を呼吸して夢の樣に生きたる少し汗ばつた生暖かい手の男と步いてみたい、瞬間でいゝ——。……肉つきのいゝ婆やの袖口の所にしづかりつかまつてた。呼吸して居たのか如何かとあやぶんだ。霧はまだ晴れぬ。(ツルテントントン戀に——浮ー名ーがッヽッン……)絃のひゞきに影と煙と燈と香と胸がゆれるのかと思つた——。

前半を、もう少し引締めてほしかつた(評)

○祭の夜

水口鈴蘭

笛—太皷—皷—斯う云つた樣な物の音色が混合に成つて人の氣を唆り立てて居る、然して人と云ふ人—其は榮え輝いてる、人も榮にまぎるゝ人も—總べての人を屋內から誘ひ出してお宮へ〳〵と引きつけ樣として居る！私も引き付けられて來て終つた—母も—兄も—、晝さへ暗いとてよりつく人も無いのに………今宵はお宮の內はさて置き神森の木下にまで人が蠢めいて居る!!提灯の光と白熱瓦斯の光とが相和して、宛がら今宵のおぼろの月と其の光を競ふかの樣、白〳〵砂煙がたつてゝ社殿の方は判然見えない、是だけの塵の舞つてるのを晝見たら迚も我慢が出來まいものを……　……と自分等の衞生心も割合薄弱な者だつたと可笑しく成つて來た、お宮の中は人と人とで埋づまつてる、男—女そんな事は皆忘れつちまつて前の人に身をよせかけ手をかけて曳山の中の囃手を見やうともがいてる！そこには美しく着飾つた男女の囃手が居るのだ—誰一

人笛の音の曲節變化に耳を傾ける者は無い、鮮かに打つ鼓の音に忍をこらす人も無い、麻裃着て混雜の中を仕舞してる人が有つたり男が女の裝をしたりなんかして狂ひ廻つてる—かと思ふと神輿の前で醉顔に熱い息を吐き乍ら何だか御祈りしてる人も有る、是等さわぐ人を小暗い木の下で見てる程面白い事は無い、自分は今人を離れて此處に居る！芳烈な香水の香をさせて藝者らしいのが千鳥足で通る—斯んな暗い所に女の私が居るので驚いたらしくぴくと身を動かせて急ぎ足に行つて終ふ、囃手は益々調子付いて來たが身を上に横に—大きく搖り動かして囃してるのが薄絹ごしに見える、やゝ寺の鐘が今十一時を告げたのを知らぬ者の樣だ否夜の明るのも知らずに囃し狂ずるのだ、砂煙ごしにポーと浮いた樣に見えてた社殿の提灯が今一つぽそーと消えた—瞬間私の小さい心はぞつとして再び其處を見る勇氣が無かつた、何故か知らんが……人を避けて漸く家に歸る—囃の音は潮の如く寄せては引き、引きては我が耳に寄せて來る、吁斯くて此の祭の夜も提灯の光の失せると共に過ぎて明日と云ふ働く可き日に成るのだ。

文章も田舍の祭らしい（評）



豆腐屋さん　新潟　吉田とし子

○ある夜

徳島市　山内知世子

古磨さんは凝乎と目をつぶつて、少し頭を傾げて耳を澄して居らつしやる。古磨さんの阿父さんは火鉢に寄り掛つて俯向いて何か考へて居られる。お妹の千代さんは座敷の眞中で、小さな里香ちゃんの御機嫌を取つて、面白さうに遊んで居る。妾の讀む廻りなので、此の月の女子文壇の和歌欄を開けて、秀逸の歌を三度宛繰り返して讀んでゆく。と、不意にバタリ……妾が讀んで居る本の上へ落ちたものがある。古磨さんも妾もはッと吃驚して、何であらうかと見ると、思はず慄然とした。（あれ百足が……あゝ妾の方へ這うて來るわ、早く殺して頂戴な！）と古磨さんは慄ひ乍ら恁う云つた。妾は素早く火箸をとつて來て、滅多矢鱈に百足を突

いた。が妙に火箸は空しく疊に穴を明ける許りで、仕損じ續け……百足ははや二尺も進んだ。（あれ逃げる、早く〳〵）と古賀さんは金切聲で云ふ。妾は途方にくれた。

（その火箸で押へたら可い）と阿父さんが落付いた聲で敎へて下さつた。成る程と妾は直ぐ樣、一旦押へて置いて、暫らくして挿みあげた。（それこの火の上へ落しなされ）と火鉢を前へ出して下さつた。で被仰る通りすると、軈て青白い焰をあげて暫らくの間燃えた。それが消えると、實に何とも云へぬ可厭な臭氣が鼻を衝いた。私は窓の障子を開けて憐れな死骸を外へ投げ捨てた。空には丸い月が仄ゝ朧の中に包まれて微かな光を投げて居た。元の座に戻ると皆はほつと息を吐いて、互に顏を見合つた。

（恐かつた事ねえ……）と古賀さんが慄ひた聲で云つた。其の顏は眞蒼になつて居た。（百足が落つたのは初めて？）と訊くと、（えゝ初めてよ……眞個にあれ程厭らしい物は無い）と云つて妾の前の雜誌を取りあげた。（妾が些し讀みますわ）と今度は小說欄を、何時に無い高い透きとほつた聲で讀んで行つた。

阿父さんはこれを聞いて居らつしたが、間もなくコクリ〳〵とお眠りなさつて居らつしやる。里香ちやんも遊び疲れたと見えて千代さんの膝を枕にして微かな寢息をたてて居る。千代さんは眠む相な目を開いて姉さんの讀むのを聞いて居る。家のぐるりの田には逝く春の夜を、哀しさうに蛙が泣きしきつて居る。

辯のない文章です（評）

○山に上りて

備中　篠原繁子

眞晝の日光に目醒むる樣な紅の躑躅山を、私は何のあてもなく上つて居る、木の枝を折つて杖についてのろり〳〵と、次第に胸が迫つて來る、ぽか〳〵と背中が太陽に暖められて嬉しいと思つて居ると、其がだん〳〵と刺される樣になつて、果てはジカ〳〵と火傷をする樣に感ずる、あ、あつい、背を反對に向けて暫し休んだ、又向きなほつて上つて行く、足は疲れて一歩〳〵と後すざりする樣になつて來た、呼吸は苦しくなるばかり、けれど私は此美しい躑躅山に唯一人、何處迄も〳〵も乾ききつた淸らかな空氣を吸うて居るのだと思へば、貴い物でもつかんだ樣で云ひ知れぬ嬉しい心地がする

ふと頭を上げると、一間許り上に大きな岩がつゝ立つて居る、よい物を見つけたと勢よく其に馳けつけた

左手に岩を壓へ右手にぽん〳〵と胸を打つて息をのんだ、漸く胸の治まると同時に沖の遙かなるに驚いた

限りない希望の光に滿ちた樣な春の海はのたり〳〵として眠るがやうな數多の小島をとりまいて居る、其淡霞んだ島の頭は又一段と濃く白くぼーとして恰ど薄絹の冠をかついで居るやうだ、其より遙かにうすく雲の樣に長引いて見ゆるのは四國島、おゝ今、今頃あの四國島には若草もゆる花なる道を年幼き娘たちの、甲斐絹の手甲脚袢に、すげ笠かつぎ片手に杖つき片手にはリリン〳〵と鈴振りならす順禮姿で、幾むれも幾むれも通つて居るのであらう。あれあそこの常夜燈の所には白鳥が舞うて居る、山々の木々は皆我劣らじと弱々しい若葉を出し競うて春の天地に色どつて居る、見下す田圃は一面青みどりの麥に黃金の菜種紅の蓮花田の打ち交つて美はしき事、錦とも毛氈とも例へられない、我等世界の眠る夜天女來りて描かれし活畫にてはあるまいかとあらぬ像想の浮んで來る、ふとなまぬるい風が頰をかすめて去つたのに心づくとすぐ眼の前には白い小蝶が舞うて居る、二つもつれようて私の周圍をまひ廻る、あゝ何と美しい事、何と嬉しい事、何と長閑な事私は知らず〳〵間に醉つて了つた、恍惚と細目勝ちになつて岩にもたれて居ると、遙かに遠くチツル〳〵と雲雀の聲の耳に這入つた、頭を上げて大空を眺めると何も見あたらない、尙見つめて居ると漸く見當つた、青空に高く一點の黑點をおした樣、稍動いて居るかの樣に見ゆる、暫時つて居たが、俄にイーツシツーと輕く身を投げたやう東の

麥畑に下りた、あたりは又元の靜けさに返つて了つた、私は又うつとりとなつた。

何處からともなく云ひ知れぬよい香が漂うて來る、暖かに柔らかく白く遠く微かにゆら〱夢の樣になつた。

　自然の描寫はわが散文欄に毎も乏し、此文勝れずと雖、乏しき中の花なり(評)

○七分間

本郷　黑田汀花

ほとんど滿員の電車は今、午前七時二十五分、砲兵工廠の前を通つて居る。私の前に腰をかけて居た二十一二の銀杏に結つた下町風の女が「どうしてこつちの方にはこう坂が多いのでせう」と、隣りに居た五十二三の櫛卷にした母らしい人にたづねた。櫛卷は昔を偲ばせる赤ら顏の陽氣そうな眼を一寸上げて「山の手だからさ」とそつけなく答へた。女は物足りなさそうな顏をした。隣に居たパナマの紳士はフフンと云つた樣に、一寸笑つて粗髯をひねつた。櫛卷と銀杏の間にエプロンをかけてキチンと座つて居た六ツ位の女の子が、其子供らしくない顏貌を體ごとクルリと後向になつて、窓から外を見て居る。

やゝ大きい聲で櫛卷は云つた。「昔は御前大變だつたんだよ、もつと急なものだから、汗水たらさなきや上れなかつたんだよ」と、たんだよを妙に強く。便利な世の中に生れた人は幸福だと云ふ樣に。皆の視線が一所に集る、「そう」と女は案外弱い返事をして首をのばした。私は四十年昔をいつの間にか、これからそれへと、連想して居た。話がとぎれて「表町」と云ふ車掌の聲と共に電車が止つた。八ツばかりの可愛い○○學校の生徒がはいつてきたら、「まア可愛い一人でよく電車にのれる事」と女は云つた。それで「何處の學校?」ときいてるらしい。

「よく一人でね、八ツ位か知ら」と櫛卷が同じ樣な事を繰り返して、電車が動き出したものだから「さこんどは下りるの」とエプロンの子に云つた。女はメリンスと縮緬珍らしい晝夜帶の間を探つて居る「切符はこつち」と櫛卷はエプロンについてるポケツトから、子供を抱へる樣にして取り出した。子供は無言である。やがて三人は下りた。みんなの眼はまだ離れない。私も三人の後姿を見送つて、またしても想像の翼を廣げた。

○髮

花一輪

毬さんが丸髷で………と云ふ聲がした。

一種眠つた樣な、心地の善くない、濕つた空氣の壓迫を受けて居た講堂は、細い光明を得たかの樣にどよめいた、と思ふと、私の頭の何所かには、直に何ともいへない淋しい氣がむら〱と起つて、皆が我先にと出て行く後姿が、淺ましくてならない。

善く似合ふのね。

まあ奧樣らしくなつてね。

變つたのね。

忙しい中、悲しい中にも、此樣な私語はもれた。今卒業して行く人が、來年來る時は、又此樣な話が皆の間に取交はされて、さも事新しげに、六百の目は其れに注がれて………、また、來年の卒業生もさうなる……たん〲其れが多くなつて、容赦なく女の自由は、或者に奪はれてしまふのだ、わざとらしい多くの目が、其れから其れへと思はれて、忘れやうと務めたが忘れられない。中には、否、多くは、赤い手柄の、大きな髷で來るのが得意らしい、反つて、束髮などで來るのを、罪でも犯かした樣に思つて、仲間はづれになつて居る、そは、むしろ總べての自然がさうして居るのだ。

急に情なくもあり、また地球上の人らしい、その第一歩を踏まんとして居る卒業生、活動せる五年生が、殊更に見てやりたい氣がした、頭を上げると立錐の餘地もない位、束髮の人と見ると多い――、無論髮によつて、ミス、ミセスはわからないが――、何故か、丸髷の人は顏に淋しい所がある、體はやつれて居る、……が、束髮の人は顏が平和で、しかも樣子は活々として居る。それが無上にうれしい。

羽織の紋は、何時か桔梗に變つて、若々しい奧樣は靜かに席についた六

百の人は、注意深い眼で見入つた、あゝ校中一の運動場、彼の氣難かしいK先生を得意のテニスで打破つた、まりさんその人が近き未來は、こんな單純なものであつた…………。

○姉

新潟縣　吉田ふみ子

風が吹くといつては淋しがり、花が散るといつては悲しがる姉様は、又た此頃鳥が鳴くので、もしや私が死ぬのぢやないでせうかなど言つて。詰らん事を氣にして被居るのに、今日も庭に來て鳴いて居る。

庭に面した空氣の流通の好い、部屋に姉様は今臥つて被居る艶の好いお顔櫻色した頰などは、何時しか蒼白い色になつてなんとなく淋しそうなお顔になつてしまつた。姉様のお目の醒ぬ中に、鳥を追うてやらうと思つて針持つ手を止め、靜に庭におり小石を拾つて、櫻の木に居た鳥を目掛けて石を投げた。けれども肝腎の鳥に當たらずして、時ならぬ花の戰場となつた。鳥は又た向ふの土藏の屋根に鳴いて居る。

血

夕日の強く射す春の黃昏、私は欄干に凭りて四邊を見た。眩い光線に目はくらみそうになつた。私はそつと目を瞑つて見たけれど、やつぱり眩ゆいやうだ。此度は兩手を顏に掩うて目を開て見た。指と指の間の血が赤く、美しうなつて見える。十年も昔の少女時代に、やつぱりこうして見た時や。青春燃るが如き想ひを胸に抱き、青葉の野邊に見た時の血の色と、總ては子の親となる私の今の身と少しも色が變らない。私は何故か言知れぬ嬉しさを感じた。此後三十年も經過して、燃ゆる想ひは失せ、顏の艶は何時しか皺と變はり、頭は白髮にならうとも永久に私の此の血の色は變らないであれ。

○晩

深　志

「天のとほきに手をあげて」と歌ひ出すと、もう遠く離れたかの友……なつかしい君。……。とし様と別れて其の淋しさがひしひしと迫るキラキラと青葉の蔭をもれて輝く淋しい夕の星の様な瞳の懐つこい、行かうとすれば「行つちやあ」と云ひそうな悲しげな面ざし。けれども私には「なぜいけないのだらう」と味氣ない思ひ許りしてならなんだ。と云つても私だつて旅情の淋しさがむらむらと起る時其瞳を跳めたら。「もう行きませんよ、いつ迄もいつ迄もこゝにおますよ」と思はず口走る程に思つた。夜な夜な凄い浪の音と稱谿の山に吹き荒ぶ怖ろしい風をきく時に、とし樣はいつも土地なれない私を慰めてくれた。

日は深く沈んで木瓜の花ばかり眞白に際立つて見える此の頃の夕べ、私は、おつとりと眠むつた樣な爽やかなやさしい姿を眺めて、とし樣に見せたらと思ふ若しあの山がなかつたらどんなに踏い晩でもとし樣の家の燈はチンガリと見えそうなもの、屹度その家はある……懐かしい土橋の上に立つた人の影も。……。樣の往によつたまゝ知らずしらず、背のびしてみるけれど、口はもどかしく何か叫きたくなるけれど……。つと前を走る樣に去るなつかしい姿とうるんだ瞳の浮んだ時おびえる樣に危く柱に抱きついて體をさゝへた時はもう姿は隱れて了ふ。自烈つたさがつかりして漸く體のゆるんだ時はもうもう忘れたやうに、あゝ、今一度見えたらと思ふけど迚ても思つてもとても忍び出せない。

○花の風呂

伯耆　新田文子

前の隱居のおぢいさんは今を盛りの櫻園の眞中に、風呂桶をかつがせて、そこでお湯をおわかしなすつた。妾も招かれて參つたのです。妾はまつぱだかになつて、一寸手をつけて見たが、身體まで此の中に入れるのは、もつたいない氣がして、ならん。するとかすかな、弱い弱い風が、花の香氣を傳へて來た。妾の手にせるクラブの醉はしめる樣な、香と一緒になつて、一種の人なづかしい、かほりが、滿ちて來る。妾は、逐うとう思ひ切ひて、身體を月や櫻花の影の中に埋めた。妾の、白い肌が花間を、もれて來る月の青みがかつた光りに照らされて、青白い二ひら三ひら、花びらが溫い身體に散りかゝつて心地よい。



和歌

與謝野晶子選

○（地賞）　伊賀　山村龍子

君戀ふとつげぬ女のわれながらなみしがたかることのことを云ふ

○（人賞）　紀伊　木澤てる子

夏菊の花さく頃の和歌の浦こひしと文にかきませるかな

【佳作】

○　牛込　平塚白百合

わが年をとはるることは黒髮を一すぢづつか拔くに比すべく

○　淡路　加藤菊子

白き風我頬かすめて大空の果なる靑に消え行くものか

○　德島市　山内知世子

紅き貝紫の貝拾ひつゝ思はれ人は渚をあゆむ

○　羽前　あらゝぎ

あゝ五月この夜明けたる故鄕に林檎の花とつばくらを見し

○　伊賀　岡花子

憎氣なる男の多き世かなとも少女ざかりのわれは思ひぬ

○　本鄕　波翠子

紫に土より吹きぬ草の芽は初戀人のまなざしに似て

○　安房　五月女美都穂

黒髮のみだれしまゝに香を焚く我が姿にもあきはてにけるか

○我が胸の血もかれなんと思ふまで君をうらみて泣夜重る
下谷 人の子靜枝

○初夏の風に吹かれて君までば彼の白鳥になるこゝちする
霞子

○消息は強きことのみ書く人も逢へば抱きぬあこがれ人を
長岡 二九子

○地下室の暗きに等し二十二のわれをとらふるいたましき戀
京都 松原きぬ子

○天雲にのりて遠へか行かましと云ふなる人の六尺の髪
愛知縣 佐分華影

○獨り身の與作の翁あはれなりすげみし口に尺八を吹く
鳥取市 米澤敏子

○初夏やあや羽の鳥のむれだちてわれをみちびくよき夢の島
豐後 吉良靜子

○華やかに戀しき日ありしみぐと雨ふる如く戀ふる日もある
東京 田代房尾子

○春の木は若く芽をふき雨戀へり少女は何を欲しとし云ふや
大阪市 山内溪子

○春さめにぬるゝかいどういとしくてともしびかかげ妹と見る
福島市 齋藤田鶴子

○夕ぐれは殊になつかし百年も千とせも逢はぬ心地のすれば
飛驒 知代子

○紅椿ほろゝと散りぬ人の子は古戀びとと向ひてありぬ
飛驒 眞砂子

○いにしへの王昭君の思ひして思はぬ人に嫁ぎゆく人
大阪 紫愛子

○たらちねの墓場に散りし紅椿奪ひあひつゝほゝづきにする
日本橋 三上たま子

○故里の春をしのべとたゞ一つ文の上より出たる菫
セレベス島 山田鯉登子

○妹が白梅封じ送り來し文のことばもなつかしき哉
神戸 あけぼの

○螢とぶ小川の岸にたゝずめばゆきにし友のなつかしきかな
熊本縣 堀川雪子

○おぼろげに霧に漕ぎゆく船の如歡樂の日はすだれゆくかな
丹波 保子

○紅梅の色濃き花をめでつゝもびんのほつれをかきあげる朝
北見 ひぐらし子

○　千葉縣　石井とね子
貝拾ふ童の姿見えずなり松より出づる夏の夜の月
○　徳島市　あぢさい
行く春をかなしといひて彼の君はさめ〴〵泣きぬかつやはらかく
○　千葉縣　飯高まさ子
ひとりねのこのさびしかる曉にまたこそ見ゆれうき人の夢
○　信州　平林敏子
戀人に捨てられし故御佛に百の悲しみうたへ申さく
○　横濱　滿貴子
淋しさに春の雨降る夕暮をわれ十三の琴の柱たつる
○　牛込　絹子
日は暮れぬ桃の名所の市川の姉が家より文のとどきぬ
○　肥前　桃香
君在す東の空仰ぎつゝ春の日永をなすこともなし
○　三重縣　田中しん子
畑も田も大河となりぬ雨の日の麥の間を小さき魚とぶ
○　三重縣　小宮はま子
夏の夜の河原に出でて物思ふわが背にまろき月はのぼりぬ
○　大阪市　鹿島綾子
相並び鏡にうつる君と我ゆく春の日の胸の淋き
○　徳島市　香川露子
薄白き月の映れる池の中その片すみの花あやめかな
○　群馬縣　宮澤みのえ
谷川の淸き流の其の中に靑葉したゝる山ぞうつれる
○　靜岡縣　壽賀
戀しつゝ三年をへたる我胸を君に語らでとほく別れぬ
○　徳島縣　中村多喜野
ふらんすの少女窓より町を見る教會裏のひるがほの花
○　三島　設子
くれなゐの花びらぬらし雨に咲くさつきのあふひうつくしきかな
○　根室　きぬ女
流れ行く水に投たる文殻を見つめて悲し昔おもへば
○　徳島市　山内房子
三階のわが室はよろし罅りたる硝子の窓にほとゝぎすなく
○　伊豫　山口たけ子
何となうものたらぬ子は漂浪のうらさびしさもなつかしとする
○　麴町　小川岩子
駒引きて歸る夏野の夕立のまばらに過ぎぬ楢に檜に
○　相模　颯島　白百合子
土橋まで君を送りて佇めば靜にかすむ春の里かな
○　麻布　美耶
十八の悲しき少女此頃は人の眼のみをたゞ恐れ居ぬ
○　麴町　佐藤いつ子
君を見て笑まむとしける一時を何物か來てわが目を蔽ひぬ
○　長野市　早田とよ子
我が信濃五月の風は若々と花林檎吹く病む君を吹く
○　麻布　藥がくれ
うかること何も云はずにすなほにも友は交しぬ囚はれけると
○　松江　淸き花
蛙なく聲をききつゝ磯濱の松の下ゆく夜はこころよし
○　土佐　嶺女
わが家の紫の藤匂ふころ君まちながらこまどりをきく
○　奈良縣　中富よしみ
あざまずや蜜ある花を漁りゆく胡蝶ににたる若き心を
○　遠江　富永雪子
五月雨は煙りの如くそぼふりてうす紫のかきつばた咲く
○　能登　且田曉星
夜となりぬ大火事色をあらためて二千の軒を照らすわびしさ
○　磐城　繁子
風かをる春の夕を我一人枯木に倚りてもの思ひする
○　徳島縣　吉田紫花
若人に路を問はれてたゆたひし其たまゆらにつみし花びら

○　山口　都志子

人戀ふる涙は赤しおとろへをなげく涙は白くながれむ

○　呉市　碓井呉竹

ゆく春や高き島田に結びたるとなりの君は笑みて門ゆく

○　上澁谷　國分常子

歌にそふうす黄のばらの花の謎解き得ぬなどとたはむれしかな

○　奈良　花香

誰そやこの花散る里の風流男に心の花をつみて來せしは

○　佐世保　草村つゆ子

大空の星にも似たるおん瞳今日も忘れず悲しむと云へ

○　茨城　二葉

なでしこの花をば君にまゐらせしわが脈膊の音の高さよ

○　西茨城　田村波津子

雨あがり青葉の露にぬれつゝも琴の師とひぬ川ぞひのみち

○　小樽　清田芳枝

つきずしも涙ながるる顔あげて君を見る時君は嘲ける

○　伊豫　玉椿

わりなくも少女心は朝日ともあるはかがやき夕日と沈む

○　水口　鈴蘭

すてられしわれと悟りしたまゆらの叫びに似たる時鳥かな

○　大阪　高山米子

そよ風や眠れる稚兒の柔肌にそと觸れて見る初夏の宵

○　宮城縣　眞野國葉

そよ風のいとこゝろよきあぜの道蛙なくなり右に左に

○　下野　てう子

初夏やすゞしう咲けるあぢさゐの垣の中なる家をし思ふ

○　長崎　永井圭子

姿見に顔を寫して取る櫛に力はなくて涙ながるゝ

○　大阪　畋野夢垣

われと吾越し方をしもしるすべく筆濕しけるつらき思ひよ

○　三島　村瀨常月

懸崖にあやうく立ちて千丈のおぐらき谷を望む心地す

○　大阪　小泉貞子

眉清き姉は嫁ぎぬ江のみなみ藤むらさきにしづるゝ家に

○　新潟　井上貞子

うつら〱鶯聞けば未だしらぬ神の御園の若葉ふむ如

○　本郷　吾妻白百合

白楊の長くなびける影ふみて何をつぶやくくろ髪の子は

○　沼津　稻野ふく子

おばしまに七夕の夜の二ツ星眺めて在れば風そよと吹く

○　茨城縣　越ケ谷秋水子

如何にして我が胸君にかたらんと初戀の子はこの頃まどふ

○　名古屋　松井通子

佛前にものをおもひてぬかづきぬ香の煙よ心おかるゝ

○　丹後　香菫子

我れ故に生きもし死にもすると云ふ人をよろこび髪すきて待つ

○　沼津　鳴田若綠

山蔭に夕日は落ぬなつかしき君住むしまはほのに浮びて

○　信濃　K子

み名の上に戀しと書きし紙の反古姉にひろはれ寒き思ひす

○　越中　谷花野

われ飽きて庭に出だせる鉢植の花にそぼ降る行く春の雨

○　大阪　小百合

紅裏の袂なびかし水をくむをとめ美くし梨子の花ちる

○　麻布　樋口朝子

水姫とかたりし夢の忘られず藤こと〱く池の面にたる

○　淺草　渡邊繁子

馬にして朝すぎゆく小木曾路の張線橋に春の雨ふる

○　岡山縣　光本古美野

かなしさの集まれる身も夢にのみさびしく笑ふ事たへぬかな

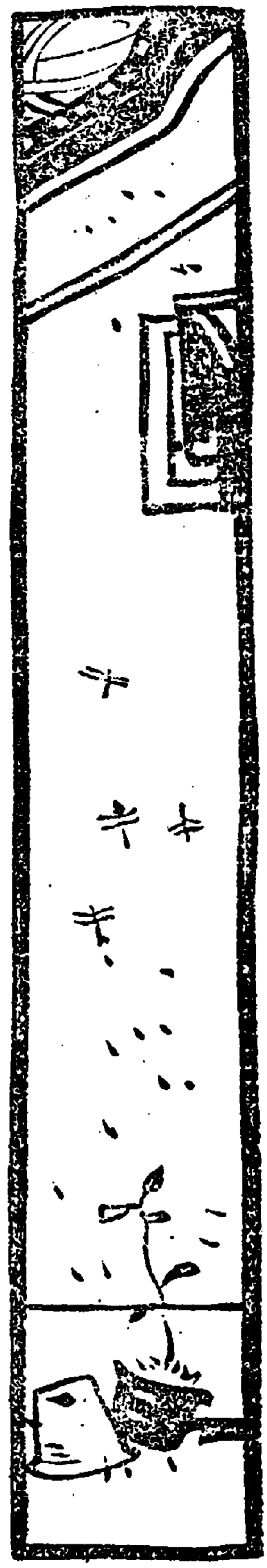
○　山城　清子

伊豆少女鍬あらひ居る門川の河骨の花月して白し

○　常陸　せい子
青柳十町つゞく河づつみ大師參りの人通る朝
○　坂本みき
青柳の下をながるゝいさゝ川流れの末は君がすむ里
○　豐後　スミス
初夏の精かとばかり此朝の白菖蒲こそ神々しけれ
○　伊豆　加藤爲子
云ひしらぬうき身横たへたゞひとり白帆にうすき落日をみる
○　淺草　藤波
君とわれ流しやりたる笹舟の竝びて往きぬ花の下水
○　鳥取市　三淺ます
一つ家のわが家の前の草に居て冷たき秋の月を見るかな
○　大阪　露草
欄干によりつゝ君を思ふかな白波よする涼しき夕
○　麻布　古賀梅子
くろ髪のいとあさましく亂れける夏の朝を白薔薇の咲く
○　岡山縣　入江曉花子
中形の袂吹かせて納涼する少女に似たる夕顔の花
○　伯耆　足立春子
此世てふ迷ひの夢を醒ましては悲しき事を告げ給ふ君
○　三重縣　まさ子
夏のこし大濱見れば黑ずみてややはやちめく風の吹くかな
○　播摩　みどり
故鄉の櫻さく野にたゝずみてかはたれ時を懷しむかな
○　紫水
五月雨に一人奏づる想夫戀あはれ悲しきわが想夫戀
○　大阪　福井まさご
誰なるや一と日〳〵と若き世を退りゆく身とわれを嘲むは
○　加賀　淡月
春くれば片山影のわが家もさくら花さくうぐひすの啼く
○　香川縣　藤村木の間
山櫻ましろく咲ける御寺より夕ぐれつくるかねの音する
○　富山縣　山本紫菫
此の夕物思ひつゝ磯ゆけば主まち顔に小舟たゞよふ
○　和泉　金田富美子
五月雨の竹にふるなる音のする夕淋しく君を思ひぬ
○　肥前　山田やゑ
花散りて鶯老びぬ梅のかぐのにほひもやがてきくべく
○　肥前城　みよ
ふるさとの春の野見れば花戀ひて飛びかふ蝶のいともやさしき
○　肥前　北村コウ
青葉する夕の道に鐘の音聞けばはるけき空の偲ばゆ
○　肥前　中島松枝
春雨のそぼふる夕窓によりうせにし母を偲びてぞ泣く
○　石川　むらさき女
柵とりしあとの心におしよせてまづ來し人は君にぞありける
○　陸前　浮草子
絶間なき蛙の聲をきゝながらやすらかに寢る夏の夜の家
○　三重縣　山崎初子
思はじと泣かじとかたく誓ひたる胸に涙すこの不覺人
○　兵庫　柳川幹野
我が心君は知れりや灰色の雲にも似たるかなしみのある
○　磐城　半谷きい子
春の夜のものの一つと見てすぎぬ場末の町の戸の色がらす
○　秋田縣　小萩たかは
この涙いつ止む時の有るらむとそを思ひつゝ花の散る見る
○　豐後　冬花生
病める子のたまははるぐ〵ふるさとの夜の湖の音を戀ひて行く
○　能登　金森夢垣
悶ましき心を抱き岩かげにうつらうつらと春の海見る
○　能登　近江加登惠
戀の歌多く抱きてただに泣く女の性とおぼし給へな

○　麹町　こと子
渦巻の重ね模様のにほはしき帶する故に人多く見る
○　出雲　しらぎく
さびしさの胸おそひくる雨の日も嬉しくなりぬ兄の文ゆゑ
○　岡山　片岡葱
むらさきのしやがの花さく藪の軒機織る人にもの云ひに行く
○　大久保　葉山靜枝
ものなべて青き五月の日の影ぞすが〳〵しけれ君と戸による
○　備中　篠原繁子
我が胸はかの六月の空の如かなしき雲に閉ざされて泣く
○　埼玉　たつ子
なつかしとそと手取られうつむきぬなでしこの花美くしき道
○　京都市　町田てる子
君の來ず海に向ひて石投ぐるはしたなきことするがわびしさ
○　越後　枯尾花
さばかりの烈しき人も日のいますまひるおそれて君と相見ず
○　信濃　丸山美根子
妹と朝の野べにむらさきの菫つみつゝものをこそおもへ
○　下總　飯塚源子
春の日の花爛漫と咲くごとき心は君にほろぼされける
○　長野縣　津金春枝子
妹にそれと語らずぬば玉の夜に見つる夢はづかしきゆめ
○　神戸　百合香
我が兄も悲しき人となりましぬ歌多く書き夜多く泣く
○　新潟市　吉田ふみ子
一人とひ一人答へてものをするこのみなし子も經をおぼえぬ
○　靜岡市　鈴木武子
文七日見ぬ人おもひ春の日のあたたかき日を寒く感じぬ
○　新潟縣　高橋やす子
春雨の煙るが中に紅の帶して君はかへりゆくかな
○　島根縣　森千代子

石刻む槌のひゞきはわが胸の觸るればいたむ傷につたはる
○　札幌　中原登美
うらうらと春の夕日は君が住む桃散る里に沈まんとする
○　札幌　安達菀女
あけぼのの狹霧の中に百合さきぬわれ待つ磯の君に行く道
○　丹後　若菜女
いにしへを今に傳ふる歌人の大伴卿の如き戀人
○　麻布　名和内孝子
君に會ひ別れて一人ゆく如くさびしき色に空の曇れる
○　下谷　谷口桂子
何とちく悲しき日には故郷の醜き少女汝のこひしき
○　桔梗子
わが胸に穴を穿ちて棲める蛇が君をしこひて醉ひ狂ふかも
○　東京　月草
ふり袖の舞姫づれの夕闇の街の角をば曲るゆく春
○　大阪市　山内花雪
そののとの我れの心は霧の夜の月の如かり星の如かり
○　近江　田中たね子
姉はなく母はあはれに老いましぬ黒馬のみがたのもしき家
○　野州　小林ぶん子
美しき振袖長き京の人二人來ましぬわが伯母の家
○　京都市　要司村福子
大空を一人あふぎていと遠き君おもふ時ほとゝぎす啼く
○　備前　佐久間林子
濃紫少女の袖をみる毎に昔の夏の偲ばるゝわれ
○　奈良　またゝく星
名なし草數多咲きけり青き葉のしげみがくれに淡き色して
○　下關市　山田くに子
放ち牛小屋に入れつつ夕容を君草に居る國を思ひぬ
○　常陸　木村那賀子
夕暮の淋しき町を疲れたる少女の行くに似たるアネモネ



日記

横瀬夜雨選

○夢の日（天）

東京　柴井やよ子

――と思つた時は左の手を疊に付けて膝の前にあつた本を見て居た。字は何とあつたか知らない。挿畫は圖案風の黒い流れの上にまる木舟が浮いて黒影の人が六人、手を擧げたり口を開いたりして居た。黒い水は渦卷の樣に蛇行の樣にうね〳〵して居た。水のゆらぎ、人の叫び。

夢だつた。冥想的な此のゆめに感興は漫ろに浮き立つ。此の朝は竈の火の燃えるのまでが面白い。夢の黒い水と此の赤い焔と何だか深秘な意味の有りさうな。けど解らない。私は自分の感受性の鈍いのを悲んだ。恁麼日に限つて裁縫して居ても氣が苛々して、曲らうがくねらうがかまはずずん〳〵縫つちまふ。後で見ると氣に入らないから縫ひ直す。氣がせけて尚拙い。「何うして恁う拙いんだらう」とつひ泣き聲出して母樣にあたると母樣は「氣をぬいて後からおし」なんと仰有ると反つて意地になつてくつくとやる。おしまひに「强情だねえ」と强く云はれるとぼろつと涙がこぼれる。涙がこぼれても自分が惡いと思はない。そして出來上ると一入愉快だ。凡そ私の着物で泪の印しない着物は一枚もない。

其せいとでもあるまいが夕方は頭が重い。横になつて迫り來る夕――靜かでそして氣忙はしい夕を徐かに味つた。いつも夕方は掃除や夕餉の支度で夕を味つてる暇なんかない。ふと自然にかへつて見ると、もう其時は夜になつて居るのだ。ひるから一足飛びに夜なのだ。かうして、その時々の感傷をしみ〴〵味へたらどんなに嬉しいだらう。私は七日ほど病氣になつて見たいと思つた。

個性躍如たり。この君到底平凡化する能はざらむ。柴井やよ子は世を忍ぶかりの名にして固よりかいなでの作家にあらず、去れる山田

くに子にはすでに多く望むべからず、太田きし子も亦然り、邦子は去ること目睫の間にあれど、きし子はまさに三千里外の異境に嫁かんとす。將星すでに落つ、ついで起つ者は新野に王たらん。

○五月三日（地）

土佐　もゝのはな

木といふ木は皆ことごとく生々した淺緑の美しい芽をふいて、家の周圍は青葉若葉に、包まれてしまつた。窓に倚つて昨年の冬から編みかけてまだ仕上らないジヤケットを編む青葉が手にうつッてびつくりする程淡青う美しく見える、無花果の木に張板をたてかけて張物を仕様としてゐると「馬鹿だねちッと空でもみて仕事はおはじめ」ッて曇ッた空を見ながら母様が仰言る、今は曇つてるけれど法經堂の上に黒雲が無いからきつと晴る、と思つたがだまつてやめた。昨夜父様に「雑誌なんか讀んでグズ／＼してゐる間に畑の草でも引くが好い」つて云はれたので、母様は「午からでなければ露があつていけない」つて仰言るのを知らぬ顔して手ぬぐひも被らずはだしで麥畑に出る、きれいに出揃つた穗に露が宿つて遠くからすかしてみると、薄白う煙ぶつてゐる樣で美しい、下葉は大分黄色づいた、初めの中は今日中に此廣い畑を皆してしまつて驚かしてやらうなんて想つてゐたけれど思へば思ふ程、女學校まですんで草引きなんか馬鹿らしくなつて胸はかきむしられる樣になる、これよりは嫌ひでも裁縫がいくらとくだか知れやしない、此樣思ふと何だか此畑中走りまはつてめちや／＼にして皆の怒つたり惜んだりする樣をみて嘲笑つてやりたい樣な變な氣がする日は雲間にかくれたり照つたり、草いきれがムン／＼として頭がツキ／＼し出す、もう我慢がしきれなくなつてたつた四十分でやめた。裁縫しながら補習科へ殘つた友等を想ふ、ロマンチックの政枝樣は十分の休時間を何樣してらつしやるだらう美しい夢みる樣な瞳が浮ぶ。クラシカルな淸樣は？淋しい美人の小梅樣は？夕方きれいに晴れた、桑を摘む、若い芳烈な匂は靜に脉うちつゝ胸に流れて來る、邊が茫と神祕めいた草色に暮れる迄摘むだ。柏木の兄樣を懷ふ、其夕暮を想ふ……「知らぬ景色を誰と語らむ」讃美歌を歌つたが聲が幽れて出なかつた。

たつた一哩の鐵道すら無き國にも才氣潑溂たる女は生れるものだとつく／＼思ふ、この君も字はまづい、手紙を冠つて麥畑へ出るとあつた。風に吹かれたらブワブワしませなんだか。

○染色たづね（人）

大分　原田澪子

暖かい日曜、今日こそ眞の花見日和。お祖父樣でもお誘ひして出掛けようかしら？と思ひ乍ら帳場へ行つて、先づ新聞を讀む。煙草のみに來た吉が、青い大きな手を四拾匁袋に突き込み乍ら、何か面白い事でも載つてますかと云ふ。「いゝえ何にも。私の袴は何時色揚して呉れるの」。「お天氣がようがすから今日ひるから

染めて見ましよう」。所へ鈴木さんの下女が今日はと云つて、白の瓦斯糸を持つて來た。

染色はこれに書いてあるそうですから、何卒御隱居樣へお上げ下さいませ。と云つて一封の手紙を差し出す。茶の間からお出なすつた父樣が、何かまた困らせ事ではないかなあ。と云つて笑つてゐらつしやる。

離れに行くと、お祖父樣は日當りのお椽に出て、昨年から御手入の瓢を磨いて、澤出しに御餘念がない。

鈴木の御隱居樣からでございます。と云つて差し出す。……持參の瓦斯糸狐のなき色に御染め下され度候……とお讀みなさる。ハテナと首傾けて被居したが、みよお苦勞だが鈴木さんへ行つてね、自慢の瓢に美しい澤が出たから圍碁旁々御覽にお出下さいと云つて來



白雲の悲み　新潟　水澤蝶子

てお呉れ。と仰有る。

直にお出下すつて、離れでは早パチ〱と碁石の音お茶の用意をして伺ふ。暫く側に坐つて碁盤を眺めてると、お祖父樣純白の髭を一すごきして、「狐のなき色何ぢやいな」と云つて黒石をパチリ。すかさず御隱居樣も、何氣なしに、「すてんて、てんではないかいな」とパチリ。「ウム左樣か」、お祖父樣が獨ん言なすつたので私は思はず微笑した。お尋ねの事は相すみまして此度は此所を頂きにかゝりませうか。と云つて二目お取りなさる。これはしくじつた。と鈴木の御隱居はピカ〱頭をツルリと一撫で。

狐のなき色、無きか鳴きか、すこんこ紺と大分ぢや鳴くかも知れぬが關東ではキヤンキヤンと鳴く。そりや犬だらうなんて、誰だいそれよりか深さんの兄さんが今日は見えぬが不思議ぢやないか。

【秀逸】

○平凡日記

外山霞子

三日見ぬ間の櫻とは云へ如何に儚ない運命だらうもうあら方散つて終つてとふと庭へ目をやると昨夜かみつぶしてとび石へ投げつけた細いリングが日にてらされてキラリと光つた、今に松が掃除に來て見つけたら又何とか云ふだらうとやにはに立つて庭へ下りた、お前も因果な指輪だワ私もあきらめるからお前もおつきあひおしと池の側まで持つて行くとボチヤンと小さい音を立てゝ身を投げて終つた…ホヽ誰も助ける者はないのよ可愛そうにとう〱私の犧牲になつて終つた、緋鯉がパクリと口を開いて浮いてる花瓣をのんだが何だ馬鹿〱しいと云つた樣にはき出して終つた、午後から妙さんが來る、又必とお琴だらうと思つて居ると豈はからんや「明後日の同級會に私お琴に當つちやつたのよ一寸で宜いから菊水さらつて頂戴な」つて云ふ私も暫く御無沙汰だからと思つたがまさか忘れもしなからうとさらつてやると妙さんいつもになくそこ〱に歸つて行つた、名古屋の叔父樣から小包がつく何か知ら此奈細長い物と母樣のとこへ持つて行つてボッと麻糸をきり二重にも三重にも包んである新聞紙を剝いで淺黄のボール箱を開けると意外！柄に青貝をちりばめた水色の洋傘、何故かサックは別にたゝんであるよりをもどしてサッと開くとふちには胡蝶の散縫ひ、昨日の葉書に「明日あたり小包が着くよ而し東京ッ子には珍らしくもなからうが」とあつたので何せつまらない物だらうと思つて居たら案外だつた、斯うと知つたら今少し洋傘を買ふのを見合せておけば宜かつたと思つた、夜は叔父樣への御禮狀を書くついでに共進會へは行かれそうもないとこぼして上る、ふと氣がつくとはめつけて居た指輪がないので手が淋しい引出から別のを出してはめて見たが常には餘りつり合ないからすぐ納めて終ふ今更短氣は損氣と思つた一體兄樣が彼んな事云ふから惡いのだ近々のうちに代りを返して頂かうと獨ゞぎめしておく。

金か、銀か、兄さんが言つたあんなとつてどんなだらう。も一つ不思議がある星ヶ岡の誌友會にお琴はできませんからと斷つた人が妙子さんになら教へるのもひどい、第二回の會があつたら自分はつゆ草さんの英語芝居と、この君に琴を彈いて戴くとと今からお願ひしておく。

○雨上り

赤坂靜江

夜前の雨は名殘なく晴れて、柔い日の光が雨に洗はれた艶々しい若葉を眩ゆく輝かせる。花壇の倒れたチユーリツプに篠竹添へて遣つて、縁に近く縫ひさしの自分の帶に掛る。父様は朝から偕行社にいらして家の中はひつそりと茶の間の銅壺のたぎる音許りする。褪紅色地に白で大きく芙蓉をぬいた羽二重友染の片側が、青い疊に長く流れたのをうつとり眺めて居ると、お向ひの杉田様で椿盡しを彈き初めた。中庭の開き戸があいて里が雨傘干しに來た。眞盛りの白つゝじの大株に近く擴げた傘のまだ新らしい藍の香が、しつとりした雨上りの景と共に云ひ知らぬ懷しみを誘ふ。

お午過仕上げた帶に火のし掛け終つた時、不斗表玄關で里が高聲に「ハアお孃様お一人でー」と云ふが聞えた、出て見たら從兄の健さんだつた、靴ぬぎながら「叔母様も留守だつて淋しからう」「健さんこそ當にした御飯がはづれて」「ヘン隊にだつて飯位あるからね、昨夕は朝鮮から呉れた鶴の吸物、靜さんなんざなめて見た事も無からう」「厭な事薄くさい鶴の肉なんか」眞先からこれだ二人寄つたら堪らない。帽をぬぎ劍とる間も云ひ合して茶の間に行く。御注文でワツプルを出したら其食べること〳〵叔母様は伊香保に湯治でいゝの、物聞山の杜鵑は今が一番だのと云ひ乍ら遂に皆一人でペロリ、あきれて終つた。今度はピンポンと云ふ。常々負かされて口惜しいから厭と云ふと、別に強ひもせず机の上の寫生帖に何かかき初めた。のぞくと誰かの未來だつて、丸髷の人を先に洋服姿の紳士が後から車走らしてゐる畫だ。人を馬鹿にしてゐる、でも一寸ゆめ二流の眼をかく。まだ何か書いてゐるので見てゐる內右の爪に星を見つけた。「健さん福星よ着物が出來るわ」「何だお母さんの見立た黑木綿の羽織位が關の山さ」「僞よ暮に少尉任官で正服一揃」健様はムムと許りニコ〳〵してゐる。「其から中尉と、大學に入つて參謀になつて」「寄生木の良平みたいな事でも考へてるの」とはぐらかすと「失敬な、コリヤ猛烈だ」と云ふ。何か云ひ返さうとしたらしいが甘く出ないで口モゴ〳〵してゐる。

三時半頃父様お歸り、健さんと卷煙草を縱横に弁べて議論が盛だ。夕食上げるからと止めたがまた來ると云うて重い築城學の本二冊抱へて遂々歸つて終つた。後の靜けさ。父様は檢閲が近いので調べ物に忙しくお部屋に籠られて、一人椽に出て薄紫の桐の花の散るのを數へてゐた。人の來るのも嬉しいけれど歸つて終はれるのが辛らい。お立ちになつてまだ五日しか經たな

い母樣がむやみに戀しくなつた。月はまだ上らない。

その丸髷の詰のわきに Madam Shizue とあつたのでせう。馬鹿にしてますね、まつたく。

○十三の人

あざぶ　美耶

言ひ合せた樣に、前髮を突出させて、私は思つた、肩上のない、若い人は、生々して居る者、いゝ香のする者、はでな着物を好む者、よく笑ひたがる者、そうして、どことなく、圓る味を持つた、溫かそうな、美しい、者だと。時々上手な人に向かはせられて、其の人の前のフダを、ぬいて來るたんび、向うがはの人には、小さいくせにと、言ふ樣に、ニラまれるけれど、味方の人には（ほんとにお上手ねー、私達位にならうものならもう選手だは）、なんて色々ほめられたのは、一番嬉しかつた。かるたはとうとお終ひになつてお茶をいただいてだまつてすみの方で皆さまのお話をきいた。

黒い髮を。マガレットに結つた、可愛らしい顏の方が、私十三までは、時々母樣のおちゝを、のんでよと、仰つたのが妙に私の耳に付いて、其の人は末つ子かしら、其れとも私の樣に、一人つ子なのかしらと、思ひながら、きつと、ミソッ齒だらうと、お口を開くたんび、氣を付けて見たら、白い美しい齒だつたので、安心した、其れは、私が七才まで母樣のおちゝを呑んでたので、皆樣に、よく、今にミソッ齒になるつて、からかはれておちゝを呑むのは七才の時、よしたけれど、十一の秋までは時々母樣のお膝へ馬のりに、のつては、おちゝを、戀ひしがつてよく。笑はれたけど、此の人は十三までだつて、言ふんだもの、私だつて今年十三なんだからまだ。いぢつてたつてよかつたのにと、思ふと、殘りをしい事でも、した樣に思はれて。是れから歸へつて、母樣のお膝へ馬のりに、のつて、ふところを開けて、おちゝを、いぢつたら、何んて言はれるだらうか、笑はれるかしら。怒られるかしら、母樣はきつと、兩手を私の背中の方へ、まはして、だきしめて、幼なかつた時の樣に、キッスして下さるのぢやないかと思ふと、たまらなくなつて、皆樣のとゞめるのも、聞かず、小母樣が、（何にね、美子さんは母樣のおちゝでも、呑たくなつたんでせう）つて、ギヨッとしたけれど、歸へつたら、今、田村樣へ居らしつたと言ふ、がつかりして、燈火のつくまで、ぼんやり火鉢に、あたつてた。

十三の人、十三の時、女の十三がこの通り無邪氣だとすると可愛くも思ふ、けれどタイムは人をして長く童女の境地に留らましめず、一年たつかたゝぬに眞黒々とわれとわが顏へおしろいを塗るのだからばか臭い。

○日曜の一日

赤坂　壽女

化粧もすましひる着に替へてお次の間へ坐つたのが九時半、日曜の朝は實にのびくする。

お嬢樣方はお嬢樣でとやらにてお上の間は大さわぎ八

重子樣がお女中にて私の前掛を取りに入らつしやるやらお氣さんじの勝子樣が表の人にてお兄樣のお帽子をお下げの上から被ぶつてすまして入らしやるかぶ〲のあや子樣はみなさまのショールやらおもちやの金ぐさりをお首から一寸のぞいて實に〲失笑したくなつた、一閑張のお机はひつくり返されて、どうやらお長車になつたらしい。

午後昨夜のお仕事を出す、おくびが半分にて針がぬひてあるゆうべのねむさが思ひやられる。

おはまさんはひわ色ちりめんのおすそ廻しをいぢりながら「どうでしよお巾が七寸にしかたらないそうしてこんなに間違へなさるでしよ」とお小言のとき丁度老女が見えた。おはまさん赤い顏しながら伺ひなさると、「あゝそれはおつまみやからお前巾からゆすつておきやす」とさつさと北のお方へゆかれる。

まあ何んて御けんやくでしよ、けれども何辭さまであらうと今の世はあたりまへ、あゝ勿體ない事云ふたやつぱり女中根生の出る事」とおはまさんは例の通り惡氣がない、今迄だまつて居られたお常さん、「あゝ人生老女となるなかれ」つて三人思はず大笑ひ折柄リンリンとお電話、すぐ立つた。

お納戸のお美代さんの聲にて今日はお子樣方も御一緒におおくでお日永があがりますからお運びに來て下さい。ハイ〲かしこまりました何卒こちらへもおくさん御馳走を。ホヽヽヽと。電話はおしまひ。

私等の樣な無性ものには實に室内電話がありがたい云ふまでもなく今日はお二人が出番ゆゑすぐ立つて水屋へゆかれる、仕にくかつたお召しもやつと出來上つてホツとした。お賄所でトン〲トコトンともうお料理が始まつたらしい、お二人が入らしたらお茶でもいただきましよと仕事を片づけた。

見よ、九重雲ふかきあたりの消息も、やうやくわがとめがらに傳へらる。夕ほしの君は侯爵○○○家の奥にありて、わかき公達の日曜を語り、この君は公爵□□家に仕へて幼き姫だちの朝夕をゑがき來る、をしむらくは筆路共にいまだ暢びず。

○日曜日の朝

台町　夕ほし

けふは目白の寮から、お上の忠樣、義樣、幸樣のお三方がお歸邸遊ばす日、お料理のお冬さんは腕にヨリをかけてお待ちしてゐる。朝から若奥樣は並ならぬ御機嫌で、ダイヤモンドのきらめくお手で、お廊下の硝子戸をバタ〲おはたき遊ばす、餘り御機嫌がよ過ぎても……ね、實際氣がつかへて困るのよ、とは一寸暇をぬすんでお弓さんとの立話し。お食堂のお仕度は如何かと見に行く途中、電話室の鈴が烈しく鳴つた。

は、は、モシ〲どなた樣？あ、忠樣、ホヽ、御めん遊ばせ、御機嫌よう、山田(書生)でございますか、え、まだお表の方は誰も……は七時半までに、承知いたしました、外に御用は、は、恐れ入ります、ではお早くどうぞさよなら。　室を出で直ぐ車夫の常さんに、七時

半迄に、例の電車停留場まで若樣達のお迎へに行くやうさう云ふ。日曜においで遊ばして午後になると、必と、運動シャツにミットをお持ちになつてお末の幸樣が、草(私の名)今何時？とお聞き遊ばす、仕方がないからあやふやに三時半でございますと申し上げると、もう三時なの、と吃驚遊ばして、あゝあと一時間で歸へるのかなあと、さも殘り惜しさうに仰せ遊ばすお聲のいぢらしさ、でも幸樣また日曜にはお出で遊ばされるのでございますもの、一週間位ぢき過ぎて終ひます、「僕あ何故か日曜が大好きさ」とお笑ひ遊ばしたその日曜、どんなに幸樣お喜び遊ばしてらつしやるかと思ふと自分まで嬉しくつてならない、大奥樣も「今日は孫達の來る日ぢやね。おやつに何ぞあるかよ」と若奥樣に仰せ遊ばして大そうな御機嫌。

開け放した十疊の室は春の日あまねきて綠に榮ゆるお庭を大奥樣と若奥樣は睦じく御散歩遊ばしてらつしやる。

侯爵〇〇〇家につかふる人の日記なり、願はくばこの君に清少納言の筆あらしめよ。

○「黑百合」の後に

むらさき

五月三日　ィ便配達で雜誌と繪はがき二、と來る女子文壇の誌友會の寫眞、記事、もう〳〵泣きたくなつた出席の諸孃が樂しい半日の會合の只一瞬時を地方の誌友の淚にかして下さつたる—か、あゝもういやだ、みたくないと思ひしが、二度、三度、五度、くり返しよむだ、繪はがきは舞鶴から。

——それは一枚ぢやない、澤山あるけど、その一枚一枚にも變つた心地が合まつてゐるやうで、手放すに忍びぬ、彼女が生前の事も、わが彼女に對する情緖もよく知つてゐる貴女だからどうぞ私の心持をくんでそこのみは許して下さい」とある少し罪だとは思つたが、yさんが貴方の唯一の人であると同じに、私にとつても忘れ難い友、血をわけた從姉です、水かけ論は好まぬけど二十枚からの寫眞を、貴方一人の專有物にするのは余りのやうに思ふと返事する、しかし餘白に、

貴方の御心もよく知つてるから無理に取り上げようとは云はぬ、複寫させて返すから一月ほど、全部おかし下さい」と書きそえた、yさんと云へば今日の命日なのでふと思ひついて日の傾きかけた頃墓參りする、折からの夕日を受けてもえるやうな、きりしまをしほれた山吹とさしかへながら、臨終の三時間前、咯血して眞白いシャツも、枕も、フランネルの寢衣も、眞赤な牡丹を染め出したやうになつたのを思つた、黑く長い髮の末を結びた濃い空色のリボンにもとんで、赤い模樣が出來てゐた、白い藤の花が墓石をかくすやうに垂れ咲いてゐる、去年のこの頃、叔父樣のお墓に二人で詣つた時。まア、きれい！島崎さんが、と云つて笑はした人は今好きな島崎さん藤のかげに眠つてゐるあゝyさん！思はず叫んでよろ〳〵と墓石に倒れかゝつ

た、悲しい日！私は月の中に三日と云ふものがなければい丶と思ふ、序にこの膝も切つてほしい。

「黒百合」は新に稿を起せる夜雨の文なり。むらさきは百合子の從姉にして其臨終の床に侍したる人。寫眞を惜める舞鶴の君はわが假に雄一君と書きし亡き人、の許嫁となす。されど見よ、死は悲慘なり。

籠燈

△足元を見なかつたものだから滑りません、まだ暖い馬糞につまづいて下駄の緒さへ切れてしまつた、私は思はず泣いた。（福島百合子）

よつぽど固い馬糞だつたと見えます、足のさきがよく折れなかつた



木挽　中島ふて

こる

△さすらひの記とは雅號なり、女といふものはすべてに優しくすべきものと敎へられてかくは名づけたるなり。（うもれ木）

女はやさしくすべきものだからつて文章の題を雅號といふをはじめてなり。この人は學校の先生らしいが何を敎るだらう。

△袖口をそつとまくつてお彈になる、そろ〱すり切れて中の甲斐絹が見え透く、中根先生見ると本當にうんざりしてしまう、オールドミスもいやねえ。（若柴）

いやならあなたの勅題模様の三枚襲ねとやらを献上すればい丶でせ

う、先生よろこびますよ。

△一小節に一時間はかゝる、そしてやつとの事戰友の半分ができる樣になつたら仰ることがふるつてる——己れは頭が好いねですつて、かと思ふと弓をなげて、あゝこんなのでも三日位はかゝるかなあ、クソッねなくつたつてやつちまへ、なんて大變な意氣込み、オット、待てよ、さあ、こいつあしまつた、なんて其相の手の多いことつたら(ちか子)

旦那さまにバイオリンを敎へ奉るの記なり、そこら仲の好い御夫婦だらけだ、當分日米戰爭も起りさうも無い。

△姉さまは着物をえりわけてゐらつしやる、義兄樣が米國へ行けば日本着物は全然不必要だよと仰つてから御氣が大きくなつて、いつもならこれはもう八重樣に讓つたらと母さまに言はれても、水につかつた銘仙一枚でも今更のやうにあつちを引張りこつちを眺めたりして中々下さらないのに、あれもこれもと終に去年三越で買たお召に糸錦の帶まで添へ下ださる、まあ。(あけぼの)

うれしいと

△一ッ投げてやるとかぶつと口へ入れたがすいからぐつと出した。三人がわつーと笑つて一聲に「ジヨーン」と呼んで表へかけ出した。誰がジヨンて名をつけたのだろー私だつたらSとつけてやるのに……エスよと口ずさんでホゝと笑つた。(福子)

夏蜜柑を犬に喰はせるなんて動物虐待も亦甚しい。

△『噴水を右に見て入口をはいると、人の頭がうろうろしてる、名古屋女と噂にきいたがさてニキビ女の多いこと、お前なぞもこゝへ來れば小町とまで行かなくとも評判娘たることと疑ひなしだアーン』なんて、兄さんたらにくらしいことを書いて。(綠髮)

アーンの一語、畫龍點睛、巡査らしくていゝ。此兄さんなら少くとも僕だけは好きだ。

△なもうしもうしお客はんやお酒たんと上つてくんなはれやと名古屋の宿やの女中がいつたと父がいふわが越後は言葉のぞんざいなので名が高い、他國の人にはどう響くやら、先づ夜雨先生に伺ひたい(うた子)

飛んだ質問だ。深夜新津の停車場に下りて眞柄弘子の家を居合した男だちに聞いたら、そりや柄目木の上の旦那の家だ、橇でなけりや行けねえ、はッこいよと敎へられたが、どつけしはようがんすかね。買うておくんなんしようねいとやつて來たので、越後では鷄の糞を紙の袋へ盛つて賣つて歩くところ……なるほど肋骨が一本足んねい筈だと思つた、しかし弘子さんは取つておき御膳上等の東京言葉を使はれたから、婆やを呼びかけて「ばばあ、あのゝ」とどの口で言ふかとをかしくてたまらなかつた。こんな惡口をいつても先生つひ先日お聟さんを貰うたから聞かれる心配もあるまい。

△病閑『門』をよむ、宗助が妻の病氣を氣丈ふあたりを見て泪がこぼれた、夫といふものが持つて見たくなつた、意久地がなくても貧乏でも……(うめ子)

なほつてから横濱中探したらいゝでせう。

△可愛い子供の手でもひいて見せつけられはしまいか、あゝ自分も早く嫁くのだつたにと袴もぬかずに考へこんでしまつた(玉椿)

鳳凰の圖を見せつけられるのも困るが、かうしよんぼりと考へ込れ

てもかわいさうである、かたいかな配偶の撰擇や。

△猫にちと雪の上を歩かせて見ようと思つて外へ出さうとしたら、お爺さんいゝざらんことをせいでもいゝと、むつかしく叱つたので、皆して笑ふ。（たけ子）

「汝等は何を笑ふ」隱居の屁。古人すでに道ふ。

△青い海、青い松、砂の上を歩いてると、お隣の別荘の原木の若様、青白く透るやうなお顔して長いマントに包まつて白衣の人の肩にすがつて靜にいらッしやる、きれの長い目、星のやうな瞳、ああ君もまた若くして！（さは）

愁人何ぞ多き。

△あれR先生、だきついたたゞ無言……無言の中にはもゆるが如き胸の思ひ取る手よりは情のほど走りてしかと握る手熱き涙ははらく／＼と袖にかゝる身はあるかなきかの樣之が終りとて一層かたくきつとしめられたあらいたい！」と夢よりさめた心地友のMSYEさんは同じく泣き縋つて居被つた幾度か熱き握手代りつ代りつ來る友にあきもせず柔き手とり給ひしあゝ忘れがたい握手!!!何時までも醒るなよ？しばく／＼我がもゆる胸に浮べよ！この握手何時迄も忘るな上面影を……

これが男の先生だからおどろいてしまふ、女の涙の安ぽいとは古今東西皆一なれど、轉任するからとて年ごろの生徒を教室において抱擁するとは論外たり。汚されたる人の爲に萬斛の涙なきを得ず。

△御案内がある、皆が萱笠を頭にのせてはひる、常磐御前よネと妙子さんさゝやく。……先生は爐の前に坐つてお立前をなさる、正客の法輿寺様什器御挨拶などすかさずなさる、お器拜見も申出らる。私はしびれが來て。（とよ子）

茶の湯顛倒論をくりかへさうかと思つたが、しびれを切らしてゐるのだから今日はやめよう。

△今夜だつたな、雨がふつてゐてと父様いふ、ええ大變な雨でしたよ、お互にあの時分は若うムいましたネと母さまお答へなさる、「さうさおれは町内一の美男だつたのだ、ハヽ」とごま鹽の毛をなでて笑ふ。私は目を閉ぢて雨の中にゆられて來た母様の花嫁姿を想像した。（櫻子）

さりとは、むすめの前で……。

△十一日、二階から鉛筆をおとしたで探しに下りたら紙幣の樣なものが眼についた、清子のおもちやと思つたら本物だつたから、姉様に話したら半分宛し樣といふの、さあつて直ぐ五十錢一つ出したら預つといてと。うまい事した、母様が二階へ蚊帳持つて行つたかいと仰有つたの迄、一圓持つて行つたかと聞いて、姉様の顔を見たら手をふつて笑ふ、夕の御飯頂く時姉様白状しなすつたけれど、あれは返しやしない事よ。（葛の葉）

拾得物隱匿罪に問はれませう。けれど猫婆は氣が咎めるかして、蚊帳を持つてつたかいと言はれても、ギヨツとするなんて。かわいさう。

△田仕事に使ふのに馴らすのであらう、うしろでは赤毛を引ぱり出して櫻の幹へ繋いでおくが、馬はぽんぽんはねる、盛過ぎた櫻だからよく散れて馬の立髪へ

とまる、とまられて馬はなほとはねる、はねるから花はよけい散れる、空には白い雲がかろく流れて夕雲雀が鳴いてる(とよ子)

馬がはねるからにぎやかでいゝ。

△漬け初めた八重櫻を今日も探る、かわいさうな氣もする、けれどどうせ七日と經ぬまに散れるのだ、きたないむくろを日にさらすよりか……(ふもと)

どうせ散らしてしまうよりか鹽に漬けて喰べてやれといふ、大いに考へたものだ。饑饉が無いともかぎらないし。

△兄さまが桑園見廻りにいらしたあとで、姉さんと上簇用の「毛虫」をする(勇子)

「毛蟲をする」「むかでを拵らへる」「島田を折る」おなじことだけれど、醉茗先生などはいつぞや常陸へ來てかひこの頭からあらぬか(もみぬか)をかけるのを見て、やはりかひこが喰べるんですかと僕に聞いたことがある、毛蟲をするといつたら桑の害蟲をすり鉢ですつておまじなひに喰べることだらうと思ふかも知れぬ、安心したまへ島田を折るといつてもあながち女の喧嘩を指すのぢやない。

△馬車のまだ留らぬのに土人の花賣少女花を持つても少しも見晴のせぬ色の黑い目の太い背の高い髮のちぢんだのが、花瓣を貫いた赤黄白の花輪を手に手に提げてフラワーチープ〳〵と追かけて來る(定子)

布哇に滯在せる人の布哇の風物に對する觀察がわづかに之に止まるとすると何の爲に文章を作るか、僕には分らない。一つの石一本の草にも自然はいたづらに生命を與へてをるのではない、まして千里異境の客となりては、見もの聞くものにいたましき感慨が添はらうに。

△お舅様が起きたのにまだとはらはらしながら思ひ切つて寢室の襖をあけるとも ぬけのから、おふとんたたんで椽に出ると桒の花さける畠みちを遠くからいらしてお早うとニッコリ。先きをこされて……(ましを)

人生、むことなることも亦つらいかな。

△お膳の前に坐つてあらためて兄樣の顏をしげ〳〵と眺めたがやつぱりそんなことを書く樣なお顏して居らしやらない。私はあれを讀むだ時の事を思ひ出てふき出しそうになつて「ゲッ」と口まで出たが兄樣の顏を見ると知らぬが佛、天井を見て敷島をくゆらして居らつしやる。

私はもうこんなお顏してあんなことが書けると思つて只面白くて〳〵てたまらぬ、手帳は知らぬ顏して前の所へおいた(すが子)

「戀をして見たい」とか何とからくがきしてあつた兄さんの手帳を見てこんなになぶつてをるのだ、かつてこの人の文を評して懷かしきかな「今にして詩中の人を見る」といつたが、早速とり消さねばならぬ、あなた方は寄つてたかつて兄さんをいぢめるから惡い。

○五月一日

横濱　小田切錦子

朝「おいタオルは何處だい」、「あ昨日お湯から歸つてどうしたかしら」、「未だ早いぢやありませんか今つから目が開かないわ」、「なんだい己が冷水浴すると云ふのに。傍へ來て裸で拜んでおいで」、「オホヽ、誰馬鹿らしい――」、遂に起されてしまつた。兄は冷水浴後、直ぐ大弓會へ行く〳〵、此頃顏色がよくなつたと大喜びだ。お掃除して居ると、飛んで歸つた、岡田樣とこれから逗子へ旅行するのだと。とても御飯は間に合ないのでパンにする。

晝、梯子段トン〳〵音さしてお武さんが上つて來た、「あの文壇取りに行つて、」「いゝえ兄樣が持つて來てくれたわ、」「アラ貴女の兄樣つてだれ」と、眞個にお武さんは憎らしい。今月の文壇、讀初める、赤インキの藍

取らうとして人差指を染めた、表紙の令孃の頬へ薄すらとボカスと、まあ生々として嬉しい事。四月のにもと、取出したが止こした。

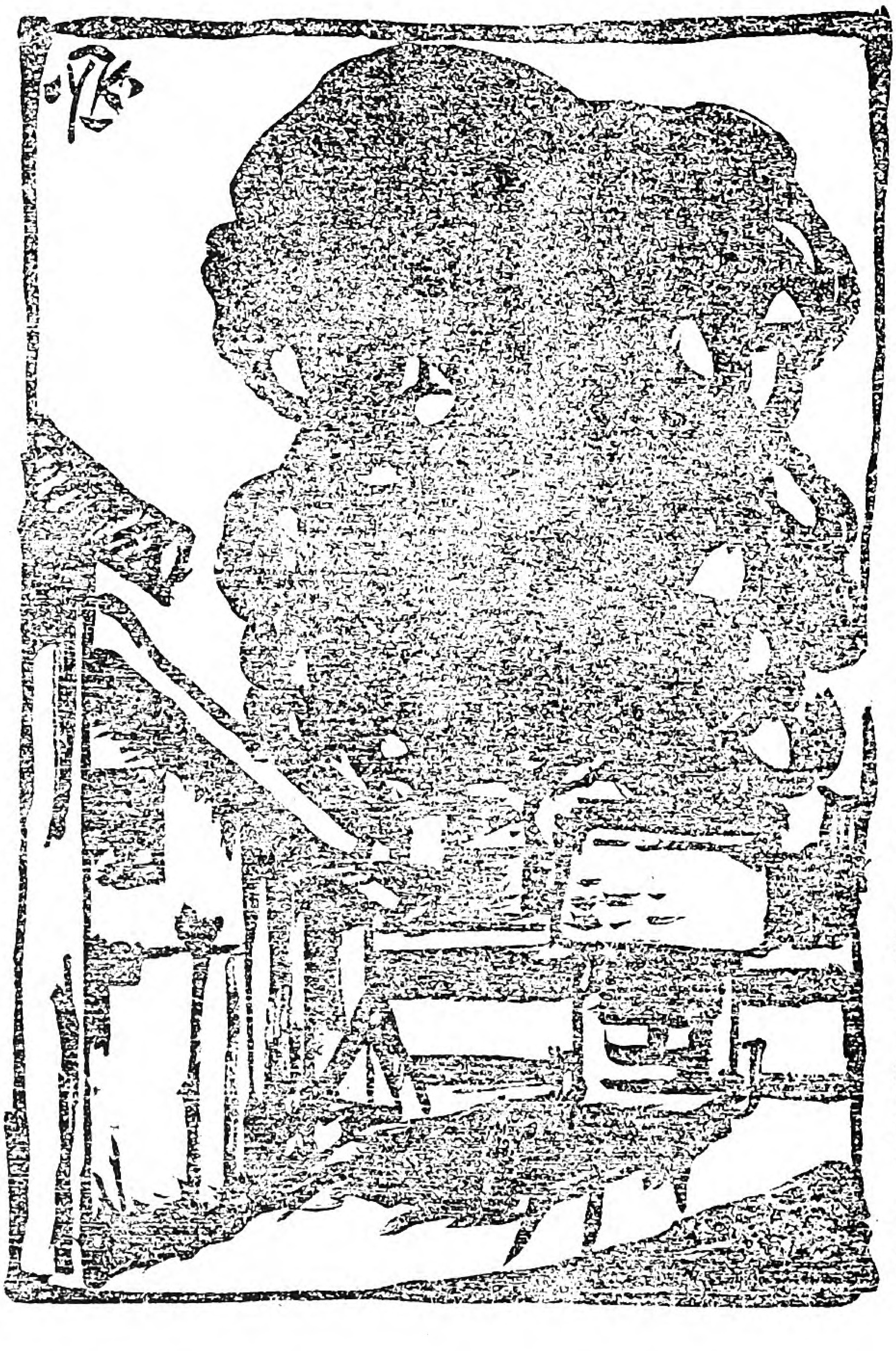
夜、兄は疲労たつて早く床に就いた、こりやいゝ塩梅だ、何時もの様に、肘の突合せや、ランプの奪合もないので、おゝやりして東京の君香さんと、滋賀の磨志緒様へ、御手紙書く一寸文壇の口繪お見せと云つたので、渡したら終まで讀んだ。私は遂に、受取らずにさつさと床へ入つた。明日、スバルがきたら、十日も隠して置いてやろう。

何だこれも兄さんいぢめの文かと思つたら、どうして、かうお睦ましくてはスバルなんど逆も、かくせ相も無い。

〇こゝろの日記

伊豆　為子

「お前がしつかりしてゐなければ……」今迄默つて俯向いてゐた私は、もうたへられないで、つと立つて縁に出た。小糠のやうな雨が忍び音をして降つてゐる。柱によつて、何を見るともなく、聞くともなく、立つてゐるとひとりでに涙がこぼれる。何で御二方の心を知らぬことがあらう、知つてゐればこそ、知つて居ればこそ、そゝる心を壓へて、かうして毎日こんな事をしてゐるのだもの、でなかつたら、とうにく私は家を出て了つてゐる。御父様、わけて御母様は私一人が頼りなのだから、何うしても脊負つて立たなければならないと思つてゐる……それを、あんまりな、……。氣の勝つたと人はいふけれども、いひたいことも言ひ得ず、それがといつて、優しい言葉をかけて慰められるでもない、義理ある子だもの女だもの何故できないだらう、よくないとは知りつゝ私にはできない。



寺町にて　かねしげ

しつかりと、行く方をきめてまつすぐにく進まうとは思ふけれど……さて、どの道をどういつてよいのやら……。たえずたえず暗い影に追ひかけられてゐる。淋しい、悲しいといつて母の手にすがつたのは、はるかはるか遠い夢、あゝ今は……。されぱとて人に語つて共に泣いて貰ひたくもなし、弱者の名の下に包まれて了はれたくはない。

あゝ十九の春も音なく逝つた。青葉がけぶる、私もこの色に包まれて、夏の快活な舞臺に出やう。

女の人は萬人が萬人一度は逢着すべき結婚問題にかゝつて惑きめを見ねばならぬ、嫁に行けといはれて腹を立てる人は有りさうもない

が、何ものか髪を掴んで引きとめるものあるのもうそではあるまい。Aは藝術に生きんが爲に髪を斷つて嫁くを拒んで上京した、Bはみづから其戀をはづかしめ其みさほを汚して平然として新しき人に行つた。嗚呼汝たゞ行け。

○二人の手紙

佐世保　つゆ子

三月十四日。春雨はしと／＼と降つて、何となく頭が重い。十時頃、新婚のmさんから手紙が來た。何だか厚ぼつたいと思ひ乍ら開けて見ると、まあ……お二人から。細々と書いてある。

「私は今愛する人から、御寫眞を出して貰つて、三人で御話をする積りで手紙を書いて居ります。外の御話よりは、今日は「妻君頌德表」を書きませう。今迄瓜連の家に居た時は、九時頃の起床を承はりましたが、腰辨の君の御出勤が、割引電車なるが爲、五時頃の御起床。日は未だ增上寺の森に、黃金色の雲を漂ばせ、明烏の聲かまびすしき頃、白前垂に赤たすき、共用栓から歸つて來る樣は一巻の畵です。大根何錢――味噌……などと、小使帳に付けられる處、自身八百屋に御出張と思召せ。御料理は一度半煮の飯を頂きました。僕は自炊生活をやつて、米が兩に何升で、炭が何程と云ふ事も知つて居りますが、愛する人の學校仕立のを頂いては、其間に一厘一毛の非難を挿む餘地がありません。其上に歌は御存の通り、文も御上手と來て、宿六は頭の上りつこはないです。二月のを御覽でせう。あの文……僕は目まひの時の藥と思つて諳記を致ました。」mさんのは、「今ねあなたに手紙を書くつて大變なの。去年湊で取つた寫眞あれと首つ引きよ。私が其樣に書くと、サイノロヂストつて云はれますと云つても、何にいゝつて。此頃漸く水道が旨く汲める樣になつてよ。でも晝間は極りが惡いの……。先日私が始めて、おさつを買つたら、「嗚呼汝も遂に女なり」ですとさ。琵琶を引け／＼つて仕樣がないのよ。あの今日は御互に見せつこてわけでせう。だから内所の事は此度ね、」隨分面白い御夫婦だ事。目に見える樣だ。可笑しいので聲を立てゝ笑つたら、次の間の婆やが、何で御座いますつて驚いた顏。

こんなのをおく面なしにかいてよこす勇氣は實に驚いたもんだけれど、自分はつひ此間、私のはつこひは藝術だつたとほめてくれた上眞人は妻のためなら職業を代へてもいゝと言ふ……との葉書をある人から受取つた、見知らぬ女にあてゝ細君のノロケを書く男も實際あるかも知れぬ。御苦勞さまな。

○五月初め

牛込　平塚白百合

五月三日。昨日から今日へとなんといふ寒さだらう。折角しまひこんだ綿入羽織を又引出して袷せの上に重ねたけれどまだ温かでない。風は昨夕から思ひ付いたと云つたやうに吹き通して、昨夜はまんじりともしなかつた。なんだかねぐるしいいやな晩で、ギーと戶がなると前の植込みが大波のやうな音をたてて方々できしむやうな妙な音がした。得て盗賊かは入りやすいなんて話したのでとう／＼明方迄ランプを細目に、まじ／＼とねぶらなかつたので鉛の塊でもまぶたにのせられたやう新聞をひろげたけれど直に目がつかれてハレー彗星の記事を一寸見た許。いよ／＼肉眼でも見えるやうに近づいて來たそうだ。結果はどうなるのかしら。

そう云へば風がこんなに強く吹いたり氣溫が下るのもしや何とかなるしるしではないかしら。ダンテの物語り中の大寒地獄のやうに地球が冷えきつて凍えるなんて云ふのかしら。萬朝新聞の懸賞小說にはスキートな夢に醉ひながら天國へ………なんてそれこそ夢見たいな事がかいてあつたけれど當にならない。けれど實際全滅するのかしら。死ぬと定まれば私も用意でもして死にたい。どうせこれから二十日位のうちには運命もきまるのだもの。思ひ殘すこともなくして死にたい。

そしたらこの間三越で見た白地に黑畵で百合を畵がいたあれを着物に仕立て（少しははでゝも門出の衣だから）ヘリオトロープをほんのりかほらせ植木屋にありたけの櫻草を部屋一ぱいにならべて、その中に靜かに死につきたい。

なんて考へて見る。こんな事思ふせいか投書かくのもいらない骨折でもするやうに思へていやになつてしまふ。もう二十日。私の二十年はほう

むられてしまふのかしら。あゝ死の生の！。

ハレイ彗星沈香もたかず屁も放らず

○切り花

小石川　つゆ草

四日、からりと藍色に霽れ渡つた空を白雲がゆるう流れる西へ〳〵と。一雨で此歴に延びましてて御在升よと豐が前の畑から青々したほうれん草を笊に山と取つて來た。私も外に出たく成つた花鋏持つて裏に行く、紅い芽ざしの大盃や淺緑の若々しい楓やたわゝに咲いた木蓮の花も海棠も白い木瓜もみんな麗な日光に鮮に浮んで……どの木も梢から金色の雫を嬉し相に振りこばしてゐる、私此木蓮つて花はお寺臭いから嫌。ふと思が五年の昔に返つた末引つめた御さげにリボンを蝶々と飛ばしてゐた十五の春にし教員室を建て直す間先生が作法室にひくい机を御並べに成つたのは花盛の今頃だつた。おひるの遊び時間騒ぎ飽きて三人の友と築山蔭の桃やら海棠やらどつさり摘んでこつそり脱ぎ捨てられた幾つかの草履と靴を綺麗に飾つたつけ……鐘が鳴ると森田先生が兩手に溢れる程花を持つて被入つた、誰方美しい贈物を下さつたのは捨てるのが惜しいからとにつこり遊ばした。夫から大きは水盤に二三日の間美しい色彩が湛へてゐたマアハイカラね他組の人から羨望の噎を向けられる毎私達の胸はどんなに幼い誇に躍りましたらう!!　吁々懷しい春の思出―あの時一緒においたした幸樣純枝樣千以さん！時の力は皆を引離して仕舞つたけれど、逢ひ度わ今、そして昔の隔なき心に返つて話して見度い笑つて見い―母樣が椽で呼んで被入る、はあいと長く御返事し乍ら海棠の枝を撓めてチヨキンと鋏を鳴らす。冷い雫が腕に流れ入る。御茶室の花にと思つてその二枝を手にして家に入つた。

花を摘んで靴をかざる、それはいかにもハイカつたことなれど、水盤へは草履と靴とをそのまゝ突込んだのですか、先生の足ごと漬けたのではなからうし、ただ散つたやうに水へ浮かしたとも思へず、想像にくるしむ。

○お店番

横濱　千鶴子

朝なのだ大分暇だ美人棚の下の椅子に腰掛と鼻をつく香水の薫りふと頭を上げたら先顔のお鼻の低い眼の細い頗る付の不の字の上にあの濃化粧ヴエールを肩にお召の半コート兩手に輝くウリングの光り一見其と知れるデコ〳〵姿「いらつしやい」と頭を下げた彼や之と見散かした上横柄な口のきゝ方何んだ洋妾の癖にと口惜しかつけれど商人に短氣は禁物だからぐつと蟲を抑へて五錢の繪葉書を風來で賣てやる支那人が四人きて美人物との事で萬龍を見せたら棚にある舟子を取つて買つてつた實支那人は嫌いだ女のばかり欲がつて其上吝嗇で………香蘭女學校の生徒が來て泰西美人を買ふ丈の高いすつきりした青眼の美青年鼻下のカイゼル式が一入顔をりりしく見せる花の部に入つて忘名草の一枚取つて五十錢置いていつた私此樣な人大好きだわ從兄がやつて來て「やあ千鶴さんの店番とは素的だね」なんてさん〴〵冷笑れる喧嘩相手が出來たからお客の來ない樣に祈つてた矢先横濱には珍らしい角帽衿にSの字紅顔のやさ姿いづれすみれの香にだらうと七の計り出したら其内で一番意味深長なのをとつた如何なる人の之れを受くるにや一葉女史ならねど心が知りたや……いつそ二人が憎くなる。

活版小僧曰く、こりや評がないのですか。

夜雨曰く、有るぢやないか、……は評だよ、

○クサ〳〵日記

桑名　山崎初子

こゝ四五日と云ふもの朝晴れかと思へば午後から曇る、降る、生ぬるい風は身體を蒸し〳〵して丁度硝子へ息吹きかけた樣な工合、五月雨にはまだ早いが――それとも繰り上げかしら、何だか知らないが否なお天氣だ、先達てから又私の緣談が持ち上がつたが今度も例に依つて例の如しなのだらう。廿才の聲きいてから以來そう〳〵あき〳〵する程うるさく幾度となしに聞かせられたが未だにこんな事だ、その筈さ私の進むのは父樣はボン〳〵退けてお終ひなさる、お母さんは、お父樣の御立腹を恐

れてテキパキとはお口出しもなさらない、之ぢや何時だつて纒まりそうな事がない、エヽいゝわ三十才になと四十才になとなるがいゝそうしたらこんな話も必用が無くなるだらう。だがあの寫眞を見ていやに變な人だと思つてる矢先へ其の人の美點ばかり並べ立てられる時の腹立だしさ！自分が其の人に及ばないと下げずまれた樣な氣がして口惜しくつて口惜しくつて尙の事反抗したくなる、それや誰だつてどんな者だつて美點の二つや三つはあるさ、それを大業そうにそう並べるにも及ばないわ、惡い處も一しよに並べたらどうかしら！考へれば考へる程クサ〳〵して、お天氣の加減も手傳ふだらうが頭は一日としてハツキリとはしない、それかと云つて話があれば考へるだけは考へて何とか相當の返事もしなければならないし、いつそ暫くこんな話が無いとい丶のだけれど、盜人にも三分の理はあるとか皆の云條にそれ〴〵理窟もあれば情實もあるものだから何とも詮樣がないわ、けれど餘りだと思ふ要は本人にありだから少しは……。ゆく〳〵は一ばん弱い子と云ふ名義持つた私が自我を捨てて周圍に從ふ樣になるのだらう―ならなければ修まらないと思つては居るが今と云つてどうもそう思ひ切りよくも行かない、まあ〳〵何とかなるだらう、どう思つても成る樣にしか成らないのだから――、以前は色々思つて隨分涙も出たが今ぢやそう涙なんぞ出ないカンカラカンの干物みたいな人間になつて終つたのだ。昨日四年前に居た女中の靜が來て親の爲に二年間紡績の工女になつて居りますと云つて居たがあれも不憫そうな者だ。下を見れば極りがない。

もう暮れそうだどれお湯へでも入浴て今晩は少しお琴でも彈いて氣を晴らしませう。

讀む人まで吊りこまれてクサクサしちまう、嫁くなら行てとてきぱきしてください、お目出たいぢやありませんか。

○喀血した日

山口都志子

誰も居なかつたので机の側へ腹ばいしてノートにつひ樂書なぞして居たら何だかこう咽喉に蚊でもは入つた樣なつまつた樣な一種の感がしたので咳をつけてみたらいかにも咽喉から何やら口中へしぶき出たのではてなをかしいがと急ぎおえんからお庭のかづら石へ吐いてみたらさら〳〵した筈眞紅の血だつたもの……驚いたのやら恥しかつたのやらちつとも物が云はれなかつた、けれどはしから固りのやうなのが出るのでハーツハーツつて吐いて居たらお祖母樣が奥からお前さつきのがすぎたでないかつて云ひ〳〵いらしたがご覽なすつてびつくり「あれ……………米さん！……」直中の姉樣は飛んで被在つたが意外も甚だしかつたので何ぞ被在らう、嗽水を呉たり背中をさすつたりして泣いて被在つた、下女と大姉樣とはお醫者へいらした樣子、――居室の六疊へ床をとつて頂いたけど私はどんなにもないやうな心地がして「私起きて居ましようもう動悸もやんでどんなにもありませんから」只これ丈いつて制しられたらどう云ふものか今の「今迄ほんの一滴だに出なかつた涙が泉とわいて〳〵遂に涙をかくさんがために横臥したやうな始末、と直に醫者が來た、燈火が二つつけられた、金盥へ半分の血を見てホーと驚いた顏つきをなすつた、種々質問の後胸と背を寒く成る程見られた「喀血ですね、心臟の血が肺へあふれ出たのです」とのみ仰在つた切、强ひて私も別に問ふ勇氣もなかつたが「喀血の折に三度程大變に氣持の惡い動悸が高く〳〵しました」といふと「ハーきつと不動でしたらう」と仰在つた、成丈靜かに冷度い物をあがれといふ藥は水散の二通り、水藥からのんだが味はお話にならない。

それより私は一寢入りしたと見えて目のさめた時にはもう蚊帳の中に入れられてあつた、お兄樣ももうお歸り遊ばして、上の室へ皆樣と一所に座つてらした、惡かないかと問はれて折角ひつこんでた涙が復もジリジリわいて來そうだつたから御飯の催足をしたら鷄肉のおかゆだといつて下すつた、割合おいしく二ぜん食べてまた一寢入りこんど目がさめたのが十一時、例の復咽喉がふさがつたが血のたんを二度吐いた、强ひて平氣に安眠を祈らうとしたが涙がわいて來て仕方がない、ちつとも死といふ觀念はなかつたのに――と八月八日最終の聲なる電氣燈會社のフーが十二時を報じた、

才子多病の諺はあてにならぬと共に、女の人が文章の上でばかり肺病がるのもちと……だ。胃出血でもあつたのでせう、御飯を二ぜん召上るんだから。



論　文

編輯局選

○『都會の婦人』の批評

其一（天賞）

白光女

豫告によつて大體の想像はついてゐたが、實際は更に其れ以上であつた。一つは今迄と方面が違つた故でもあらう。さて、先づ、西と南の郊外――孤雁――の若き女のシーズン、何ともいへぬ懐しさを覺えて、東京の女の美のタイプ其のものをみる樣な氣がする。次は僅に殘れる印象――葉舟――東京には型に入れ樣もない女の階級があるといふことを痛切に感じて、都會に對する觀念は複雜になつてきた。次は暗愁に囚はれたる都會の女性――胡夷――所謂ドラマチックの特性ある女性を論理的にピシ〳〵と斷定を下したのは、名題に最も適してゐる、うす雪といふ人の對話「上野より」は、女の心持がよく寫されてゐる、斷片的なのがよい併しいくらか、わざとらしい樣な所がないでもない。東京印象記。まづ大體の調子の上から分けてみるとＡ、芝公園、銀座、日比谷。Ｂ、神樂坂、魚河岸、西片町。Ｃ、根津、神田。Ｄ、不忍、谷中。Ｃ、美しい動物園、深川。となるだらう。さて、どれにも其れらの特徴はあるが、現在の都會の婦人の大部分はＢＣ等ではなからうか。いき〳〵としてゐる、白百合の神樂坂、千歳子の西片町などは實によい調和だと思ふ、すつきりとした夏の夜の樣な趣がある。Ｃは小説を書く人だけ描寫が細かい。私等は苦痛の壓迫のといふより其の中から何等かの趣味を見出すのにつとめたい。太陽の鋭い光りを浴せかけられた都會の呻き、そこに起る苦痛の響はＡによつて聞くことが出來る、イラ〳〵した感情のゆらぎは寫してあるが餘り誇張し過ぎてゐ

ゐまいか。不忍谷中の作其のものには特色を見出されない。美しい動物園に深川は講談的のやうな氣がする。

若き女の感情。　濁つた室に輝く電燈、いつも作ら題が面白い。そして現代の女で、壓迫は感じてゐるけれど、それを抜け出よう〳〵とする強い力があるので此の人の作は覇氣に富んでゐる。入京記は一番期待して居た作であるのに、これでは餘り飽氣ない、併し優しい人格の閃きは到る處に現れてゐる。鬪ひ疲れて、始終一貫した強い調子、チヤームする筆致は此の作者獨特である。筑波根詩人は何と評されるか知れないが過去を追懷する樣に此の人も老いたのであらうか。

熱い涙冷い涙――ふと「未來を信ずる人は幸福か否か」といふことを思つた。そして「人生はそんなに無意味であらうか」とも思つた、常世草に、夕ほしは達筆の人。垣間みた東京は調うて穩かな觀察である。薬がくれの花これも人生の無意味を訴へてゐるが、心の聲と矛盾してゐはしまいか。欺れたる工女の懺悔は眞面目に書いてはあるが平凡だ。三府の比較はよいが、うすつぺらな會話で、下手な談話會の樣だ、併し筆は達者だからむしろ書簡文體にしたらどうか。

都會の實際的生活。　卒業式の前、バザーの當日は華かな女學生生活の一面がよく描かれてあるが、慾をいへば其の裏面を紹介して貰ひたかつた。生活の階級は單に階級があるといふにすぎぬ。白菊の某子爵邸に遊ぶ、はよく寫されてゐるが他所行でなくて、もつと手近の所謂實際生活を發表したら興味があるだらう。作者は上流の人であるから特に希望する次第である。英子のお孃樣のお供は果して實際かどうか平常より劣つてゐる樣に思ふ。

さて最後に、印象記、女の眞情、實際生活と比較してみると、前二者に對して後者の內容に乏しい事がわかる。實際生活があらゆる原動力となるのであつてみれば、如何しても此の方面の觀察を捨てる事は出來ない。他の二題目に勝つた作があるといふことも、實際生活を傍觀視することが出來ない、いひかへれば生活の渦卷の中にまき込まれてゐる――つまり都會の婦人が革命の第二期に入りつゝあるといふことが判然する。

要するに「都會の婦人」は第二增刊として確に進歩してゐて、新らしい作家がないかはりに作品は大體平均してゐると思ふ。創作の批評はしないが、最後に、にくまれ口を一二いつて擱筆する。表紙の色彩の單純なのと、作家の肖像のないのとは少からず物足りなく感じた。

見かたが偏して居ない、又あまりに淺薄でもない、女子の批評文としては上乘の部に屬す(評)

其二（地賞）

露木雅子

最初「都會の婦人」を手にした時、先づ表紙にゑがかれた夏の女の清楚なる粧ほひがさながら本號の內容を現して居る樣に思はれて何となう嬉しく、且つ口繪兩國行の小女の見るからにあどけない下町風との對照が中々面白く感じた東京の地と東京の女に孤蝶氏が不忍池畔をば芝居の書割の樣だと評されたり、東京の女に就ての御高說、有明氏が庇髮が明治四十三年限りの明治年間の名殘として殘るべきものなるべしとの御談しなど別けて面白く讀んだ。赤明氏の「女子教育を疑ふ」も割合に穩やかなものだと思はれた。孤雁氏の「若き女のシーズン」と嘉香氏の夏の女の美とどこか同じ樣な點の有るのも一寸不思議である。秋骨氏の「大なる未成名」は極めて眞面目な文字であるから是非よみ返す積りである。



暖氣　新潟　村田けん子

街頭を歩める女の印象―自分は矢つ張り薬舟氏のものをさきによんで、それから白秋氏の「植物園で逢つた女」を見たが中中鮮かな文章だと思つた。薬舟氏自身が僅に殘れる印象と題されるもの故平常ほど動かされないが然し鈍い頭惱に聯想の念を起させる丈けの力は充分にふくまれて居た。吉井氏の對話は一寸振つてる中で第三の女が自分に最も近い樣の感に打たれた。醉茗氏、木下氏、胡夷氏等の物は何れも趣味ふかくよみ通して、さて次には西南の兩郊外よりの日誌であるが、何となく西の郊外の方が好いと見たのは兎に角水野

樣の御家庭の御樣子がほのかにうかゞはれる丈けでも喜ばしい。日比谷大神宮の記事は誠に重寶だと云つて老若男女が遊蝶花樣に感謝する事と信ずる。(對話) 上野よりの三人の女のいき〳〵して居る心地よさ、とりわけ銀杏返しの人が懷しい、東海道樣はたゞ關東ひいきの面白さに二度程よみ返した。

東京印象記。　いよ〳〵これからが若い婦人方の才華と筆のあやを壇に表現し給ふところ……、本欄で最も勝れた作は魚河岸か、朝よりも晝の方ずつとよく寫されて居る樣だが、夜の河岸にも中々かくれたる趣きがあるらしい、次は銀座、不忍、二つながら作者の感想が吾胸に映ずる樣におぼえる、が根津の筆つきは他にかけ離れて極しつくりと重味の有る中に鋭敏なる觀察力をもつて居られるのには敬服の外がない。西片町もすら〳〵と寫し得て妙味たつぷり。

若き女の眞情――やゑ子樣と馥子樣とのお作をのぞく外は大概存じ上てる(誌上にて)御方達の御筆なれば決して惡い筈がない。たゞ强ひて申上ぐれば常世草樣の雄辯なのと、夕ほし樣の心の活動寫眞の面白いのと萩花樣の垣間見たる東京をよんで誰の人心も同じ物かと今更の樣に感じた位の事、なほ入京記はしみ〴〵と可成りながいページをよんで倦ましめない所も流石に才筆と感嘆した。

生活の階級は非常に面白く讀んだ。代議士の令夫人の華美な生活も床しく、茶店女はすみもて行く間も心忙しかつた。御孃樣のお供もすら〳〵として心地よき筆つきで有る。

創作欄に水平線以上の傑作は淚花子の卵であらう。恐らく是迄にもまづ見當らない位の逸品だらう。闘先生はちつとも先生らしい所がなく、生徒は處女のやさしみを缺いてるから一向情がうつらない。山みち野みちは立派な寫生文の大家の仲間入りが出來さう、兎に角餘りヒステリカルな文章ばかりに耽溺して居ると折には胸のすつとする樣な文字に接し度くなるものなれば此後樣々の文體の新に生れ來ん事を祈る。

夢二氏の筆になりしコマ繪、どれも〳〵よかりし中に日本橋の女、柳橋の女、淺草公園、新橋の女等實に立派な畵だと感心した。

八方美人的ではあるが、なか〳〵褒め上手です、時には各欄の選評のお手傳ひをねがひたいものです、ハヽヽヽ(評)

其三(入賞)

ふもと子

若き血潮のみなぎつた我が女子文壇の第二增刊、都會の婦人は名を聞いてさへ、いかに華やかに活氣に滿てることで有らうと思はれて、特更に待たれたのでした

表紙は初夏にいとふさはしいもの、あつさりした中の燃ゆる樣な眞紅の色女子文壇の文字が懷かしうございました。口繪、どう言ふわけか夢二樣の繪は好きで堪りません。再度だからでせうが入撰者の寫眞の無いのは物足りない氣がしました。

先づ東京の地と東京の女と云ふ字が大きく目につく、何となく落ちついて居られない樣な氣がしてずん／＼繰つてゆく、印象記のくに子白百合萬壽子春子筆などずらり秀才の竝ばれたのは、目ばゆい許りあざやかなものでした。都會の渦捲に漂ふ若き女の眞情、こゝで長曾我部菊子樣の入京記をよむでみる、出京前の日記には思はず泣かされました、鬪ひ疲れて、あゝ、活動の都をはなれて唯一人、筑波山麓に足を、胸をなやみ給ふ多情の詩人は、これをいかに讀み玉ふでせう。

熱い涙冷い涙、湖畔の女とは山田邦枝樣でせう、同じ希望の菊子樣と共に、時代の思潮にさほさして努力奮鬪し玉ふ御勇ましさ、どうせ人と生れて思ひあれば苦しまずには居られないもの、意義ある苦鬪をするのなら、此のまゝにして終る一生であり玉ふとも、兩親の間に安らかに生れて平凡な一生を送る者より、神が書き玉ふ人間の歴史にいかばかり大きく記される御名でせう、切に／＼成功を祈ります。

常世草、夕ほし、お二人とも東京つ子らしいお筆、萩花樣の垣間見たる東京は二年前出京の折りの事など思ひ出されました。解放されたのか落伍したのか、現代の女の煩悶とでも言ふのでせうか、通じて誰方にもかかる聲が有る樣に思はれます。

生活の階級、霞子樣の代議士令夫人は難なく、茶見世の女は花につかれた上野の夕暮がしのばれる、卒業式の前、バザーの當日無邪氣な快樂はどうしても學生時代でなければ、あゝ學校生活が懷かしい！

創作、卵は面白くよみました。詩の白鳴、青色の大杯を倒にした大空の印象はいゝと思ふ。前へ歸つて詩に現れたる都會、河井醉茗樣いつもながら眞面目に忠實なお筆、お人柄がしのばれてうれしい。うす雪樣の上野よりは現代的島田銀杏返し庇髮の性質が目に見える樣。東京印象記は誰方もお見事な物、此記事の爲に、ずつと内容の整頓した雜誌に成つて何となく我が女子文壇と言ふ誇を覺えました。けれど女は情のものてう題を附せられた樣なのより、廣く樣々の方面へ走つた第一增刊若き婦人の方が、興ふかい樣に思はれます。拙なき身の公に批評などとても出來ませねど、唯ふとの興じに筆とつてみました。

同情のある批評です(評)

其四

草葉の露

十五日から二十日迄、毎日〳〵婆やを本屋にやつて漸く二十一日の朝手に入つた、待にまつた都會婦人！まづ第一に東京印象記。銀座——流石詩人丈けに違つたもの……目まぐるほしい銀座の街も、三味の音ひゞく數寄屋町通りも、何時の間にか詩化せられた。神樂坂——長く住んだ土地丈けに、一層のなつかしみ。午か寅か、お毘沙の緣日の樣が能く現はれて居る。母樣と小さい妹さんと、人込をわけて、あの交番の所をつと岩戸町の方へ御曲りになつた、白百合樣の美しい姿が目に見える樣……何時だつたか、占者の前を通つた時、姉樣に見て貰ひませうかといつて、笑はれた時の事が胸に浮んで、一人微笑した。魚河岸——向ふ鉢巻勢よくかけ込む、いなせな若い衆の活動場!!「今日はまあ、買つときねえッて事よ」何かてう自分でも朝の日本橋に立つてる樣な氣がした。日比谷——日比谷ではなかつたが私も、いつか此麼事に出會した事があつた此前の淺草公園よりは大分見劣りがする。

根津——御上手だけれどあまり好きでない。一つはあの邊をあまり知らないからでもあらう、不忍——はでな浴衣の伊達卷姿……チユッとねずみ鳴きするあたり池の端の空氣が能く出て居る。芝公園——此方のはあまり詩的？六ヶ敷くて能く分らない。谷中——女らしくていゝ。淋しい墓地の中に立つて居らつしやる鏡子樣の同情ある御眼……若い學生の櫻狩の歌……折からの風にサッと散つた、櫻も花も何となく床しい。

神田——あまりゾッとしない。西片町——此方のも女らしくて好き。西片町と云ふと直ぐ私は、大塚博士夫人を思ひ出す。靜な屋數町の淋しい夕暮の樣——如何しても此處へは琴が付物。美しい動物園——內藤新宿のズラリと兩側に並んだ人の檻……隨分思ひ切つて、大たんな筆の跡と驚いて仕舞つた。深川——ふぢとは誰れ男子の方でせう。

長曾我部菊子樣の入京記——後の日記のところを讀んで、思はず淚にむせびました。何の淚？自分でも分らない。つまり同情の……でせう。

筑波山麓の鳥子樣のおたより、夜雨先生は何と御覽になつたでせうか。造物主は何故私の鼻の土を儉約したでせうか。——オホヽ、隨分面白い事をと一人で可笑しくなりました。そして慶應が御好きですつて？麻布と三田、矢つぱり私達が牛込に居たおかげで、早稻田をヒイキにするのと同じわけでせうね。

和歌——灰色の波はいゝ。其中の伊達まつ子樣のは、

あまり烈しいと思ひます。以上盲評多謝。
大多數の讀者の意見を代表してゐるやうに思ます（評）

其五

石川　むらさき子

私はいまかの文士の都會觀と若き女性の都會觀との充實してる都會の婦人を手にした時の印象をかいて見ませう、全體にわたつて一種よわくしい哀愁が漂うてるやうに思はれたと同時に、色彩の濃厚な氣の利いた美しい女がえがき出された然しどこかはしやいだ、塵にまみれた、私共田舍者から申せば多少純潔をかいてゐるやうにも思はれた、表紙、口繪、ともにいゝことはいゝけれど、今迄のやうになつかしさが湧いてこなかつた。都會の女はさばけてゐる事は、たしかであるが、あきらめのいいといふのは美點で又缺點であると思ふ都會の女はうつり氣だとかきくのは、そんなところからではあるまいか。何もかも呑込んで諦めてしまつたら、詩も歌もない。諦められないと云つて煩悶してこそ、立派な詩も出來るのであると思ふ。若き女のシーズンはたしかに夏でせう。「街の夕月」はしんみりした悲哀が月光にほのぬれてくる三絃の音のやうに、私の心におしよせてきた。「僅に殘れる印象」中の女。いやで



海岸　埼玉　野原夕花

すねえ、其他一般に江戸趣味の消滅を歎いてをらるゝやうですが、私はある一部には是非とも殘して置たらいゝと思ふ。「東京印象記」中の山田くに子樣の「銀座」、烈しい街をいろ／＼の壓迫を感じなら歩いてる女の心持があらはれてゐる、すきだつた。菊子樣の「入京記」……私は何度も／＼これをよみかへした、私も幾度かそんなに思つた事でせう。併し出るだけの勇氣と自信とがなくつて、未だにこんな田舍にゐるのですもの、私の胸の血潮は踊つたのでした。若杉樣の「闘ひ疲れて」をよんで情ない氣持になつた私もそんなのになるのではあるまいかと、人事のやうに思はれなかつた。「垣間見たる東京」はきつと菊池、りう子樣なんでせう、あなたの事はある人からきいて存じてゐますの。其外都會の煙の中に漂はされてる女の眞の叫びをきくことが出來ました、創作では小説「卵」が一寸いゝと思ひました。短歌では「人妻は手毬ほどあるぬけ髪をすてもかねつゝ手の上におく」。がすきだつた。まあつまらない事を申しました御免下さいまし。

肯綮に中つた處と、中らない處と相半してゐるやうです（評）

其　六

近江鈴蘭

都會（主として私は東京を――）と云ふ者は間口の廣い奥行の淺いもの、甚だしく亂調子なそして妙にはしやいだもの……と斯う定義して居た――是は都會を知らぬ私のお上り氣質の誤つた考かも知れん否誤つて居る事を希ふので有る（都會のために）――で今度發刊の都會の婦人も美はしい――其れは動搖少ない地方に住む私等を眩ます樣な華かな物で有らう――併し其中には私等の氣を唆る樣な物が此度多からうと……豫期して居た、病床に都會の婦人を熟讀した、然して今又批評文を書く、元より病人は氣のみじかい神經質のもの何を云ふか知れないけど？口繪から深厚なる注意を拂つて見た、東京の地と東京の女より奥へ十九編迄は殊に多大の興味を以て讀んだ、中にも暗愁に囚はれたる都會の女性――深く／＼私の腦裡に印象した――と共に一種云ふべからざる冷刻を覺えた、四十七頁「以上の説明で滿足して置かうと思ふので有る」迄の中には單に都會許で無く此の地方にすむ者にも多くの教訓と反省すべき思考の力とを與へるものが多かつたと思ひます、其他の東京印象記、若き女の眞情、都會の實際生活中にも思つたより重みの有る確かりしたのが有つた、涙を催す樣なものも有つた、又中には里芋の葉の上に轉ぶ白露――と云つた樣な取り止めのない上つ調子のが有つた、是を文章として見ると潑溂たる鮮魚の樣な活氣が見えて一字一句にも何となくフレッシュ

な香が有つて、私のする其れより見ると幾何位精彩が有るか知れん、が併し何でも是でなければ――と持て囃された流行物が暫しで振り向く人も無く成り果ては全く忘られて終ふ樣に、此都會婦人の半分は再び讀まうと云ふ氣も起らなかつた、要するに此號は、讀んで居る中こそパッと何かの光を受けたかの樣な陽氣を覺えはすれ、ゆる〳〵と咀嚼しつゝ讀むものでは無い、華やかな心を――眼を――以て一息にす――と讀むべき物で有る……と思ふ。

又一面の理です（評）

其七

麻布　葉隠れ花

印象記では佐藤樣の魚河岸――流石に世なれた處があると感心しました。

八代樣の芝公園、例の御筆法で詩的に書き上た處はうつとりさせます。此處は公園だと指さす譯には行きませんが神秘的の感が起ります。

しげを樣の苦しい動物園――昨年酉の市に父に願ふての吉原見物を思ひます。蒼白の面賤しい目鼻口、强度の疲勞に厚化粧した嫌ふべき印象が再現されましたあゝ悲むべき同性よ。

眞情――やゑ樣の濁つた室に輝く電燈、は貴女も渦巻の一人りでは――と申たら失禮かも知れませんが、よく急所を貫た書き方は全たくそうと思はせます。讀んで泣きました、そうして繰返して、私の周圍はそうでは無いと自覺した時は幸福だと喜びました。

菊子樣の入京記――初めてお目に掛つた時は驚きました。なぜ他の人は斯く容易く上京ができるかと羨みました。兄に語つたら、其の中に潜んでゐる悲哀があらうと言はれた。果して迸り出づる涙を抑へて强固の確信を以ての御上京は、君が活社會に奮鬪すべき天の使命でせう――。

御老體のお祖母樣と貴女を賴るお一人のお母樣を殘しての御上京は痛切に胸に入ります。君の心を忍んで泣て居ます。

若松樣の闘ひ疲れて――涙をおさへて眞實を語つてゐる人と共に泣きたう御座います。「昔知つて居た女はお前では無い」、世の戰ひに刺戟に斯うも變るものかと思はせます。整理のついたお心はどうぞ疲れずに世の迫害にも勝つて下さい、貴女の前途の爲めに蔭ながら祈つてをります。

實際的生活――細谷樣の生活の階級、感心いたしましたと申したらわるいかも知れませんが、能く面目が見えました。

町田樣のバザーの當日、面白う御座います、學校時

代の學藝部大會の時が夢の樣に浮びます、聯想されます——あの美しいお姿があらはれて熱したお聲表情のある、お瞳が拜見ができたらどんなによいでせう、惜い樣な心がいたします。

眞面目なるを取る（評）

◎新しき文學とは何ぞ

三重縣　雨屋正子

◎題が餘りに强過ぎるので、本文に立ち入る際に皆樣の落膽を恐れます、決して〳〵妾にはそんな難かしい純文學の議論は出來ないのですから其おつもりでゐて下さい、たゞ自分の感じたことを一寸言つて見るつもりなのが、題の着け樣に窮して、實は此樣な途方もない大きな題にしたばかりです。

◎新興文學——私には何うも新興文學が愉快に感ぜられません、自我の强い、片ねぢけな性格と、陰鬱な、暗い〳〵、まるきし氣の狂ひ出しさうな氣分とを以て此樣な怖氣のするやうな物を出して、此で現代思潮の代表作だとやら、現代青年の新らしき解決だとやら言うてゐる氣が知れないではありませんか。

◎果して現代の青年と、新らしき思潮は、然うほど陰鬱な、不安な、おど〳〵する性質なものでせうか、いや、其は言ひますまい、たゞ私等は今一度、文學とは果して何ういふ性質のものかを考へたいのです。

◎で、私等は文學は唯人生の娛樂に過ぎぬ、即ち文藝上の作品は芝居や活動寫眞や旅行や生け花などと同じく人生の方便として、息をつなぐ娛樂に過ぎぬものであると思ふのであります、又是の解釋が普通であつて且つ正當なるものであらうと思ひます。

◎若し娛樂に資するものならば、何故に讀者に美しい印象を與へる工夫と、快き感想を起さしめる思案を何故しないでせう、人は何うか知りませんが、新興文學に依つて受けた印象は私に取つて極めて不快な、黴菌の飛散してゐさうな裏町を通る如き陰鬱な感じでありました。

◎といつて新興文學が惡いとは申しません、多くの學者方の主張せられる事ですもの、とても私等の指さず事さへも出來ないのであります、たゞ私等は文藝上の作品、娛樂的文學ならば最つと明るい感のする十人に面白く讀まれる、而も傑作が出てほしいと思ふのであります。

●豫告●

觀劇趣味の變遷　吉田紫花

初めて見たる東京　蔦の葉

右二篇は次號に於て發表すべし（記者）



書簡文

編輯局選

○病みて（地賞）

小石川　つゆ草

姉様、私又寝て居ます、でも心配遊ばさないで下さい、唯風邪なのですから、少し寒けがするのになあにと打ちやつて置いたのでこぢれて一時は發熱三十九度、頭が破れ相に痛みました、母様にどれ程お氣をもませましたらう、眞實にわたくしは不孝の子でございます。年に一度や二度は御藥に親しまない事はないのですもの、—お弱い母様が頭をもんで下すつたり背をなでて下すつたりした後で、私お蒲團被つて思ひ切り泣きます、溫い御情が泌々胸に浸み通つて何と云へばいゝのか無暗と感情が高ぶつて—苦しい中はねえ姉様頭が輕く成つたらと其外の思は無かつたのですけれど、なまじつか直り懸けて御床に居るのが辛う御ざいます、本見るのも飽きたし、只々人戀しさが胸につき上げて參り升、健やかだつた日が懐しうございます。姉様今頃何して被在るでせう？ 昨晩ねられぬ儘お亡り遊ばした××様の事を考へて見ました。隨分御悩み遊ばしたに係はらず御臨終は夫は〱落付いて御立派だつた相でございます。天の父の御許に歸ると思召した御心に死も御恐れ遊ばさなかつたと見えます。堅い眞の信仰に生きる人達は幸福で御在ませう。羨しう御ざいます。そして自分を顧みて、佗しい寂しい思も致しますけれど、姉様私まだ神の御手に縋らう氣は起りません、何かに便つて苦痛を忘れるのは意氣地ない様で嫌なのです。——先刻母様に躑躅はと伺つたら、もうとつくに散つてと淋しい顔をなさいました、寝付いた時蕾が堅かつたんですのに。斯うやつて枕を落ち付けてると微な電車の地響や、けたたましく自働車が門前を過ぎたり、物賣りの呼聲や絶えず町のどよめきが耳に入ります。吁活動！ 世は人は刻一刻止まずに活動して居るのですもの、じつとして居られない私の性質姉様御存じですわね、其物音にそゝくられて茫然と寝てゐるのが

焦つたいのです、皆に追ひ越される獨取殘される、そんな事も強く思つたりし升の。御庭は初夏の風にいきいき若葉が薫つて居り升。少しまだふらつき升がじき起きられるだらうと思ひ升、え屹度起きますわ。姉様何卒御からだを御大事に遊ばして下さい。さよなら

「え、屹度起きますわ」といふ句が全體の調和上よく利いて居る、現代の空氣は弱い女を容れない、貴女には何處か強いウイルのあるのが賴もしい(評)

○京橋の美代様へ（入賞）

東京　葉山しづ枝

美代さま、その後はしばらく。もう學校へも行けないし、この頃どんなにお暮しでございます。つひ先日まで學校で、皆さまにかくれて庭の隅の方に行つて小説の話をしたり、お轉婆だつて笑はれるのを餘計面白がつて、腕をくむで、『綠もぞけき柏葉の陰を今宵の……』と歌ひながら荒れまはつたのですのに、もうそれさへ出來なくなつちやつて、寂しうございますわね。

それに私の家では、今度こんな田舍へ來て了ひましたんですもの。父が三重縣へ轉任することになりまして、皆行くはずでしたが、義夫や千賀さんの學校の都合もありますし、母も私も東京を去るのが厭なもんですから父に反對しますと、ぢや神田なんかに居るより靜かな處へ行けと云つて父の出發前に、大いそぎで、こんな田舍へ押しこめられて了ひました。こんな次第で、お知らせも致しませんでしたが、どうぞ惡からずね。どちら向いても知らぬ方ばつかり、旅がらすの身は寂しう御座いますが、でも靜かでよろしうございます。裏口から出て行きますと、すぐそこに廣い〱麥畑があつて、その中を少し行くと小川もあり、若草の一ぱいに萌へて居る原もございます。その原へそつとぬけ出して、草の上に腰をおろし、なつかしい草の匂ひを吸ひながら、心ゆくばかりたのしい空想に醉ふことも御座いますが、たいていは母と二人でお裁縫をいたして居ります。女學校を卒業したと云つても靜枝のやうに不器用な女は珍らしい、私なんかもう二十歳の時には一人で家を切つてまはつたもんですと、一日に三度も五度もお小言をいたゞいて、それでも大人しう何にも云はないで暮して居ります。でもさびしうございますわ。

おひまが御座いましたら、いゝえ、お暇がなくとも近い内に是非一度いらつして下さいませ。母と二人でお待ち申して居ります。さよなら

とドク現代離れのした娘々した風が氣に入つた、おとなしい下町式の文、但し「なつちやつて」が少々氣になる(評)

【秀逸】

○田舍より

土佐　桃の花

兄様、なつかしい兄様よ、戀しい兄様よ、如何してらつしやるの?、私はね、つひ今迄兄様の黒の靴下を編んで居ましたら、急に手元が闇くなりましたでふつと痛くなつた目を上げますと邊は茫と底深い様な草色に暮れてゐました、柔い光をおびた月は藍色がゝつた空にうつすりとかゝつてゐますの兄様の仰がれる月も矢張り御窓から西の空に見えるでせう、そしてこれと同じ月ね、そう思ふと妹とたつた二人で淋しい留守居の私はたまらなく懐しくなつて編棒を握つた儘ヂッと眺めて居ましたの、そしたら遮ぎる物も無い軟かな廣い空に御姿が浮んできますもの、柏木柏木つてどんな處でせうね、矢張り森もある川もある坂もある好い處でせう、よく小説の主人公なんかが散歩に行きさうな處ね、葉舟様や夕暮様のお住居もお近くですつてね、毎日訪問ばかりで御勉强が……!?と、ちつとばかり心配にならない事も無いわホヽヽ。リボンなんか欲しかありませんわ、兄様が角帽被て買に行らつしやるの!?詩的ぢや無いわ、田舍者の私は小間物屋から若い男の方が出て來るのを見ると小説的みたいないやな心地がしますの、まだ買つて戴くのは早いわ、ね、兄様、餘りハイカラにならずに御勉强なすつて下さいね、ドクトルはハイカラだけれど、でも夢二様なんかの三分の一も頭を光らしたらそれこそお友達にお賴して切つて戴きますよ、餘りハイカラで無い方はお體も御丈夫で勉强も出來てきつと成功するんですから、兄様もきつと



日永　深川　鈴木きみ子

ね、あゝ御成功を祈りますよ、さよなら

なかく〈振って居る。但し夢二君が頭を光らして居ると云ふのは寃罪なり（評）

○宮崎より

牛込　平塚　白百合

東京とは一月違ひ位でございますね。汽車のレールが一尺そかゝつてゐない極ひらけない處なのでございます。

南も此方になりますと南洋の島を思はせますのよ、あの地圖で點位になつてゐる青島ね、あれなんかまはり一里の全島椰子がシックリと青くしげつて、暖潮が静かに岸をぬつて流れて居ります。そして何鳥だか白いつばさの大きな鳥が、島から海へとスーッときれる處なんか心持がようございます事。都から出て男性的とでもいふ潮の香をかぎますと　沖に見える外國行の船にのつて行きたいやうでございますよ、と云へばきつと房州通ひの船に醉つた昔をスッパぬくのでしよう、ホヽヽヽ。　珊瑚もこの海から生まれるさうですの。草木は土地が肥えてゐるとでも申すのですかのびますこと、秋は此處のコスモスが有名だそうです。どの家でも一面に色どられるのださうですからどんなに秋が待遠しいことでございませう。何に致せ夏が長くて冬が短かいのでございますから北の冬の話しなどいたしますとうそのやうに思ふのでございますよ。人氣は惡い處ではございません。開けないだけに質樸でして田舍の方へ入りますと眞夏は木の下に湯巻一つで骨組のよい身體を風にふかせて居ります。これだけお聞きになりましたらもう充分こゝの開けないのがおわかりになりましたでしよう。でも女學校もございます。今申したのは田舍の女でございますよ。でも東京のやうに二尺の袖を……なんてやさしい姿ではございません暖國式の身體につゝ袖でございますもの、ヘリオトロープもみ園お白粉も名すらしつたものはまあございますまい。

葉もれの月もよいころとなりました。今夜あたり日比谷の音樂堂では美しい音色が青い月の中にとけてゐるのではムいますまいか。アト弟が都の香がかぎたいなど申しましたの、此處もすてがたうございますが都にこした處はございませんわ。どうぞおたよりをね。時節がら不向な方からでさぞおつらうございませう仁丹でもおふくみあそばしてね。さよなら。

今華氏の九十八度、昨日は百度をこえました。

何を書かせても器用なのは此人なり、惜いことには筆が餘り輕妙過ぎて、スラくと走つて行くことだ、併し斯う云ふ手紙などには、そんな贅澤も云へまい（評）

○従兄の許へ

赤坂　壽女

其後は誠にく〈御無沙汰申候。お變りもなくや、御地

よりも餘りお便りなく、實は少々お恨み申居候。太つたゆうれいの出ない内便りし給へ、と此は兄上のお口惡にて候も、其程までもなく御安心下され度く候。東京もさして變りたる事もなく、芝も皆さま御丈夫にて、一昨日も伺ひ候處、伯母様も此頃は御持病もどこへやら、義ちやんの五月人形かざり居られ候。此は行雄のですと仰せられし内に、あたら花のかんばせを墨くろ〳〵と、おひげのある神功皇后を拜見致し候。行様が七ッの時のおいたの由、實に〳〵お床にありし眞面目のお寫眞と見くらべ、涙の出る程笑ひ致し候。松本の常雄様も其は〳〵お美しいお嫁さまお迎へなされ、昨日御二方にて御赴任地へ御出發にて、新橋までお見送り致し候。丁度一昨年の今日、行様をお送り申し、最早丸二年にて今更の様月日の早きにおどろき候。伯母様より御依頼のフランネル、本日は出來上るべく、早速御送り申べく候、誠によきがらにて行様には勿體なしとてつひ口すべり母上にお目玉頂戴致し候。正直なる私こゝにて白狀致候。

いつもながらくだらなき事許り申上お免し下され度く候、時分惡き折柄くれ〴〵もお身體大切になさる様此は母上の重ね〴〵の御言傳へに御座候、こゝのみ女らしふあら〳〵かしく

才女の文、氣のきいた文(評)

○友に

陸奥露草

房江さんお手紙有がたう、私ね、今朝白手拭の姉様かぶり宜しく山着の筒袖で桑摘みに出掛ける所でしたの私こんな姿すると、妙に氣が怯けて、邊りにばかり氣を配つて、それは、氣を採みますのよ。おどおど、出やうとする途端に、郵便と一封の書狀、チラと見ると懐しいあなたからのお便りでせう、わたし嬉しくつて嬉しくつて、でも家へ入つて見たりすると、此の忙しいのにと何處からか怒聲が飛びますから、その儘ふところに抱いて行つて、人の見ない桑畑の崖下で讀みましたの。スルと涙が出る程うれしいなつかしいお筆づかひ、よんでる中に氣がぼーとなりましたわ、私何とか云つてももう、此んな田舍嫌ひ、而も世間を飾る義理とか恩とかのもとに養女と云ふ肩書なんか持つて、憐んで下さい房江さん、初めて二人上京して神田の宿屋に着いた時、無理に東京辯を眞似て女中に笑はれた事など遠霞のやうに胸に浮び出ると、一種の強い虚榮心の様な物が熱の様に湧き出しますのよ、ほんに房江さんは羨しい、生れ故郷は同じでも、育つて見ればひどい違ひ、一人は都に學ぶ美しい人、一人は田舍に土掘る醜き者、もうこんな事止しませうね、家へ歸つたつて早速御返事認める事が覺束ないと思ひましたから、

手帳と鉛筆身につけて居るを幸膝の上で書きました、所々消えかかつて居るのは桑の葉の露です、ホヽヽまさか涙ではないことよ。さよなら

眞情を以てまさる（評）

○出張先の夫に

大分　原田澪子

それ御覧なさい、こんなに雨が降るのに、降りやせんよく／＼つて人を泣かせてまで出るなんて。私し今日はお琴にも行かないで今迄一人で泣いてましたの、だつて淋しいんですもの。こんな雨が降るのになぜお出なすつたの、今から歸つて下さいませな。縁までしぶきがかゝつてよ、こんな家に一人居るのはいや。今夜もめいるやうな雨の音を聞いて、淋しい燈火の許で一人御飯をすますなんて思ふと悲しいわ。人を泣かせてまで御出なすつた罰には必つと明日も大雨が降つてよ、御天氣だつて私の涙で降らして見せますわ。いくらお勧めだからつてこんな旅へ連れて來て一人ほつとくなんて酷いわ。明日もお歸りなさらなかつたら私し、電報で母樣呼んで歸つて了ひますからいそのこと？うそ、うそよ。私しいつまでも音無しくして待つてますから早く歸つて頂戴、少しでも早くね。

よく／＼いへば情緒纒綿、惡くいへば少々甘つたる過ぎる、大分邊はノンキで結構ですね（評）

○櫻草便り

岐阜　葛の葉

妙子樣、貴女の櫻草は咲きましたつてねえ、私羨敷うございますわ、私のはお醫者さんも手をはなしなさいます程でしたけど、御蔭樣で命丈はとりとめたらしうございますがねえ、近い處ならお目にかけ乍ら御話致すんですが、どうも東京の貴女に電話でだつて見せられませんから、ほんとにひよろ／＼して居ますよ、毎朝眼ざましに見に行きますがねえ、少しづゝは力づく樣ですわ、だつてあなた病人櫻草になる筈ですよ、荒川堤を小半日新聞紙に包んで振りつけて、やはらかくも無い麴町の妹の處に雨垂わきのかれ土に十日間もあづけて、水をやつたり忘れたりてな鹽梅式、漸く力づいた頃また上て而も箱入の湯呑へしのばせて此度は汽車積、澤山の荷物にへしこんでゝすよ、そして直ぐならまだしも、用事のある身であり乍ら歸宅したら當時出られないからと切符通用の許す限り、道々共進會だの何だのと下車しては思ひ切りやりつけましたものですから忘れたつちやをかしいですが、二日も氣なしですんで夕食中思ひ出して、さあ大變、早速湯のみを出して有り合せたお茶の呑み殘りを入れときましたが、やはり壽命があつたのか枯れもせずに、歸宅早々又出す事を忘れて、だつて皆が私をとりまいて立せもしま

せんからなの、翌日から身體がぐつたりして、疲れて疲れて仕樣ありませんのでした、早朝氣がついて三日目に、こしはびの來たのを鉢に植ゑました樣なわけですから、人間にだつて私の櫻草みたいな運命に落ちてる方もありませうねえ、貴女や私はその事思や仕合せよ。

櫻草の虐待はいけない、そんな事をすると櫻草の幽靈が出ますよと云ひたいが、無慮x貫の貴女には、そんなオドカシも利くまい、まア折角お大事に…………(評)

○再び兄樣に

宮城縣　眞野圓葉

兄樣嬉しう御座いますこと、近日中にいらつしやるつて、私早く悅子さんを抱つこしてあの落ちさうな頰にキスがして見たいわ、それから新らしい姉樣にも早く御目にかゝりたいのよ、姉樣は音樂家でゐらつしやるつてね、私バイオリンを教へて頂くわそして一しよに歌つたならどんなに樂しいでせう、私澤山御馳走を拵らへてお待ち申しますわ、お前の御馳走なら眞平だなんておつしやつちやいやですよ、今ではねお料理の腕は中々出來てゐるんですの、嘘ぢやないことよ、兄樣は私の事を田舍育ちの無作法者だつて姉樣へお聞かせなすつたんですてね、酷いわ、兄樣だつてもとは田舍者でないの、威張つたつて駄目よ、ほら、兄樣が誰も居ない間におすしを拵らへて食べよつて御飯を炊いて焦つかせた時、オイ鞠子早く來ておくれつて悲鳴を上げて私を呼んだ事があつたでせう、ホヽヽ私皆姉樣へ吹聽して上げてよ、いゝこと？いけなかつたら賄賂を持つていらつしやい、姉樣の爲には尙の事よ小姑は鬼つ子千匹ですからね、賄賂には空氣草履に襟留がようござんすわ、下さらぬと二千匹になるかも知れなくつてよ、オヽ恐い！。

どうも怖しい勢ひだ、盛んだ、驚く(評)

○私口惜しくつて

越後　田中牧子

きのふ久し振りに野へ參りました。さつき晴れのはれやかさ。野には色々の春の小草や、蝶なども舞つてゐて春のさかりの美くしさ樂しさ。

小さな家をたてたり、おほばこを出したり、お饅頭など攤ろげてゐますと中學の生徒が二人來たの。私は洋傘にかくれてもうもう眞紅になつてゐると(詩的だね)と云つて家をつつくぢやありませんか。そればかりか洋傘を外づして私にからかふのだもの。

私はあれらが歸つたあとになぜこれ程の侮辱に默つてゐたのだらう。反抗しなかつただらう。日頃、女子の矜りだの、權威などと思うてゐて、なぜこんなにすぐ眞紅になるんだらうと、淚さへこぼしたワ。

私口惜くつて〳〵――。

其處が女だと云つて舊い頭の人は欣ぶだらう、女よ、正しき事の前には强かれ、飽くまでも强かれ(評)

○留守宅より

福岡　登譽子

汽車中は、往きと違ひまして、人も左程注意致しませんので、私も平氣に(其實、心淋しう感じながら)、致して居りましたので、恥かしい思ひも致しませんで、嬉しうございました、オホヽヽヽ。御免遊ばせ。一人淋しく車に搖られて宅につきますと、華かなのは門の瓦斯燈計り、……部屋々々は固くしめ切られて、家の中の空氣は、何となう冷うございました。只、松の部屋だけに、薄暗いランプが燈つて居て、松は居眠つて居たらしうございましたに。

今朝も、松と淋しい食事を致しまして、學校へ參りました。屹度、皆樣にからかはれるだらうと、途すがら、胸がどき〳〵致しますのでね、引きかへさうかとふと後を見ますと、生憎、黑い洋服が見えたぢやあございませんか、もうどうする事も出來ず、大急ぎで校門をくゞりました。案の定、敎務室の塗板に、色チョウクの二重丸附で、○○○子女之祝結婚と書いて、右肩に鶴、左の下に龜が書いてございましたよ、それは、先日の披露の時、赤垣源藏德利の別れで、雲右衛門もはだしだとおほめになりました、あの森田先生の筆でございますの、かね〴〵、覺悟は致して居りましたものの、かう手嚴しい宣告を受け樣とは存じませんでした。皆樣が被居らぬを幸、敎室へ逃げ込まうと存じましたら、それは駄目でございました。ドヤ〳〵と八人揃つて被入いましてね、お目出度ございますの、先日はどうもだの、且那樣はのと、惡くすましておからかいなさるのですもの、此時許り、學校を止したいと熟々考へました。でもね、自づと浮び出る微笑は、何故か、抑へ樣として抑へきれませんでした。

始業式に出ますと、やつぱり氣のせいでございますね、五百に餘る生徒の視線が、私一人に注がれて居る樣で、鳥渡の囁きにも、些の微笑にも胸を躍らせ顏を赤めました。今日の出來事も亦、新婚の日誌を飾る一ページとでも申しませうか。オホヽヽヽ。松始め物皆がおかへりを待ち詫びてますから、どうぞ一日も早くおかへり下さいませ。え、「お前もだらう」と、それはもう仰る迄もございません。オホヽヽヽ。

まアお目出度うとでも云つて置かう、少々淺薄だけれど……(評)

○江田島の兄さんへ

ゆり子

御手紙難有う、セーリングは面白かつたでせう、だけど雨ぢや閉口でしたね、兄さん二言目には「菓子〳〵」ておつしやるから、○でをかしかつてよ、夕べ中兄さんから可愛想な話きひたからかきます、兄さんの受持つてる牛屋にね、十三になる男兒があつて學校の餘暇に牧夫と牛の世話をして何よりの樂みとしてたんですつて、そしたら運惡く牛疫でパタパタ殺られたんです、夫れは丁度其日の午後の三時頃で、やがて其子が歸つて來たんです學校から、何氣なく牛小屋を見ると日頃可愛がつてた十五頭は枕を並べてるんでせう、學校の包を投出すが早いかスーッとかけて、一頭の首にだきつきワーッと泣き出したんですつて、之を見た其子の兩親は勿論檢疫委員の兄さんも、殺伐を業とする屠殺夫も、思はず涙にむせばれたそうよ、其子の心はどんなでせう、牛に靈があつたらさぞ喜んだでせう、兄さん、ゆりはお話きいて泣いたのよ可愛想ね。早瀨の瀨戸つてそんなに佳い所(?)兄さん別莊おたてになるなら、私ヨットでゆくわキンツパおみやにしてね。今晩はこれで猫ちやんは大きくなつてよサヨナラ

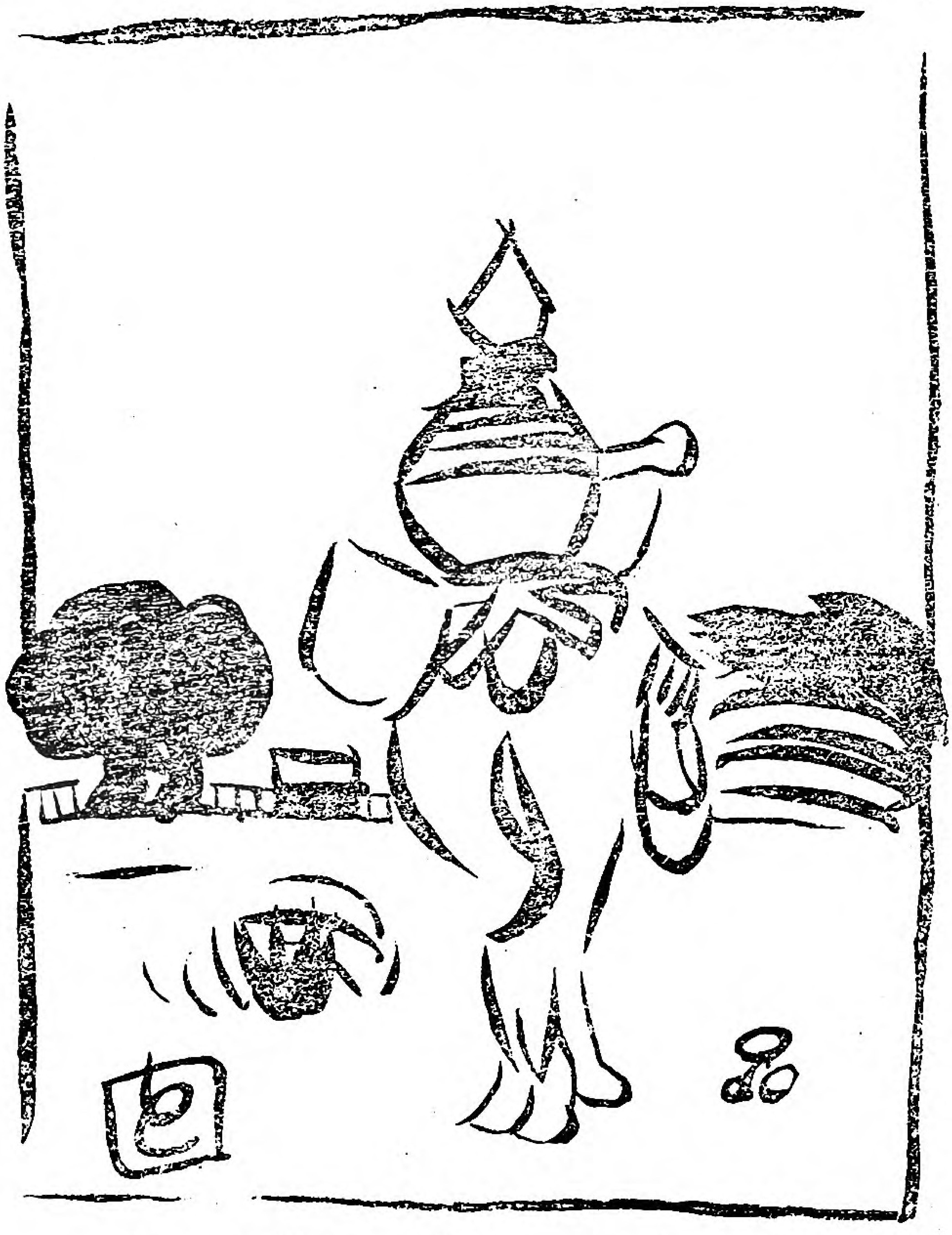
牛に抱きつくのが妙に氣に入つた、こんな手紙もいゝ(評)

○山里の友へ

三重縣　山崎初子

光子様先日の御返事たしかに拜見しました、御親子お三人にお女中まで大の御健康ですつて眞實にお目出度のね、お喜び申して居ますよ、敏ちやんも近々御成人で此頃はキャツキャと御笑ひなさいますつてまあどんなにかお可愛いでせう、御樂しみですわね、それはもう大抵な御骨では御座いますまいとも！私いつもねお湯屋なんかで御子連れの方を見ちやお湯の一ぱいも汲んでお手傳ひして上げないでは居られませんもの！でも其れがまた御自分には左程苦にもならないと云ふ事ですね、矢張り赤ちやんのお蔭なんでせうか奇妙なものね。それはそうとあなたどうしてもよう出ていらつしやらないの！敏ちやん御寫眞も撮らなければならないでせう?!それに私もあなたの赤ちやんに初對面したいぢやありませんか出ていらつしやいな、お子持ちだからつて少とも御遠慮なんかいりませんよ、敏ちやんのおそさうの御心配なら、私とこ小蒲團も敷合羽もありますし、皆が子供好ですから、汚ないなんて思ふ者は一人もありませんからね、今こそ宅も小供なしですけれど、五人も育つて來たんですから何もかも分つて居ますよ、ですから是非出ていらつしやいましな、あなたにもそちらへ嫁らしてから………そうね一年半ばかりも御目にかゝらないのですもの、二十日頃にね、いゝでせう!?お待ち申して居ますよ。變つた御話も澤山ありますけれど態とお知らせしませんわ、赤ちやんのお顔見せて下すつてから話しますよホヽヽ、中々意地惡るでせう！ぢや屹度ですよ、ね、御良人の君によろしく赤ちやんにも私に代つてキツス一つ願ひます、さよなら

娘さん離れがした筆つきだ、おちついてシツカリと書けて居る(評)



郊外　茨城　小堀とし子

○友の許に

雪子

昨日はお手紙頂きましてありがたう御座います、卯の通り櫻花の盛りは早や過ぎて新綠の色いや增す頃となりましたが、あなた樣には其後相變らずお變りがありませんに、御令妹は早や酸類要求病にかゝらせられましたとか、ほんとに早いことですね、あとの烏が先になるとは此事でせうね、あなたも確り御奮發遊ばせな、人は迷信と申すかも存じませんが諺に鰯の頭も信仰からと申す事も御座います、お隣の須磨子樣も鬼子母神樣を御信仰遊ばして、其お蔭樣で玉の樣な男のお子樣を擧げられまして、和氣

藹々たる家庭を作つてゐらつしやいますから、今朝父の出張を幸に母に願つてお札を受けにお詣り致しまして、只今小包便でお送り致しました、どうぞ朝夕御心こめて御信仰遊ばしませ、二十世紀の令夫人に何を失禮なと仰しやるかと恐れながらお勸め申します、私も共に朝夕お願を致します、併し御利益等分説なんか持出しは致しませんから此點は御安神遊ばしてホヽヽ、さよなら

なかく常識的だ、併しお守りの効能があるかないかは、心理學上問題だ、我關せず焉(評)

○遠き友へ

信濃　優　梨　子

愛樣！それでは餘り優梨が、可哀想で御ざいます。一度ならず二度のおたよりにもお返しいたしませんでしたのは重々惡う御ざいました。けれど貴女をお見限り申してなんて、まア愛樣は優梨を其麽女と思召して被在いますの？幾百里と離れた悲しさには、よもや私が斯うして病んで居るとは、夢御存じ遊ばさなくてでせう。お手紙いたゞいたらすぐお返ししなければ氣の濟まない私は、まアどんなにくあせりましたか………。

一昨年の丁度今頃から病みました、盲腸炎の再發らしく、二週間許り前から床に就いて居ります。お飯が少しも不可ませんので、流石の私もすつかり弱つて終ひました。昨日まではもう横に寐たきり寐返りするのも恩ひで御ざいました。そんなですから、廣くも無い庭の春葉が、日一日と色濃くなるのを、只眤と見詰めて居ます許り、もう倦々して終ひました。それでも今度は、熱も御ざいませんで、さう痛みもしませんので大へん樂で御ざいます。今朝は珍らしく氣が晴々して、何か讀んで見たい樣な氣がしますので、此間に一寸鉛筆でなりとお返し致さうと思つて居ります處へ、三度目のお手紙で御ざいました。もう私は堪らなくなつて、恁歴原稿紙へ走り書、手の振へるのも構はずになぐり書きいたしました。何ぞお察し下さいまして、幾重にも御許し下さいまし。此手紙がお手許へ着く頃には、どうか御飯がいたゞける樣になりたいと思ひます。

病氣でも此位書ければ先づ結構です(評)

○御相談

前橋　み　ど　り

一昨日、手紙がきたばかりだのにつてびつくりなすつたでせう、少し御相談があつて!!姉さままきいて下さい。

私のゐる此家は御存じの通りすぐそばにこゝの鎭守の八幡樣がありますわね、ですから、一日とか十五日とかいふ日は、殊に朝早くからお詣りがたいへんです、それ色々な人が行きますの、私はこういふ朝きまつて部屋のまどを細目に明けて、そこからひつきりなしに通るこの人達をながめては、いろんな事を想像してそれを樂しみの一つにしてゐるんです、昨日は一日、例のとほり見てますとね、今、石段を下りてくる美しい人、すき通るやうな白い顔に、粹ないてふ返し、荒いしま御召のすそをさばきながら……私はびつくりしました、姉樣それはね、あのおしもさん!!五年前まで隣り同志で仲よくしてゐたおしもさんでした、どうしようとおもひましたが、思ひきつて聲かけて見たら、むかふでもびつくりして、家の前で十分許り立話し、色々話しがあるから、かまはなければ、家へきてくれつて云ひますの、姉樣おしもさんは、今どういふ身だかお分りなすつたでせう、たづねていつていゝでせうか、私は學生向ふは……どうしても私一人で定められないので、姉樣のお考へを伺つたわけ、なるべく「いゝでせう」このお言葉がほしいわ。

こんなのも一つ位はいゝ(評)



短文

編輯局選

○母不知（地賞）

岡山　片岡慈

小包膝に嬉しげな繁様のお顔、開けてがつかり失望らしく、何母様が洗濯足袋をつと私の前に投げ出された勿體ないとみつめる瞳は霞んだ、前にもまして白く洒された十餘足、且つ兩の緒ずれの所々細かくさゝれてある。

せめては人の母の心盡しなりともと其日一足拜借して登校しましたが、おかげで暖いめをしたのも矢張人の母の惠みでした。

評　痛切

○琴の稽古（人賞）

伊豫　よしゑ

曇つた空から日がパッと射すと、急に障子が明るくなつて格子の影がハッキリうつる、新らしい青疊が何故か浮き上つて見える「――去年の秋散りし梢は綠して今將峰に有明の――」向ひ合つて彈いて居るお師匠さんと晶子さんの手が白く輝いて、花でも落ちて來るやうに美しい。

評　音波一旋又緩にかへる

【秀逸】

○何處

德島縣　紫花

漸く坂の峠へはい付いて、なだらかな草の上へ崩れる様に坐つた、ふと氣がつくと自分の後に「郡境標」が建つてゐた、一體自分は今どちらの郡に居るのであらうか、標柱の文字は黒々と讀まれるけれどそれでは得心出來ぬ、と益々解らなくなつて遂にはてゝが世界のどこであるかさへ解らなくなつて仕舞つた。

評　心天に馳すれば人爲の無意味を知る、さうなくてはならぬ

○墨

東京　柴井やよ子

明るい座敷で、畫をかくために、筆にたつぷり含ませた墨の一雫を何の氣なしに筆洗にぽたりと落すと其一滴は小さい輪を畫いて徐々と水中を

落ちて行く。私は秘を見出した樣に喜んだ。又一軍、今度は巴の形してる先の輪に絡んだ。たまらなく嬉しい。

評　造化の神も亦微笑まむ

○明暗　三ケ島よし子

新らしい定紋染めぬいた吹き流しは十間にあまる竿によつて、瀧のやうになつたり大凧の尾のやうになつたりしてゐる。下には牡丹の花が五つばかり咲いて眩ゆいやうな庭から、泣きもせぬみどり子の熱い手をとつたお醫者樣が出られた。

評　新緑の愁ひ、白日の哀み、初夏の風がむうつと暑い

○初夏　牛込　平塚白百合

スッカリ庭が青くなつてしまつた。カラリとした紺色の空をヂーと見つめてゐると鳶が大らかにまつてゐるのびやかな節のこゑのいゝ苗賣が垣の外を唄つてゆく、松の緑はさんでゐる植木屋がから日が永くつちややりきれない、とぐちをこぼしながら枝にこしかけてチヨキン〳〵やつてる。髪を洗ふかねーと茶の間の方で母樣のおこゑがした。

評　干竿に萠黄の蚊帳など

○淋しき蚊　三重縣　まさ子

夏來ることの何故に私には係うも苦しいであらう、六月近き夜、ふと耳のあたりに唯一匹、心細い聲立てゝ蚊の鳴くのを聞くと、堪らなく淋しさが胸に迫る、遠き蛙の聲と、青葉の月と、蚊の聲と、あゝ私には六月の印象ほど苦しいものはない。

評　卯の花の流れで洗濯でもしたらいゝ

○癖　千代

長い長い手紙を一寸位に裂いてそして讀んで見る、今度は五分位、三分位、更に横に引き裂いて讀んで見る御不沙汰、梅の花、兄が、上京等ととぎれとぎれの文字をこんよく讀んで見る、時によると其裂いたのを亦つぎ足して見る事も有る、別に面白いと云ふのではない、之が私の癖。

評　あまり感心も出來ない癖だ

○悲しい　はりま　みどり

只わけもなく悲しい、友は「貴女の御病氣を見舞ひに行かなかつたから怒つてゐらつしやるのでせう」と云ふ、あゝ此友――私はいつそ此の友の前で涙の涸れる迄泣いて〳〵さうして逝きたい、此樣に思はれて居るのだらうか、あゝ、私は悲しい。

評　此ギヤップ遂にうづむ可らずとせば哀むべき哉泣くは可し、是れ所以ある涙

○何故？　妙光子

何んだか私無意識に都が戀しい。行きたいわ、友の行つて居るのが羨ましいのか。あの華やかな、都が再び見たいのか物學んだ學校が戀しいのか。いゝえ、いゝえ、さうぢやあない。何んだか知らないが行きたくて行きたくて仕方がないのよ汽車を見れば

飛び乘りたい、何故だらう。

評　無意識は痲痺したる意識也

○桐の花　東京　若紫

遠くから見ると非常に美しいけれど傍で見ると細かい毛がムク〳〵して花びらがいやに厚ぼつたくて汚い。ボタリ〳〵と重さうに落ちると妙な匂がして猶厭だ、女を花にした樣だと秀夫さんは云ふ。

評　秀夫さんの言奇警々々

○若葉　三島　雪子

草家の納戸で娘が機を織つて居る。白い顔と赤い衿が灯の影を洩れてちら〳〵輝く、東の丘からは月が登つて若葉の露に光が凝つた。と何處からか來たか若い旅人は木陰に石像の如く佇むで居た。――靜に聲を忍ばせて乙女が歌ふ、甘い春の歌の譜の盡きるまで――。

評　青葉で綠とつた印象畫

○かはり　札幌　中原登美子

村で一番高襟であつた斐さんが、女學校を出るとすぐ、あまり豐かでもない農家へ嫁かれてから二年目の今日は一人の子の母となつて毎日白い手拭の茶色に汚れたのをかぶりながら、身なりなんかちつともおかまいなしで馬追ひしたり肥料あつかつたり平氣でして居らるゝ。

評　彼れも一時、これも一時

○我が身　篤子

朝清い心の希望に晴々してる私は、日が高くなるにつれて、無意識に世の人のする樣な事をする、そして夜は、自分といふものゝ解決に苦るしんで、夜具をぬらすんで御座いますあゝ滿足すべき私を、いつ得られるでせう。

評　今日でも、明日でも、火の洗禮は君を待てり

○額　熊本　波の花

がらりとペンをなげて仰いだのは、いつも目なれた額、だが今日は何だか新らしい物が見える、白いカラーが目に立つ、ページくる手がおぼろに見える、おや暗くなつた……………今度のは手紙だいたゞく人は誰？私の魂は額の中にすひ込まれた。

評　心靈の抱擁、沈默の接吻

○花束　愛知　佐分華影

美くしい日は羽衣の樣な雲を美くしく彩つてかくれた又明日、と云ふ樣に、ばらの花が飜れた燃える樣な紅い花を見詰めて居ると鐘がなる「春も行くわ厭ね」綺麗な春さん花壇を眺めたが春の花は皆「えゝゆくわ」「金魚屋ももうぢきね」私は散りかかつた皆の花を集めて花束を作つたがどうしようかと思つた。

評　執する勿れ、しづかに葬れ

○醒めし夜半　麻布　葉がくれ

はつと思たら、夢は破れた、半で消た先きを續を見たいと思て胸に手をあてて眼を閉たが駄目、一度醒た夢はもう來ない――何故何處へ行つた焦たけれどもふけた夜は聲も無い、ゆつたりと歩む猫の步音は高く低く刹那に――、ゴトンと一時を聞た夢心地は現實の夜に歸つた――何とも解らぬ暗闇の響きはしん〳〵と耳に頭に囁てゐる。

評　肯定の聲否定の聲、建設の聲破壞の聲、破毀の鎚の響、要するにこれだ

○兄さんの親切　淡路　菊子

「今日はお前がわるいので何だか案じられて早く退いて歸つた」彼方の部屋で服をぬぐが早いかもうちやんとお向ひの理髮屋でパチ〳〵と白か黒かの石を並べて餘念のない樣子―夜お歸りになつたとき「兄さんお願して有た梨は」と尋ねると「ヤア忘れるでなかつたが實は今日は」と一寸お頭をかいて「會社の方が忙しかつたので」と後の方小さなお聲。

評　兄さんの深切は社會的に主觀に淺くして客觀に廣し、まアそれ位であなたも御滿足なさい

○謎　釜山　山本君子

人が眞黑に集まつてゐるので何氣なく覗いて見ると、汚い韓人が路に蹲踞まつてゐる、それを仲仕風の日本人が青竹で撲ぐつてゐる。一つ〳〵打つ度に少し體を斜にするばかり聲も出さない。七を數へた頃男は止めた。韓人は手に一錢銅貨を握ぎつたまゝ無言つて去つた。妾には何の事か解らぬ。

評　與國の民。亡國の民。解らないのも道理

○本當の私　神戸　あけぼの

私と交際うた人は皆私を內氣な悲觀な人間だと申します、全くそうでしよう、然しほんたうの私はなか〳〵どうして快活な樂觀な人間なのですけれども四邊の境遇が此快活な眞の私と云ふものやうに內氣と云ふ新たな私を造つたのです。だから折々妙な狂人じみた行爲の起るのも全くまだ失せない本當の私が顏を出す時にあるのです。

評　さう云へば誰れしもさうでせう

○絹絲　山口　都志子

紅白五色ヅツの絹糸の束をから結びにして其上をつまんでならして見たらクワ〳〵といかにも神妙な音がする、はーて此音は何であらう?とこんどは目をとぢ耳の端へつけてきいて見た…あ…あ尊い哉此淡き音―お蠶が二世の淸い聲ではないでしやうか……

評　しらず欣びの聲か哀みの聲か

○新旅の宿　磐城　牛谷きい子

病める身を欄干に凭せて、しつとりと夜露の掛つた庭を眺める。夜の空氣が細く揺いで仄に新綠の香が漂うてくる。此麼夜姉樣と呼んで呉れる弟がゐたら…隣室の耳新しい話聲が心の底に泌込む。私は旅の寂しさが愈々と胸に滿ちてきた。

評　弟君の話しはベースボールか冒險談かですよ、それでもよくつて

○鳴門の渦　德島市　香川露子

悪魔の口の如な渦が絕えずぐる〳〵捲いて居ます私は今妹と二人で鳴門の巖頭に立つてゐるのです白帆が一つこの渦を通り越して讃岐へ行か

ケとして苦しんでおます進んだり退いたりしても乘り切ない『可哀相にねえあれ那麼に傾いてるわ』と突然妹が斯う叫びました。

評　人間の運命、生存の苦闘、猶は「阿波の鳴門に音もなし」と唄はれむ

○焔

岡山　片岡梅子

折にふれ時にふれ胸の潮の踊る儘を赤鉛筆に淡く濃く露出した水色表紙の雑記帖三冊今無心な槇割木の焰と心ある其雑記帳の焰とがよれ〳〵になつて立騰つて居る微かに邊を漂ふ白い煙はすきを見て未來の少女たる人の胸に流れ入るのではなからう……か……と私は氣抜がした。

評　あゝ深く息する沈練の焰を見よ

○眞砂路

信濃　浅田千代子

綺麗な綺麗な眞砂路——損じて行くのがをしい折々美しい貝を蹈付けやうとする。今朝早く通つたのでせう、小さい足跡がヅーと一直線に砂山の方へ——松原茶店の朝の烟が薄紫に、静な海の上を這うてゆく。

評　水銀の海、微花一線の薄愁

○私の思

大和　静子

人が、高師へ入學すると、行つて見たい。友が、學士の所へ嫁くと早く嫁きたい。妙なる琴を聞くと、習ひたし、よい畫を見れば、畫きたい。字の佳いのを見ると、稽古したく、生花、茶、編物、造花、さては、和歌、俳句、ヴアイオリンもしてみたい。が、何時になつたら、出來る事やら。

評　友達が死ぬと自分も若いうちに死ぬに限ると思つたり……ですか、違ひましたか



行者　浅草　寛正子

○蛇

伊豫　躑躅

何時の間にか私は廣い谷間の山菫の咲いた傍で土筆の束を緋のりボンで結んで草原に並べて居た林の中で鶯がなく靜だと土筆の一本が緋のりボンからぬけ出て蛇になつて私を襲うてくるあれ叫ぶとふと眼が覺めた晝間とつた土筆を握つたまゝ昨日ふんだ蛇を思ひ出してぞつとした。

評　昨日の蛇今日の土筆而して夢心象の研究ものだ

○雑巾

四谷　桝崎佐喜子

艮家の令孃玉に疵なのは色の黒い一點である。令孃の心痛一方ならず日夜煩悶してゐる。女中の話に雑巾で顔をふくと色が白くなると。令孃心ひそかに喜び、人の目を忍びしきりに雑巾で顔をふいて而してどうか白くなる様に。

評　その衷情や實に哀むべし

○今更に

甲府　若葉

昨日、稲積神社の祭典に池に落ちて、死んだ者

が有たと人の噂、休憩室の事務員間にも、此噂が出た、私の毎朝の通勤に必ず、あの白い顔が外に見える、白いのも無理なかつた、肺病人と有ては、吁幸であつた、燃ゆる思を手と手に傳へなくつて！。

評　又時代の犂

○柿　常陸　木村那賀子

長屋の裏の空地に、二間許りの柿の木が有る。以前の店子が植ゑておいて、退つて了つたのだとか。家主のともつかず長家のともつかず、所有主が無い、秋に成ると實が眞赤に熟す、取つたと云ふ者はなくてなくなつて了ふ、食べたと云ふ者もないけれど、誰云ふとなく甘柿だくと云ひ傳つてる。

評　落語家は曰く、湯屋の半風子は拾ひ主があつて落し主が無いと、

○揖　四谷　大場百合子

師の命で私は筍買に行きました八百屋の主人は「奥様之は日ましですがごく軟で味も大變宜し御座います」といつたのでつひ買つて來た隣の豆腐屋の硝子で一寸と姿見したら私は之で奥様風かと頰笑んだ豆腐屋では盛に油が煮えてゐるが筍は腐つてゐた

評　多少の滑稽

○名の由來　琴　子

琴子とは、生れた時父のつけた俗名で、戸籍も學校の屆けもそれなの。マリナは九歳の時、パプテスマと共に授かつた聖名で、牧師はそう呼びます。

尾花は、淋しい貴女の性格を現して居るからとて米ちやんがつけて下すつた。それから稻廼家は……去年私に反いた或る人の號、悲しい中にも、嬉しい思出のあるこの名が一番好き！みんなで、四つなのよ。

評　矢張り親のつけた琴ちやんがいゝやうだ

○歸り路　尾張　朝　香

暖い濡氣を帶びた夜、微かな月の懸つた柳の影を若い二人連が歩むともなく動いてゐる、跫もたてずに興ずるのは確に想思の戀仲、人知れずエデンの園を夢見るべく秘かに約した今宵と知られた、姿が胸には淋さが一歩一歩に彝々せまつた。

評　所謂復活の樂土?

○日　和　淡路　留　子

若葉の末には昨日の雨の名殘が朝日に照つてキラくと、風に搖れる度に光つてゐる。陽炎が上つてゐる。母が乾された蛇の目からホカくと陽炎が上つてゐる。コケコツコーと桑畑で鷄が歌ふと椽に寢てゐた猫が驚いて奥へかけ込んだ。

評　おひるが來て又飯を食ふ、泰平く

○蛇　長野　早田とよ子

青麥の路に子供が輪を作つて居る。覗いたら燦の散らばつた中にべつたり延びた蛇が見えた。私は眼をつぶつて行過ぎた。振返つたらワツと云つて子供が散つた、蛇は兩斷されて尾の方だけヒクく動いた。乾いた路に春の日光が漂ふて居る。

評　其蛇今夜いましの夢に入らむ

○雨の日　石川　むらさき女

細かい糠雨が田の面へ小さい渦をこしらへて降つてゐる。其音が嘆きに沈んでゐる女の泣聲のやうだ……どうしてもそうだ……私は畦に立つて傘をかたげてじつときゝ入つた。何だか慈しみの界へ引込まれたやうにしみぐと哀れを味つた。

評　平凡、此作者とも思はれない覗ひ方

○梅雨時　備中　篠原繁子

今日で二十二日續け樣に、さし下駄に雨傘用心で出かける、もうく厭になつ了ふ、かゝへた風呂敷も、袴も頭髮も、じとくとして、何者かに壓へられた樣で、心が陰氣で、眼の底から頭の横につきぬける樣で田にぐつぐつとないてる蛙がつら憎くつて、何もかも無茶苦茶に、ぶつ破して了ひたいやうだ。

評　八ツ當りは眞つ平

○栗の花　伯耆　足立春子

今朝綺麗に掃き淸めておいたお庭に、また、いやな栗の花が散つて、みづくしい芝草を、全然隱してしまつた。私の心には、まだ散らないのでしようか?……。

評　ハテ何の事だらう

○兄樣の寫眞　伊豫　文　子

京都にお出る兄樣からお寫眞が來た。七分身四角帽でちやんとすましたものだ、まるでポンチ繪みたいな思ひがする。でも變りないあのやさしい目元、私が似てゐるさうだ。ついでに鼻の

格好も似たらよかつたのに。

評　哀歓交々

○初　夏　　　德島　紫陽花

昨日の夕方まで降り續いた雨はもうやんで、なつかしい青葉の香がせまつてくる、葉櫻の木によりかゝつて庭を眺めた、池の畔の海棠の實が日のさす方だけ赤く美しく色取つてゐる、その傍らのばらの花からは絶えず好い香をはなつ、心地よい風が吹く毎に、花から露がスル〳〵と池の中に落ちた、青葉がすれ合うてさら〳〵となる。

評　普通の寫生、海棠の實などは面白いのに此まゝでは惜しい

○いやな事　　　加賀　淡月

自分が行くなり、何か續けて居られたお話を俄にばつたり止められた時と、何思はずそばへ寄つて聲をかけるとビツクリしたやうに手帳の面を手でおほうてピタンと閉ぢられた時とのやうな氣持の惡い事といつたらありません。

評　前者は陳、後者は今少し強く書くべし

○病　後　　　南千住　堀桃園子

見舞つて下すつた信さんに強られて裏庭をぶら〳〵と歩いた、櫻はもう散り果てゝ名殘の花片が池に浮いて居る、ぢつと水面を見つめるてマア衰へた我姿並んでうつる美しい信さんの姿を見ると嫉妬の念がむら〳〵と沸いて急に悲しくなつた。

評。無理もなし

○足　跡　　　橫濱　新綠

そよ〳〵と生暖い風の吹く夕潮の香の強い濱邊をそろ〳〵歩いた時にふと二つの足跡を見付けた一つは砂に深く刻まれて青春の人の樣に一つは薄く引ずつて病める人の樣に……だん〳〵と波打際に薄れて行くのを、此時思はず自分の足跡を振りかへつて見た。

評　描寫不足、惜むべし

○我まゝ　　　金澤　藤永靜子

さればと云つて、あまりにすげないのもいけないけれど、あの方のやうにあゝ誰方にでもやさしくつては、私だつて女だもの、やつぱり淡いねたみも起りますわ……。

評　いさゝか尤もに聞ゆ

○逝く春の夜　　　德島市　山內知世子

今しがた一時が鳴つた。妾は布團の中に顏を埋めて靜かに眼を閉つたが妙に頭腦が冴えて奈何しても眠付けぬ。其上に蛙の聲が耳の底まで響く恨むやう訴へるやう、何となく憐れに聞える數知れぬ蛙の合奏——噫逝く春を泣いて居るのだと思つた。とホロリ泪が頰を傳つて流れた。

○雨の町　　　麴町　こう子

灯ともしの雨の町を私は粹な人と連の樣に傘を並べてゆく、四角のポストを曲るともう家の前、美い人よ、之切で別るのが何となく物足らない白顏がだん〴〵に薄て白藤の樣な其姿が暗い町の方へ曲らうとした時私は思はず左樣ならつと小く叫んだ。

○八つ時　　　美濃　蔦の葉

森をぼんやり雲霧にけむらせて、小川の流れのみ滔々とかすかに得きかれる田舍の家、早苗とりあぐんで燒けつく樣な夏の晝は犬の子も野には出でない、八つ時、遠くの方で子供の巴太鼓の音が……又靜まり返つてしまふ、ふと馬がないた。

○お　庭　　　青森縣　小島繁子

今日お晝ごろからそぼふり出した雨に、庭の眺めは一としほみどりを增した。名も知らない小鳥は葉蔭をくゞつて、きれいに囀づてゐる。枝から枝に飛び移つると青い露がはらはらこぼれる、通りかゝつた女の子は唱歌ア歌つた、芍藥は明日頃咲く。

○好きな人　　　福岡　匿名子

いつぞや御うつしゑを眺めて居たりやさつちやんが、伯父樣はにらんでらつしやるねといつたいつも無口でぶこつらしい兄樣、私は何故か此兄樣が好きだ、だつて私の愚痴を御叱りもなく何處迄御同情して下さる眞は御やさしい方だもの。

○筍　　　德島市　山內房子

（筍掘りに行きませう）と暗い裡からきみさん誘つて下さつたので、直ぐ身輕に裝うて藪の中へ入つた。朝露が足を濡して好い心地。（大分生えとるねえ）（左樣ね今年は格別多いのよ）と互ひに顏を見合つて莞爾微笑んだ。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
燕の古巣とばかり伊勢が家　越後　藤原鍋女

○（地賞）
よべの夢皆海棠と散りにけり　茅ケ崎　篠田壽美子

○（人賞）
夜はいつか明けてゐるなり花の雨　麻布　樋口朝子

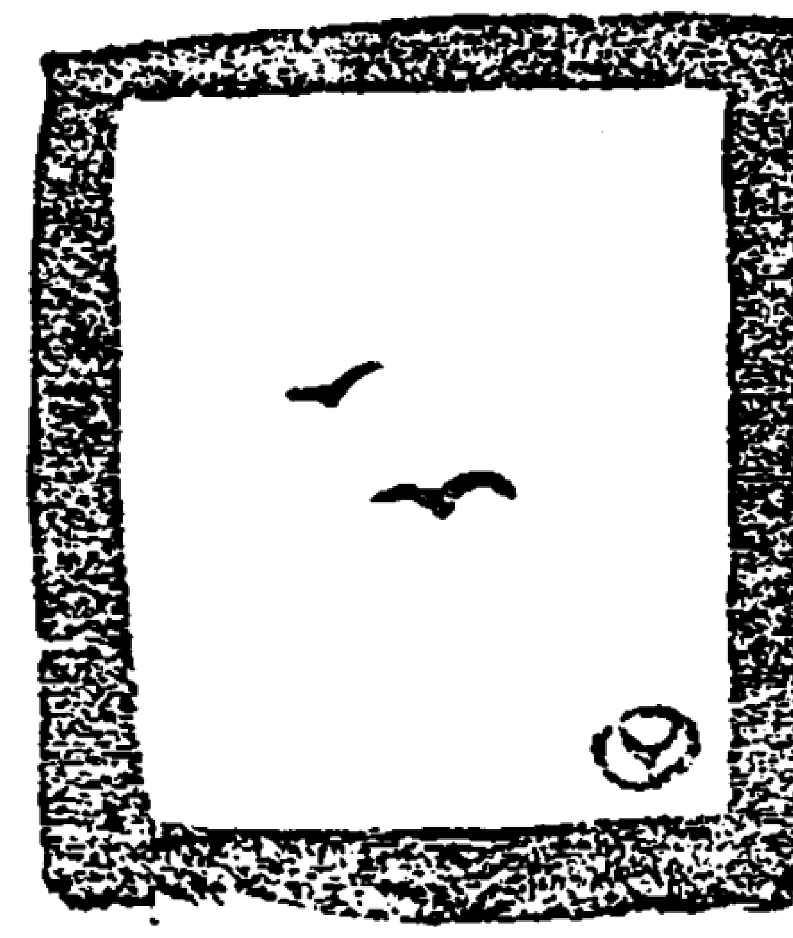
【秀逸】

牛に乗る僧の袂や春の風　三島　舟子
君よべど姿はおぼろく月　佐渡　美穂子
若草に煙れる雨や君は逝く　土佐　桃花
雀子の迷ひ飛ぶなり春の月　出雲　百合子
鶯の尾を吹きにけり春の風　下谷　操子
長閑さに任せて流す筏かな　淺草　繁子

千人の草刈り競ふ夏野哉　秋田　萩原とよ子
提て行く百合にさも似て白うるり　能登　近江加能恵
薫風や武者振り競ふ公子達　新潟　吉田ひな子
踏青の丘の彼方や緋桃さく　信濃　丸山美根子
鐘の音に目をさましたる夜櫻や　福岡　石井うら
若竹や嵯峨へ馬上の朝霞　神戸　山本愛子
取出す琵琶に風あり靑簾　神戸　森本豐子
初蝶やまだ飛びなれぬ芝の上　失名
八千草の花野を守る翁かな　長野　津金壽枝子
初がつを女さびしき日なりけり　島根　森千代子
岩より出て來る人や夏の雨　札幌　安達茄女
瀧の音する川上の若葉かな　京都　竹村まき子
放れ馬の坂かけ上る時雨かな　千葉　林中子
糸櫻煽げば枝の揺ぎけり　下谷　蕉雨子
菖蒲湯の菖蒲微かにかをりけり　横濱　山崎京子
石垣に毒だみ咲て五月雨るゝ　三重縣　まさ子
蜂飛んで牡丹は落ちぬ春の香　三重縣　山崎初子
舟の灯の涼しう水にうつりけり　磐城　半谷きい子
笘舟の影定まりぬ夏の月　釜山　山本君子
はつ夏の若葉の蔭に小店かな　攝津　中後とみ子

謡ひゆく三位の君や梅の月　日本橋　佐藤光子
柴の戸をたゝく水鷄やねむも咲き　堺　中島白蓮
春の旅一夜は奈良に宿りけり　大阪　阿以子
蝶一つ風に追はれて春の行く　横濱　君子
古池を過ればむるゝ螢かな　熊本縣　堀川雪子
島廻り一町ほどに若葉かな　丹波　保子
書に倦いて鶺鴒と語る日永哉　新潟縣　加藤しづゑ子
朝雨や櫻の雪をかさで受け　直江津　磯巾着
青嵐詩人の家のかすみけり　德島　紫陽花
七夕の露多き夜となりにけり　千葉縣　内山なか子
病むわれに百合の香せまる枕かな　德島市　山内知世子
白桃や鷄の遊べる舟の中　大分縣　安東山胡桃
行春を田舍の山で送りけり　上野　きく子
花ちらす雨は佳人のなみだかな　靜岡縣　壽賀子
名月や歌など話すお宮守り　茨城縣　小ゆり
上市は靄にかくれて夏の月　根室　きぬ子
春を待つ事の始めや酉の市　上總　高梨露子
天狗など住むべき山の春淺し　秋田縣　本間てい子
そとつなく小舟を掩ふ若葉哉　横濱　新緑
春の山昔たづねてのぼりけり　靜岡縣　岡野くら子
露重き桐の一葉や蟬の殼　和歌山　木澤てる子
朝庭や薫風輕く我を吹く　淡路　富士元とし子
花散りぬ鶯老いぬ南風　佐賀縣　大石桃香
髪ゆひて衣更へたる朝心地　信濃　五九八四
蠶飼ふ家や若葉に灯がうつる　三重縣　月見草
雨の日や軒に子雀とびちかふ　山口縣　庭菊女
逗子の濱に朝の砂踏む浴衣かな　大阪市　鹿島綾子
河骨の花のもとなる目高哉　德島　香川露子
夕ぐれにあやめ手折れる女かな　濱松　平岩うた子
鎌執つて立てばしば〳〵稲妻す　麻布　石井すみえ
脱捨てし衣に委むすみれかな　麴町　牧野嵐水

海むけて机をなほす若葉かな　相模　福島白百合子
名月をねたみ心の女哉　埴生　矢野醉花
鶯や庫裡の雛に飯を乾す　長野市　早田とよ子
尺八の音色寂しき男哉　松江　清き花
桐の花下郎が馬術巧みなり　新潟　八田敏子
絶壁を仰げば高しほとゝぎす　奈良　中富よしみ
春の日や櫻の殿に給仕して　尾張國　丹羽志希
鳩鳴て一入閑き木立かな　長門　伊藤三重
薫風や湖を見おろす峠茶屋　遠江　富永雪子
かはほりの仁王の顔をなぶりけり　山口縣　椰良美奈子
山里の一ばん風呂や夏の月　岡山縣　入江曉花子
春雨は晴れて十戸の小村かな　伯耆　足立春子
浦人の友とならばや春の風　大分　すみず
ほとゝぎす一聲に詩は成りにけり　茨城　ふじ子
たゞ一人散る花を見る夕べかな　酒井貞子
春風や花咲く野邊の姫小松　常陸　坂本みき
逝く春や歌ひて泣きて我一人　京都　本郷はるの
春雨や欄に飛びかふぬれつばめ　佐世保　草村つゆ子
人の世を高根に匂ふ櫻かな　大阪　墨繪
京人や浴衣を誇る夏の月　喜連川　齋藤こう子
大空に月たゞ赤き旱哉　越後　金塚美代子
春の日や飛び行く雉子の尾の長き　三島　村瀬常月
青嵐に猫洗ひ居る嫗かな　本郷　吾妻白百合
朧夜を言葉すくなの別れかな　本郷　相樂きみ子
おばしまに人は眺めて秋の空　茨城縣　秋水子
一疋の蚤の行方や大廣間　秋田縣　大越たえ子
夕立や廢寺の塔のたゞ高き　淺草　藤波
君が通ぶ長坂道や初がすみ　下谷　林山櫻
宵月や新樹を渡る時鳥　京都　目黒須美禮
四阿にうたゝね寒し春の月　南千住　堀桃園子
泥舟の中にも人や夕涼み　信濃　とし子



誌友

作家の進境

一記者

上

本誌は女子の文章を載せる唯一の雜誌であるだけ、既往五年半の間には隨分幾多の才媛を養成して來た、今本年の下半季の初めに當り、本年上半季の投稿家の成績を顧みて、多少其進境を探り、併せて一記者の意見を述べてみたい。

概論としても、述べたいことは澤山あるが、今僅に割かれたる紙面に於て、多くを述ぶることは出來ぬ、全體に投稿の作物が年一年と進んで來てゐることは確かである、而して詩歌文章の各欄を通じて見るに、每も云ふことであるが、散文欄が最も特色を存してゐる若き女子の感情と云ふやうなものが、最も散文に書き易いからであらう、また處女時代は全く感情に活きてゐる時だから、自然抒情的の好い散文が出來るのであらう、男子の文壇を涉獵しても此種の文字は滅多に見つけることが出來ぬ、小說も好くなりつゝあるが、小說となると、多少技巧を要するから、人生の見方とか其表はし方とかに、未熟の點があるやうに思ふ、詩は更に純藝術的であるだけに進步がぬるい、日記は選者橫瀨夜雨氏の批評が、天下一品的のもので、其無遠慮皮肉、諷刺の續發する處が却つて讀者の意を迎へると見え、なか〳〵投稿が多い、每月增加しつゝあるやうだ、和歌は選者の手加減もあることとて、おとなしくなつてきたやうに思はれる、以下主なる投稿家の一人一人に就いて少しばかり語つてみよう。

鈴木春子　散文欄の一驍將である、夜の淺草公園に其印象的な、都會式な、新しい筆致を見せて以來、殊に注意を惹かれてゐる、新年以來、每號の散文欄に於ても其淸新な描寫を發揮してゐる、此君は所謂情調派、耽美派の行きかたに倣つてゐる、新しいものに憧憬れてゐる結果、其作物が際立つて鮮明に見える、恐らく最新の藝術品に接近しない人の目から見ると、異端のやうに見えるかもしれぬ、併し確に一個の才人たるに相違ない、近頃暫く作物に接せず、今後とも意義ある動搖を待つ。

長曾我部菊子　上京以前の此君の作物は殆ど圓熟の

極に達した、文章としては或る處まで行つて行き止りの姿であつた、更に新方面を開拓するには何うしても其心境を變へねばなるまいと思つた、果然君は上京した、劈頭入京記を公にした、次いで本號の武藏野よりが表はれた、けれども此君は其境遇が變つても、文章の上には駭目すべき變化を見ない、之れ却つて菊子の菊子たる所以で、激變しない中に、自ら新味を湛へて行かうとする態度は、着實なる前途の發展を想はしめるのである。

章子　もとは單にA――と云ふ雅號で出した、其前は本名を用ゐた、今は章子として一言する、此君は嘗て熱海に居たので、海邊の描寫が好い、詩も、散文も得意らしい、散文詩と云つた形式のものが多くあつた存外藝術的の憧憬を多く持つてゐる。

加藤筆子　段階は違ふけれど、此君の作は德田秋聲氏の作物の傾向に似てゐる、いつも生の疲れと云つたやうな暗い陰が添うてゐる、小説の技倆は確に本誌の一雄將と認める。

朝井ちとせ　大塚夫人の面影があると誰やらも云つたが正しく然うも思はれる、但だ如何にも藝術の香が薄い、輕い罪の無い敍事の筆に於ては一時壇上に類がなかつた、近頃の消息は如何。

靜江　千とせに似て更に常識的、文章は健實を以て勝る、自己の感情を訴へたことは殆ど無い、隨つて紀行文、日記文のやうなものに傑作が多い、殊に樺太の記事は周圍が珍しいだけに毎も好奇心を以て讀まれる此君の作には女性の分子が少い。

酒向敏子　かなり以前からの投稿家である、忠實に毎月何かを作つてゐる、餘りに眞面目過ぎて何の作を見ても同じ線上にあるやうで、選者の注意を惹き難い此君に似て、

原田澪子　がある、此君の方は敏子に比べて、偶ま奇變を弄するだけ、多く認められてゐる、地方の作家としては、癖のない方であらう。

井上年子　本誌には論客が少い、必ずしも論客ではないけれど、偶然論客と認められるやうになつた磨志緒の君がある、けれども年子の方が眞の論客であらう

磨志緒　の君は事を論じても、なほ情味が饒かだ、此點から見て年子よりは女性的だと言ふことが出來る磨志緒の文は激しくなくて、能く筋が通る。

寂靜子　文章は達者な方だ、批評も一わたり書けるが、只達者と云ふだけで個性が著しく表はれてゐない

何うかすると輕浮に流れようとする缺點がある、此君と同じ程度の能文家であつて、一層個性の表はれてゐるのは、同じ四國の

よしゑ　の君であらう、此君もいろ〳〵名を變へたけれど、數年以前よりの投稿家である、今一歩といふ處で紙上に出なかつた作も多からうと察するが、奮つて書けば必ず一方にぬきんづる才がある。

佐藤萬壽子　君は女子文壇の一異彩である、最初の魚河岸以來、桃代といひ、此間の魚河岸といひ、書けば必ず光彩を放つ、君には文學的修養が乏しい、のみならず周圍の境界は殆ど文學に緣がない、而かも君は文章を自由に書き得る才能を持つて生れた、此君ほど文字に囚はれずに文章を書き得る者は少い、而かも其れが皆生氣を帶びてゐる、周圍の物象を見る力が他より一倍勝れてゐるからであらう。必ずしも多作を可とはしないが、見聞の博くなるにつれ、何か書いて見ることを勸める、書かぬのは惜しい。

田中落葉子　新年以來、詩壇では最も活躍してゐる元來女子文壇の詩欄には人が少い、山田邦子の活動してゐた時代はかなり盛んであつたが、其代り男性の假面したのも多かつた、今や昨年までの選者夜雨氏の爲に其假面を剝脫されると同時に、詩欄は女性が多くなつた、けれども一方に詩といふものが全體に動搖したので、本誌の詩欄も亦其餘波を受け、甚だ振はなくなつた、殊に文語詩の如きは每號數篇しか載らない、多くは口語詩、散文詩に傾いた、其中で獨り落葉子の作には異彩がある。口語でも、文語でも君の作には詩人らしい心持が味はれてゐる、折々拙い作も交つてくるけれど、月一二篇は好い作をこしらへたら宜しからうと思ふ。

山村龍子　歌は增刊以外の時は一人一首だから、人として其作風の特色を窺ひにくい、龍子は其間にあつて眼に着く一人である、作の風は柴舟氏の流れを汲むやうに見受ける、晶子女史に私淑してゐるやうに見える原田琴子と好一對である、龍子の技巧は細やかで又理性の勝つた作が多い、前田夕暮氏の作風に似て、未だよわ〳〵しい處がある。

以上の外に猶ほ山田邦子、やゑ子、太田喜志子、葉山しげ子、內藤千代子、平塚白百合、若杉とり子、霞子、せゝらぎ、つゆ草、矢野君子、月雪子、原田琴子、金田代志子、前島優梨子、あらゝぎ、三島葭子、夕ほし、萩花、花子、うめ子、安木春子、木村那賀子、篠田とみ子、吉田紫花等澤山あるから、何れも次號に於て短評を試みよう。



讀友倶樂部

記者と讀者

○私は投書してから、もしや沒書になりはしまいか?あゝあの通信文が。とばかり一ヶ月間と言ふものは、殆ど無我夢中で居りました。ところが――あゝところが記者様の御情にて、掲載されてあつたのを見て、何の位私は嬉しかつたでしやう。だから幾多の姉様方と交際することが出來ました。記者様――幾重にも――感謝――感謝――!感謝します。何卒お見捨なく、私もこれからなまいきにも將來本文壇に盡力したいと思ひますから御惠を願ひます。本文壇は初めてですが、他の雜誌は讀んで居りました。けれども、投書したことはありませぬ。が、幾分か様子が解つた様な氣がしますから、これから拙筆を執て投書家様のせめて傍になりとも居りたいと思ひます。(信濃、玉川星子)(記者曰、貴孃許りでなく自分の投書が沒書になりはしないかと云ふ不安が皆さんにあるやうですが、記者は一つでも多く出したい、出來ることなら來ただけ出したいのですけれど、劣等な作は最初に選者の手で落第する、次に又紙上で好い物から載る順序ですから、何うかすると一二人の爲に落伍する、然う云ふ方にはほんとうにお氣の毒だと思ひます)○記者様、私は今某家に奉公中の者ですが、此の二月お孃様から本誌を拜借して、誠に有益な雜誌と思ひ、毎月愛讀してをりますが、此度、私も投書して見たいと思ひます、元より淺學の者でよい者は出來ませんが、諸孃様方の末席に侍らせて頂きたいのです、誠に下女風情で、あつかましい申状ですが、もしおゆるし下されたならば何卒誌上で御返事を(淺草にて某家下女)(記者曰、下女だつて少しも御謙遜なさるに及びません、外の事とちがひ、文章のことは身分の上下や、生活の高低にかゝはりません、上手な人は上手、下手な人は下手、持つて生れた天分ですから、お好きなら何なりと書いてお送りなさい、殊に本誌は一切平等主義ですから、斯る篤志家を歡迎します)○私に數へ年まだ十五、十三才七ヶ月なので厶います私、姉が三十八年から本誌を愛讀してました故私も見まして、いつか投書致して見様と思ひましたので聞た事もない論文など知りおぼえを書きましたのです。あれで書式はよございますか、字が下手なので、讀みにくゝておらつしやると思ひますけど。あの様なことを書くのでせうか。どうぞ次號のどこかで御答を!(記者曰、字はこれなら結構ですけれど、此處にお名前が書いてありません、原稿には一つ〳〵お名前を書いて下さい)○記者様私はほんとにかなしい事が出來ましたそれはある都合で投書する事をやめねばならぬやうになつたのです。今まで私の下手な文などを、おのせ下さいました御恩は決して忘れません。投書はやめても本誌はいつまでも愛讀しますから、記者さまもどうか私をわすれないでちやうだい、私はかげながら本誌の榮えてゆく事をいのります。おなつかしい姉上様方によろしく。(高知縣種崎町臼井春枝)(記者曰投書はやめても永遠〳〵愛讀者たる御志は忝く思ひます)○記者様私事上京して何處かに書生に置いて戴いて勉強したいと思ひますが、一體書生として爲すべき仕事はどんな事が多いでせうか、又夜學なり何んなりに通學させて戴いて勉

强するだけの餘暇がありませうか敎へて下さい（千葉縣安房町吉尾村川名政子）（記者曰、それは置いて下さる家の都合ですから、其家の都合次第で伺うともなるでせう、一般に婦人の書生は勉强しにくからうと思ひます）○私の友達は澤山本誌を見て居りますけれど投書する者はありません、私は或る店より求めて居りますが投書しても差支ございませんか、（信州、愛讀者）（記者曰、勿論差支ありません）○本誌は私のやうな文學好きには獨習するのに好都合です、なほ文藝問答欄を設けて頂きたいと思ひますが何うでせう（池田綠子）（記者曰、設けてもよろしいが、いつも問の要領を得ないに困るのです）○本鄕の若林葉流さん、御はがき確に拜見、よろしく御愛讀下さい（記者）○本誌を讀むやうになつてからいろ〳〵の事が分り喜ばしく日々感謝いたして居ります（操子）（記者曰、感謝して下さるのも畢竟はあなたのお心掛が好いからです）○私は耳の病ひの爲めに尋常小學切りで學問をやめました、他に樂みもなく未熟をも顧ず投書をいたす考へてございます何卒御導き下さい（四谷、むらさめ）（記者曰、御不幸な御身に同情いたします、折角御自愛して文學を慰藉になさいませ）○直江津の木島磯巾着さんに、繪ハガキで御あいさつ有りがたう（記者）○靜岡の大石君代さんに、お尋ねの同封のことは其通りなさいましても宜しいのです（記者）○北海道、柏葉女さんに、短評はつまり短評を書いて、誌友くらぶ原稿短評と題をつけて下されば宜しいのです（記者）○須田まきさん、外二三の方に、夜ſ氏の花守及び二十八宿は只今殆んど絶版の姿ですから、誰か御知合の方に賴んで古本でゞもお探しなさるより外仕方がありますまい（記者）○なゝしくささんに、勿論皆さんの投書は凡て記者が見て居ります、其上それ〴〵選評の先生方に送るのです、それから今月お出しになつたのが來々月に出るのです（記者）○山道奈賀さんに、誌友くらぶ原稿と書かねばいけません、次に用紙はハガキ形に切つてはいけません、和歌俳句は何れも半紙半枚へ書いて下さい（記者）○堺市の中島白菊女さんに、別に御勝手の分らぬやうなことはないと存じます、どうかつゞいて御投稿下さい（記者）○文子さんに、和歌俳句短文は半紙半枚にお書き下さつて宜しい、其他の文章の二十三字詰はいけません、四字詰です（記者）

交際を望む

○大阪改野たけ子樣に●●●●●●●●　大阪誌友會の義に付大賛成です、東京の誌友會の記を見て羨ましくて〳〵お腹の中がむづ〳〵します、是非大阪でも開催いたしたいものです、然し諸先生の御來阪は願へるでせうか、もつと御賛成の方はありませんか。（大阪、福井まさ子）

○誌友會幹事の方へ●●●●●●●●　そろ〳〵お暑く成つて參りました皆樣御機嫌よくて？いつぞやの寫眞大切に紀念にとしまつて置き升けれど、あの私のヒヨツトコ面みたいな顏がしかもまん中に陣取つてるんですもの――皆樣の御手元についた時さぞ御笑の種子に成つたらうと思つて御恥しう御在升わ、こちらの方に被入いましたら御立寄り下さいませ。美子樣御不快でしたつて？もうおよろしくて？時節柄皆樣御自愛を祈り升。（恒）

○東京花子樣へ●●●●●　私も御同樣園藝に深き趣味を有して居るのでございます、向後とこしへに御交り下さいませ、內地の草花少しは持つて居ります貴孃の西洋種と御換へ下さい宛名は（新潟縣中頸城郡名香山村大石孟）

○いつも變らぬ心で●●●●●●●　私は八ケ嶽の麓諏訪高原に住んでゐる不束な少女でありますが、幸に五月から女子文壇を讀む樣になりました。そして本誌の文壇の勝れてゐるのに感心いたしました。私は文學は非常に好きでしたから以前から多少文學に心をゆだねてゐましたけれど、眞個のまだ初心であります。けれど是れから拙手ながらも少しづゝ投稿爲樣と思つてゐます。何卒誌友姉樣方御指導して下さいませ。今からお願ひいたします。そして繪葉書なり、書簡なりの交換を爲て下さいませ。そして繪葉書や書簡の交換は文學の上にも甚だ有益と思つてゐます。誌友姉樣方熱くならないで、又冷淡にならないで永久に交際を願ひます。私は永久と云ふ言葉は何の事業でも賴母しい言葉だと思つてゐます。誌友姉樣方の玉章の訪れのあるのを今から待つてをります。（長野縣諏訪郡玉川村、宮坂明子）

○市內の方と●●●●　皆樣私は誠に不束者でございますが、東京市內の方と御交際を願ます御たより下さつた方にはきつと御返事差上ます（東京日本橋區桶町廿四番地、岡田靜香）

○夢二樣●●●　千夜子樣程夢二樣を大騷ぎしないけれど夢二樣は私好き。少女會でよくお話をき

いたり席畫を拜見いたしました、夢二樣と遊んだ事もあるのよ、夢二式が大變流行してきましたわね　本誌の玉川樣の畫も二三年前とは全く變つて夢二式に感化された樣ですはネ。大日本少女會遠足を大森で催した時夢二樣に畫學紙半面へ美人を書いて頂いたのも夢二樣のかたみと思つて大切にしまつてありますの、けれど重樣は夢二樣大きらい、夢二の畫を見ると盛んに罵倒なさる、私は賞める。それはそうと此度のお寫眞は大變惡く寫りましたのネ、夢二樣はお色が淺黑くて目の大きな涼しい黑髮を長く肩へおさげ遊ばした、いゝお方なのに。長髮が誰の目でもひく樣になつて居りますのネ。マーとんだ失禮いたしました。(四谷、桝崎佐喜子)

○お別れ●●●　私ことながく〳〵皆樣に親しいお情けを蒙りましたけれど、或る事情の爲め永くお別れせんければならぬ事となりました、譯を詳しく申上たいのですけれど、これのみは聞かないで下さいませ。(福岡縣　井上たつ子)

○僞善者●●●　私は今まで不正な交換者の爲に何れだけ欺かれたか知れません、此等僞善者の名前を一々本誌上に發表して此のクラブ欄を廓清しやうではありませんか、皆さんも報告して下さい(なでしこ)

○困却●●　此の誌友くらぶが萬雜誌中で一番盛んなだけに、ずゐ分ずるい人があつてよ、それらの人の姓名を紙上に發表して一般皆さんの困却を救ひたいと思ひます　皆樣如何(筧のしづく)

○諏訪より●●●●　御なつかしき諸友の諸姉樣方よ妾は、諏訪山間に住居して、淋しく暮し居り未だ一度も都會などへ出て見ぬ、不束者ですが、願はくは、玉章繪ハガキの交際を願ます。(長野諏訪郡玉川村穴山長田雪枝)

○都へきました●●●●●　名のみ美しけれど、さばくのやうなところよ、私はけものゝような人を恐れます、僞りなき愛もて、幾久しく御交り下さる方はございませんか、なるだけは田舍の方に…(東京市日本橋區本石町二松本方、柳澤幾子)

○妹を失うて●●●●　親密な諸女姉樣何卒々々永久に妾を妹と思ふて御交際して頂戴よ、妾に一人の妹が居りましたが、ふとしたる病氣にて遂に遂にあゝ遂に歸らぬ黃泉の客とやらに成られて終いました、姉さん方も同情して慰さめて下さつても、妾淋しうて、何卒お情厚き親密な姉さんよ妾の姉さんにお成りに成さつて頂戴な心からお願よ不束者ですけれど(秋田縣仙北郡金澤町すみれ會內、小原あき子)

○京都の方に●●●●　不束な私も文壇の愛讀者となりましたから御見捨なく誌上で御交際を願ひます、あの皆樣如何でせう京都にも誌友會が開きとうございますわ、御同意の方は活動して頂戴なそうして要司村福子樣貴女も振つて奔走して下さいよ……後生だから(京女)

○草花に熱心●●●●●　東京の花子樣妾も園藝に深く趣味を持つて居る不束者で御座いますがどうぞ末長く御交り下さいませ、元來妾は下手の橫ずきとやらで、每年草花を培養致しますが、いつも不成功に終ります、誠に御恥かしい事ですがどうしても思ひ切る事が出來ませんのよ、經驗をつめば、必ずよき實をむすぶ時節も有るだろうと思ひまして、人に笑はれてもかまはず相變らず一生懸命にやつて居りますの、何も知らない者で御座いますから、今後は何卒御面倒でしようけれど、どうぞ永久におみちびき下さいまし御願がひ申上げます。(福井市佐佳枝上町八十三、福岡絹江子)

○妹と思召して●●●●●　誌上の姉上樣私は一昨年からの愛讀者ですの、每月〳〵皆樣の御通信を拜見するのを、何より樂しみにいたして居りますのよ、私のやうな不束なものでも何とぞ妹と思召し、永久に御交際して下さる姉上樣をほしう御座います、忘れな草樣私も廻狀の片端に入れて頂戴な。(仙臺市花壇五〇、田村千世子)

○旅より●●●　諸姉樣に申上ます、妾今度から御交際をお願ひ致します、どうぞ末長ふ御情をたれ下さいませ……あら寂靜子樣御進によつてとう〳〵名のりを上げまして初めての投書をいたしました、どうぞ是迄に倍して御交際下さい(土佐、秋野もよ子)

○初めて●●●　私六月から本誌愛讀者の御中間に入りましたのだから、投書も今が初めてですわ、賢明なる諸姉さまどうぞ宜しう御導びきを願ひます(長崎油屋町、中村登和子)

○交換●●　皆樣の內に不用の樂器類、雜誌小說等御持ちの方は此の憐れな少女にお讓り下さるか又は一時御貸し下さいな、お禮は必ず當地の繪葉書にて致します、それから繪葉書玉章の交換も致して頂戴ね。(京都府天田郡福知山町字內記町川崎寅き內、幸子)

○晶子先生の和歌●●●●●　皆さまの內で晶子先生の

和歌御存じの方は一首でもかまひませんから、左記の處まで御送り下さい、また歌集に御座いましたならば歌集の名も書いて下さい、又手數ながら振假名をもつけて下さい。(横濱市福富町二の五四飯島方、光香)

○俳句や玉章　俳句や玉章の御交換を御願申ます三重縣のみねさん御變りなくつて次號で御返事下さい、栃木縣の皆樣御手紙頂きだい必ず御返し致します(栃木縣芳賀郡眞岡荒町、野中白葉)

○京都より　おなつかしい誌友の姉上樣、まことに暑くなりましたね、海水浴もたくさん行かれますでしよう、妾等京都の暑い市中に此の夏も過ごさんならんかと思ふと、いやになつてよ、何卒ね、エハガキや玉章の交換をして下さいな御願ひ致します。(京都市西洞院五條上ル宮本方、小川きみよ)

○分りやすき手紙　私は山口縣山口町出身でキリスト信者で御座ます、只今は色々の事情で一人田舍に淋く調劑手をして居ます。何卒親愛なる御交際を願ます、山口縣の御方御懷しふ御座ます、山口を出ましてから四五年になりますが御地の御樣子など御聞せ下さいますれば、誠に嬉しく存じます、誠に御無理を申ますが私は無學ですからわかりやすき御手紙戴きとふ御座ます。(淡路洲本鐘紡二工場醫局松田クエ)

○西肥の方　私は寒國のさびしいいその町に住まつて居る者ですが、いさゝかのゆかりから只西肥の方がなつかしくてなりませむのよ、詩友の皆樣方の內、肥前三養基郡の方が御ざいましたら何卒いく久しき御交りを願上ます、(豐後臼杵壁屋町、吉田辭子)

○能登の方へ　當地の本誌愛讀なさる方に御投書なさる方はほんとに少くないのね、もうすこし盛んにしようぢやありませんか、當地で何か小會のやうなものでも開いて、和歌に詩文を作り合つて記者樣に見て頂いて進歩を計つては如何でせう、御同意の御方は御一報を願ひます(能登國七尾龜山町、近江加能惠)

○明笛あり　私の手許に父が滿洲から持つて歸つたミンテキが不用になつて居ります、洋琴かヴワヰオリンと御かへ被下ませんかおねがいよ(大阪市南區瓦屋町五番町百拾壹番屋敷、畋野たけ子)

○御相談　和歌及び新體詩同好の御方に御相談致します、廻覽誌を作ては如何でしようと、御同志のお方は(和歌は一人五首詩は一人二題)御送附被下ませ。順々に廻送致すか又は大多數の時は印刷してもお送り致します。(和泉國泉南郡信達男里村八七、金田代志子)

○ハモニカが欲しい　御愛讀の皆々樣のうちハーモニカ中古御不用の方がありましたら、私の細工又相當の品物と御交換して下さい、必ずいつはりは致しません、御送り下さる御方は御一報を(府下青梅町森下粕谷方、川村きよ子)

○御禮　身の愚のともかへり見ず誌上をかりて御交際などと申し、後で恥かしい樣で御座いましたがなつかしき皆樣からいろく共御深切な御手紙頂戴致しまして誠にうれしふ御座いました深く御禮申します、此後とも皆樣もどふぞ宜しく。(備中小田、俊惠)

○私は二十才　妾は東京芝區の生ですが幼少の時母にわかれ其後なんとなく、心淋しく暮してをりました處へ妾の親しき友達より女子文壇を拜借致ましてから、今日迄相變らず愛讀してよ、ですから皆々樣不束者ですがね、以後宜敷御交際を願ますよ、妾の家は芝區ですがね都合により左の家にをりますのよ妾はね今年二十才ですよ。(麴町內幸町一ノ四龜井鑛四郎方、澤村君子)

○寂しい一人　誌友の姉樣に私は谷中に住むものでございまして、寂しいく唯一人本誌を姉樣の如く慕つてをります、どうぞ誌友の姉樣御ひまのをりにはレターお惠下さい。(下谷區谷中清水町三佐藤莞爾方とし子)

○花子樣に　六月號本誌にて拜讀致しました東京の花子樣とか、園藝に心ある私に御交際下さるなれば有難存じます。(滋賀縣蒲生郡苗村字山之上、小出すゑ子)

○私は十六才　私は高等の四年生にて本誌の三十九年以後の愛讀女です、父母の許をえた者ですが、皆樣御文通下さいな澤山に御願ひ致します。(神田今川小路大見方、野菊女)

▲右の外、左の方々からも交際を望む旨申込まれました、本文は大抵同じやすでうから一々揭げません、初めに能く意思を疏通させて、健實なるお交りをなさい(記者)

○長崎市十人町十五、加悅みえ子
○東京本鄉區森川町一番地、黑木啓子
○京都市高辻室町西入ル西洸方、中田千賀子

○群馬縣邑樂郡小泉町、佐藤たつ子
○紀伊海草郡宮前村平、河井櫻子
○京都市麩屋町松原上ル野口樣方、英清子
○伊勢鈴鹿郡白川村字白木、若林綾子
○仙臺市北二番丁百十一番地、後藤はる子
○大阪市西區御池橋西、小泉貞子
○茨城縣東茨城郡磯濱町字祝町、渡邊壽惠子
○京都市室町　五條上ル松山方、神川ぬい子
○美作苫田郡奥津村、水田邦子
○大阪市西區天保町五八、村中不二子
○京都市小川通竹屋町上ル、中川志奈子
○東京麴町内幸町一ノ四龜井鑛四郎方、倉形てつ
○東京本鄉森川町一番地守屋方、黑木啓子
○秋田縣雄勝郡稻庭局區内大湯村、石川靜枝
○千葉縣山武郡二川村山中、土井たい子
○東濃中津町林方、橋村伊都
○靑森縣　戸郡五戸村、佐藤さく子

持つてゐる書物
讀みたい書物

○德義を守る御方へ　　手許に風葉著女學生、春葉著、母の心、後の世上下、山櫻など御座いますゆ御望の方へ御ゆづり申ます故往復ハガキにて御問合せ下さい尙玉かつら、朝日櫻上下、形見の笄、明治辭典も不用につきヴアイオリンかフローチ、又は空氣ゾーリと御交換下さいましも中古にてもかまひません私は十七歳の田舍娘ですがあざむかれた事が御座ます故決して僞に申しませぬ右は私をお信じ下さる方に申上げます（秋田縣象潟町、齋藤りゑ子）

○源氏と十六夜　　なつかしい姉樣方の中で十六夜日記源氏物語を御もちの方は大切に取あつかひますから御かし下さいましな、讀みをへましたら私の寫眞レース、しほり銀貨入れ、いろいろの押繪又郵税もそへて御禮致します。（千葉縣君津郡岩根村中里、山口その女）

○白羊宮あり　　皆樣私は白羊宮を一冊持つてをりますがむつかしくてわかりません、どなたか明治少女節用か又はやさしい英文のおとぎ話などと交換して下さい、なるべく同價のものとおねがひいたします（佐賀縣立佐賀高等女學校寄宿舍内、田中幸子）

○女子文壇　　明治四拾年度以前の女子文壇御ざいましたら送つて下さい、いくら古くとも文字さへわかればよいのです、御禮としては當地名所繪葉書かなにかを送ります。（長野縣北安曇郡平村野口、工藤清子）

○持つてゐる書物　　慈しみ深き皆々樣、鈍な私を御厭いなく御交際下さいまして、誠に忝けのう御座います、紙上にて一寸御禮申上げます私の手許に左の不用書が御座いますから、皆樣の內に何か面白い書物が御座いましたら、何卒御交換を御願ひ申ます、新體風琴風、女夫波、戀無緣、歸雁の蘆、實業の日本、婦人鏡、食道樂、俳句自在、美文自在、後の不如歸、黃菊白菊等（栃木縣下都賀郡寺尾村尻內、福富きん子）

○私の不如歸其他　　親愛なる諸孃樣御手許に金色夜叉、魔風戀風、少女の秘密日記、テニソンの詩、藤村詩集等御不用の方は、私の不如歸思ひ出の記、大絃小絃、婦人世界、婦人界、深山の雪、肉彈、貴女用文、和洋料理法、秀才文壇少女之友、新文林、實業之日本、外十數種有りますから御交換を願ひます、御送附次第御望みの本を送ります、外に絹ハンカチーフや、編物及び名産物の交換をも願ひます。（長野縣北安曇郡北城村、細川靜枝）

○思出の記を乞ふ　　誌友の皆樣がた蘆花先生の『思ひ出の記』御持ちの方若し御不用ならば御讓り下さいませ。終りに皆樣の御交際を願ふ（仙臺市上樋六八秋保靜子）

○譜　　皆樣私の許に音樂廣瀨中佐、はなれ小島、露營の夢、其他女學唱歌色々あります入用の方は御かし申します、今故鄉の方へかへつて居ります。（伊豫川ノ江町坂本出張所、黑田操子）

○夢二畫集　　諸姉樣の中夢二畫集春の卷夏の卷御持の方がありますなら、どうか御送り下さいませ、御禮には坪内逍遥のハムレット差上ます、但し一冊しかありませんから早い方にあげます、他の方にはリボン又はヱハカキで御禮致します。（愛媛縣松山市北京町、藤井章子）

○邪宗門を乞ふ　　詩集「邪宗門」お持ちの方がありましたら、御不用なら私の持つてゐます風葉樣の「天才」秋聲樣の「凋落」等の一冊をお換へ下さいませんか、そして和歌の趣味通信をもお願ひ致します。（大阪市西區西道頓堀通二段谷方秋洋子）

○女學世界增刊　　皆々樣御手許に昨年の女學世界の增刊驚く手紙、嫁に行く人、心の日記等御ありでしたら何卒お送り下さいな私の女子文

壇婦女界趣味及びヱハガキ等で御禮いたします（越後十日町、樋口濤子）

○不用詩集あり　私の所に泣菫氏の二十五絃、露風氏の廢園、柴舟氏の静夜、空穂氏の短歌評釋、其他詩集、文集少々不用になつて居りますから晶子先生の舞姫、常夏、藤村氏の、落梅集、酔茗氏の玉蟲、夜雨氏の詩集、いづれにてもお持ちの方は御交換を願ひます。（上總君津郡駒山村高瀬春枝）

○金色夜叉其他　誌友の諸姉様妾事不用小説金色夜叉、虞美人草、不如歸を始め數冊持合せて居りますが何ぞ外の面白い小説と交換又は御分ちも致します、　玉章か繪葉書かで御一報下さいませ　亦諸姉様に御不用の才媛文集がおありでしたら御惠み下さいませ。（千葉縣船橋町三丁目柏屋方、杉本春江）

○辭典と　妾の所に新詩辭典、漢和大字典、英和大辭典、和英中辭林、明治才媛文集、新英和辭典等ありますから皆様の中でヴアイオリンか寫眞器械御不用の方ありましたら、右の書籍と御交換下さいませんか、御交換下さる方は男子の方でもよろしいのよ何卒御願ひ致します。（北海道後志國昆布宮川温泉内、宮川もと子）

○懇請　皆々様へ御願申上升が村井先生の御作になつた臺所重寶記及食道樂が御座いましたら御めぐみ下さいませんか御禮はきつとつき次第相當に致します。（仙臺市東四番町十一、平間方、佐藤きみ子）

○源氏物語其他　源氏物語。太平記。樗牛全集金色夜叉。一葉全集。お伽花籠。藤村集。天地有情響。美辭學前後。アラビヤナイト。等あり眉山全集、萩の家遺稿、黒潮。青春。新片町より。破戒。夏子。寄生木等と交換を望む　希望の方は紙上にて御一報を。（ゆかり）

○お返事がない　本誌愛讀の御姉様に申ますよ、妾は山間に住む無學無才の少女ですが何を樂みとする事もないですが、只妾の好きな小説や詩歌繪葉書の交換が大好きよ、夫れでねえ、本誌倶樂部にて交換を願ひますとか何とかを投書してあるから早速皆様に願ふの、するとねえ何の返事もないの妾の眞實は本當に水の泡なのよ其内數人は福井縣の十重子さん、奈良の吉枝さん、神戸の春子さん、上野の菊子さん等ですの、ほんとに馬鹿らしいわ、此後は眞正なる御交換を好む御姉様に永遠の交情を御願ひ申します。（兵庫縣津名郡廣石驛文林社内、林光枝子）

○冒險ものと　皆様方の中に佐保姫、小説不如歸、少女昨年十一月より本月迄、あめりか物語、ハガキ文學三月より四月迄、秀才文壇昨年十月號本年一月號、ハイカラ令孃を御持なら、私の怪人鐵塔、水原旅行、俠勇少年、東洋武俠團、新日本島、伶人の外、小説數十冊と女學世界、新文林、本誌、女學世界がありますから交換して下さるか、若しくば御ゆずり下さい、終りに皆様の中で紅葉全集が御有りなら、どうか四五日御貸し下さい、惡い事は致しませんからそして御禮に深山櫻か美文斷錦を差上ます。（千葉縣君津郡小糸村福岡四六六、林美津子）

○名曲寫譜交換　お持ち合せの曲譜目錄と御希望の曲名とを拜見いたしました上で御返事いたします。（福井縣丹生郡吉野村吉野小學校内、花井蝶子）

○歌集希望　皆様の内で晶子先生の佐保姫御不用の御方がありましたら御ゆづり願たう存じます、御禮は必ず致します（札幌郡篠路村二三、安達けい）

○二十八宿と花守　皆様の中で夜雨先生の二十八宿でも花守でも御持ち遊ばしての方は、誠に恐入り升が十日許り御拜借願ひ升まいか、汚さない樣に大切に拜見致しますから、時々誌上で拔きがき拜見して是非よみ度くて堪らず、古くてもと人に賴むで探して貰ひましたけれどもいまだに見つかりません。どなたか此願を叶へて下されば眞實に嬉しいと存じ升。若御許し下さる方も被入いましたら誌上で御知らせ下さいませ改めて御願ひ申上升から。（恒子）

○詩集　お姉様達の内にみだれ髮、藤村詩集、お持の方がございましたらお送り下さい、御禮にはリボンを送ります。（千葉縣千葉町市場、和田のぶ子）

○金子薫園著和歌入門、今井柏浦選古今女流俳句集、新選俳句集、德富蘆花著思出の記、不如歸花袋集一、二、小形言海、破戒、新案端書用文、本誌四巻以後六巻三號迄、不用の姉兄様は妾の所の雜誌と御交換して下さいアミモノ、シヲリ、ヒジツキ等も交換々願ます持居る書物、太陽、中學文壇、女學世界、文藝倶樂部、ムラサキ、秀才文だん、書かん文大觀、康熙字典、小説魔風戀風、三人兄弟、家庭日記、新小説紀念號、無名通信、化粧かがみ、樂しき婦人其外澤山あります。尙繪はがき

交換も御願致します（上野、長野原局區内日影町冨澤きく子）○なつかしき皆様よ、私の手許に不用な小說本魔風戀風、あしわけ舟、濡衣、小猫、女金色夜叉、已が罪、戀無常、折れ櫛、新不如歸、美津子、金色夜叉、不如歸、夏子、ハイカラ令孃、出潮、後の新不如歸、怪男子、女敎師、最後の岡崎新平、野心、綠雲、自白、後の不如歸、海島奇傑、痛快、ゴーリギー集、自然主義、原田甲斐以上あるのよ、御望みなら何冊でも上げるわ、そう御婦人のお方のみ、あれ皆さんよりねー絹ハンカチツ、色々の仕折編物、財布、リボンなど〜、なるべく自身の寫眞を添へて送つて盾戴な、あらァあ！なにも遠慮なくに、心安く申込なさいね、オヤー姉さん妹—、一刻も早かれよ、私待ちて居るものねー皆さんさらば（若松市中六日町Y宮原）○本誌滿五週年紀念號と女學世界增刊こゝろの日記御持合の方は與謝野夫人著女子のふみと花袋著ふるさとの二冊と交換して下さい。（越後關川大石厚子）○皆様の内に、佐保姫、言海、都會の婦人等御不用の方がありますならば私の小說筆子（初子ノ巻）夏子上下、小猫、紫帽子、愁芙蓉、少女の煩悶、姉妹の秘密、百合子上、はやり唄、初姿、おもかげ、妾の思ひ出、小羊等の不用書と御交換下さいませんか、ひたすら御願ひ申上ます。（福岡縣筑紫郡住吉村花園、建部眞久子）○皆様の中で、俳句入門或は俳句作法お持ちの方はお讓り下さいませんか、相當のお禮はいたします。（箱根湯本村須雲川山本家内安藤澄江）○諸姉様のうちにて、已が罪、伯爵夫人（前後）噫無情、寄生木、不如歸、ほまれのかぶと、一葉全集村井弦齋先生の小弓御所其他をお持の方は下名へ御送り下さいませ、私のシオリ、リボン、ハンカチーフ、造花のカンザシ（皆新しきもの）のうちどれにても御所望のものを御禮として繪葉書そへてお返し致します。（東京日本橋區箱崎町四丁目一番地伊坂方、露香）○誌友の諸姉様よ、妾の手許に新小說、不如歸、紅葉全集六、少年世界等ありますから魔風戀風、金色夜叉、ハアモニカ等何れなりとも御持の方は御交換下さい御送りの方に妾の寫眞をそへてあげます又廣瀨中佐銅像除幕式紀念の三枚つゞき一組繪ハガキがありますから、婦人世界新號と交換して下さい（千葉縣長生郡二宮本郷村眞名、薛田靜枝子）○皆様の内で山岳誌、やま、明治一萬句、新撰一萬句、俳諧文集、太平記、源氏物語、源平盛衰記のあまり古く汚れぬのを御持の方は妾の空中軍艦新學士、南洋王、ゴリキー集、新怪談等と御交換下さいませ、そして男の御方にも清き美しき御交換なら（横濱市青木町千七百五十三番地別邸内小原小百合）○私の手元に婦人畫報增刊、東京遊び畫報、四月の演藝畫報など不用がございます皆様の内何んなりとも御引きかへを願ひますマダムぶり御不用の御方はお惠み下さいませんか（德島浦中の丁一丁目谷田方、多田油點草）○私には未だ不如歸、金色夜叉の小說がありません諸姉様の中に御持の方が御ざいましたら御交換を御願ひいたします、私のところにはよいものではありませんがヴアイオリン、獨笑珍話、少女界、女學世界が少しありますから、御望みのものにて御禮はきつといたします（靜岡縣引佐郡田中野、宮司むら子）○妾も文壇の愛讀者のひとりです以後永くお交はり下さいな、それから繪はがきや少女世界、女學世界、奥様氣質、女學生訓、茶の湯と生花其他不用の小說類も多少ありますから御交換下さいな、此度妾「はやし」と云ふ回覽雜誌を出しましたから、おしらせ次第御送りしますからどうぞ御批評下さいな。（深川小松町七、佐久間貞子）○本誌愛讀者皆様の中に本誌昨年の十月號御不用の方が御座いましたなら、何卒お惠み下さいましもしお惠み下さる方は早速ハガキにてお知らせ下さい、御禮はきつと致します（北海道岩内町歸厚院内、加藤はる子）○ディアーミツスヨ、私は草花を一番よく好んで居ります、溫室培養のものありましたら幾種なり共御送り下され、書籍では、青春、ホトヽギス、魔風戀風等の御不用のもの、御ゆづり下されませ、私はきつと其御禮を致します。（大阪市北區樋上町一五五、藤本やつこ子）○誌友の諸姉様私しの手許に女子文壇、新文林、秀才文壇、ムラサキ、文章世界、中學世界、等御座いますが皆様の手藝おふくろもの、手藝おさいくもの、おてんば孃日記、等と御交換下さいませんか、尚編物、絹ハンカチーフ等の交換を願ひます、（久留米市庄島町四二二、光益露子）

繪葉書を好む

○名所希望（山口縣玖珂郡灘村藤生、山根敎子）○同じく名所を望む（滋賀縣蒲生郡苗村山之上、寺島代富）○私は大の繪はがき狂です勿論交換を熱望す（鹿兒島縣指宿郡指宿村同春擴院內、はるえ）○繪はがき下さいましたお方には大阪名所須磨舞子等の繪はがきにてお返しいたします（大阪市北區芝田町一四八榎並方、清子）○圖書

御送り下さる方には妾の見苦しき寫眞、繪はがき送り下さる方には當地名所繪はがきを御禮に進ず（千葉縣長生郡二宮本郷村減府關原出字佐美方、多賀榮子）○兩樣、內に風景美術名所記念スタンプ付等の繪はがき壹組以上御惠與下さいな二組以上御惠與下されし方へは雜誌に妾のしやしん（第五着まで）御送り致ます壹組送り下されし方へは草津川原湯溫泉はがきで必らず返禮しますからなるべく下く送て下さい（群馬縣吾妻郡六合村富澤駒吉方、きよ子）○美人及び名所の交換希望（秋田縣山本郡淺中村、野呂田とみ子）○岡山後樂園と御地方名所との交換を願ひます（備前八濱町、板崎好枝）○各地の繪はがきを集めて居ますが、兄姉樣の中で名古屋と福岡の共進會のを御惠下さいませんが、御禮は當地の名所で致します　又水戶と岡山の公園のを御送り下さい男の御方でも必ず〳〵御返事します。（富山礪波郡大瀧村字柳川近藤方、近藤松枝）○五月號で塔の葉書お御願ひ致しました所、早速國から御送り下さいまして珍らしい塔も集まりまして日々喜んで居ります、一々御禮は致しましたが誌上で諸姉さんに御禮申します、どうか皆さんも御惠み下さいませ、そして繪葉書のお好きなのを仰しやつて頂戴直ぐ御禮致します。（大阪西區京町堀通四丁目、中島貴美子）○御懷かしき滿天下の誌友諸姉樣、私は俳句が大好なのよ、何卒ね繪葉書に夏の句五句づゝ書いて送つて下さいな御禮は屹度致します。（岐阜縣加茂郡黑川村字遠見場、鷲見方、春野あき子）○名所、紀念風俗繪葉書を交換して頂戴よ、きつと、其御禮には有名の本居宣長翁の肖像、墓及伊勢神宮及び伊勢名所を送る桑名の水谷とも子樣繪葉書有り難ふ御返事を出したら附箋でもどつてきてよも一度御所を通知して頂戴。（三重縣松阪町新座町村田吉太郎方、英子）○誌友の皆樣が方名所繪葉書御送り下されました方には不如歸の歌、己が罪の歌、金色夜叉の歌、女夫波の歌、少女世界等で御禮申上げます。（栃木縣眞岡町荒町中野白葉子）

●●●●個人消息

四谷の荒井すゞ子樣、私もあなたと同じ思ひに惱まされて居る一人です、私はあなたに交際して頂きたいと思つてゐます、（谷中初音町の校舍にて俊子）○文學好の姉樣方何卒誌上で御交り下さいませ、備中の篠原しげ子さま！御同縣でおなつかしゆう存じます私も茂ると申しますのよ、どうか誌上で御交りを!! 岡山市の皆樣ちとおふるひあそばせな。（岡山市　野ばら）○千葉の深雪さんや、かをるさんや。勝子さんをわたし良く知ててよ、深雪さん相かはらずおふとりなの勝子さんは畫の名人ね、ホヽヽ（東京、弓子）○秋月きみ子樣私しほんとうに貴女の御近所が戀しくつてよ、雨の日風の日もさめた袴をはいて跋涉した一人ですものこれを書くさへおあたりが偲ばれますわ。（京女）○上野長野原局下なる茂木よしえ子樣同縣で一しほおなつかしう存じます、私は御地を去る十五里ばかりの田舍に生れた者ですが、今は修業のためこちらへ參つてをります何卒御交際の程願ます。（橫濱市神奈川西の町六四井野方、長島露子）○一葉樣とやら何れの御君か存しませんが、み心づくしの白菊の歌有りがたく頂きました、別に御禮差し上げる處ですが御住居不名の爲め誌上で失禮致します（麴町、愛讀者）○波の花さんに申します、三月號の賞は凡て他の賞品と同時に發送いたしました處あなたのは受取人不明で附箋して返つてきました、郡名か村名に間違ひがあつたのでせう、御住所と姓名はきつぱり能く分るやうに楷書で書いて今一度ハガキでもお送り下さい分り次第に送ります（記者）○兵庫の杉山春翠さま、私はあなたにお目にかゝつて歌のお話でも伺ひたいと思ひ、さる日曜によほど探しましたけれど、お宅が分りませんから電車で歸りました、何うぞ御交際下さい（神戶市下山手通三丁目六五ノ二五、とし子）○松山の美耶樣、送つた雜誌が戾りました住所再報を乞ふ（姫路大野）

●●●●●●●塔の繪葉書を求む　醉茗

△私は塔の繪葉書を集めてゐます△皆さんの內で塔の繪葉書をお持の方があつて、送つて下されば結構です△塔が主になつてゐて、又は一部にあつても何れでも、塔さへあれば好いのです△文字は表の方へ認めて下さい、繪の方へは何も書かないこと△お返しする繪葉書には、たゞ詩の一句だけ書いて差上ませう△宛名は、東京青山原宿、百八十番地、河井醉茗として下さい

紹介

【注意】

▲女中、小間使、女書生などに雇はれたい方、及び職業を求める女子は、自分の年齢、略歴、希望を簡單に明記して申込みなさい。

▲女中、小間使、女書生などを求めてゐる方、及び女子に職業を授けたい方は、其要項を明記して申込みなさい。

▲右、雇はれたい方も、雇ふ方も、紙上には匿名又は別名で發表して差支ないのですが、紹介掛へ申込の時は、必ず住所本名を詳しく明瞭に書添へて下さい。

▲此の紹介欄を見て、此の女を雇つて見たいとか、此方に應じて見たいとか思はれた時は、其番號を書いて、本社紹介掛へ往復ハガキで問合せて下さい。

▲紹介掛からは、問合せがあり次第、直ちに其本人の住所氏名をお答いたします、其上で直接双方で御掛合の上、雇ふなり、雇はれるなりして下さい。

▲記者は聊か愛讀者に酬ゆる爲め、紙上で双方の紹介の勞を取る譯です。

▲掲載は一切、無手數料です。

紹介掛

【應ずる方】

九　高知　一女

年齢　二十歳
略歴　高等女學校四年在學中、病氣の爲め目下中止、家に在り
希望　或る事情の爲め上京して看護婦になりたし、女醫の宅に雇はれたし

一〇　函館　中島　する

年齢　十八歳
略歴　高等小學卒業
希望　東京市内にて中流以上の家庭に行儀見習として、小間使若くは附添に雇はれたし、年限は先方次第にて長きを厭はず

【求むる方】

二　大阪　淺田

年齢　十六七歳まで
仕事　一日一度の御飯焚き、晝間高等女學校に通學せしむ（但し容顔の見苦しからざる者）
當方　夫婦二人

編輯通信

○地方の婦人　來月發行する地方の婦人の編輯に着手しました、全體は都會の婦人に似た體裁で、内容は全く異つた新しいものです、殊に地方的特色のある記事が滿載されます、今まで有つた雜誌とは甚だ趣の變つたものが出來ます

餘興　お祭

毎年、夏から秋にかけてはお祭の時節である、全國の諸孃からお祭の樣子を知らせて貰つて、本誌に發表するのも亦一つの餘興であらう。

▲各地それぞれに行はれるお祭の模樣をざつと書いて下さい▲地名、神名、社名、及び何祭とか云ふ祭の名があつたら其等も分るだけは書くこと▲祭の式は何う云ふことをするか▲詳しい說明よりも諸孃が見た通り書いた方が宜しい▲祭に就いて珍しい行事や、奇習があつたらそれも合せて書くこと▲祭日に於ける町又は村の樣子▲祭と女▲祭の日の御馳走▲祭の前又は祭の後の模樣▲祭に關係した俗謠▲祭は神樣に限りません、佛樣の祭のことも宜しい、但しお盆とか、ねはんとか、又は神武天皇祭や、秋季皇靈祭のやうな大祭日のことなど全國一體のお祭のことは除いて下さい▲成るべく一地方に限られたる神樣のお祭の事が宜しい▲內容に依つて行數を制限しませんが先づ十六字詰二三十行に書いて下さい

▲原稿締切は七月十五日です

雜報

刹那の美感

雨が降つて居た。風は横すぢかひに吹きまくつて、通る人の足をすくつた。どの人もどの人も頭から瀧を浴びたやうになつて、寒さと冷さに戰へて居た。

併しそれでも廣瀨中佐の銅像除幕式は行はれた。餘り濡れるので前の人が傘をさすと、後から『傘を取れ――』と呶鳴る。仕方がないから、誰も彼も、傘を持ち乍ら、雨の中に濡れて立つて居た。

ポ、ポ、ポーンと間の拔けたやうな音を立てて花火が揚がると、幕がパラリと落ちる。群集はサツと潮の引くやうに騷めいた。其間無慮七八秒。二號活字入で新聞に書立てると、これでも大層な事實だが、要するに只七八秒の劇であつた。

雨に吹捲られて、身體をビショ濡にして、只これだけの事實を見る爲めに、多くの東京人が萬世橋畔にギツシリと集つたのは、面白い現象である。銅像はいつでも見られる。いつでも得られないのは只刹那の美感である。

私は東京人がまだ打算的になりきつて居ないのが嬉しかつた。

停留場の五分間

濕つた礴石の片蔭には、結核菌や窒扶斯菌がウヨウヨと蚯蚓の子の群れのやうに蠢めいて居る。停留場前の減力屋で、ガ、ガーンと消魂ましい音を立てると、最前から新宿行が三臺も續いて通つた煽りを食つて、まだ落着き兼ねて居た赤、青、紫、鶏色と樣々の色をした微塵埃がフーツと舞揚つて、其拍子に件の黴菌共を誘つて立つた。腐敗した微分子が色々の匂ひを帶びて人の鼻に入つて來る。――赤い色は死んで居る。

顏をあげると、下町風の女が二三人前に居た若い女だ。「アラ兒雷也が何とかの何とかだ」と云つて、心持首を傾げると結ひ立の唐人髷に粘着した香油の乾燥分子がフウワリと浮いて、最前から落着く場所を求めて居た黴菌と組んで落ちる。

青い色が二度網膜を刺戟した。ゴーツと云ふ凄まじい摩擦音と共に電車が停つた。昇降口から大波が寄せるやうに、美しい黴菌が吐出される。そしてダンスし乍ら行く。若い女等はダンスの群と抱擁するやうに、眞紅な唇をあけて扉を潜つて行く。

花壇通信

狐の手袋（ヂキタリス）は地に落ちた。

牧場の王と云はれる夏雪草の花は、紅の粉を蒔いたやうに、濡れた地に滲れて滲んでゐる、此花の白いのは筑波山に多い。

綠の雌の奥に腰てゐる金蓮花は、朝から晩まで寢てゐる、すきみ許さじ何とか女詩人に歌はれた花だ。

カーネーションの甘い香が、他の花の香を占めて了つた。

常夏は六月の雨に腐れて、花がみにくい亡骸のやうになつた。

此頃の花は皆雨に脆い、天竺葵なども蕾のままに朽ちて了ふ、今は花の時期ではない、葉の時期である、今は葉の勢ひさへ好ければ、其草に好い花が咲く。

薊の花ばかりは何んな花屋にもない、野から採つて來て植ゑたら面白からう。

わが朝顏はまだ蔓を持たぬ。

睡蓮の水を出る時は近い。

向日葵の莖、伸びること日に一寸、コスモスは遂に及ばぬ。（六月十七日）

旅行期

七月と八月とは一年の旅行期です、旅行も思ふやうに出來る人と、出來ない人とありますが、思ふやうに旅行の出來る人は、旅行を善用しないで、つまらない事にして了ふ者があります、避暑に行つて病氣になつて歸つたり、惡い噂を立てられたりする人は、皆旅行を害用してゐるので、其爲に旅行其ものを惡く云ふことは出來ません。旅行は男子は勿論、女子の爲にも出來るなら好いことです。女子の旅行は申す迄もなく單獨ではいけません、成るべく四五人の團體を組んでゆくか、然うでなければ、家族的旅行が宜いと思ひます、旅行には贅澤を避けねばなりません、旅行は不自由を忍んで、出來得るだけ簡易がよろしい、いろ〳〵贅澤を考へると旅行が出來なくなります。一體我邦の婦人は旅行をしない方です、元來から外出を忌まれてゐる傾きがあつたので、其爲に自然旅行と婦人との

交渉が少かつたのでせう。婦人が社會的になる一つの方便として、夏期の旅行は推奬したいものです。

登山

旅行期の七八月は又登山の好時節です、富士登山も惡くはありませんが、一種の流行のやうになつては嫌です、海拔二三千尺の山にも登つた經驗のない者が、卒然として富士に登るのは無謀です、山は富士に限りません、見て美くしい富士よりも、登つて興味のある山岳は外にも澤山あらうと思ひます。

登山の序に山岳會のことを一寸記しませう、英國の山岳會は會員七百名を有して居ますが婦人の入會は許さないことになつてをます、之に反して、米國のカナダ山岳會では四百名の會員中、百二十六名の婦人があります、斯う云ふことにも其國風が見えて面白いではありませんか。

日本の山岳會も年々盛んになるやうですけれど、未だ一人も婦人の會員がないやうです。

夏期講習會

夏期講習會は年々盛んになる。此八月から催ふされるもので今までに定つたのだけを擧げて見ると、女子大學の英語家事裁縫料理講習會、京都帝國大學の法政文學理工科講演會、太田及び長府の日本歴史地理學會第三回講演會、外國語學校で東亞協會の講演、國學院大學の國文學史學講演、房州で毎年行ふ某外人の英語講習會など様々ある。各公私大學のユニバーシチー、エキステンションも甚だ結構であるが、暑い盛りに狹苦しい都會地の講堂に詰込まれて、講義を聞いた所で、何になるものではない。多少贅澤の嫌はあるが、講習會など云ふものは、都會地に開かないで、去年誰かが企てた筑波山上の女子講習會とか、日本歴史地理學會の小田原講演會などのやうに、山間か海濱で避暑半分にやる方がいゝ。出來る事なら袴着用で講堂へ詰込むといふやうな事は止して、夕暮から渚の岩にでも腰をかけて、浴衣がけで聽講せしめるといふ風の打解けた會にすれば餘計可い。

誇張されたる美人法

左に掲ぐる一文は、亞米利加の新聞に掲載されてあつたもので、或る日本通の米國人の話である、虚實取り交ぜてあるが、吾等日本人の眼から見ると、其誇張した談話の中にも一種の興味があつて面白い

△日本の美人の眼　先づ日本の美人は、愛嬌こぼるゝ、はつきりした小兒の樣な罪のない眼を持つてをる、その髪の毛は繻子の如く滑かに暗夜の如く黑く其顔面の表情は夏の朝に於ける内海の水の如く靜穩である、而して其手と其足の美しさは△日に三度の湯　然らば何が故にその美？夫は恁うだ、第一に日本の婦人は麪麭を食はぬ、肉類を食ふことが少い、而して彼等は專ら米のみを食ふからだ、次に彼等は不斷に入浴をするからだ、一日に三度湯に這入る、开麽日本婦人が世界の何處にまたとあらう、日本婦人は出來る限り戸外に居る、例しや屋内に居る時でもそれは障子と稱する薄紙で造つた戸一重で外界と距てられて居るに過ぎぬ、彼等は決して過激なる運動をせぬ、菓子と云ふやうなものは殆ど食ずに薄い茶ばかりを喫んで居る、彼等は低い木枕の上に眠る、中には全く枕と云ふものを用ひないで自分の腕を代用する者もある、其が毛髪を綺麗にするのに不思議なる効力があるので、又時に彼等は雨水を溜めて置いてその黑髪を洗ふ言ふに言はれぬ光澤が出る、△按摩さんそして按摩を取らせるのだ、此按摩といふものが一般に行はれるので中流以上の家庭に按摩取りの一人や二人を雇つて居らぬ處は無い、斯く國民的だから按摩賃が非常に安直い、從つて下流社會の人々も此贅澤を恣にすることが出來る△白百合の如き手　日本婦人の手先の美しいと云ふことは世界の定評である、譬へば綻びかけた白百合の如き纎手が座つた膝の絹布の上に品善く置かれた所を見れば何とも言へぬ一種の美感に打たれる、彼等は亞米利加婦人の如く手套なるものを用ひない、柔かな絹布の袖から如何にも趣ありげに現れて居る、日本婦人がその美しき手及び指の爲に苦心することは非常なものだ、彼等は一日に二回其手を漬ける、一度は微温湯に、其次にはコ、ナット油に!!斯くして殆ど十五分間もコ、ナット油に浸した後に柔かい木で造つた小さな釘拔のやうなもので靜かに指を揉む、先づ肱の邊から始めて徐々指頭に至る、血液の循環が烈しくなつて皮膚が紅らむ迄揉む、彼等は斯くして腕の圓みを整へ指先の尖を猶善

くずるのだ――と以上のやうなことを詳細に說明した後で日本婦人の化粧法と名くる甘扁桃を二十瓦安息香丁幾を五十瓦と言つたやうな工合に醫者の處方書みたやうなものを揭げて、嘘だと思ふなら日本へ行つて御覽なさいと。

英國婦人の見たる日英博覽會

私は日本の一紳士に案內されて、運よく博覽會の開會に臨む事を得た、先づ我々の一行は朝の十時半にアクスブリッヂの入口に行つて見ると旣早大勢の人が詰め掛けて、門の開くのを待つてゐた、會場へ這入つた、何よりも嬉しく思つたのは、アクスブリッヂロードからウッドレーンに至るまでの、長い陳列場が四季に形どつた日本の風景で充たされてゐる事であつた、此處の入口の兩側には、獰猛な面相をした恐しい巨人が二人立つてゐた、青々とした大きな杉の枝には、日本の鳩が澤山飛び廻つてゐた、鐵道部に行つて見ると、日本人の生活を描いた綺麗な繪が澤山列べてある、其中には新舊の俳優、寺院、朝日の景色など樣々の珍しい物がある、殊に面白いのは、千年以前の日本の獵具衣裝等であつた、我々の興味を牽いたのは、巧妙な針仕事であつた、それから角力が多くの提灯を懸けてゐた、孰れも肥り切つた身體を、荒々しく鍊えたと見えて、如何にも强さうに見える、此大きな男たちは、長い髮を頭の頂上で結んで、各自お抱への結髮者(床やま　を持つてる事を誇とし、皆んな百磅以上に値する前懸(廻し)を所持してゐる、さて又繪畫を一瞥するに、日本の肖像畫は、すべて西洋の影響を受けてゐるのは、必ずしも得策とは思へない、併し動物の畫は仲々甘いのがある、例へば猿獅子などは今にも動き出しさうに描いてあつた。

○冷藏函の發賣　帝國冷藏株式會社の冷藏函は暑中に於て鮮魚、果物其他一切の食品を貯藏するに適し、殊に牛乳などを大暑中にでも貯へて置いて少しも腐敗の恐れがないと云ふのだから最も重寶である、冷藏品は決して風味を害さない、新鮮の者と何の變りもないと云ふことであるから、一般の　庭に於ても此冷藏庫を使ふやうになれば衞生上にも宜い事であらう。

○音樂講習會　神田今川小路の東京音樂院では音樂科敎員及び音樂學校入學者の爲め來る八月一日より向ふ三週間第六回夏期音樂講習會を開く、入會志望者は七月三十日迄に申込むべしと又神田錦町三丁目日本音樂協會でも、來る七月二十五日より八月十三日まで講習會を開く、申込は來る二十三日までなりと。

○菊苗分與　和歌山縣海草郡西和佐村池田實玄と云ふ人は今般一千名を限り秋菊苗優等十種宛を分與する由實費郵劵三枚を送る者には無代配附するとのこと。

新刊

○夢二畫集(花の巻)　竹久夢二著

小形の愛らしい製本である。夢二君の畫集は『春の巻』『夏の巻』『花の巻』とこれで三冊目だ。今度の花の巻は色が入つて嫌味だと云ふ者もあるが赤い色ゝ夢二君の畫とは最も調和が好い。何となしに印象がハッキリして見えるのもいゝ。君の所謂る線をもつて描ける詩は、倍々其特色が現れて來る。(定價四十錢東京麴町區麴町二丁目洛陽堂發行)

○おみよ(前編)　水野葉舟著

前に雜誌に出た時から非常に評判であつた『おみよ』が一冊の本になつて出た。まだ讀んだことのない者は、是非一度買つて見るが可からう。現在の文壇で此葉舟氏の「おみよ」位、若い女の心持をクッキリと寫したものはあるまい。前に雜誌で見た時も非常に嬉しく思つて讀んだが、何度讀返して見ても矢張可い　(定價四十錢東京神田末廣町十八光華書房發行)

○文子の涙　尾島菊子著

三十に近い、落魄した、惱める女の身の上を書いた悲哀小說である。女らしい優しい筆つきが斯う云つた風な家庭物の氣分に如何にもシックリと合つて居る。描寫も頗る巧みであるし、文子の激越したヒステリー的の感情や、寂れた心の哀愁が中々よく出て居る、ヒロインの文子と云ふのは、或は作者自身の半面ぢやあるまいか(定價金五十錢東京本町三丁目金港堂發行)

○菩提樹の花咲く頃　細越夏村著

『迷へる巡禮の詩集』を出した夏村氏の第二集である、此集は殆んど口語詩ばかりであるから、更に適切に作者の情調に接することが出來る。(定價三十五錢盛岡市悠々書樓出版)

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大ききにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る

▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。地賞金七拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の當選者には相當の價格の呉服物。小間物。文房具、日用具等凡て物品にて贈呈す。
壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲毎月一回（一日定期發行）

冊數	定價・前金	郵税	計
一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

冊數	定價・前金	郵税	計
一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	前金七拾二錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六回

冊數	定價・前金	郵税	計
四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	前金壹圓三拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

明治四十三年六月廿五日印刷
明治四十三年七月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者 野口竹次郎
東京市京橋區宗十郎町十五番地
印刷者 松本愳
東京市京橋區宗十郎町十五番地
印刷所 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十一、十二番地
電話（本局六〇七番）
女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

第六年第九號（每月一回一日發行）
女子文壇
（明治四十三年六月廿五日印刷納本）
〔明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可〕

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅五厘